

博士論文

近世駿河国における建築普請活動に関する研究

新妻 淳子

(戸籍名：月原淳子)

目次

序	1	
第一部 駿府における建築普請活動	9	
第一章 駿府の工匠	9	
第一節 駿府町絵図に見る職人町	9	
第二節 駿府の大工町	12	
第三節 駿府における大工の分布	15	
第四節 駿府の大工と太子講	18	
第五節 駿府の火消と大工・木挽	20	
第六節 駿府の左官と太子講	21	
第七節 大工と左官の仲間規定	22	
第二章 駿府における公儀作事と工匠	25	
第一節 駿府城	25	
第二節 久能山東照宮	28	
第一項 久能山東照宮の修宮と組織	28	
第二項 久能山東照宮の修宮における古木	55	
第三項 久能山東照宮における修復関係者の旅宿	61	
第三節 静岡浅間神社	66	
第一項 静岡浅間神社の修宮	66	
第二項 静岡浅間神社文化度造宮と工匠	67	
第三章 駿府棟梁の活動	75	
第一節 駿府棟梁と公儀作事	75	
第二節 駿府の棟梁	81	
第一項 駿府棟梁 花村与七郎	81	
第二項 大工棟梁 花村清右衛門	81	
第三項 大工棟梁 池田栄次郎	82	
第四項 左官方棟梁 宮嶋宗蔵	82	
第二部 駿河国とその周辺における建築普請活動	85	
第一章 遠州一宮・駿州村山浅間の同時造宮	85	
第一節 元禄十年遠州一宮・村山浅間の造宮組織	85	
第一項 元禄十年造宮の概要	85	
第二項 天宮神社の造宮組織	87	
第三項 小國神社の造宮組織	88	
第四項 村山浅間神社の造宮組織	88	
第五項 三社の造宮組織	88	
第二節 元禄十年遠州一宮・村山浅間の造宮	89	
第三節 遠州一宮の大工高木助右衛門	92	

第二章 富士山西麓における建築普請活動―富士宮市と山梨県の交流―

第一節 工匠の建築普請活動

第一項	大石寺と甲州下山大工	95
第二項	北山本門寺と甲州下山・波木井・大野村の大工	96
第三項	内野神社と工匠	100
第四項	白山神社と甲州身延大工	100
第五項	善能寺と甲州下山大工	100
第六項	大頂寺と伊豆の工匠	101
第七項	妙円寺と富士の大工	101
第八項	井出家と甲州葉袋村大工	101
第九項	上井出村の神社と甲州古関村大工	101
第十項	沼久保八幡宮と甲州塩沢の大工	102
第二節	屋根屋の甲州での活動	102
第三節	甲州の神主内藤氏	103

第三部 建築用材の流通―木材と石材

第一章 大河川による木材流通

第一節	天竜川筋の木材と樽木	108
第二節	大井川筋の木材	113
第三節	安倍川筋の木材	114
第四節	富士川筋の木材	115

第二章 石材の流通―伊豆「あわ島石」

116

第四部 駿河国とその周辺の寺社造営における

公儀作事とその組織

第一章 主要寺社の修営と幕府

第一節	久能山東照宮の修営	121
第一項	久能山東照宮の成立期	121
第二項	江戸中期の久能山東照宮修復における幕府作事方と小普請方	121
第三項	江戸後期の久能山東照宮建築普請方式	123
第四項	久能山東照宮修営における石工事	124
第二節	静岡浅間神社の修営	125
第三節	五社神社・諏訪神社と府八幡宮の修営	126
第四節	遠州一宮・駿州村山浅間神社の同時造営	127
第五節	豆州一宮（三嶋大社）の修営	127
第六節	徳川家ゆかりの寺社と駿州一宮（富士山本宮浅間大社）	128

第二章 公儀作事の組織と工匠

第一節	江戸中・後期における幕府の寺社見分	128
第二節	江戸幕府棟梁と地元棟梁	129
第一項	作事方大棟梁甲良豊前と駿府棟梁花村与七郎	129
第二項	江戸町棟梁	130

結

141

資料編

149

資料目録

151

資料

153

序

駿河国の府中「駿府」は、徳川家康の隠居所としての駿府城築城と共に整備され、家康薨去後、徳川頼宣と徳川忠長を城主に迎えるが、寛永九年（一六三二）以降幕末まで幕府直轄領となり、諸藩とは異なった歴史を辿った。

駿府には駿府城、久能山東照宮の他、徳川家祈願所の静岡浅間神社、宝台院等徳川家ゆかりの寺社が所在している。それらの建築普請活動は、幕府の公儀作事として行なわれた。

江戸幕府の建築普請組織は、寛永九年（一六三二）に設置された作事方と、貞享二年（一六八五）正式に設置となった小普請方から成っていた。田邊泰氏¹の「江戸幕府作事方職制に就て」によつて作事方の組織と職制、大工頭、大棟梁の系譜が示され、さらに「江戸幕府大工頭木原氏に就て」「江戸幕府大棟梁甲良氏に就て」で木原氏と甲良氏についてさらに明らかにされた。小普請方の成立過程と職制に関しては、鈴木解雄氏²「江戸幕府小普請方について」・内藤昌氏³「江戸幕府小普請方の成立過程について」の研究がある。さらに西和夫氏⁴は『江戸建築と本途帳』で、江戸における作事方と小普請方の活動と本途について検証している。家康に重用された大工棟梁中井大和守正清については谷直樹氏⁵の『中井家大工支配の研究』にまとめられ、慶長度駿府城築城と元和度久能山東照宮造営に関しては「大工頭中井大和守正清と久能山東照宮」で扱われるが、その後の修営に関しては触れられていない。

諸藩における建築普請組織に関しても明らかにされている。

吉岡泰英。「福井藩大工の研究 御大工頭を中心として」によると、福井藩には作事方が設置されており、作事奉行の下には、大工頭、扶持大工が組織された。大工頭の上に破損奉行が置かれた時期もあり、以降幕末まで若干の組織の変化が

みられる。

庄内藩については、永井康雄氏・飯淵康一氏⁷の「庄内藩の普請・仕事組織について」の研究があり、江戸初期には大工頭の存在が確認されている。その後の普請・作事組織の整備に伴い、大工頭に代わつて大工棟梁職が確立、普請・作事組織の役所として「大工屋」が設置された。宝永元年（一七〇四）の目付新設によつて、普請奉行以下の普請・作事組織が完成したとされる。

松江藩御作事所に関する和田嘉宥氏⁸の研究によると、松江藩には作事奉行とそれを補佐する添奉行が置かれ、その下に御大工頭、御大工、御大工並、御左官等が組織されていた。御大工は御作事所の普請所勤めの他、併置の破損方、寺社修理方等への参画もあった。さらに、江戸勤番も重要な任務で、添奉行、御大工頭、御大工等は交互で江戸勤めを行なっている。

さらに諸藩への建築文化・技術の伝播についても認められる。

仙台藩は、江戸初期から元禄期までは積極的に上方の建築文化・技術を取り入れていた。永井康雄氏・飯淵康一氏。「仙台藩への四天王寺流の伝播と継承について」によると、仙台藩の工匠朴澤氏は、宝暦期に藩命で江戸の東叡山手伝普請に派遣され、幕府作事方大棟梁平内政治門弟から四天王寺流を皆伝している。仙台藩の恒職としての作事奉行と普請奉行の職制は、寛永九年に存在していたことが、小山祐司氏¹⁰の「仙台藩御作事方の組織・職制について」で示されている。加賀藩作事方の成立と構成は、田中徳英氏¹¹『加賀藩大工の研究』によつて検討され、そこには建仁寺流と四天王寺流を継承した大工が所属して技術交流が行なわれていた。寛永十三年（一六三六）に作事方の定め書が決められ、その後、職制の変遷があるものの天明年間には整備され、金沢城内の作事を担う内作事方、藩内一般の作事は外作事方、寺社建築には寺社方が設置され、各役所に所属する御大工もいた。

駿河の隣国遠江には浜松藩があり、浜松棟梁の公儀作事への関与が認められる。浜松棟梁とは、家康が浜松城入城の際に召し出した大工棟梁で、江戸において幕

府作事方配下の大工棟梁となった者、浜松藩の大工頭や棟梁となった者がある。

このような浜松棟梁の実態および幕府作事方との関係については西和夫氏¹²によって明らかにされている。湯浅隆氏¹³は幕府作事方と浜松棟梁が関与した五社神社・諏訪神社の修営と組織について検討を加えている。五社神社・諏訪神社の修復には、幕府作事方配下の大工棟梁が派遣された。彼らは『杉浦系譜』に「江戸町棟梁」、「鈴木修理日記」では「棟梁」「町棟梁」とも称されている。本研究では、江戸にある作事方配下の大工棟梁を地元棟梁と明確に区別するために「江戸町棟梁」を用いる。

以上のように、諸藩においては各々の建築普請組織が設置され、藩内さらに江戸藩邸の作事、公儀の手伝普請に対応していた。また、上方や江戸の建築技術が伝播され、加賀建仁寺流も生まれている。諸藩とは異なる幕府直轄領の「駿府」における建築普請活動の実態について様々な事例から検討する。

幕府や諸藩による建築規制は、建築の普請や形式に影響を与え、中でも梁間規制については論じられてきた。光井渉氏¹⁴は寺社建築の法的規制として「寛文八年令」（二六六八）の三間梁規制に注目し、梁間規制下で建築された寺院建築を分析し、「寛文八年令」の枠組みの中で認知された建築形式の事例を示している。

萩藩の寺社建築および武家屋敷における建築規制と違反については妻木宣嗣氏¹⁵によって検証されている。作事違反事例について、申請手続き違反、申請相違作事、不届け作事に分類し、建築の申請と確認の事例を個別に分析したものである。

京都およびその周辺の建築規制については丸山俊明氏¹⁶の研究があり、幕府直轄都市に共通する建築規制について、江戸で発令された長押や付書院等の規制に関する御触書（寛文八年）の末尾に「大坂、奈良、堺、伏見、長崎、駿府、山田」¹⁷へも触れ出すことも書き添えられている点について重要であると指摘する。このように幕府による建築規制は江戸で発令された後、幕府直轄都市へも触れ出さ

れた。その中には駿府も含まれている。

金行信輔氏¹⁸の幕府寺社奉行所の江戸御府内寺社に関する建築認可システムの検証の中で、天保期の寺社奉行所において運用されていた基本法令は「寛文八年令」の一部改定版で「寛文十年令」であることが指摘されている。建築認可システムは江戸の一般寺社が対象で、寛永寺・増上寺・東西両本願寺境内の作事・修復等、江戸のいくつかの寺社は出願免除権があり、その特権の変化についても述べられている。最後に課題として提示されたのは、江戸以外の地域にも検討対象を広げること。幕府による「御造営」「御修復」には勘定所や作事方の関与が想定されること。幕藩権力からの資金・資材・技術の供与勸化等の資金調達も考慮に入れ、近世期の建築統制・認可の問題を総体的に捉えていく必要があることが示されている。

本研究では、江戸以外の地域「駿河国」における公儀作事について検証する。江戸時代中期の幕府作事方大工頭鈴木修理によって記された『鈴木修理日記』¹⁹の存在によって、幕府作事方・小普請方の活動実態が判明してきた。日記中の遠国における公儀作事に関する記事によって駿府及びその周辺地域における幕府方の関与と地元工匠を結びつけることが可能になった。特に当地における幕府作事方大工頭・被官・大棟梁と江戸町棟梁の活動について着目し、検討する。また江戸前期までは幕府直営で行なわれていた駿河国とその周辺地域の寺社修営は、江戸中期以降、資金調達に苦しむ状況に置かれ、勸化に頼らざるを得ない事例もある。

江戸時代中期の江戸における町棟梁と幕府作事方の関わりと活動実態については川村由紀子氏²⁰の研究がある。『鈴木修理日記』の元禄十一年（一六九八）に記載の諸職人人別帳の分析から、寛永寺門前町に諸職人の四分一が居住していることが判明し、人別帳作成の目的は、臨時的な公儀作事の労働力として諸職人を掌握するためと考えられている。享保十二年（一七二七）の寛永寺中堂修復および宝暦期の積算制度改正の事例からは、実務能力と建築技術を兼ね備えた江戸

町棟梁が、大棟梁と同等以上の活動をするようになる。江戸町棟梁の職にあった石丸家が天明期に大棟梁に登用されたことは西和夫氏²¹の研究でも明らかで、この登用は作事方組織の弱体化と江戸町棟梁の技術・実務力の向上による結果と捉えている。

日光東照宮修営における幕府作事方と日光方の分担及び建築普請方式について川村氏が検討を行なっている²²。山澤学氏²³によると、日光東照宮には御菓子屋・大工・鍛冶・鋳屋・塗師・檜物師の六職人があり、その役務は「常之御用」とされ、大工棟梁（日光棟梁）は日常的な小破修繕等建物の維持管理を行なっていた。川村氏によれば、日光東照宮の大規模修営は幕府が関与し、初期の建築普請方式は幕府の直営であった。元禄度造替は、幕府主導の直営工事であったが資材調達及び加工、諸色の人札は江戸で行なわれている。宝暦十二年（一七六二）の修復は、明和の百五十回御忌の準備を含むものであることから、日光山内では多種大量の修復が実施された。作事方大棟梁の一式請負、建物別の修復一式、場所別の一式請切、商人資本による請負、という建築普請方式が採用された。大棟梁一式請負の場合は、作事方（江戸方）と日光方で場所割・工割を行ない、勤料は割り合う方式だったが、日光方にとって納得できる内容ではなく、作事方同様の勤料を要望し続け、ようやく獲得することができた。安永度修復以降は、作事方が御宮・御霊屋・本坊等主要建築・神橋の修復や大工事を、日光方は附属的な建物の修復や日光山内外の普請に携わることになった。このように日光棟梁は幕末まで日光山内の建築修復に関与した。

建築普請方式に関する研究としては、藤川昌樹氏²⁴の「萩藩江戸屋敷作事における「手作事」と「請負」がある。萩藩の作事には手大工、国大工、江戸出入大工、江戸町大工が参画し、材木は江戸・国元・他国（大坂等）から調達された。建築普請方式は手作事（直営工事）、軸方請負、一式請負に大別され、作事の規模や時代的な傾向によりその方式は細分化している。重要性が高い建物については

手作事、低い部分は請負で実施されたが、安永期以降その基本方針がみられなくなったという。

材木と瓦の調達過程については、宮崎勝美氏²⁵の「萩藩江戸屋敷の作事と資材調達」によって検討されている。国元からの材木調達の場合、基本的には藩直轄の山林から伐出されたが、享保作事は上級藩士や寺院の持山からも提供された。また、材木は国元で製材・加工して江戸へ回漕する方法も取られている。

また、安政江戸地震後の松代藩江戸屋敷作事と請負について岩淵令治氏²⁶「幕末期松代藩江戸屋敷の作事と請負」によって分析されている。新橋上屋敷も地震の被害を受け、作事の基本方針は「実用」を重視し、節約するというもので、作事は工区分割入札の方式で行なわれ、材料を一括購入し、古木の活用・払下げ、樹種・寸法等の制限も検討されている。

以上、日光東照宮・萩藩江戸屋敷・松代藩江戸屋敷の作事において、建築普請方式・資材調達方法・修復方針等に関して論じられている。日光東照宮に対して久能山東照宮には常用の職人組織はなく、主要な修営に関しては幕府作事方・小普請方が関与していた。久能山東照宮の建築普請方式については断片的に史料に表われ、天保・安政地震後の記録から修復方針・工法・古木の活用、建築資材の調達、修復関係者の旅宿等について、包括的に建築普請を解明したい。さらに、それを担った幕府の建築普請組織と地元工匠との関係について整理する。

第一部は、「駿府」における建築普請活動の実態について明らかにすることを目的とし、第一章では駿府の工匠たちについて述べる。

江戸時代前期の職人と職人集団に関する横田冬彦氏²⁷の研究では、江戸の国役町や城下町の職人町では役体系が変質し集住形態が崩れていくこと。公儀作事において大工頭が作事監理業務を行なうようになること。資本による自由な雇用契約関係の展開が職人の経営のあり方を変化させ、元禄期には他の大工の出入場を禁じる規定が見られるようになる」と述べられている。

家康によって築かれた駿府城下町の職人と職人集団の実態はどのようなものだったのか。駿府城下町については若尾俊平氏²⁹⁾、駿府の各町絵図の分析については織田元泰氏²⁹⁾の研究があるが、建築に関連する職人町や駿府の工匠に関しては詳しく扱われていない。天保期と明治期の駿府町絵図から、工匠たちの居住状況を把握することができる。多数あつた職人町の中で、「大工町」は現在も町名として残り、慶長の町割りによって二町となつた「上大工町」と「新通大工町」の成り立ちや集住形態・町役等について述べる。駿府の大工組と左官組の存在は太子講関連史料等から知られており、その組の構成や規定の変遷等について分析する。工匠たちは、火消として大きな役割も果たしており、大工と木挽が集住する町で構成される駿府定火消は「斧組」と称された。

第二章は、駿府における主要な公儀作事として駿府城、久能山東照宮、静岡浅間神社を取り上げる。駿府城と久能山東照宮は、家康の大工棟梁中井大和守正清によって造営され、徳川家の祈願所である静岡浅間神社は、家光によって再造営が行なわれた。いずれも幕府による大普請であつた。駿府城と久能山東照宮の主要な修営は、幕末まで幕府作事方・小普請方によって行なわれた。

久能山東照宮は、四度の大地震に見舞われるが、幕府によって迅速に修営が行なわれている。久能山総門番榊原照成が編纂した『久能経営記』中の「御修復公私日録」³⁰⁾に久能山内の修復をめぐる記録も納められ、修復の実態を窺うことができる。修営の実態と組織について通覧し、江戸末期から積極的に修復に活用された古木および修復関係者の旅宿と滞在をめぐる事象に関しても扱う。

静岡浅間神社は寛永の再造営の後、安永・天明の二度の大火により全焼し、文化元年（一八〇四）から六十余年をかけて再建が行なわれた。駿府城代・町奉行を奉行に駿府の工匠と諏訪の彫物大工立川一門の手によって完成されたのが現社殿である。

第三章では、江戸時代を通じて活躍した駿府の棟梁家について詳述する。駿府の大工棟梁花村与七郎家は、家康在城時から幕府の造営に携わり、駿府城・久能

山東照宮・静岡浅間神社の修営を担当してきたことが各史料に記される等、江戸中期には駿河を代表する棟梁であつた。駿府における公儀作事に参画し、活躍したその他の棟梁についても取り上げる。

第二部では、駿河国とその周辺地域における調査から得られた建築普請活動の事例を取り上げる。

遠州一宮（小國神社・天宮神社）（周智郡森町）と駿州村山浅間神社（富士宮市）の三社は、幕府作事方大棟梁甲良豊前宗賀の下、同時造営が行なわれたことが判明した。駿府の大工棟梁花村与七郎の名も三社の棟札に記されていることから、駿河そして遠江の公儀作事にも関与していたことが明らかになった。第一章は、遠州一宮・駿州村山浅間の三社同時造営が、幕府作事方の下、どのように行なわれたのか。地元史料と『鈴木修理日記』を関連付けることで明らかになった三社造営の実態について述べる。また、遠州一宮の両社造営では、遠州一宮の大工棟梁高木助右衛門等、地元の棟梁や工匠が造営に当たっている。

富士山の西麓に位置する富士宮市は、駿州一宮富士山本宮浅間大社、日蓮宗寺院の富士五山があり、甲州の工匠による建築普請も知られていた。第二章では、棟札等史料から富士宮市内における工匠の建築普請活動を抽出する。富士宮市全域の棟札調査によって、隣接する山梨県河内地域の工匠の進出も明らかになった。身延大工・下山大工はよく知られているが、その周辺地域の大工による進出も見られ、甲州大工・地元大工協同の造営の事例も見られる。下山大工の普請活動については、高橋恒夫氏が『近世在方集住大工の研究』の中で言及し³¹⁾、江戸時代を通じて日蓮正宗大石寺の建築普請には下山大工石川氏の関与が認められる。

第三部では、建築普請に用いられた木材と石材を扱う。豊かな山林が広がる駿河・遠江・伊豆においては、天竜川・大井川・安倍川・富士川の四大河川上流域の木材が伐出された。木材は川を利用して筏下げされ、廻船で江戸をはじめ大坂

や各地へ運送された。近世の林業史の総合的な研究は所三男氏³²が、天竜川の樺木については村瀬典章氏³³が詳述している。本稿では、地場産材の地元使用を中心に検討する。

第一章は、駿河国およびその周辺の建築普請で使用された木材の調達について着目し、四大河川によって運ばれた木材・樺木の当地における使用について各地に残る史料から、その一端を明らかにした。

伊豆から産出された石材は「伊豆石」と呼ばれて広く重用された。伊豆西海岸の重寺村（沼津市内浦）の石切文書に関する高木浅雄氏³⁴の調査報告により、重寺村の石材が駿府城・久能山東照宮へ搬送されたことは知られていた。第二章は、石切文書から久能山東照宮修営に関する史料を抽出し、石材運送の事例を紹介する。内浦湾に浮かぶ淡島産出の石材は「あわ島石」と称され、幕府作事方大工頭鈴木修理の駿府城見分時の「あわ島石」に関する記録も取り上げる。

第四部では、駿河国と、隣接する遠江国・伊豆国における公儀作事に関する個別事例を横断的に総括し、幕府作事方・小普請方の下、どのような組織で建築普請が行なわれたのかを説明する。各所で活躍した駿府棟梁・遠州一宮棟梁の他に浜松棟梁・三島棟梁の活動にも触れる。

特に久能山東照宮においては、修復をめぐる作事方と小普請方の勢力関係に着目して実態を説明する。日光東照宮の事例を踏まえてどのような建築普請方式が取られたのか、また、石工事関連史料から石材・石工事に関する入札と請負の実態の一端に触れる。

これまで進めてきた駿府を中心とする駿河国とその周辺地域における近世建築普請活動に関する調査・研究から、幕府方や地元工匠たちの各建築への関与が明らかになった。これら数々の公儀作事と組織を『鈴木修理日記』によって関連付け、建築普請をめぐる実態の解明を試みた。その一つとして、大工頭鈴木修理による江戸中・後期の一連の幕府見分。二つ目は、幕府作事方各棟梁の当地にお

ける複数の建築普請への関与と地元棟梁の関わりである。

※本稿では、江戸時代における建築に関わる活動を総称して「建築普請活動」とした。現在多用されている「修理」については、『鈴木修理日記』や史料中に用いられる「修復」に統一し、造営および修復は「修営」を用いた。

本論文は、既発表論文を基に補筆・修正を加え再構成したものである。

第一部

第一章

「駿府の工匠の活動について―駿河国における工匠の活動 その一―」

（日本建築学会東海支部研究報告集 第三十五号、一九九七）

「駿府の職人町と大工について―駿河国における工匠の活動その八―」

（日本建築学会東海支部研究報告集 第四十一、二〇〇三）

「駿府の職人町と左官について―駿河国における工匠の活動 その九―」

（日本建築学会大会学術講演梗概集（北海道）、二〇〇四）

「左官組合と太子講―静岡市の事例から―」

（『鰻（KOTE）―伊豆長八と新宿の左官たち―』新宿区教育委員会、一九九六）

第二章第二節

「久能山東照宮の修営と工匠」― 『久能山誌』静岡市、二〇一六

「天保十三年久能山東照宮の修理について

―駿河国における工匠の活動 その二―」

（日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）、一九九七）

「安政期久能山東照宮の修理について―駿河国における工匠の活動 その四―」

（日本建築学会大会学術講演梗概集（東北）、二〇〇〇）

「久能山東照宮の修理における古木の拝領と払下について

―駿河国における工匠の活動 その五―」

（日本建築学会東海支部研究報告集 第三十九号、二〇〇二）

「久能山東照宮修理関係者の旅宿について

―駿河国における工匠の活動 その六―」

（日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）、二〇〇二）

「久能山東照宮の作事組織について―駿河国における工匠の活動 その七―」

（日本建築学会大会学術講演梗概集（北陸）、二〇〇二）

第三章

「久能山東照宮の修営と工匠」三 『久能山誌』静岡市、二〇一六

「駿府の大工棟梁花村家について―駿河国における工匠の活動 その三―」

（日本建築学会東海支部研究報告集 第三十八号、二〇〇〇）

第二部

第一章

「元禄期の天宮神社造営組織」

（『静岡県指定有形文化財 天宮神社本殿及び拝殿修理工事報告書』天宮神社、二〇一三）

「元禄十年の棟札写に見る造営」

（『史跡富士山「村山大日堂」保存修理工事報告書』富士宮市教育委員会、二〇一五）

第二章第一節第八項

「井出家高麗門及び長屋の建立年代」「大工喜三郎と甲州との交流」

（『富士宮市指定有形文化財 井出家高麗門及び長屋修復整備工事報告書』

富士宮市、二〇一六）

第三部

「久能山東照宮の修営と工匠」二 『久能山誌』静岡市、二〇一六

第四部

「駿河・遠江・伊豆の寺社造営における江戸幕府の作事とその組織」

（『藤井恵介先生献呈論文集』中央公論美術出版、二〇一八刊行予定）

- 1 田邊 泰「江戸幕府作事方職制に就て」『建築学会大会論文集』一九三五。
- 田邊 泰「江戸幕府大工頭木原氏に就て」『建築雑誌』五九六、一九三五。
- 田邊 泰「江戸幕府大棟梁甲良氏に就て」『建築雑誌』六〇九、一九三六。
- 2 鈴木解雄「江戸幕府小普請方について」『日本建築学会論文報告集』六〇、一九五八。
- 3 内藤 昌・中村利則「江戸幕府小普請方の成立過程について」『日本建築学会大会学術講演梗概集』一九六九。
- 4 西 和夫『江戸建築と本途帳』SD選書八九、鹿島出版会、一九七四。
- 5 谷 直樹『中井家大工支配の研究』思文閣出版、一九九二。
- 6 谷 直樹『大工頭中井大和守正清と久能山東照宮』『久能山誌』静岡市、二〇一六。
- 7 吉岡泰英「福井藩大工の研究 御大工頭を中心として」『日本建築学会計画系論文報告集』四〇六、一九八九。
- 8 永井康雄・飯淵康一「庄内藩の普請・仕事組織について」『日本建築学会計画系論文報告集』四六八、一九九二。
- 9 和田嘉宥「松江藩御作事所の構成とその推移 松江藩御作事所と御大工の作事に関する研究 その一」『日本建築学会計画系論文報告集』五〇四、一九九八。
- 10 和田嘉宥「松江藩におけるお大工位置付けとその推移 松江藩御作事所と御大工の作事に関する研究 その二」『日本建築学会計画系論文報告集』五四四、二〇〇一。
- 9 永井康雄・飯淵康一「仙台藩への四天王寺流の伝播と継承について」『日本建築学会論文報告集』五三〇、二〇〇〇。
- 10 小山祐司「仙台藩御作事方の組織・職制について」『日本建築学会東北支部研究報告会』二〇〇四。
- 11 田中徳英『加賀藩大工の研究』桂書房、二〇〇八。
- 12 西 和夫「浜松棟梁桑原家について」『日本建築学会論文報告集』二五九、一九七七。
- 西 和夫「浜松棟梁と徳川幕府作事方大工棟梁」『日本建築学会論文報告集』二六〇、一九七七。
- 13 湯浅 隆「五社神社、諏訪神社の成立過程」『五社神社、諏訪神社の社殿維持について』『調査研究報告書 五社神社・諏訪神社社殿等修理関係資料』本文編、東京国立博物館、一九九六。
- 14 光井 渉「寺社建築への法的規制」『近世寺社境内とその建築』中央公論美術出版、二〇〇一。

- 15 妻木宣嗣「萩藩における寺社建築物に対する建築規制と作事申請手続き上の違反について―萩藩の建築規制に関する研究 その一―」『日本建築学会計画系論文報告集』五四一、二〇〇一。
- 妻木宣嗣「萩藩寺社建築物における申請相違作事・不届け作事について―萩藩の建築規制に関する研究 その二―」『日本建築学会計画系論文報告集』五七四、二〇〇三。
- 妻木宣嗣「普請申請書類と全く異なる作事が行われた事例を中心にした萩藩寺院建築物における申請相違作事・不届け作事について―萩藩の建築規制に関する研究 その三―」『日本建築学会計画系論文報告集』五八一、二〇〇四。
- 妻木宣嗣・曾我友良・橋本孝成「萩藩の武家屋敷における建築規制違反について」『建築史学』六七、二〇一六。
- 16 丸山俊明『京都の町家と町なみ 何方を見申様に作る事、堅仕間敷事』昭和堂、二〇〇七。
- 17 『御触書寛保集成』儉約之部 五五一―五五二頁、岩波書店、一九五八。
- 18 金行信輔「寺社建築に対する江戸幕府の規制法令について」『建築史学』三三、一九九八。
- 金行信輔「幕府寺社奉行所における建築認可システムの史料学的検討」『日本近世史料学研究 史料空間論への旅立ち』北海道大学図書刊行会、二〇〇〇。
- 19 鈴木棠三・保田晴男『近世庶民生活史料未刊日記集成 鈴木修理日記』三一書房、一九七七八。
- 20 鈴木修理長常・長頼父子によって記されたもので、欠落部分もあるが、寛文十年（一六七〇）九月から宝永三年（一七〇六）十二月までのものである。小普請方の成立期から始まり、小普請方の勢力拡大時期に相当しており、久能山東照宮の修復にその一端を見ることが出来る。
- 20 川村由紀子「元禄期寛永寺門前町における諸職人の存在形態」『國史学』二〇二、二〇一〇。
- 川村由紀子「近世中期における江戸の「町棟梁」」『日本歴史』七八六、二〇一三。
- 川村由紀子「享保期における江戸幕府作事方と大工職人」『風俗史学』五六、二〇一四。
- 21 西 和夫「江戸幕府作事方大棟梁石丸家について―町棟梁より登用の背景と大棟梁としての略系譜―」『日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）』一九七九。
- 22 川村由紀子「宝暦・明和期の日光東照宮の修理と日光棟梁」『関東近世史研究』二、二〇一四。

- 七九、二〇一六。
- ²₃ 山澤 学『日光東照宮の成立 近世日光山の「莊嚴」と祭祀・組織』思文閣出版、二〇〇九。
- ²₄ 藤川昌樹「萩藩江戸屋敷作事における「手仕事」と「請負」作事記録研究会編『大名江戸屋敷の建設と近世社会』中央公論美術出版、二〇一三。
- ²₅ 宮崎勝美「萩藩江戸屋敷の作事と資材調達」『大名江戸屋敷の建設と近世社会』中央公論美術出版、二〇一三。
- ²₆ 岩淵令治「幕末期松代藩江戸屋敷の作事と請負」『大名江戸屋敷の建設と近世社会』中央公論美術出版、二〇一三。
- ²₇ 横田冬彦「職人と職人集団」『講座日本歴史』五 近世一、東京大学出版会、一九八九。
- ²₈ 若尾俊平「駿府の都市構造と社会」『静岡市史』近世、静岡市役所、一九七九。
- 若尾俊平「駿府の町割り」『静岡中心街誌』同編集委員会、一九七四。
- ²₉ 若尾俊平「家康の町づくり」『駿府の城下町』静岡新聞社、一九八三。
- ²₉ 織田元泰「駿府町絵図の一考察」『葵』一六。
- ³₀ 織田元泰「駿府九六カ町を歩く」『駿府の城下町』静岡新聞社、一九八三。
- 『久能山叢書』第一編、久能山東照宮社務所、一九七〇、所収。
- 「天保癸巳御修復公私日録」(天保四年)「天保壬寅御修復公私日録」(天保十三年)「安政丙辰地震損御修復公私日録」(安政三年)があり、久能山総門番榑原照成が在任期間に行なわれた三度の修復について記録したもの。
- ³₁ 高橋恒夫「甲斐の下山大工とその活動」『近世在方集住大工の研究』中央公論美術出版、二〇一〇。
- ³₂ 所三男『近世林業史の研究』吉川弘文館、一九八〇。
- ³₃ 村瀬典章『天竜川水運と樽木』建設省中部地方建設局天竜川上流工事事務所、一九九三。
- ³₄ 高木浅雄「重寺村の石切文書」『沼津市歴史民俗資料館紀要』五、沼津市歴史民俗資料館、一九八一。

第一部 駿府における建築普請活動

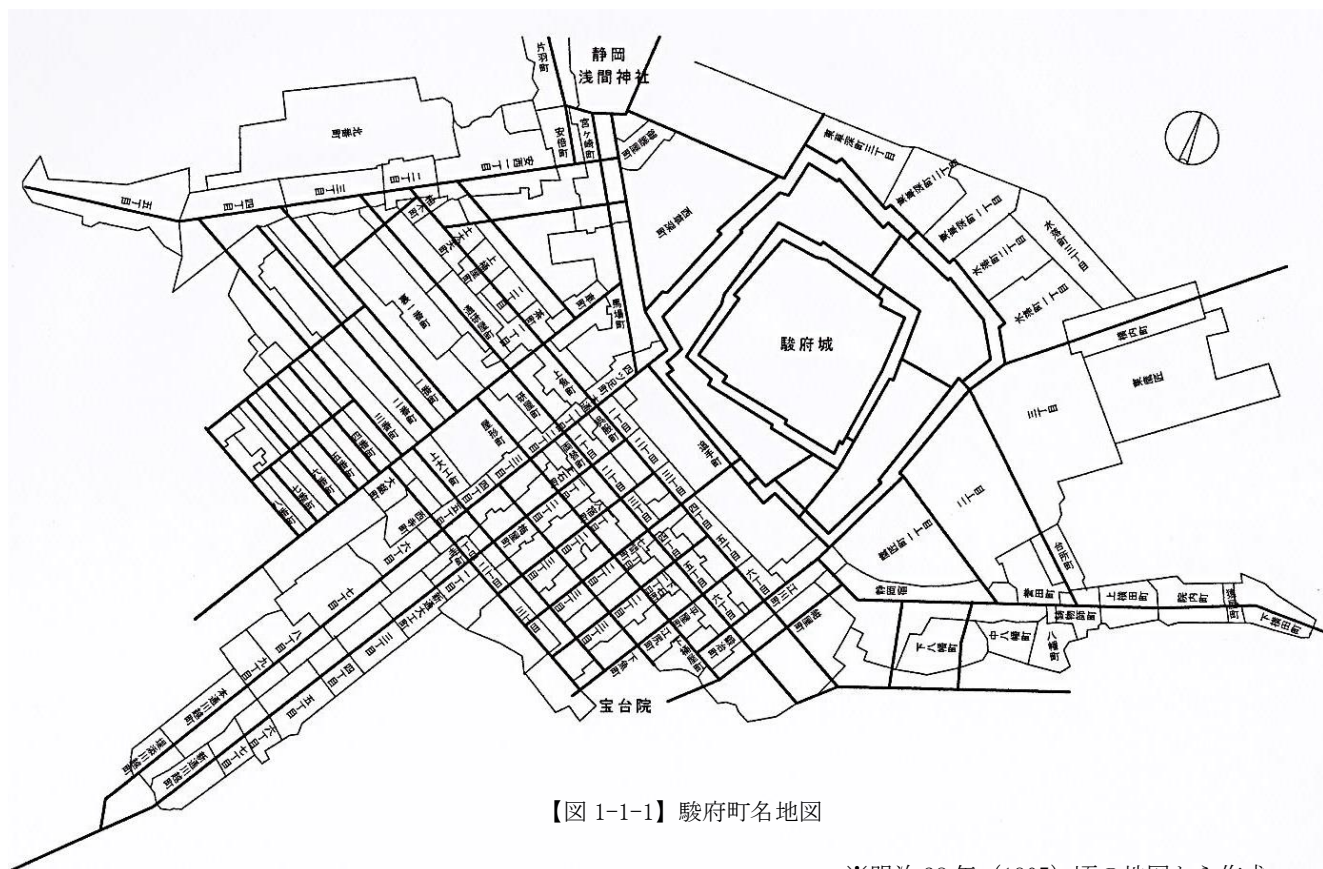
第一章 駿府の工匠

慶長十二年（一六〇七）、徳川家康が駿府を隠居所に定め、駿府城の造営並びに城下町の経営が行なわれた。さらに家康薨去後は、久能山東照宮、静岡浅間神社等の修営が幕府の作事として行なわれた。駿府の棟梁と工匠たちの公儀作事への参画が認められる。駿府町絵図から職人町の分布や、二町あった「大工町」の成り立ちや集住状況、町役について窺い知ることができる。太子講関連史料から大工組・左官組の構成や規定の変遷について述べ、大工・木挽が勤めた駿府定火消についても触れる。

第一節 駿府町絵図に見る職人町

現在の静岡市街地は、家康在城時に行なわれた慶長十三〜四年（一六〇八〜九）の町割りを基盤としている。城下町の人口は当時十二万人でこれは江戸の十五万人に次ぐものであった。町の構成は武家地が半分以上を占める江戸とは異なり、町人地が半分近くを占めていた。町屋の多い中心部は碁盤割りで、駿府城から遠ざかるにつれて短冊型に変形している。町の中心部には駿府の町数の三分の一を超える三十七町が集中し、武家屋敷は駿府城の東・北・西の三面に配された。

駿府の町の構成を伝える史料として、「駿河国駿府町方文書」中の天保十三年（一八四二）町絵図¹と『明治前期静岡町割絵図集成』²がある。駿府にも城下町によく見られる職人町が存在し、桶屋町・鍛冶町・大鋸町・御器屋町・研屋町・大工町・材木町・紺屋町・鋳物師町等が確認できる。家康在城以前から職人が集住していた町もあるが、ほとんどが慶長時に整備され、現在も職名が町名として残る町が見られる【図1-1-1】。



【図 1-1-1】 駿府町名地図

※明治 38 年（1905）頃の地図から作成

【表 1-1-1】 天保 13 年駿府町絵図による工匠一覧表

町名	大工	家 根 屋	左 官	木 挽	材 木	瓦	建 具	釘	合 計
下桶屋町	0	1	0	0	0	0	0	0	1
藤右衛門町	3	0	0	0	0	0	0	0	3
七間町三丁目	1	1	0	0	0	0	0	0	2
寺町一丁目	1	0	0	0	0	0	0	0	1
人宿町一・二丁目	0	4	0	1	0	0	0	0	5
梅屋町	0	1	0	0	0	0	1	0	2
上大工町	30	0	0	0	0	0	0	0	30
太鋸町西寺町	0	3	0	0	0	0	0	0	3
茶町二丁目	2	0	0	0	0	0	0	0	2
柚木町	2	0	0	1	0	0	0	0	3
安西一丁目	3	3	0	18	1	0	0	0	25
安西二丁目	0	0	0	2	0	0	0	0	2
安西三丁目	0	1	0	0	0	0	0	0	1
安西四丁目	0	0	0	1	0	0	0	0	1
材木町	1	0	0	10	0	0	0	0	11
御器屋町	6	0	0	2	0	0	0	0	8
宮ヶ崎町	1	0	1	1	0	1	0	0	4
馬場町	4	3	0	0	0	1	0	0	8
四ツ足町	0	3	0	0	0	0	0	0	3
研屋町	2	2	0	0	0	0	0	2	6
本通二丁目	1	0	0	0	0	0	0	0	1
本通三丁目	2	1	1	0	0	0	0	0	4
本通四丁目	4	1	0	0	0	0	0	0	5
本通五丁目	5	5	1	0	0	0	0	0	11
本通六丁目	4	0	0	1	0	0	0	0	5
本通七丁目	4	1	0	1	0	0	0	0	6
本通八丁目	3	1	0	0	0	0	0	0	4
本通九丁目	2	3	0	0	0	0	0	0	5
本通川越町	1	0	0	0	0	0	0	0	1
堤添川越町	4	0	0	0	0	0	0	0	4
新通大工町	12	0	0	0	0	0	0	0	12
新通三・四丁目	5	1	0	0	0	0	0	0	6
新通五丁目	3	1	0	1	0	0	0	0	5
新通六丁目	0	2	0	0	0	0	0	0	2
新通七丁目	3	1	0	1	0	0	0	0	5
新通川越町	1	0	0	0	0	0	0	0	1
紺屋町	3	0	0	0	0	0	0	0	3
院内町	0	0	0	2	0	0	0	0	2
上横田町	0	0	0	0	0	1	0	0	1
横内町	3	0	0	0	0	1	0	0	4
草深町代地	6	0	0	0	0	0	0	0	6
合計	122	39	3	42	1	4	1	2	214

天保十三年及び明治前期の駿府町絵図から建築に関わる工匠の分布が判明する【表 1-1-1】【表 1-1-2】。

【表 1-1-1】天保十三年駿府町絵図による工匠一覧表は、町絵図記載の建築関連八職種を抽出したものである。慶長の町割り当初には町名通りの工匠が集住していたと考えられるが、天保期にもなると、町名由来の工匠が集住する町は、上大工町・新通大工町のみになっている。町絵図に記載の大工の総数は百二十二人で、そのうちの三十人が上大工町、十二人が新通大工町の住人である。大工は他の職種と比べ総人数が多く、広範囲に分布している。大工に次いで多いのが木

挽四十二人、家根屋三十九人である。その他の建築関連職は極端に少なく、特に左官と称する者が三人しか記されていない。木挽は安西一丁目に十八人、材木町に十人あるが、大鋸町には見られない。慶長の町割り時に大鋸町から一部移住した新通七丁目（新通大鋸町）には一人確認することができる。材木町はその名の通り材木を扱う町で、片羽町の北に位置する。材木町と安西五丁目には、安倍川・藁科川上流から切り出された材木の十分の一を徴収する「十分一材木蔵」³があったことから、安西一丁目に木挽が多かったと考えられる。家根屋も多く認められるが集住の傾向は見られない。

町名	大工	屋根屋	左官	木挽	材木	板へき	屋根板	白木	瓦	畳	建具	表具	彫物	釘	合計
泉原町二丁目	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
泉原町五丁目	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
泉原町六丁目	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	2
江川町	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
下桶屋町	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
平屋町	3	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	5
江尻町	2	0	3	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	7
正石町一丁目	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2
正石町二丁目	2	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
正石町三丁目	1	0	2	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	5
藤右エ門町	2	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
下魚町	3	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6
鍛冶町	4	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6
南換町一丁目	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	3	0	0	0	5
南換町二丁目	2	0	1	2	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	6
南換町三丁目	1	0	0	1	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	4
南換町四丁目	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
南換町五丁目	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
南換町六丁目	2	0	1	3	0	0	0	0	0	1	1	2	0	0	10
七間町二丁目	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	4
七間町三丁目	2	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	5
寺町二丁目	2	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
寺町三丁目	2	0	2	3	1	1	0	0	0	0	0	1	0	0	10
寺町四丁目	2	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
人宿町一丁目	2	2	0	0	0	1	0	0	0	2	0	0	0	0	7
人宿町二丁目	1	1	0	1	0	0	0	0	0	4	1	0	0	0	8
人宿町三丁目	2	0	2	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	6
上石町一丁目	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2
上石町二丁目	3	0	0	2	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	6
梅屋町	2	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6
大工町	15	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	16
太極町	1	0	0	6	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8
西寺町	3	0	4	2	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	10
東町	2	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	17
茶町二丁目	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
上桶屋町	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
土太夫町	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
楠木町	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
安西一丁目	8	0	10	19	0	1	1	0	0	1	0	0	0	0	40
安西二丁目	3	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
安西三丁目	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
安西四丁目	2	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
安西五丁目	4	0	1	5	2	0	0	5	0	0	0	0	0	0	17
安宿町	3	0	3	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7
杉木町	0	0	1	13	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	19
西草深町	0	0	4	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6
東草深町三丁目	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
御器屋町	4	0	5	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10
宮ヶ崎町	2	1	0	6	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	10
馬場町	7	0	6	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	16
四ツ足町	0	0	0	1	0	0	0	2	0	0	0	2	0	0	5
研屋町	6	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8
通り研屋町	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
本通二丁目	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	2
本通三丁目	1	0	0	3	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	5
本通四丁目	5	0	3	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	11
本通五丁目	8	0	4	5	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	18
本通六丁目	2	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	4
本通七丁目	9	0	2	10	0	3	0	0	0	1	0	0	0	0	25
本通八丁目	6	0	2	8	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	17
本通九丁目	4	0	5	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10
堤浜川越町	0	0	3	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	4
新通一丁目	3	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	5
新通二丁目	9	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	11
新通三丁目	2	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	4
新通四丁目	6	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7
新通五丁目	7	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	10
新通七丁目	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
新通川越町	4	0	3	4	0	0	0	1	0	2	0	0	0	0	14
龍屋町	11	1	2	3	0	0	0	1	0	0	1	1	0	0	20
鋳物師町	3	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	5
上八幡町	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
下八幡町	0	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
台所町	2	0	2	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7
腔内町	5	0	1	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	8
上横田町	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
下横田町	1	0	0	1	0	0	0	0	2	0	1	0	0	0	5
横内町	5	1	12	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	20
上魚町	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
泉澤代地	5	0	1	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	8
片羽町	4	0	0	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10
迫手町	4	0	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8
屋形町	0	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
静岡宿	4	1	1	1	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	9
裏一番町	4	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
二番町	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
三番町	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	3
三番町	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
五番町	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
北番町	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	2
鷹匠町一丁目	3	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
鷹匠町二丁目	7	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8
鷹匠町三丁目	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2
東鷹匠町	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
清水尻南安事	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	4
合計	257	10	135	143	13	11	3	12	3	28	21	10	1	1	648

明治前期駿府町絵図によると建築関連職は十四職種抽出することができ、【表 1-1-2】明治前期駿府町絵図による工匠一覧表にまとめた。大工総数二百五十七人のうち、大工町十五人、新通二丁目（新通大工町）九人とあり、大工は各町に分散されている。大工町以外では紺屋町に十一人、本通七丁目九人、安西一丁目八人、本通五丁目八人、馬場町七人、新通五丁目七人、鷹匠町二丁目七人が見られる。木挽の総数は百四十三人、次いで左官が百三十五人認められる。木挽は、安西一丁目に十九人、材木町に十三人を数え、天保期と同じ傾向である。さらに、大鋸町に六人、本通七丁目十人、本通八丁目八人、その他各町にも分散して見られる。左官は車町に十四人、横内町十二人、安西一丁目十人で、この三町に集中している。左官は天保期の町絵図では三人しか確認できなかったが、左官も駿府

城修営の役を勤めていたことが静岡市左官組合所蔵太子講関連史料から明らかで、公用を勤める者は、駿府城から近い車町・馬場町在住の者と決められていた。明治前期の車町には、左官が継続して集住していたことがわかる。木挽と関連する材木関係では、屋根屋が十人、材木十三人、板へぎ十一人、屋根板三人、白木十二人が確認できる。その他は畳二十八人、建具二十一人、表具十人など少数である。明治期になると職人町への集住の傾向が見られなくなっているが、「十分一材木蔵」に近い安西一丁目には、木挽十九人の他、大工八人、左官十人が在住している。また本通りや新通りに大工が比較的多く、特に本通七丁目・八丁目には大工と木挽が多く認められる。

【表 1-1-2】
明治前期駿府町絵図による工匠一覧表

第二節 駿府の大工町

駿府には上大工町と新通大工町と呼ばれる二つの大工町が存在していた。両大工町について各地誌から窺うことができる(資料二)。その中でも、文化年間に桑原藤泰によって記された『駿河記』【史料一―一―】に詳しく、後の地誌もこれに依っている。

【史料一―一―】『駿河記』

上大工町 昔より大工の住せしによりて名づく。

昔は今の丁より上の方につゞきて町屋ありしが、慶長年町割ありし時に、其所に住る者に今の新通二丁目に替地を賜ふ。是を新大工町と云、今に新通は二丁目の名なくして新通大工町と云。此丁も御城の修営の役を勤むるをもて、諸役を免さる。町内素人屋敷と称るものは、大工ならぬ人の住し所なれば、其屋敷のみ町方の役を勤む。

新通町 七丁 此筋の町は慶長十四年に町割ありて初て建し処なり。東海道の往来と定められしは其頃の事なるか不詳。寛永年間に記せし寺町の寺々の過去帳に、新通町の名なくして異名にしてしるす。今も一丁目二丁目の次第のみありて何れも異名あり。新通一丁目は旅籠町と云。昔旅籠屋此辺にありしと云。二丁目は新大工町と云。是慶長十四年町割ありし時、上大工町をさきて此所に移せし処なり。三丁目四丁目は馬喰町。五丁目六丁目を笠屋町。七丁目は大鋸町と云。此大鋸町も、昔西の大鋸町をさきて此処に移せし処なりと云。古へはすべて名を異にせしを、後に新通の一名とはなれるなり。

『駿河記』によると、上大工町は往古より大工が居住していたことから名付いた町で、町の上の方へも町屋が続いていた。慶長十四年(一六〇九)の町割りの際

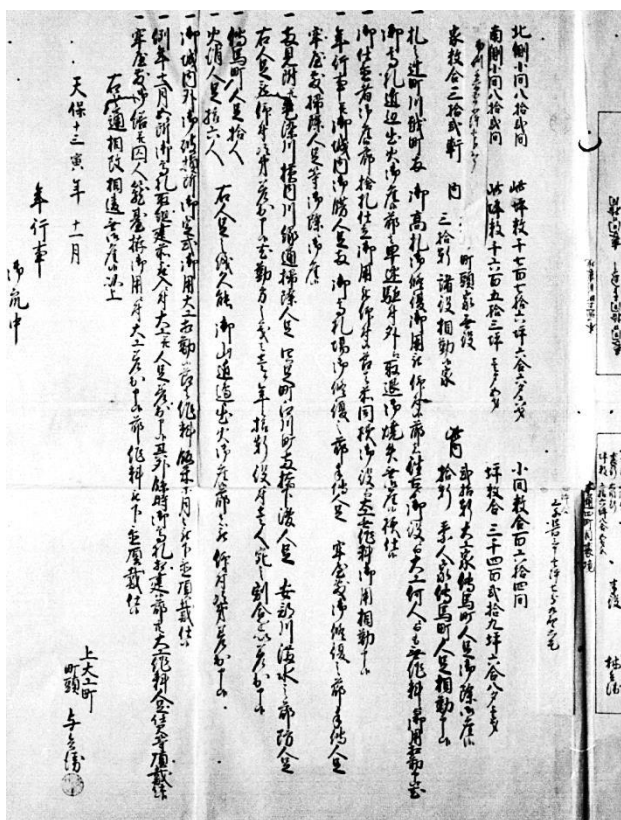
に上の方の大工は、新通二丁目に替地を賜わつて移住した。駿府城の修営の役を勤めるため諸役は免除されていた。町内の素人屋敷と呼ばれる屋敷は、大工以外の者の住居で、町方の役を勤める必要があった。

新通大工町は、慶長の町割りの際に新しく開かれた道筋「新通り」に設けられた大工町で、上大工町の大工が移住してできたものである。新通町は一丁目から七丁目までであるが、それぞれ異名があり、一丁目は旅籠町、二丁目を大工町、三・四丁目は馬喰町、五・六丁目は笠屋町、七丁目を大鋸町⁴と呼ばれた。

また、新通大工町は、上大工町に対して下大工町とも称され、やはり駿府城の修営の役を勤めるため諸役は免除されていた。

さらに、天保十三年(一八四二)の町絵図から、上大工町と新通大工町の大工の居住状況や公用として担った役割を確認することができる。

上大工町の町絵図【写真一―一―】【史料一―一―】を見ていく。



【写真 1-1-1】上大工町 (天保 13 年駿府町絵図)
「駿河国駿府町方文書」 静岡県立中央図書館所蔵

【史料一―一二】上大工町（天保十三年町絵図）

（表書）

天保十三年寅十一月改

上大工町

明治三庚午閏十月裏打致ス

（町絵図）【図一―一二】

北側小間八拾貳間 此坪数千七百七拾六坪六合六夕六戈 小間数合百六拾

四間

南側小間八拾貳間 此坪数千六百五拾三坪老夕五戈

坪数合三千四百

貳拾九坪炉六

合八夕老戈

家数合三拾貳軒 貳軒町頭家無役

貳拾軒大工家伝馬町人足御除

内 此内

三拾軒諸役相勤候家 拾軒 素人家伝馬町人足相勤申候 御座候

一札之辻町河原町両 御高札御修復御用被 仰付候節は往古より御役ニ而

大工何人ニ而も無作料ニ而御用相勤申候尤御高札近辺出火御座候節は早

速駆付外江取退御焼失無御座候様仕候

一御仕置者御座候節捨札仕立御用被仰付候節は前同様御役ニ而大工無作料

御用相勤申候

一年行事并御城内御鋸人足両 御高札場御修復之節手伝人足 牢屋敷御修

復之節手伝人足牢屋敷掃除人足等御除ニ御座候

一両見附并愛染川横内川縁通掃除人足 四ツ足町江川町両橋下浚人足 安

部川満水之節防人足右人足被 仰付次第差出申候尤勤方之儀は老ヶ年拾

軒役ニ付菅人宛之割合を以差出申候

一伝馬町人足拾人

右人足之儀久能 御山近辺出火御座候節は被 仰付次第

一火消人足拾六人

差出申候

一御城内外御破損所御定式御用大工相勤候節は作料飯米等月々被下置頂戴仕候

一例年十一月五ヶ所御高札取組建前被入ニ付大工并人足差出申候其外臨時

御高札相建候節共大工作料人足賃等頂戴仕候

一牢屋敷御繕并囚人籠台拵御用ニ付大工差出申候節作料被下置頂戴仕候

右之通相改相違無御座候以上

天保十三年寅年十一月

上大工町

年行事

町頭 与兵衛（印）

御衆中

【史料一―一二】より、上大工町の軒役は合計三十二軒で、内二軒は町頭家で無役、残りの三十軒が諸役を勤めた。大工家は二十軒を占めて伝馬町人足は免除され、大工家以外の十軒は素人家と言われ伝馬町人足を勤めた。町が担うべき公用は次のように定められていた。

（一）札之辻町・河原町の両高札の修復は、たとえ大工が何人掛ろうとも無作料で行なうこと。高札近辺から出火した場合、早急に駆け付け、高札を取り除き焼失を防ぐこと。

（二）仕置者がいる場合、捨札の仕立てを大工は無作料で行なうこと。

（三）年行事・城内鋸人足・高札修復手伝人足・牢屋敷修復手伝人足・牢屋敷掃除人足は免除する。

（四）両見附・川縁通掃除人足・橋下浚人足・安倍川満水時の防人足は、一ヶ年十軒役に一人ずつの割合で差し出すこと。

（五）伝馬町人足十人・火消人足十六人。久能山近辺で出火の場合、指示あり次第、出動のこと。

第三節 駿府における大工の分布

駿府における大工の人数を確認できる史料として、延享四年（一七四二）の両大工町太子講仲間帳（資料四）、宝暦三年（一七五三）に改正された太子講仲間帳（資料五）、天保十三年（一八四二）駿府町絵図、明治前期駿府町絵図が在る。

延享四年については、両大工町が発起人となつて結ばれた太子講の仲間帳で、上大工町丁頭を筆頭に七十人、新通大工町丁頭を筆頭に四十一人の大工が駿府に在ったことが確認できる。

十一年後の宝暦三年の太子講仲間帳は、宝暦二年七月に幕府より駿府大工方的人数・名前・住所を提出するよう命じられて、宝暦三年正月五日に改正したものである。この中には上大工町の大工は見られず、新通大工町は三人のみである。仲間帳であることから、駿府の大工全体を把握するものではなく、仲間帳に記載の大工の存在を示す史料と考える必要がある。これによると、静岡浅間神社門前の御器屋町に十一人、馬場町に十二人の大工が在った。十分一材木蔵に近い安西一丁目にも十一人、新通大工町と隣接する本通七丁目に九人、上大工町と隣接する本通五丁目に六人の大工が居住していたことが判明する【表1-1-3】。

【表 1-1-3】宝暦 3 年（1753）駿府大工組一覧表

	花村 長左衛門組	花村 與七郎組	望月 長右衛門組	細井 長兵衛組	海野 佐兵衛組	池田 十右衛門組	川本 仁左衛門組	花村 清右衛門組	花村 忠左衛門組	石川 安右衛門組	合計
馬場町	8	3								1	12
車町	4	1						1			6
番町長八分	1										1
安倍町	1	2		2							5
茶町一丁目	1										1
本通四丁目					1			1		1	3
本通五丁目	1				4					2	7
本通六丁目					2			3			5
本通七丁目								9			9
本通九丁目								2			2
本通十丁目									1		1
横内町	4	3									7
横田町	3										3
上横田町		1									1
紺屋町	3										3
鍔物師町	2			1							3
八幡町	1										1
宮内	1										1
下石町		1		2							3
安西一丁目		5		2	1					3	11
安西四丁目										1	1
御器屋町		7		4							11
宮ヶ崎		1									1
宮中			2								2
草深町				2			1				3
寺町					1						1
上寺町						1					1
寺町三丁目										1	1
呉服町一丁目					1						1
呉服町二丁目						3					3
下魚町						1		1			2
江尻町						1					1
人宿町二丁目						1					1
人宿町三丁目										1	1
両替町一丁目						1					1
両替町二丁目						1					1
両替町四丁目										1	1
茶町二丁目							1				1
上桶屋町							1				1
上石町							1			1	2
梅屋町							1			2	3
伝馬町								1			1
材木町							1				1
新通一丁目								1			1
新通大工町								1	2		3
新通三丁目								3	1		4
新通四丁目					2				2		4
研屋町										2	2
片羽										1	1
建徳村								1			1
小坂村								1			1
曲金村	1										1
黒又村							2				2
吉田村									1		1
中田村									1		1
池田村					2						2
小鹿村						2					2
龍上村		1									1
合 計	31	25	2	13	14	11	8	25	8	17	154

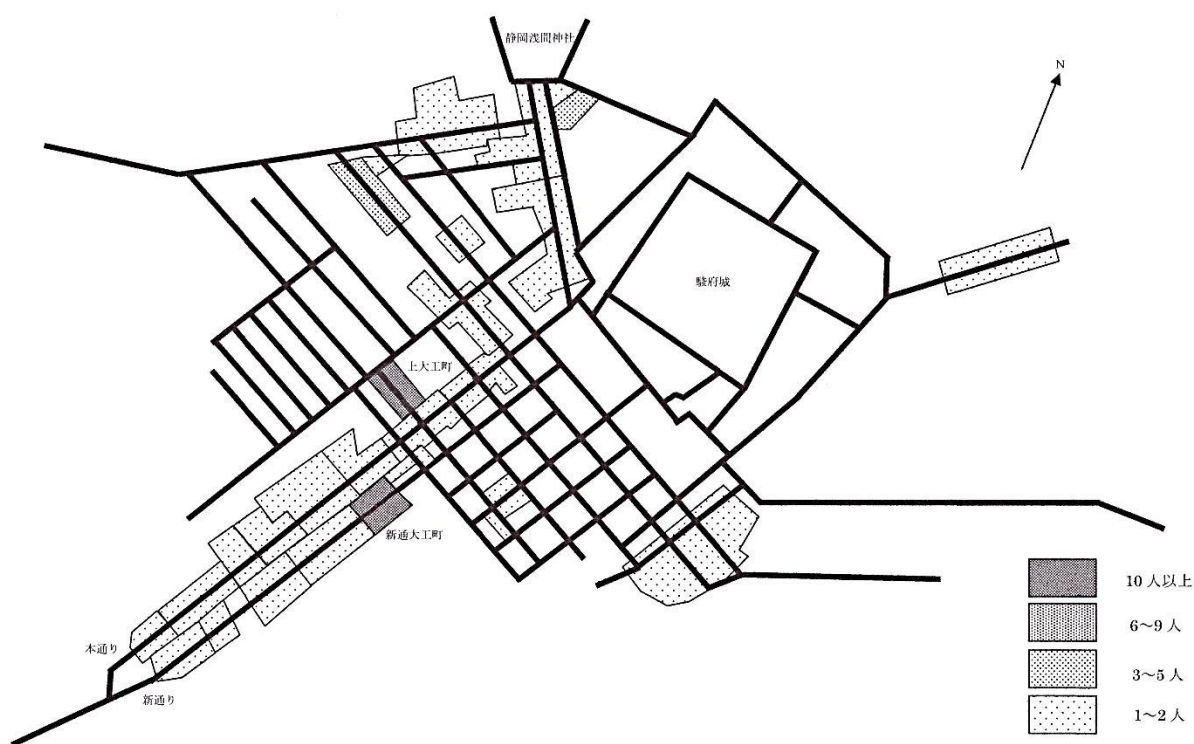
【表 1-1-4】駿府における大工の分布

町名	天保13年	明治前期	町名	天保13年	明治前期
呉服町一丁目	0	0	御器屋町	6	4
呉服町二丁目	0	2	宮ヶ崎町	1	2
呉服町五丁目	0	1	馬場町	4	7
呉服町六丁目	0	1	四ツ足町	0	0
江川町	0	1	研屋町	2	6
下桶屋町	0	2	通り研屋町	0	0
平屋町	0	3	本通二丁目	1	1
江尻町	0	2	本通三丁目	2	1
下石町一丁目	0	1	本通四丁目	4	5
下石町二丁目	0	2	本通五丁目	5	8
下石町三丁目	0	1	本通六丁目	4	2
藤右衛門町	3	2	本通七丁目	4	9
下魚町	0	3	本通八丁目	3	6
鍛冶町	0	4	本通九丁目	2	4
両替町一丁目	0	1	本通川越町	1	0
両替町二丁目	0	2	堤添川越町	4	0
両替町三丁目	0	1	新通一丁目	0	3
両替町四丁目	0	0	新通二丁目	12	9
両替町五丁目	0	1	新通三丁目	5	2
両替町六丁目	0	2	新通四丁目		6
七間町二丁目	0	1	新通五丁目	3	7
七間町三丁目	1	2	新通七丁目	3	2
寺町一丁目	1	0	新通川越町	1	4
寺町二丁目	0	2	紺屋町	3	11
寺町三丁目	0	2	伝馬町	0	0
寺町四丁目	0	2	鋳物師町	0	3
人宿町一丁目	0	2	上八幡町	0	3
人宿町二丁目	0	1	下八幡町	0	0
人宿町三丁目	0	2	台所町	0	2
上石町一丁目	0	0	院内町	0	5
上石町二丁目	0	3	上横田町	0	4
梅屋町	0	2	下横田町	0	1
上大工町	30	15	横内町	3	5
大鋸町	0	1	上魚町	0	0
西寺町	0	3	草深代地	6	5
車町	0	2	片羽町	0	4
茶町一丁目	0	0	追手町	0	4
茶町二丁目	2	1	屋形町	0	0
上桶屋町	0	1	静岡宿	0	4
土太夫町	0	1	裏一番町	0	4
柚木町	2	0	一番町	0	2
安西一丁目	3	8	二番町	0	1
安西二丁目	0	3	三番町	0	1
安西三丁目	0	2	五番町	0	1
安西四丁目	0	2	北番町	0	1
安西五丁目	0	4	鷹匠町一丁目	0	3
安倍町	0	3	鷹匠町二丁目	0	7
材木町	1	0	鷹匠町三丁目	0	0
草深町	0	0	東鷹匠町	0	1
西草深町	0	0	清水尻南安東	0	0
東草深町三丁目	0	0	合計	122	257

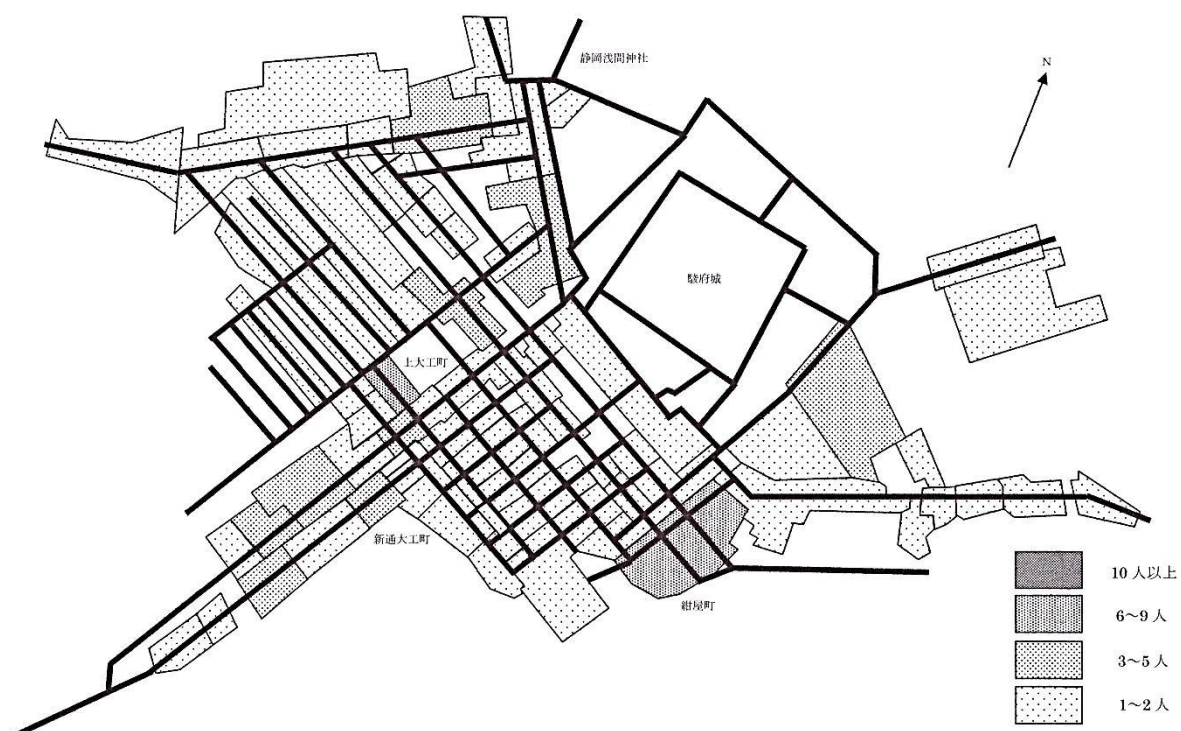
天保十三年（一八四二）と明治前期の駿府町絵図によって、駿府における大工の分布を把握することが可能である【表一―一四】。

天保十三年当時は、上大工町に三十人、新通大工町に十二人の大工が在り、他の町と比べて大工の集住傾向が見られる。上大工町が隣接する本通り筋と、新通大工町が属する新通り筋に大工が分散して居住していることが、【図一―一三】天保十三年駿府大工分布図から読み取ることができる。

明治前期になると、上大工町の大工十五人を中心に本通り筋・新通り筋と、静岡浅間神社門前に比較的多くの大工が集まっている。その中で、紺屋町に大工十人が認められる他、【図一―一四】明治前期駿府大工分布図によると、駿府全体に大工が分散するようになったことが判明する。



【図 1-1-3】天保 13 年（1842）駿府大工分布図



【図 1-1-4】明治前期駿府大工分布図

第四節 駿府の大工と太子講

太子講とは、聖徳太子を祀る講で、もともとは信仰的なものであったが、江戸時代に入り職人組合の設立を契機に職人の間で普及したものである。享保二年（一七一七）、江戸の各職はじめ、各地共に同業の組合が設けられ、駿府でも同年十月三十日に大工職組合が創始された。その三十年後の延享四年（一七四七）九月に、上下両大工町が発起人となり太子講が結ばれたのである⁵⁾。太子講は、職人間の秩序を保つために共通の信仰の対象を設けたのがはじまりとされる。

延享四年の太子講仲間帳（資料四）によると、太子講が開かれるのは聖徳太子の命日である毎月二十二日で、最寄に銭三文を持ち寄って溜め置き、正月十六日と七月十六日の昼四つ時、極楽寺で行なわれる組合全体の寄合いに、一人十八文宛（三十六文／年）を持参することになっている。この太子講の重要な役割として組合の規定と作料の決定がある。

延享四年の組合は、上大工町丁頭海野佐兵衛、石川安右衛門を筆頭に計七十名、下大工町丁頭花村清右衛門、花村忠左衛門を筆頭に計四十一名、合計百十一名で設立された。

宝暦三年（一七五三）正月改正の太子講仲間帳によると、大工組が十組に増え、いずれも組頭名が組名になっている【表一―一―三】。この組頭のうち何名かは久能山東照宮・駿府城・静岡浅間神社等の公儀作事に携わり、延享四年の筆頭四名も含まれている【表一―一―五】。大工組の構成は地域ではなく、駿府の町々と周辺の村々まで広範囲に及んでいる。さらに組の構成人数にもばらつきがあり、宝暦期の大工総人数は百五十四名で、延享時よりも増加している。当初、上下大工町が発起人となり、太子講が結ばれたが、上大工町在住の大工の記載はなく、新通大工町の住人は三人のみであった。天保十三年（一八四二）には、上大工町・新通大工町共に大工が集住しており、公用を担っていたことは駿府町絵図からも明らかである。

【表 1-1-5】 宝暦 3 年（1753）大工組頭一覧表

大工組	人数	備 考 ※宝暦以前担当の公儀作事
花村長左衛門	31	久能山東照宮造営（元和 2 年） 駿府城内外修復（寛永 9 年～） 静岡浅間神社再建（寛永 18 年）棟梁
花村与七郎	25	村山浅間神社造営（元禄 10 年）棟梁 小国神社造営（元禄 10 年）棟梁 天宮神社造営（元禄 10 年）棟梁 駿府城修復（宝永 5 年）駿府棟梁組頭 久能山東照宮霧除（宝永 2 年）
望月長右衛門	2	駿府城修復（宝永 5 年）小屋棟梁
細井長兵衛	13	
海野佐兵衛	14	延享（上大工町丁頭）
池田十右衛門	11	
川本仁左衛門	8	川本仁右衛門カ（駿府城修復（宝永 5 年）棟梁）
花村清左衛門	25	花村清右衛門カ 延享（下大工町丁頭） （静岡浅間神社再建（寛永 18 年）棟梁）
花村忠左衛門	8	延享（下大工町丁頭）
石川安右衛門	17	駿府城修復（宝永 5 年）棟梁 延享（上大工町丁頭）

安政五年（一八五八）十月に大工職十組で取り決められた規定書「十組仲間大工規定書」（資料六）がある。往古からの大工職の変遷や十組内の規則、太子講等について詳細に記されている。大工組数は宝暦三年と同数だが、組名は番号に変わっている。最初に、「大工職規定書」の取り決めにあたっての経緯が記されている。

駿府大工職は、往古より職親弟子の間柄によって各々出入先を持ち、勝手な他所への出入りは仲間一同で禁止されていた。地震・洪水・火災によって建物が破損・焼失した時は、平常と異なり仕事が多くなるため、仲間の規定を乱さぬように、と天明年中（一七八一〜九）に評議された。

公儀の修復御用は「大工定式」と呼ばれ、駿府における対応の変遷について次にまとめた。

（一）天明以前は、棟梁方より町方大工への指示によって、交代で大工定式を勤めていた。

（二）天明年中から、大工定式は上下両大工町の大工が勤めるようになった。

定式御用も年により入用・人工が異なるため、大工職一同から冥加金三十六銭／人を、毎年正月と七月の太子講の際に支払われた。また両大工町の大工を職親とし、彼らは世話役を勤めた。

（三）安政五年以降、大工定式は町方年番の指示により町方大工が勤めることになった。

天保年中の凶作により両大工町は資格を失い、さらに仲間の規定を破った。職親として不適任であるため、今回十組で協議の結果、両大工町へは付き合わず、職親も断り、十組年番中が世話役となることになった。

以上のような経緯により、旧来通りの規定を左記の通り定めたのである。

イ）賃金の増賃禁止。

ロ）定式御用大工は、年番によって決められ、棟梁方の指図を受け、心得違いや遅滞なく勤める。

ハ）駿府城・静岡浅間神社等公用の普請は、棟梁方に従い、勝手な請負は禁止する。

ニ）各々の出入先以外への入職は禁止する。

ホ）在町の寺社堂宮の場合、過半は入札で行なうため、在家でも入札が必要となる場合がある。

ヘ）規定仲間ではない両大工町大工の十組仲間持合先への立入は許さず、逆に仲間の両大工町の職先への出入も禁止する。

ト）弟子の年季は十年、礼奉公一年、合計十一年とする。年季が明け、組入りの際には披露酒代五百文、十組へ披露の場合は酒代七百文を差し出す。いずれも職親から届け出がない場合は認めない。

チ）他国の同職者が当所へ落ち着き仕事をする場合は、職親に付いて規定を守ること。さらに当所へ住居を定め、組入りする際は酒代金二朱、十組へ披露の際は金一両二分を差し出す。職親からの届け出がない者は認めない。

リ）毎年正月十五日・七月十五日の太子講の際には、一人十八文宛差し出し、酒代又は定式入用への備えとする。太子講へは遅滞なく出席すること。

定式御用・駿府城・静岡浅間神社等公用の普請は、棟梁方の指示に基づき行なわれ、両大工町の大工については「規定仲間ニ無之両大工町之者」とあり、この度より両大工町は大工仲間外であることが明記されている。

第五節 駿府の火消と大工・木挽

駿府における火消は、元禄元年（一六八八）前後に創設され、市中七十五ヶ町、火消人足七百六十二人が設置された。町奉行指揮の下、井筒組・輪違組・軍配組・太鼓組・蛇目組・斧組の六組から成り、斧組は火事場詰を務めた。斧組は、上大工町・新通大工町・新通七丁目・大鋸町・西寺町の五町で構成されていた⁷。上大工町・新通大工町には大工が集住し、新通七丁目・大鋸町・西寺町は木挽が居住していたことから、各町には火消人足が課せられていた。

斧組五町の火消人足数の変遷について、『駿國雜誌一』（万治元年（一六五八）火消役）、「享保十九年寅七月町火消人足改帳」。（以下「町火消人足改帳」、明和二年「新通大工町書上」）、天保十三年「駿河国駿府町方文書」中町絵図から抽出し、【表1-1-6】にまとめた。万治期の斧組の火消人足は三十六人であったが、享保期には四十四人、天保期には四十三人に増員されている。享保期以降、上大工町が十六人と最も多く、次いで新通大工町が十三人、大鋸町と西寺町からは合わせて七人の火消人足が負担された。天保十三年の町絵図によると、「西寺町大鋸町」が一町の町絵図となっており、その軒数は二十六軒であった。

「町火消人足改帳」【史料1-1-3】によると火消の道具として、上大工町・新

【史料1-1-3】享保十九年寅年七月 町火消人足改帳

斧組。 幟、黒一通の横筋違。

上大工町	一、家数三十二軒	此出人足十六人	町纏一	鋸四	
新通大工町	一、家数二十六軒	此出人足十三人	町纏一	鋸四	
新通七丁目	一、家数十七軒	此出人足八人	町纏一	斧三	
大鋸町・西寺町	一、家数十七軒	此出人足七人	町纏一	斧二	
斧組合て五組、人足合て四十四人					
斧大纏	一本	町纏	四本	鋸	八枚
かけや	八本	斧	五挺	鳶口	六本

通大工町は鋸八枚（各四枚）、かけや八本（各四本）、新通七丁目は斧三挺、鳶口三本、大鋸町・西寺町は斧二挺、鳶口四本を携え、火事場へ急行することになっている。当時の火消は、建物を壊すことで延焼を防ぐ破壊消防であったため、大工・木挽・鳶が各道具を用いて、火消に当った。

この定火消の外に、文政四年（一八二一）九月十三日、百人組合火消が創設された。駿府九十六ヶ町の内、九十ヶ町で構成され、九十ヶ町を東西南北四組に分けて、各組消防人足を二十五人宛、合計百人で組織された。各町から一人宛消防人足を出し、不足の十人は四十軒役以上の町から出すことになっていた¹⁰。

【表 1-1-6】 駿府定火消「斧組」の変遷

町 名	万治元年 (1658)	享保 19 年 (1734)	明和 2 年 (1765)	天保 13 年 (1842)
	火消人足	火消人足／軒数	火消人足／軒数	火消人足／軒数
上大工町	11 人	16 人／32 軒	—	16 人／32 軒
新通大工町	6 人	13 人／26 軒	13 人／25 軒	13 人／27 軒
新通七丁目	11 人	8 人／17 軒	—	7 人／17 軒
大鋸町	3 人	7 人／17 軒	—	7 人／26 軒
西寺町	5 人		—	
合 計	36 人	44 人	—	43 人

第六節 駿府の左官と太子講

駿府町絵図¹¹から駿府の左官を抽出し、【表 1-1-7】駿府町絵図による左官一覧表を作成した。天保十三年（一八四二）の町絵図には左官が三人しか記されないが、明治前期には百三十五人の左官が確認できる。明治前期の分布状況から、静岡浅間神社周辺の車町・安西一丁目・馬場町に左官が集住していたことが判明し、中でも車町¹²に集中していた。

左官に関する史料として、静岡市左官組合所蔵史料（太子講仲間帳関連）がある¹³。駿府の場合、左官は五組、大工は十組あり、それぞれ太子講が結ばれていた。左官組合史料は、組単位の仲間規定書や仲間約定証が多く、同時期のものが五組分揃うものは少ない。その中で、明治七年（一八七四）「左官仲間」¹⁴、明治八年（一八七五）「左官連名帳」¹⁵、明治二十八年（一九九五）「仲間約定証」¹⁶から五組の人員構成及び分布状況を確認することができた。

【表 1-1-7】駿府町絵図による左官一覧表

町名	天保十三年	明治前期	町名	天保十三年	明治前期
江尻町	0	3	馬場町	0	6
下石町二丁目	0	2	研屋町	0	1
下石町三丁目	0	2	本通三丁目	1	0
藤右衛門町	0	1	本通四丁目	0	3
下魚町	0	2	本通五丁目	1	4
鍛冶町	0	1	本通七丁目	0	2
両替町二丁目	0	1	本通八丁目	0	2
両替町六丁目	0	1	本通九丁目	0	5
七間町二丁目	0	1	堤添川越町	0	3
七間町三丁目	0	1	新通四丁目	0	1
寺町二丁目	0	2	新通五丁目	0	1
寺町三丁目	0	2	新通川越町	0	3
寺町四丁目	0	2	紺屋町	0	2
人宿町三丁目	0	2	下八幡町	0	2
上石町一丁目	0	1	台所町	0	2
梅屋町	0	1	院内町	0	1
西寺町	0	4	横内町	0	12
車町	0	14	上魚町	0	1
安西一丁目	0	10	草深代地	0	1
安西二丁目	0	1	追手町	0	2
安西三丁目	0	1	屋形町	0	1
安西四丁目	0	1	静岡宿	0	1
安西五丁目	0	1	裏一番町	0	1
安倍町	0	3	一番町	0	1
材木町	0	1	二番町	0	1
西草深町	0	4	鷹匠町一丁目	0	1
東草深町三丁目	0	1	東鷹匠町	0	1
御器屋町	0	5	清水尻南安東	0	3
宮ヶ崎町	1	0	合計	3	135

【表一―一八】は、明治八年と明治二十八年の組別人数及び合計人数を集計したものである。明治八年の左官の集住傾向を見ると、最も多いのが車町（二十六人、二番組）、続いて横内町（十七人、五番組）、安倍町（十人、一番組）、下魚町（十人、四番組）であった。

天保十三年の町絵図とほぼ同時期の史料としては、天保十二年（一八四一）一番組¹⁷・二番組¹⁸の史料があり、一番組三十五人、二番組三十九人の左官が認められる。

車町在住の左官を中心とした二番組は、天保・安政期の史料から車町・馬場町在住者のみで構成されていたことがわかる【表一―一九】。しかし、明治期の二番組史料には、両町以外の左官も見られるようになっていく。

以上によって、絵図では認められなかった左官の実態が一部明らかになった。駿府の大工の場合、大工町と新通大工町の者が公用を担っていた。同様に馬場町と車町が、駿府城等を担当する町であり、「御公儀様御用」を勤めていたことが、安政三年「仲間規定連印書」（資料七）から判明する。

また、安政二年（一八五五）卯五月の太子講による申合規約¹⁹からも二番組（馬場町・車町）が肝煎世話役を務める等、特別な役割を担っていたことが読み取れる。

第七節 大工と左官の仲間規定

駿府の大工と左官の仲間規定について、同時期の史料で内容を比較検討する。大工の安政五年（一八五八）十月「十組仲間大工職規定書」（資料六）と左官の安政三年（一八五六）七月「仲間規定連印書」（資料七）の相違点を【表一―一十】にまとめた。

弟子の年季については、大工も左官も十であるが、大工は礼奉公一年が取り決

められていた。また、左官は中年の者の場合は年季六年で、弟子の人数は二人に制限されている。仲間入のために必要な費用は左官の方が多く、大工の場合は、親方が所属する組と、十組披露の場合と、それぞれ酒代を支払う必要があった。以上のような左官の基本的な規定については、天保十二年（一八四一）の規定²⁰の内容も同様である。文久三年（一八六三）以降の史料は、作料に関することが²¹主要な内容で、頻繁に改正が行なわれていた。

【表 1-1-8】 明治期の左官組別人数

	1 番組	2 番組	3 番組	4 番組	5 番組	合計
明治 8 年	40	39	49	39	40	207
明治 28 年	34	41	47	31	23	176

【表 1-1-9】 左官 2 番組変遷

	馬場町	車町	合計
天保 12 年	12	27	39
安政 3 年	13	22	35

【表 1-1-10】 安政期 大工・左官規定一覧表

	大工	左官
弟子年季	10 年 礼奉公 1 年	若年 10 年 中年 6 年
弟子人数		2 人まで
仲間入	披露酒代 500 文 十組披露酒代 700 文	金 100 疋

駿府には多数の職人町があり、中でも天保期に工匠の集住が確認できるのは両大工町のみで、大工たちは定式御用と火消人足を勤めた。駿府でも太子講が結ばれ、大工は十組、左官は五組で構成され、左官は二番組が定式御用を勤めた。安政五年の大工規定書に、天保年中の凶作の際に両大工町は定式御用の資格を失い、以降は棟梁方の指図により町方大工が勤めることになったとある。両大工町が仲間規定を破ったことが記されており、駿府の町で重大な変化が起こったことを示している。

註

- 1 『駿河国駿府町方文書』(S〇九二・二〇三)町絵図、静岡県立中央図書館所蔵。天保十三年(一八四二)の町絵図の他、一部の町に関しては元文三年(一七三八)、明治三年(一八七〇)の町絵図も存在する。
- 2 『明治前期静岡町割絵図集成』静岡郷土出版社、一九八九。
- 3 江戸時代、駿府の林産物を貯蔵した庫で、安倍山中五十八村、藁科三十三村より安倍川に出す材木の十分一を納めることによりこのように呼ばれた。これは、上下二カ所あり、材木町に上十分一材木蔵、安西五丁目以下十分一材木蔵が置かれた。(阿部正信『駿國雜誌』吉見書店、一九七六。『静岡市史編纂資料』第六卷、静岡市役所教育社会課、一九二九。『静岡市史』第二卷、静岡市役所、一九三一。)
- 4 新通七丁目を大鋸町と呼ぶのは、西寺町大鋸町の一部を新通町に移したもので、下大鋸町とも呼ばれた。大工町と同様に公用を勤め、年行事役・町役は免除された。木挽以外の者は伝馬町人足を勤めた。(新庄道雄『修訂駿河国新風土記』上巻、図書刊行会、一九七五。『静岡市史』第二卷。)
- 5 榊原幸次郎『番匠秘事録』建築業助成会、一九三一、所収。
- 6 「十組仲間大工規定書」と同様の内容のものが『番匠秘事録』に「規定書の事」として収録されている。それによると、

安政五年年十月

十組	当年番(七番組印)
安西五丁目	竹蔵
世話人	外三十三名(氏名略)
御器屋町	忠兵衛
安西一丁目	文吉

と記されており、大工組数は十組ある。「当年番(七番組印)」とあるように、組名は番号で呼ばれていたことがわかる。

『静岡市史』第二卷。

同右、所収。

『静岡市史』近世史料三、静岡市役所、一九七六。斧組五町の内、明和期の史料が残るのは新通大工町のみである。

『消防警備関係書類附火災志』『静岡市史』近世史料三。

『駿河国駿府町方文書』中町絵図。『明治前期静岡町割絵図集成』。

「馬場町の南なり」近世此町は多く府城造営の傭夫、所謂鳶の者住めり」

(中村高平『駿河志料』歴史図書社、一九六九。)

静岡市の左官の太子講については拙稿「左官組合と太子講―静岡市の事例から」(新宿区立新宿歴史博物館『鏝(KOTE)―伊豆長八と新宿の左官たち』)新宿区教育委員会、一九九六)参照。

「明治七年戊辰一月改 左官仲間連名」在住地書き込み少。(静岡市左官組合史料)

「老番組 二番組 三番組 四番組 五番組 明治八年 左官連名帳 亥正月之改」(同右)

「仲間約定証」明治二十八年一月十七日 沓・式・三・四・五番組。(同右)

「山ノ手老番組 天保十二歳 左官連 丑三月吉日」表紙及び内容がほぼ同一のものがあり、左官の人数が三十五人と四十二人で異なる。(同右)

「天保十二年辛丑歳四月 仲間規定連印書 二番組 馬場町 車町」(同右)

「二番組：肝煎世話役八人(内年番二人)、他四組：世話役二・三人宛。正月十六日二番組太子講に棟梁方と他四組世話役が集まり取極等行なう。

(白鳥金次郎『聖徳太子伝附遺跡巡り』聖徳太子伝刊行会、一九五九、所収。)

「天保十二年辛丑歳四月 仲間規定連印書 二番組 馬場町 車町」(静岡市左官組合史料)

拙稿「左官組合と太子講―静岡市の事例から」参照。

第二章 駿府における公儀作事と工匠

駿府における主要な公儀作事として、駿府城、久能山東照宮、静岡浅間神社が挙げられる。駿府城と久能山東照宮は、大工棟梁中井大和守正清によって造営され、幕末まで幕府作事方・小普請方が修営を行なった。静岡浅間神社の寛永度再造営は幕府作事方によって行なわれたが、文化度再建は駿府城代・町奉行の下で六十余年かけて完成された。これらの公儀作事には駿府の工匠も参画しており、それぞれの建築普請の実態と工匠の関わりについて見ていきたい。

第一節 駿府城

現在の駿府城跡は、徳川家康が將軍職を秀忠に譲り、大御所として隠居するために築いた駿府の城址である。家康は、天正十八年（一五九〇）江戸を居城とし、慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原の戦いで天下を握ると、慶長八年に征夷大將軍に任じられ、江戸幕府を開いた。その後の慶長十年、家康は將軍職を辞して、二代將軍に徳川秀忠が任命されると、自らが幼少期と天正十三〜八年を過ごした駿府に城を築き隠居することとしたのである。

駿府城の造営について、『徳川実紀』¹慶長十一年十月六日条に「大御所駿府につかせ給ひ。駿城経営の地を沙汰し給ふ。」「明年構造あるべしと仰出さる。」「と見られ、駿府に到着した家康は、駿府城造営の地を示し、翌十二年に築城を開始することを命じた。慶長十二年（一六〇七）一月二十五日条「大御所江戸の城を御所にゆづらせ給ひ。いよいよ菟裘の地を駿府にさだめ給ふべしと仰出され。駿府の城郭を廣め。諸士の宅地を分布し給ふべしとて。」家康は、江戸城を秀忠に譲り、駿府を隠居所に定めたのである。前年の駿府滞在時²に城郭の範囲を少し南北に拡張することを命じていた。駿府城の修築には、越前・美濃・尾張・三河・遠江の諸大名に人夫を課した³。また、前年より結城秀康の家老本多富正は、駿

府城修築の役に当たっていた。「富正ある日富士山に分けいり材木を伐りとり。正月にいたり沼津までいでゝ。」⁴と本多富正は、材木を富士山に求め正月には、伐出された材木が沼津まで下ろされたのだった。同じ頃、吉野でも材木の調達が行なわれていた。駿府城の大工棟梁中井大和守正清へも、良材を確保するために、目利きの者を派遣させて刻印を打つよう指示が出された⁵。また、石材は安倍川の支流蘆科川流域から調達された⁶。

慶長十二年二月十七日条「駿府城経営はじめらる。」⁷とあり、ついに駿府城造営が開始された。三月二十五日条には「駿城修築の為。畿内。丹波。備中。近江。伊勢。美濃十か国の人夫召る。」⁸とあり、人夫をさらに遠方の十ヶ国にも課す大普請となった。五月二十日には、朝鮮通信使が駿府城にて家康に謁見しているが、「このとき駿城殿閣経営いまだ全からず。」⁹という進捗状況であった。同二十三日条によると「駿城本丸経営始あり。天守台の基石もけふはじめて置る。」¹⁰とあり、この時、本丸の造営および天守台の築造が始められたことがわかる。六月には、郡上藩主遠藤但馬守慶隆に、駿府城造営のため木曾山より良材を選び運ばせている¹¹。七月三日条「駿府城落成せしかば。大御所移らせたまふ。」¹²ついに、駿府城が落成し、家康が江戸から移る段階を迎えた。駿府城の造営が全て完了したのではなく、八月十五日条には「駿府の経営多半成功すといへども二丸はいまだならず。凡当城本丸四方百二十間づゝ。其高九間。天守台十三間。二丸は百五十間。その高七間。本丸内石垣高さ。あるは七間。あるは五間なりとぞ。すべてこの二三年このかた。江戸。駿府。伏見等をはじめ。城々修築拓關一日もやむときなし。いかさまにも近年のうち戦争あるべき為にやと。下民の巷説洵々たり。」¹³駿府城の多半は完成しているが、二之丸はいまだ進行中のものである。七月三日の時点では、家康が居住する殿閣部分が竣工したといえる。また、本丸・天守台・二丸の規模が記されている。さらに、この二・三年間、城普請が一日も止むことがないため、近年のうちに戦争が始まるのではないかと世間では噂されていた。ようやく十月に「また駿城経営成功しければ。諸国の役夫を放ちかへさ

る。¹⁴とあり、駿府城の全造営が竣成したのであった。

駿府城完成からわずか二ヶ月後の十二月二十二日のこと、「丑刻駿城火あり。殿閣一字ものこらず此災にかゝる」¹⁵とあり、一夜にして駿府城は全焼した。「すべて此火後宮女房の。夜の物置所へ手燭を置きしが。其火屋壁の張付にうつり。廣き殿閣へ一時にもえひろがりし事なれば。」¹⁶と、物置所から出火したことも判明している。「京より工匠雲霞の如く駿府へ下る。これ駿城火後経営あるべきが為なり。」¹⁷と、二十九日条にあることから、その当時、禁裏の作事のため京都に在った大工棟梁中井大和守正清は、駿府城再建のため、京都の工匠を伴い、即刻駿府へ駆け付けたことがわかる。明けて十三年一月条「駿府本丸経営をいそがれ。三遠の内掛川。浜松。吉田。岡崎の工夫を召あつめ。信濃木曾。紀伊熊野の山々より良材を伐出し。関東の工夫を召て伊豆山の材を採り。ともに駿府に運送せしむ。」「こたび経営の用に江府儲蓄の材木を用ひ給ふべきよし仰進せらる。此材木運送のため。諸国浦々にて通船を査検そしめ。」¹⁸と、駿府城本丸の再建が急ぎ進められた。掛川・浜松・吉田・岡崎から工夫を招集して木曾および熊野の良材を、関東の工夫は伊豆の材木を伐出し、駿府へ運送させた。さらに江戸の備蓄材も使用することになり、材木運送船は諸国の港にて検査されることとなった。二月十四日条「駿府の本城上棟の式行はる。」¹⁹ということから迅速に再建が進められたことがわかる。先の火災の経験から、「駿城殿閣屋舎ことごとく瓦葺になし。御座所はこと更白鐵を沃せしめらる。」²⁰と、屋根葺き材の仕様が記されている。屋根は全て瓦葺に変更し、家康の御座所は白鐵で仕上げられた。三月十一日に「駿府本城落成して。大御所うつらせたまふ。」²¹と、ようやく家康が御城に移れる段階まで再建されたのだった。そして、八月二十日に「駿城七重の天守上棟あり。」とあるように、七重の新天守の上棟までこぎつけたのである。大工棟梁中井正清以下、工匠たちに褒美が与えられた²²。この頃家康は、二之丸で秀忠と猿樂を楽しんでいる²³ことから、一之丸が完成していたことがわかる。小堀作助政一は、駿府城作事奉行を勤めた功績により、小堀遠江守と称し、従五

位下に叙された²⁴。小堀遠江守は、天守並びに二之丸書院、同数寄屋の奉行²⁵で、「数寄屋」を担当していた。駿府城の造営と共に城下町も整備され、現在の静岡市街地の基盤が築かれた。慶長十五年十月九日、再び火災が起こった。「駿城の御厨所より火おこり。阿茶の局のすめる方の廊にうつる。また其余焰二丸にをよび。屋舎いさゝかやけ。瓦葺の倉三十間ばかり焼うせぬ。」²⁶と、この度は二之丸と瓦葺きの倉三十間を焼失した。

元和二年（一六一六）四月十七日、徳川家康は、駿府城中で七十五歳の生涯を閉じた。慶長十四年に駿府に移封されていた家康十男の徳川頼宣が、駿府城主となったが、元和五年、頼宣は紀伊国伊勢松坂を与えられて和歌山城主となる。その後、松平重勝が駿府城代となり、駿府は幕府の直轄地となった。寛永元年（一六二四）、二代將軍秀忠の二男忠長が駿府城主として迎えられるが、寛永九年、上野国高崎に逼塞を命じられ、駿府徳川藩は改易となり、再び駿府城は番城となった。在番に松平忠重・秋田俊季・新庄直好、町奉行に長崎元通・佐藤継成が任命され、松平勝政が駿府城代に就任した。これ以降、幕末まで駿府は幕府直轄地のままであった²⁷。

家康の薨去後、遺言通り中井大和守正清によつて久能山に仮殿が建立され、翌三年には久能山に社殿が完成した。そして同五年、中井正清も逝去したのである。寛永十二年（一六三五）十一月二十九日「駿府市街失火し城中にうつり。天守。殿閣。櫓屏ことごとくこの災にかゝり。民屋過半焼失たるよし注進しければ。」²⁸中井大和守正清によつて造営された駿府城天守・殿閣・櫓は悉く焼失した。同五年、駿府城の殿閣造営²⁹が行なわれたのである。

宝永四年（一七〇七）十月四日、宝永大地震が起こった。駿府城も石垣や北丸が比較的大きな被害を受け、翌五年一月に普請が始動された。手伝奉行神原式部大輔・松平越中守・松平伊豆守、幕府作事方の大棟梁甲良豊前宗員、棟梁川合利兵衛・石丸仁右衛門・桑原伝八、石方亀岡石見等が派遣された（第二部第三章参照）。棟梁の中に駿府町棟梁組頭花村与七郎、駿府棟梁川本仁右衛門・石川安右衛

【表 1-2-1】駿府城修営年表

年月日		記 事	備 考
慶長12年（1607）	2月17日	駿府城造営開始	大工棟梁中井大和守正清
	5月23日	天守根石置き開始	
	7月3日	天守石墨完成	
	8月15日	二丸半分完成	
	10月	造営成功	
	12月22日	城中失火。本丸殿舎・櫓・堀・門全焼	大工棟梁 中井大和守正清
慶長13年（1608）	2月14日	殿舎上棟	大工棟梁 中井大和守正清
		天守・櫓門	作事奉行 小堀政一
	3月1日	殿舎落成	
	3月3日	城内屋形瓦葺、御座所白蠟仕上	
	8月20日	七重天守上棟	大工棟梁 中井大和守正清
慶長14年（1609）	6月1日	本丸女房局に放火	
慶長15年（1610）	10月9日	上台所城梁より出火	
		台所・阿茶局廊下・二丸・倉30間	
		天守・諸御殿修復	
慶長16年（1611）	8月16日	書院再建開始	
	9月6日	城内造作半ば完成	
	9月9日	前殿（対面所）造替	
	9月14日	料理の間造作完成	
	10月1日	前殿（対面所）完成	
慶長17年（1612）	7月29日	大風雨により屋壁崩壊	
慶長19年（1614）	1月1日	9月迄、本丸・二丸御殿補修	
	2月23日	三丸北之御門西脇石垣、風雨のため崩壊	
慶長20年（1615）	2月10日	御殿新造	
元和元年（1615）		家康御隠居所三丸造営	
元和2年（1616）	4月17日	家康薨去	
寛永12年（1635）	11月29日	駿府市中より失火、城中に延焼	
		天守・殿閣・櫓・堀悉く焼失	
寛永15年（1638）	6月9日	諸櫓殿舎再建	
明暦2年（1656）	8月22日	大風雨、城郭市井敗損	
寛文4年（1664）		本丸玄関前・石垣場・鍛冶屋小屋焼失	
宝永4年（1707）	10月4日	宝永大地震	
	12月9日	三丸多門石垣修復	
宝永5年（1708）	1月	普請始動	大棟梁甲良豊前
		石垣・北丸修復	棟梁川合利兵衛
			（江戸町棟梁） 石丸仁右衛門
			（江戸町棟梁） 桑原伝八
			（駿府町棟梁組頭） 花村與七郎
			（駿府棟梁） 川本仁右衛門
			（駿府棟梁） 石川安右衛門
			（駿府棟梁） 細井伝次郎
			甲良豊前方肝煎三人
			石方亀岡石見
			亀岡石見肝煎三人
	5月28日	修復完了	
正徳2年（1712）		石垣修復	
宝暦元年（1751）		修復（～宝暦3年）	
嘉永7年（1854）	11月4日	安政東海地震、御殿焼失	安政元年
安政3年（1856）	8月20日	修営開始	
安政5年（1858）	7月9日	修営完了	

門・細井伝次郎の名もあり、当地の小屋棟梁・壁方棟梁・屋根方棟梁・木挽方棟梁も多数参画した。このように、幕府の建築普請ではあるが、地元の工匠たちも大いに活躍し、同年五月末に修復は完了した（第一部第三章参照）。
そして、嘉永七年（一八五四）十一月四日、再び大地震が発生した。これが安政東海地震である。地震による出火で殿舎は悉く焼失した。翌二年、安政江戸地震が起き、駿府城の修復が開始されたのは、一年半後の安政三年（一八五六）八月のことで、二年後の同五年七月ようやく完成を迎えた。

駿府城の修営に駿府の工匠たちが携わっていたことは明らかである。大工町、大鋸町、車町・馬場町（左官）は、駿府城等の公儀御用を勤めていたことは、第一部第一章で述べた。しかし、中井大和守正清による駿府城造営や火災後の再造営、大地震後の修営は、大規模な公儀普請であったため、駿府の棟梁と工匠がどのように修営に携わっていたのか具体的に知ることは難しい。宝永大地震後の修復組織に関しては、史料から一端を窺うことができた（第一部第三章参照）。

第二節 久能山東照宮

第一項 久能山東照宮の修営と組織

徳川家康は、遺言により薨去後、久能山に埋葬され、久能山東照宮が造営された。薨去翌年の元和三年（一六一七）、主要な社殿が完成し、寛永・正保の造営を経て諸施設が整備される。その後、四度の大地震に見舞われるが、幕末まで主要な修営は幕府によって行なわれてきた。それらには、地元駿府の工匠の関与が認められる。公儀作事として行なわれた久能山東照宮の修営の概要と組織、さらに主要建築物の修復がどのように行なわれてきたのか、久能山東照宮修営年表【表一―一二】と合わせて検討する。

徳川幕府の造営組織は、土木工事を担当する普請方、建築工事を担当する作事方・小普請方から成っていた。作事方は寛永九年（一六三二）に設置され、幕府関係の建築物の造営を行なった。明暦三年（一六五七）、江戸で大火が起きてからは、修復工事を担当していた小普請方の仕事が増加していった。貞享二年（一六八五）、小普請方は正式な役職として成立し、力を伸ばして作事方を圧倒していく。享保三年（一七一八）、作事方の嘆願によって両者の担当場所が確定された。久能山東照宮の修復にも、幕府の作事方と小普請方の双方が携わっている。宝永期・宝暦期の修復は小普請方が担当しており、幕府内の小普請方の勢力拡大時期と合致している。明和以降幕末までは再び作事方が担った。このような公儀の修営組織の中に駿府棟梁の名も認められ、修復への参入を垣間見ることが出来る。

家康が薨去したのは、元和二年（一六一六）四月十七日³⁰だが、その遺言通り十九日には久能山に仮殿が建立され³¹、翌二十日に埋葬されている。二十二日には、大工棟梁中井大和守正清が社殿の造営を命じられ³²、本殿・石の間・拝殿（以下、史料中にある「御宮」と呼ぶ）そして諸堂社が順次建造された。御宮は元和三年（一六一七）の建立で、拝殿の向拝擬宝珠には、「元和三年 丁巳五月十七日

江戸大工 椎名」と刻まれている。江戸鋳物師大工の椎名伊予の銘が宝塔前の唐金灯籠にも「元和三年丁巳四月十四日 江戸鋳物師大工 椎名 伊予」と見られる。『徳川実紀』元和二年四月条には「久能山の 神廟本地堂。神楽堂。御供所。楼門。鳥居等は宰相頼宣卿より構造せらる。」とあり、諸堂社の建立時期に関しては、史料により異なるものもあるが、一連の造営で古坊四ヶ院（大寿院・三明院・定智院・宝性院）も建立された³³。

一― 寛永の造営

寛永期には、徳川家光によって五重塔が建立され、御宮諸堂社は銅瓦葺きに、宝塔は石造となった。これらの造営については、史料により一年の差異がある。

五重塔は、資料八「久能山五重塔建立書付」によると、寛永十一年（一六三四）八月十七日鋳始め、翌十二年一月十八日「銑針打」³⁴、十六年八月五重塔供養とある。一方、「久能山御造営年譜（資料九）」と「駿州久能山之事」（資料十）には寛永十二年鋳始めと記され、一年の差がある。史料には大工棟梁甲良出雲の名が認められ、「播州式東郡寺村飛弾内匠十五代孫」とある。「甲良出雲守宗次」³⁵とは、作事方大棟梁甲良家の二代目宗次であろうか。当時宗次は、初代宗広と共に寛永の日光東照宮造替に当たっており、寛永十三年の完成後、作事方大棟梁を継いでいる。出身地については、甲良家滋賀県犬上郡甲良町法養寺の出身で、播州（兵庫県）という記録は見られない³⁶。

『徳川実紀』の寛永十六年七月二十六日条³⁷に「又久能の 御宮塔供養あり。」と記され、棟札写³⁸（資料十二）の寛永十六年八月の年記と合致する。棟札写によると御大工は木原木工允義久である。木原義久は木原家六代目で、寛永九年、鈴木近江長次と共に作事方大工頭に任命された。元は鈴木姓であったが、二代目吉頼の時に遠江国山名郡木原村（静岡県袋井市）を賜り、三代目吉次の代に家康の命によって「木原」に改めた。両者とも家康の浜松築城の普請方を務めてから家康の造営組織を率いてきた³⁹。

【表 1-2-2】久能山東照宮修営年表

和暦	月日	事項	担当	氏名	史料
元和2年	4月17日	徳川家康薨去			
	4月19日	仮殿（三間四方）、鳥居・井垣、 灯籠2個 建立			実紀
	4月20日	徳川家康葬礼			
	4月22日	本社は大明神造り（千木・堅魚木） 拝殿・巫女屋・神供所・舞殿・御厩・あぜくら・神 籠・楼門 順次建立の命	御大工	中井大和守正清（大工頭）	実紀
	4月	神廟・本地堂・神楽堂・供所・楼門・鳥居等建立の 命	手伝	徳川頼宣	実紀
		御宮造営、古坊4院（大寿院・三明院・定智院・宝 性院）建立	奉行	佐久間河内守・山城宮内	普請覚・造営年譜
元和3年	4月17日	唐金灯籠（宝塔前）	鋳物師	椎名伊予（江戸）	陰刻
	5月17日	本社建立	大工頭	中井大和	造営年譜・久能山 之事・陰刻
			普請奉行	松平豊前守・井屋左衛門・ 後藤権左衛門・平岡瀬兵衛・ 佐藤七右衛門・桜岡吉兵衛	
			鋳物師	椎名伊予（江戸）	
		本社・拝殿・本地堂・神楽所・御膳所 建立	手伝	紀伊大納言（徳川頼宣）	御宮堂舎造営覚・ 普請之次第
			奉行	佐久間河内守・山城宮内	
元和年中		奥院・鐘楼・宝蔵 建立	手伝	駿河大納言（徳川忠長）	御宮堂舎造営覚・ 普請之次第
			奉行	松平壱岐守・渡辺監物	
寛永4年		奥院・鐘楼・宝蔵 建立		駿河大納言（徳川忠長）	実紀
		本地堂・宝蔵・楼門	普請奉行	村上三右衛門	造営年譜・久能山 之事
寛永9年		久能山修復、石鳥居完成	奉行	佐藤勘右衛門・長崎半左衛門	普請覚・御宮堂舎 造営覚
寛永11年	8月17日	五重塔新始	大奉行	松平豊前守	五重塔建立年月・ 普請覚・御宮堂舎 造営覚
		翌1月18日銃針打	奉行	若林与右衛門・山岡伝右衛門	
寛永12年	8月17日	五重塔新始	作事	普請奉行	造営年譜・久能山 之事
		翌1月18日銃針打		山岡伝右衛門・若林与左衛門 甲良出雲宗次	
寛永14年	8月7日	駿府大風			実紀
寛永16年	8月	五重塔供養	作事	奉行	棟札写・五重塔建 立年月・実紀
				御大工	
寛永16～17年		本社銅瓦へ葺替	大奉行	水野監物	造営年譜・久能山 之事
		宝塔建替	奉行	竹中左京・荒尾平八郎	
寛永17～18年		御宮堂舎檜皮から銅瓦へ葺替	大奉行	水野監物	普請覚・御宮堂舎 造営覚・普請之次 第・実紀・釣灯籠 調書
		石造宝塔へ建替	奉行	竹中左京・荒尾平八郎	
		久能山中修復	奉行	関兵部少輔	
寛永19年		石鳥居の貫折れ取替	奉行	松平主馬	普請覚・御宮堂舎 造営覚

＜凡例＞ 年表中の事項・氏名は史料による。修営関係者は、主に建築関係者を掲載。

災害

〔史料〕 実紀…黒板勝美・國史大系編集会『新訂増補國史大系 徳川実紀』吉川弘文館、1981

黒板勝美・國史大系編集会『新訂増補國史大系 続徳川実紀』吉川弘文館、1982

普請覚…「久能山御普請覚」久能山東照宮文書 3-39（『久能山叢書』第三編、久能山東照宮社務所、1973、所収）

造営年譜…「久能山御造営年譜」（『久能山叢書』第一編、久能山東照宮社務所、1970、所収）

陰刻…唐金灯籠（宝塔前）陰刻、擬宝珠（拝殿）陰刻

久能山之事…「駿州久能山之事」（『秘録覚』『久能山叢書』第三編、所収）

御宮堂舎造営覚…「久能山御宮堂舎造営覚」

（『御城内外臨時御普請覚』『静岡市史』近世史料三、静岡市役所、1976、所収）

普請之次第…「御普請之次第」（『秘録覚』『久能山叢書』第三編、所収）

棟札写（寛永16年）…「五重塔棟札写」久能山東照宮文書 3-67-2-1～2（資料11）

五重塔…「五重塔建立年月に関する書付」久能山東照宮文書 3-66-10（資料8）

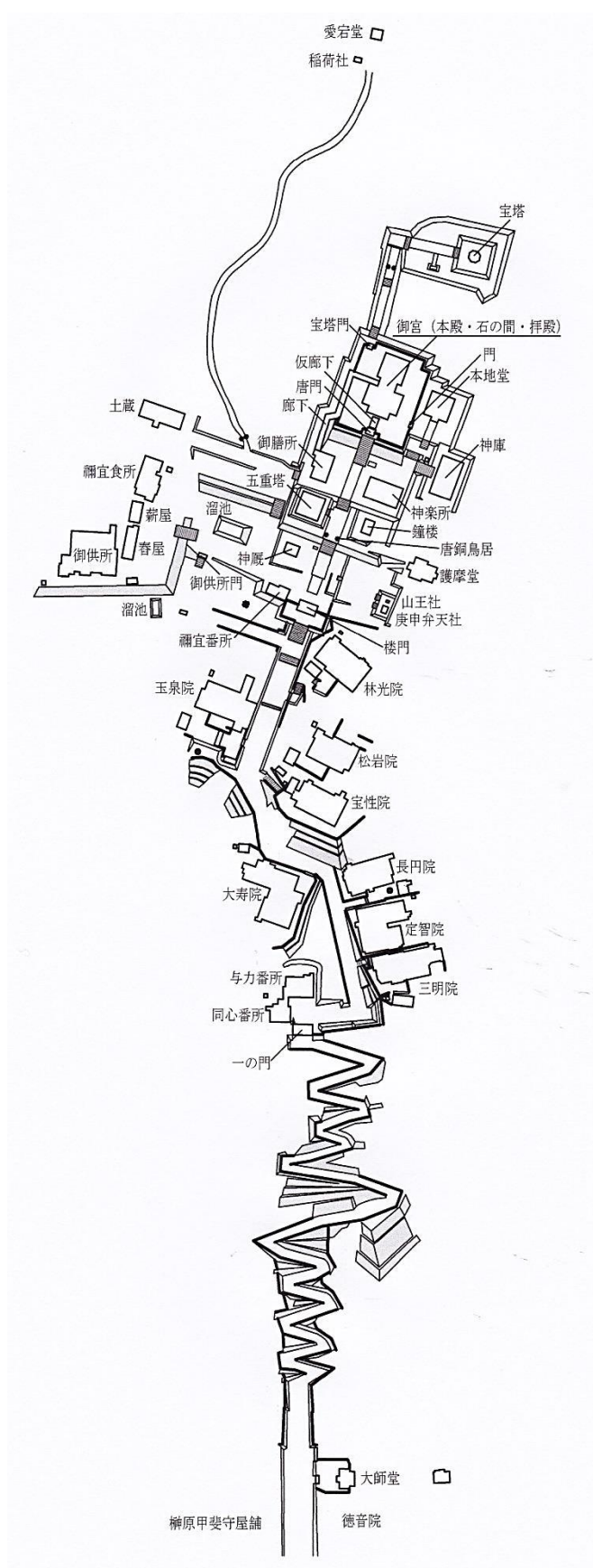
釣灯籠調書…「釣灯籠調書」久能山東照宮文書 3-107-4（『久能山叢書』第三編、所収）

五重塔は、作事方大工頭木原木工允義久の下、大棟梁甲良宗次が担当したと考
えることはできるが、断定できない。

御宮諸堂社の銅瓦葺きへの屋根替えと宝塔の建て替へは同時期に行なわれた。
「久能山御造営年譜」には寛永十六く七年とあるが、「久能山御宮堂舎造営寛」⁴⁰
では寛永十七く八年とあり一年の差が生じている。後者によると、御宮諸堂社は
檜皮葺きであつたが銅瓦葺きに葺き替えられ、宝塔もこの時に石造に新造された
こと、山内の修復も行なわれたことがわかる。また、「釣灯籠調書」⁴¹には寛永
十八年九月十七日の釣灯籠が石の間に四ヶ所とある。『徳川実紀』寛永十八年九月
十九日条の「久能山にも今春より、宝塔構造せられ、この廿七日遷宮ありとぞ。」
の記述から、寛永十八年九月に完成したことが推測され、銅瓦への葺き替え及び
石造宝塔の新造は、寛永十七く八年にかけて行なわれたと考えられる。

一 正保の造営

正保三年（一六四六）、護摩堂・禰宜番所等が造営された。『徳川実紀』正保三
年十月三日条に「黒木書院にて作事奉行牧野織部成常。使番林丹波勝正。大工棟
梁木原木工允義久に。駿州久能山御供所御装束所旧を改め。新に構造のこと面命
せらる。」とあり、御供所・装束所が建て替えられたことがわかる。別当德音院及
び新坊四ヶ院（玉泉院・林光院・松岩院・長円院）が建立され、古坊四ヶ院も同
時に建て替え、都合九ヶ院の建物が整った⁴²。（久能山総門番神原越中守の居宅
はこの際に山麓へ移された。）正保三年の造営によって、久能山内の諸施設がほぼ
整ったことになり、「御山惣絵図」の作成が大工頭に命じられた⁴³。



【図 1-2-1】江戸期の久能山東照宮配置図
（久能山東照宮所蔵「久能山惣絵図」（18C末頃）より作成）

西暦	和暦	月日	事項	担当	氏名	史料
1646	正保3～4年		護摩堂・御膳所・禰宜番所 建立	作事	大奉行 久世大和守（老中）	造営年譜・久能山之事・普請覚・御宮堂舎造営覚・実紀
			御供所・装束所 建替		目付 兼松下総守	
			別当・新坊4院（玉泉院・林光院・松岩院・長円院）建立		普請奉行 牧野織部（作事奉行）	
			古坊4院 建替		普請奉行 林丹後守（使番）	
			榑原越中守家居・家来共山下へ		手伝 本多越中守・北条出羽守	
					大工棟梁 木原木工允義久（大工頭）	
1646	正保3		御山惣絵図作成		大工頭	御宮堂舎造営覚
1652	承応元～3年		破損所修復		大奉行 大久保右京	御宮堂舎造営覚・普請覚・造営年譜
					奉行 大久保平四郎・打越治右衛門	
1656	明暦2年		破損所修復		大奉行 稲葉伊勢守	御宮堂舎造営覚・普請覚・造営年譜
					奉行 由良新六郎・小笠原七左衛門	
1656	明暦2年	8月22日	修復中大風、山上山下大破 駿府大風雨城郭市井敗損多。久能御宮も破壊。			御宮堂舎造営覚・普請覚・実紀
1656	明暦2年		御宮修復	奉行	大河内善兵衛・千本又七郎	普請覚・実紀
				奉行	島角左衛門	
1658	万治元年		石垣普請	奉行	川口源左衛門	普請覚・御宮堂舎造営覚
				奉行	美濃部八郎右衛門	
			杉4万本植林			久能山之事
1661	寛文元年		破損所修復	奉行	神尾五郎太夫・久留嶋主税	普請覚・御宮堂舎造営覚
1662	寛文2～3年		坂の石垣・石高欄・石橋普請	奉行	前田左太郎・内藤権九郎	普請覚・御宮堂舎造営覚
1663	寛文3年		別当所前より御殿前まで道付替	奉行	稲葉主膳・杉浦武兵衛	御宮堂舎造営覚・普請覚・造営年譜
1665	寛文5年		東照宮五十回御忌			
1667	寛文7年		道通り塀・坊中修繕	奉行	新見市左衛門（目代）	普請覚・御宮堂舎造営覚
1672	寛文11年	5月	破損所見分	被官大工	吉本加右衛門	修理日記
		12月	井戸完成	奉行	新見市左衛門（目代）	御宮堂舎造営覚・修理日記
1673	寛文12年		御宮外廻り土朱塗り、本社銅瓦葺替	作事	奉行 榑原越中守	御宮堂舎造営覚・普請覚・造営年譜・普請之次第・修理日記
			堂塔・別当・坊中総修復・総畳替		被官大工 吉本加右衛門	
			久能御用石材（淡島）		奉行 榑原越中守	
1673	延宝元年	8月9日	大風により愛宕堂大破			普請覚・御宮堂舎造営覚
			大風雨にて駿府城内破損多			実紀
1673	延宝元年		愛宕堂・一之門・坊中修繕	奉行	新見市左衛門（目代）	普請覚・御宮堂舎造営覚
1676	延宝4年		水溜並びに膳所・神楽所脇石笠木矢来	奉行	三明院・星与左衛門（目代）	普請覚・御宮堂舎造営覚
			別当所客殿・書院・廊下建立（金200両、槽3000挺）	奉行	定智院	御宮堂舎造営覚
			古御殿の台所屋根を柿葺に変更			
1676	延宝4年	8月12日	大風			普請覚・御宮堂舎造営覚
1677	延宝5年		破損所修復	奉行	大寿院・星与左衛門（目代）	普請覚・御宮堂舎造営覚
1679	延宝7年		久能御宮坊中樺木20,000丁（船明山樺木）			秋鹿家文書
1680	延宝8年		別当所居間・台所・物置・蔵屋根葺替		定智院	御宮堂舎造営覚

〔史料〕修理日記…鈴木棠三・保田晴男『近世庶民生活史料未刊日記集成 鈴木修理日記』三一書房、1997～8
室伏家文書（寛文12年）…室伏家文書 655「久能御宮御修覆御用石指図覚」沼津市歴史民俗資料館所蔵
室伏家文書 652「久能御用石見積覚」沼津市歴史民俗資料館所蔵
室伏家文書 653「御請負申駿州久能御用石之事」沼津市歴史民俗資料館所蔵
秋鹿家文書（延宝7年）…秋鹿家文書「元禄二年七月遠州舟明山樺木中勘定目録」
（『磐田市史』資料編四、磐田市、1995、所収）

承応元年（一六五二）から三年間、そして明暦二年（一六五六）には、山内破損所の修復が行なわれた。具体的な修復箇所は不明だが、明暦二年の修復中に大風雨が襲った。久能山上・山下は大破し、駿府も大風雨で城郭市井の破損も多かったと記録されている。災害による修復も加わり、新たな奉行三名が命じられ、翌三年四月十七日前に修復は完了した⁴⁴。

万治元年（一六五八）及び寛文七年（一六六七）までは、石垣普請や道普請等で大掛かりな修復は行なわれなかった。

一・二 寛文十二年（一六七三）の修復

幕府作事方大工頭鈴木修理の『鈴木修理日記』に、寛文十一年に行なわれた久能山東照宮破損所の見分について記されている。『鈴木修理日記』は、鈴木修理長常・長頼父子によって書かれた日記である。長常の父は鈴木近江長次で木原木工允義久と共に大工頭に任命され、その後、鈴木修理長常・長頼・新五兵衛（木原内匠重弘の子（養子））が大工頭を継いだ。

寛文十一年五月、作事方の被官大工吉本加右衛門によって、久能破損所の見分が行なわれた。久能から事前に「破損所之帳」が提出されたが、棟梁同行の上、現地で確認することとなった。そこで、駿府の棟梁を同伴すれば伝馬も不要であるとして日記に記されている。被官吉本加右衛門は「久能惣絵図」を携えて江戸を発った。彼は久能山の見分を終えると仕様書・見積書を作成、修復は寛文十二年一月から開始されることになった。「久能山御造営年譜」⁴⁵によると、閏六月に鉦始め、十一月に修復が完了している。この修復で「御宮廻り土朱塗二成ル」、本殿屋根の銅瓦を葺き替え、正外遷宮が執り行なわれた。諸堂社・別当・坊中まで修復に及び畳替えも実施された。「久能山御普請覚」⁴⁶にも修復の内容が記録されており、最後に「是ハ公儀御大工来ル」と記されている。

一・四 天和二年（一六八二）の修復

延宝九年（一六八二）三月、作事方によって駿府・久能の見分が行なわれた（資料十二）。鈴木長兵衛（二代目鈴木修理長頼（天和三年（一六八三）末より作事方大工頭）と被官大工河辺六左衛門が派遣されることになった。その見分についての覚書が『鈴木修理日記』【史料一・二一】に記されている。

【史料一・二一】『鈴木修理日記』延宝九年二月十九日条⁴⁷

覚

一、唯今能御座候所も、六七年之内悪敷可罷成所は、御修復被遊候様ニ見分可仕哉之事。

是ハ両様ニ見分仕、罷帰申上候上、御相談可被成由、備中守殿被仰。

一、惣而被仰渡候外之破損、先ニ而見分仕候様ニ、出家・社人申儀御座候得共、其外は断ヲ申、見分不仕候、久能坏之儀は一色公儀より御修復被遊候所ニ御座候得ば、不殘見可申儀ニ御座候哉之事。

彼地へ参、御奉行衆相談之上、可相極。

一、駿府御城代・御番頭衆・町御奉行衆江御奉書被遣候ハズ、先府中江罷越、久能見分之御奉行・御番衆より被仰付候由、左候ハズ同道申、久能へ参、立合見分可仕儀ニ御座候哉之事。

尤思召候由。

一、坊中ニ公儀より不被遊候、自分より仕候家之分、見分除可申哉之事。

除可然候由。

一、駿府又は道中、公儀より御造営被遊候寺社見可申哉、所々御役人衆御指図ニ御座候ハズ、何方ニ而も見分可仕哉之事。

指図次第第二可参候。

一、久能江登山仕候ニ、何方江も御断可被仰遣候事哉。
於駿府可承合候由。

一、久能破損見分、本多備前殿御組山口孫二郎・土岐左衛門殿被仕候帳、江戸へ参候由、三枝撰津守殿御物語ニ御座候間、右之帳、此元ニ而御渡被成候ハゞ、了簡仕、其上存寄見分仕候ハゞ、手間掛申間敷と奉存候、右之段、伺可然之由、撰津守殿も被仰候事。

御吟味可被成之由。

修復に関する要点として、①修復箇所については、見分時点で状態が良く見えても、六・七年の内に破損の恐れがある部分は拾い上げ、相談して決めること。②久能山等は一式公儀普請であるため残らず見分を行なうこと。③久能坊中で自ら建築した部分は見分から除くこと。④駿府または道中にある公儀造営の寺社は見分すること。とされている。

幕府作事方の両名は、二月二十五日に江戸を出発し、二十八日には駿府に到着。駿府棟梁花村長左衛門に迎えられた。久能奉行土岐左衛門・山口孫次郎と面談し、鈴木長兵衛が久能見分帳・坊中願書各一冊を受け取り、三月五日から三日間で久能山の見分を行なった。初日に宝塔・本殿・石之間・拝殿・玉垣・唐門・本地堂・鐘楼・五重塔・蔵・愛宕堂・稲荷社等を見分し、神楽所にて弁当、奉行衆は見分帳と突き合わせ、今回の修復仕様について相談を行なった。残り二日間で坊中・一之門等を見分し、四日目に仕様帳を作成して、再度登山し最終確認を行なった。駿府に戻り見分帳を清書して、駿府町奉行大久保甚兵衛と面会した。十五日まで駿府城・役屋敷・宝台院・静岡浅間神社を見分、三月十八日江戸へ帰着している。四月上旬には久能帳面・目録を老中へ提出し、目録通り入札、修復することがよく決定した。

天和二年の修復は、「御宮外廻り、うるみ朱塗被 仰付。其外御宮銅瓦等之繕。依之、正外之御遷宮有之。并諸堂房中学頭已下御修復有之。」⁴⁸とあり、御宮外廻りの「うるみ朱塗」⁴⁹と御宮の銅瓦等の修繕を行なうため正外遷宮が執行された。さらに諸堂・坊中・別当德音院以下、残らず修復が行なわれている。

西暦	和暦	月日	事項	担当	氏名	史料
1681	延宝9年	3月	久能御宮破損所見分	作事 (駿府棟梁)	鈴木長兵衛（大工頭子）	修理日記
					河辺六左衛門 花村長左衛門（出迎）	
1681	天和元年	12月27日	久能御用石材（淡島）			室伏家文書
1682	天和2年	4月	久能御用石材（淡島）			室伏家文書
1682	天和2年		御宮外廻りうるみ朱塗り	奉行	安部助九郎（久能奉行）	普請覚・御宮堂舎造営覚
			御宮銅瓦修繕、 諸堂・坊中・別当修復	奉行	細井宗左衛門（久能奉行）	
			神前向きのみ畳替			
			正外遷宮（外遷宮4/26・正遷宮8/19）			
1683	天和3年		諸堂・御供所・坊中・別当畳替	奉行	星与左衛門（目代）	普請覚・御宮堂舎造営覚
			石垣普請	奉行	力石小兵衛・矢嶋源八郎	
1686	貞享3年		久能御宮坊中樽木30,000丁（船明山樽木）			秋鹿家文書
			神前諸堂諸具鍍金差直し、彩色	奉行	宝性院・三明院	普請覚・御宮堂舎造営覚
				奉行	星与左衛門（目代）	
1687	貞享4年	7月中旬	御宮廊下11間余新築、銅瓦葺き、土朱塗り	奉行	石巻七郎左衛門・高橋藤兵衛	普請覚・御宮堂舎造営覚
		10月	総畳表替え	奉行	宝性院・星与左衛門（目代）	

〔史料〕室伏家文書（天和元年）…室伏家文書 660「久能御山御普請石数之事」沼津市歴史民俗資料館所蔵
 室伏家文書（天和2年）…室伏家文書 661「久能御山御用石あは嶋山取石数舟積」沼津市歴史民俗資料館所蔵
 秋鹿家文書（貞享3年）…秋鹿家文書「元禄十年五月遠州舟明山樽木中勘定目録」
 （『磐田市史』資料編四、磐田市、1995、所収）

一五 元禄二年（一六八九）の修復（資料十三・十四）

元禄二年三月三日、御宮修復のための仮殿の鉦始めが行なわれた。十二日に柱立て、十八日に仮殿が完成し、二十七日外遷宮が執り行なわれた。先ず坊中・御供所・別当德音院の修復が四月から始まり、九月十七日に完了した。別当德音院については、居間・台所の屋根葺き替え（茅葺きを柿屋根に葺き替え）も行なわれ、柿板は「久能山坊中御修復樽木」⁵⁰として天竜川筋の船明山から二万挺搬出された。これらの修復は奉行佐野又兵衛・長崎半左衛門の下で行なわれた。

外遷宮後の四月二十一日から五月十日まで久能山の見分が行なわれた。新たな久能奉行安藤九郎左衛門・西尾藤兵衛と作事方の被官大工河辺六左衛門、江戸町棟梁⁵¹平内長右衛門・大谷善次郎がそれに当たった。八月に入り御宮の鉦始め、そして御宮廻りの塗り彩色、さらに本殿内陣へ鼠が入らないよう天井裏の鼠の通り道を塞ぎ、十一月十六日に正遷宮を迎えた。

元禄八年（一六八五）は、各所の修復と別当德音院の屋根葺き替えが実施された。それに加えて、五重塔・神楽所については、「御塔御神楽所縁宇留美朱塗チャン塗二成」⁵²と記録されている。

元禄十二年（一六九九）は、六月二十八日から七月一日まで大雨が続き、石が崩壊する等の被害を受けた⁵³。八月十五日、今度は大風が吹き、「増普請出来御宮・愛宕堂・稲利堂両社風ニ而大破也。御供所・房中不残御修復、大寿院下石垣崩レ、築直シ。」⁵⁴という状況であった。翌十三年五月に修復が開始され、御供所は再建、坊中・別当德音院の屋根は総葺き替え、坊中四ヶ院（松岩院・宝性院・大寿院・長円院）は風損大破して修復するほどの被害であった⁵⁵。

その後も、元禄十四年（一七〇一）四月に洪水、八月には風雨に見舞われている。

一六 宝永元年（一七〇四）の修復（資料十五）

元禄十六年（一七〇三）一月、久能山の見分が行なわれることになった。見分には作事方の被官増田清右衛門と大棟梁甲良豊前宗員が命じられ、江戸町棟梁の代わりに駿府棟梁花村与七郎以下を召連れるよう指示された。「雑簿」⁵⁶によると、二月四日別当德音院が江戸へ参上し、「久能山御宮大破に付」と修復を願いつた。大破に及んだ理由は記されていないが、三月中旬に改めて小普請奉行曲淵伊左衛門・鈴木伊兵衛が久能山の見分を命じられ、二十一日久能山に到着している⁵⁷。見分の前に、小普請奉行曲淵伊左衛門へ別当德音院より御宮の様子が報告されておき、「雑簿」【史料一二二】に、先ず御宮見分の際の覚書が示されている。

【史料一二二】「雑簿」元禄十六年三月十四日条

覚

- 一 御本社外廻りより御見分被成候ても不苦候。
 - 一 御同所御床下へ入、御改候ても不苦候。
 - 一 御幣殿、御拝殿御床下へ入候ても不苦候。
 - 一 御幣殿御屋根上へ上り候ても不苦候。
- 右の通御見分不苦候。 以上。

未	久能
三月	德音院

これによると、本殿外廻り、本殿・幣殿（石の間）・拝殿床下、幣殿（石の間）屋根上の見分は可能とされている。

西暦	和暦	月日	事項	担当	氏名		史料
1689	元禄2年	3月3日	修復開始、仮殿建立し外遷宮（3/27）		奉行	佐野又兵衛・長崎半左衛門	普請覚・御宮堂舎造営覚
			御供所・坊中・別当所修復				
			別当所居間・台所屋根葺替（柿葺）				
			大寿院脇道石垣				
			駿府久能山坊中修復博木20,000丁（船明山博木）				秋鹿家文書
1689	元禄2年	4月21日	久能御宮見分		奉行	安藤九郎左衛門（久能奉行）	普請覚・修理日記
		～5月10日		作事	奉行	西尾藤兵衛（久能奉行）	
					被官大工	河辺六左衛門	
					江戸町棟梁	平内長右衛門・大谷善次郎	
		8月	御宮廻修復塗彩色		修復奉行	安藤九郎左衛門（久能奉行）	普請覚・御宮堂舎造営覚・実紀
			内陣へ鼠入らぬよう、天井裏の鼠道塞ぐ	作事	修復奉行	西尾藤兵衛（久能奉行）	
			棧門・隨身修復		被官大工	河辺六左衛門	
			正遷宮（11/16）				
1692	元禄5年	9月13日	総畳替完了		奉行	星伝右衛門（目代）	御宮堂舎造営覚
					奉行	植村才兵衛・大谷木仙右衛門	
1695	元禄8年	7月23日	本社の縁口柱一本檜、隨身彩色、唐門両脇玉垣土台取替		奉行	森川庄九郎・佐々喜六郎・松平新八郎	御宮堂舎造営覚
			堂社・御供所廻り、雑蔵桁梁取替		前奉行	富永甚四郎・諏訪甚兵衛	
			一之御門・別当屋根葺替・坊中修復				
			五重塔・神楽所縁うるみ朱塗チヤン塗りに成る				
1696	元禄9年	9月上旬	総畳表替		奉行	星伝右衛門（目代）	御宮堂舎造営覚
					奉行	大谷木仙右衛門・佐藤岡右衛門	
1699	元禄12年	3月16日	久能山領堤防修理、代官へ命ず		代官		実紀
1699	元禄12年	6月28日	7月朔日まで大雨、大寿院前石垣崩壊				御宮堂舎造営覚
		8月15日	大風、所々大破 御宮・愛宕堂・稲荷堂両社大破				普請覚・御宮堂舎造営覚
1700	元禄13年	5月	修復開始				普請覚・御宮堂舎造営覚
			御宮・愛宕堂・稲荷堂修復、御供所再建		奉行	岡部次郎助・川勝甚兵衛	
			大寿院下石垣再築				
			坊中・別当所総屋根葺替				
			松岩院・宝性院・大寿院・長円院は風損大破修復				
1701	元禄14年	1月27日	畳表替		奉行	星伝右衛門（目代）	御宮堂舎造営覚
					駿府町与力	田宮藤左衛門	
1701	元禄14年	4月8日	洪水 宝性院下崖崩れ・石垣修復		奉行	森川勘兵衛・細井源五郎	御宮堂舎造営覚
		8月18日	風雨、大寿院・長円院物置屋根及び板塀水破		奉行	星伝右衛門（目代）	御宮堂舎造営覚
1703	元禄16年	1月29日	久能見分		被官	増田清右衛門	修理日記
				作事	大棟梁	甲良豊前	
					駿府棟梁	花村与七郎以下	
		2月4日	久能山御宮大破				雑簿
		3月	久能見分	小普請		曲淵伊左衛門 鈴木伊兵衛	修理日記・雑簿
		9月27日	御宮修復新始（柳原小屋にて）				修理日記・雑簿

〔史料〕秋鹿家文書（元禄2年）…秋鹿家文書「元禄十年五月遠州舟明山博木中勘定目録」

（『磐田市史』資料編四、磐田市、1995、所収）

雑簿…「雑簿 未元禄十六年申宝永元年」久能山東照宮文書 3-31（『久能山叢書』第三編、所収）

続いて本殿内陣に関しても記されている【史料一―一二三】。

【史料一―一二三】「雑簿」元禄十六年三月十四日条

覚

一 御内陣の御彩色は能御座候。塗の儀少々すれ候処相見え申候え共、あやうき儀少も無御座候。

一 御内陣折上げ御天井の小組物、所々くつろぎ申候。然共危き儀は無御座候。

一 御同所大床高欄木ぼうしゆ柱朽相見え候え共あやうき儀相見不申候。右の通御座候。御見分の上委細相可申候。

以上

未

三月

久能

德音院

本殿内陣の彩色塗りは、かすれが少々あるが状態は良く、内陣折上天井の小組物は所々くつろぎ、大床高欄擬宝珠柱は朽損が見られるが問題ないと記されている。久能御宮修復の手伝奉行に太田摂津守、そして小普請奉行曲淵伊左衛門・鈴木伊兵衛が命じられた。久能御宮修復の下拵えは柳原小屋（江戸）で行なわれ、鉦始めは九月二十七日となった。三月の見分に同行した小普請方定棟梁大谷甲斐がこの度病気のため、同じ小普請方の定棟梁村松淡路が棟梁の代わりを務めることになった。江戸での材木加工が出来次第、材木は廻船で清水湊に上げ、久能山まで運ばれる段取りで、目代の星伝右衛門が立ち会って受け取ることとなった。翌十月には駿府大工棟梁花村与七郎の小普請棟梁への参加願が作事方大工頭鈴木修理長頼から出されている（第一部第三章参照）。

元禄十六年十一月二十二日夜（丑后刻）大地震が発生した（正確には二十三日午前二時頃）。地震被害はどれほどであったか記録にないが、翌宝永元年（一七〇四）九月十一日、小普請方の大工棟梁大谷甲斐が久能山の修復を命じられた。大谷甲斐は、江戸で護持院普請場を担当していたが、久能山修復の間は作事方大棟梁甲良豊前宗員が代わりに見廻ることになった。

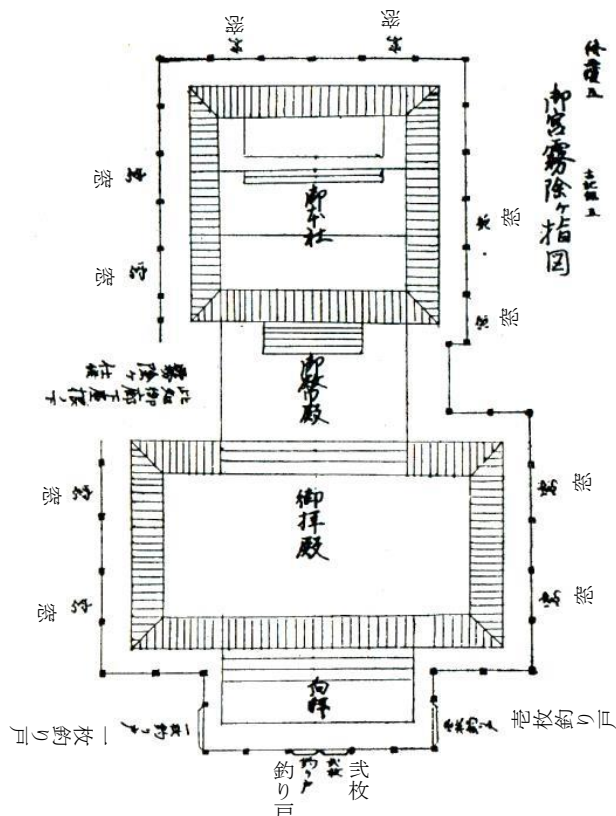
十二月十五日辰刻「御上棟」、同酉刻「御地鎮御安鎮相兼」、十六日酉刻「正遷宮」、十七日に「御供養」が行なわれた。上棟前の十四日に総奉行稲垣対馬守が到着し、本殿内陣並びに天井その他所々の見分が行なわれた。棟札も十五日の上棟と十七日の供養の二枚が作られた（資料十六①②）。棟札には作事奉行松平安房守と小普請奉行曲淵伊左衛門・鈴木伊兵衛の名が記され、大工棟梁は小普請方の大谷甲斐正矩・大谷出雲基矩であった。今回の修復は実質的に小普請方が担い、作事方と小普請方の勢力関係が表れている。

宝永元年の修復が完了し、翌二年、早急に普請勘定帳の作成が進められた。そこで問題となったのが大工手間である。今回の修復大工手間は二割増の積りであったが、翌三年、他所の事例を持ち出して吟味された。元禄十三年（一七〇〇）の「日光大猷院様御法事方并三仏堂御修復方」は急ぎの分として一割半増、同十五年の「日光御本坊御修復吟味工高」は急ぎの分一割増であった。今回の久能山の場合、地震後であるため作料が高値で、二割増もやむを得ない状況であった。増手間については、担当奉行の判断によっており、今回は二割増の決定となった（資料十七）。

一七 宝永二年（一七〇五）の御宮霧除設置

宝永元年の御宮の修復も成り、宝永二年四月に霧除の設置が行なわれた。「御宮霧除ケ指図」【図1-2-2】によると、霧除は開口部の上に設けられる霧除庇とは異なり、軒先に壁を建て、風雨・霧を防ぐものであったと推測できる。久能山は海辺にあるため、汐風が激しく、山上は霧が深い地であった。霧除の柱間に窓が設けられ、向拝正面には二枚の釣戸が、側面には一枚の釣戸が備えられている。

この霧除の設置には、駿府棟梁花村与七郎も立ち会うよう、小普請奉行曲淵越前守より命じられた。霧除材の下拵えが来ると、その材木と道具は船にて久能へ運搬されることになった。久能到着後も材木置場と下拵場が必要であり、三間×十二〜三間の長屋を借用できるよう手配している。大工十人程に肝煎二人・鉄鍛冶一人が到着すると、花村与七郎が案内し、立ち会いの下で霧除の作業が進められた。完成後には少々木切れが残り、使用できるものは取り置き、残りは諸職人方も使用が許された。



【図 1-2-2】御宮霧除ケ指図（年代不詳）
（『久能山叢書』第二編、所収）

西暦	和暦	月日	事項	担当	氏名	史料
1703	元禄16年	11月23日	22日夜大地震（丑后刻）			実紀・修理日記
1704	宝永元年	12月15日	上棟 駿州久能山東照宮大権現（9/16外遷宮）	総奉行	稲垣対馬守重富（若年寄）	棟札明細図
				手伝奉行	太田摂津守資直	
				小普請 作事奉行	松平安房守	
				小普請奉行	曲淵越前守・鈴木伊兵衛	
				大工	大谷甲斐正矩・大谷出雲基矩	棟札写・造宮年譜・実紀
		12月17日	奉修久能山東照宮（供養、12/16正遷宮）	総奉行	稲垣対馬守重富（若年寄）	
				手伝奉行	太田摂津守資直	
				小普請 作事奉行	松平安房守	
				小普請奉行	曲淵越前守・鈴木伊兵衛	霧除四通
				大工	大谷甲斐正矩・大谷出雲基矩	
1705	宝永2年	4〜5月	御宮霧除	小普請 駿府棟梁	曲淵越前守 花村与七郎	

〔史料〕棟札明細図…「御修宮御棟札明細図」久能山東照宮文書 3-67-3（「御本社并五重塔御修復御棟札明細書」同 3-35、明治 20 年所収）（『久能山叢書』第三編、所収）

棟札写（宝永元年）…「御修宮棟札写」久能山東照宮文書 3-67-6（同上所収）

霧除四通…「覚（霧除棟梁立合ニ付）久能山東照宮文書 3-104-6（「霧除棟梁立合之件」『久能山叢書』第三編、所収）

「大工に道具運搬の立会いなどを任せるに付書状」久能山東照宮文書 3-66-1（「霧除取放之件」同上所収）

「霧除御普請にて曲淵越前守殿より御門職員出入りの儀に付書状」久能山東照宮文書 3-66-3

（「御宮霧除之時分職人等学頭印形にて御門出入之事」同上所収）

「霧除木切残木処置ニ付書状」久能山東照宮文書 3-104-3（「霧除切木残木処置之件」同上所収）

一八 宝永四年（一七〇七）の修復

宝永四年十月四日、宝永の大地震が発生した。久能山は「御山上所々御損有之」⁶²、駿府城内外破壊の報告により、翌日若年寄稲垣対馬守へ小普請方を伴つての久能山御宮の巡察が命じられた。その結果、十月二十七日には、久能山御宮並びに駿府城石塁の修復に普請奉行水野権十郎忠順、小普請奉行間宮播磨守信明が任命された⁶³。十一月二十三日、今度は富士山が噴火し、その様子を『徳川実紀』に見ることができる【史料一―一四】。

【史料一―一四】『徳川実紀』第六篇

〔宝永四年十一月二十三日〕

けさ未明より府内震動をびただし。はたして駿河の富士山の東偏火もえ出。砂灰吹出し。近国の田圃みな埋没せしとぞ聞えし。

〔宝永四年十一月二十五日〕

けふも地震しばしばなり。

富士山の砂灰田圃を埋没せるよし聞えければ。徒目付を巡察につかはさる。

〔宝永四年十一月二十六日〕

富士山焼により。久能山に駅書をはせて 御宮の安否をとほせ給ふ。

〔宝永五年一月十六日〕

令せらるるは。武相駿三国の中。去冬富士山焼にて灰砂埋没せし村里。今に其ままになし置よし聞ゆ。ことし春耕以前とりすてしむべき旨。地頭より命ずべし。多く埋没して民力及びがたき地も。先とりかからしむべし。かさねて査検せられしうへにて賑救あるべし。その間領地飢餓せ

ざるよう。こころ用ゆべしとなり。

十一月二十三日は、江戸でも地震動が夥しく、二十五日になってもしばしば地震が起き、二十六日、久能山へ御宮の安否の確認があった。富士山の周辺部は、噴火による灰の被害を受けたが、久能山東照宮の被害はそれほど大きくなかったよう⁶⁴で、正外遷宮は行わずに、翌五年一月二十六日修復が始まり、四月に完了した。一方、駿府城も一月から五月末まで修復が行なわれた（第一部第二章第一節参照）。

宝永六年（一七〇九）、五重塔は雨漏りを生じ、塗り彩色は剥落した状態であった。さらに本地堂・御膳所・神楽所・宝蔵・鐘楼・楼門についても銅瓦葺きの屋根が朽損し雨漏りしているものや、塗り彩色が剥落している箇所が認められた。そこで六月、別当徳音院から寺社奉行へ修復願が提出されている⁶⁵。「久能山御普請覚」（資料十八）によると、八月に府中破損奉行によって見分が行なわれ、諸堂社の銅瓦葺きの屋根下地が朽損していることが判明した。五重塔に関しては足代ができてからの再見分となっている。翌七年七月二十八日、五重塔足代掛けに取り掛り、閏八月二十七日から修復を開始した。五重塔の屋根の修復状況について「漏盤ト九輪之根之金物之上葺有之也」と記されている。これによると、塔頂部の相輪廻りの修復が行なわれたことが読み取れる。九輪の根元の雨漏り部の上を金属板で葺き、雨漏りを防ぐ方法がとられたのだろう。九月十日には普請が完了していることから、五重塔も応急的な修復であったと考えられる。

西暦	和暦	月日	事項	担当	氏名	史料
1707	宝永4年	10月4日	大地震			実紀・造営年譜
		10月4日	久能山上所々破損所有			普請覚・御暇参府之記・普請之次第
		10月5日	久能山御宮巡察命	小普請	若年寄 小普請方 稲垣対馬守重富	実紀
		10月27日	久能山御宮修復並びに駿府城石塁修復命	小普請	普請奉行 小普請奉行 水野権十郎忠順 間宮播磨守信明	実紀
1707	宝永4年	11月23日	富士山噴火			実紀
		11月26日	富士山噴火により久能山へ御宮安否確認			実紀
1708	宝永5年	1月26日	久能山修復、4月完成	小普請	普請奉行 普請奉行 間宮播磨守（小普請奉行） 横山藤兵衛	造営年譜
1709	宝永6年	6月	五重塔銅瓦屋根雨漏・内外塗彩色剥損 本地堂銅瓦朽損、膳所銅瓦朽損雨漏 神楽所・宝蔵・鐘楼・楼門朽損、鐘楼外廻り塗彩色剥損			雨漏の件・普請覚
1710	宝永7年	9月	五重塔修復完成		塔奉行 下奉行 塔奉行 大工棟梁 大工肝煎 屋根屋 山岡孫七郎 安西半右衛門・石井治郎右衛門 井戸三五郎・山本喜助・川崎武兵衛 孫右衛門・伝四郎 源三郎 与右衛門	普請覚
1713	正徳3年		修復	普請奉行	土岐縫殿介・松浦伊左衛門	造営年譜
1715	正徳5年		東照宮百回御忌			
1716	享保元年		宝塔扉修繕、御宮縁塗直し 愛宕・護摩堂その他小社葺替、楼門随神彩色 別当・坊中総屋根葺替、別当井戸側両所取替	普請奉行 普請奉行	村瀬伊左衛門（駿府町奉行） 小林又左衛門（駿府代官）	普請之次第・造営年譜
		11月22日	久能山修復御用材木	請負	梅ヶ嶋 藤兵衛	梅ヶ嶋
1720	享保5年		修復			御暇参府之記
1721	享保6年	7月4日	修復（御宮向き修復無）	普請奉行	天野兵八郎・近藤平八郎	造営年譜
1723	享保8年		修復	普請奉行	小長谷喜八郎・松浦与次郎	造営年譜
1726	享保11年		修復	普請奉行	大岡三次郎・松平兵庫	造営年譜
1728	享保13年		修復	普請奉行	岩瀬吉左衛門・曲淵市太夫	造営年譜
1732	享保17年		修復	普請奉行	松平帯刀・多賀外記	造営年譜
1735	享保20年		修復	普請奉行	榊原市郎右衛門・小沢彦太夫	造営年譜
1736	享保21年		修復	普請奉行	高井五兵衛・寛平三郎	造営年譜
1742	寛保2年	2月27日	久能修復御用材木300本・榑木3000丁（破船・三州赤羽根村沖）	破船	遠州掛塚八郎左衛門船	寛保二年萬留帳
		8月22日	御宮・諸堂社・坊中修復（正遷宮、4/22外遷宮）	作事	奉行 寺社奉行 作事奉行 目付 豊奉行 大工頭 作事下奉行 大棟梁 手伝奉行 松平左近衛将監乗邑（老中） 本多紀伊守 井戸伊勢守 稲生七郎右衛門 廣戸勘九郎 鈴木源次郎 石渡善次郎・大柳八左衛門 平内大隅政長 小笠原山城守	棟札写・造営年譜・御暇参府之記・手伝記

[史料] 御暇参府之記…「久能御修復御暇参府之記」（『久能山叢書』第一編、所収）

雨漏の件…「覚（五重塔其他銅屋根雨漏ニ付）」久能山東照宮文書 3-104-5（『久能山叢書』第三編、所収）

梅ヶ嶋（享保元年）…「久能山御修復」（新井正『梅ヶ嶋郷土誌』硯水泉、1990、所収）

寛保二年万留帳…「寛保二壬戌年万留帳」（『竜洋町史』資料編Ⅰ、竜洋町史編さん委員会、2007、所収）

棟札写（寛保2年）…「御修宮棟札写」久能山東照宮文書 3-67-7（「御本社并五重塔御修復御棟札明細書」同 3-35、明治20年所収）（『久能山叢書』第三編、所収）

手伝記…「慶長以来御手伝記」東京志料（東 781-5）（東京都立中央図書館特別文庫室所蔵）

宝暦二年（一七五二）、小普請方によって破損所の見分が行なわれた。「宝暦二申年御修復見分之節窺書」⁶⁵によると、「御宮向外廻り御塗り彩色並御飾金もの減金磨直等」修繕が必要な状態で、「御本社御屋根は其儘にて無御別条候。」と、本殿の屋根は問題なかった。別当德音院・坊中共に修復によって雑人が入ることを嫌い、今回は外遷宮を行わずに修復する方針となった。そのため、「御宮並御拝殿外廻りの御塗り方、当分、拭漆に申付、御縁側土朱の分御塗り直し、御高欄等の金ものは取はずし減金差直し可申付候。」となり、唐門・瑞籬・諸堂社もこれに準ずることになった。五重塔についても「余程大破」とあり、本地堂・宝蔵は屋根下葺き破損、御供所も大破の様子である。見分の結果、急を要する箇所以外は、外遷宮を伴う修復まで延期の可能性があり、この見分がどのような修復に繋がったのかは不明である。

宝暦六年（一七五六）は、小普請方による修復である。「造営年譜」によると作事奉行鵜殿十郎左衛門の名も見える。

【史料一―一五】「久能山御造営年譜」

「宝暦六丙子年」

一、御修復

外 遷宮、四月十九日

御名代

横瀬駿河守

正 遷宮、十月廿二日

御名代

前田伊豆守

御手伝

松平伊豆守

寺社奉行

鳥居伊賀守

御作事奉行

鵜殿十郎左衛門

御目付

小菅猪右衛門

按異本、小普請奉行小幡山城守忌中に付、鵜殿十郎左衛門被仰付と有之。鵜殿十郎左衛門役名無之、小菅猪右衛門御使番とあり。

小普請奉行小幡山城守が忌中のため、その代理として鵜殿十郎左衛門が作事奉行を命じられたと追記されている。『徳川実紀』によると「目付鵜殿十郎左衛門久能山の御宮修理の事命ぜられて。その間は小普請奉行の事もつかさどるべしと仰下さる。」⁶⁶とある。宝暦六年の棟札写（資料十六④）には、小普請方、小普請方改役、そして小普請方大工棟梁の村松飛驒棟貫の名が並ぶ。

明和二年（一七六五）、四月の東照宮百五十回御忌に向けて、作事方による修復が行なわれた。二月二十八日から役人が到着し、三月一日より修復が開始された。作事方大棟梁辻内遠江の下、棟梁平内八右衛門・浜松清七が担当し、そこに駿府棟梁花村清右衛門・海野佐右衛門・牧田定次郎（第一部第三章参照）が参画している⁶⁷。漆奉行・神宝方棟梁到着後の三月十九日に外遷宮が行なわれ、四月七日には正遷宮が執り行なわれた。

安永四年（一七七五）の修復は作事方によるもので、同時に宝台院の修復も行なわれ、両所の手伝奉行が任命されている。

安永五年には、本殿の内陣に鼠が入ったため、作事奉行と目付によって見分が行なわれ、修復は翌六年に完了した。

天明七年（一七八七）、作事奉行松平織部正・目付井上助之進が久能山修復を命じられ、翌八年完成した。その際、両奉行によって釣灯籠が奉納され⁶⁸、以降慣例となったようだ。

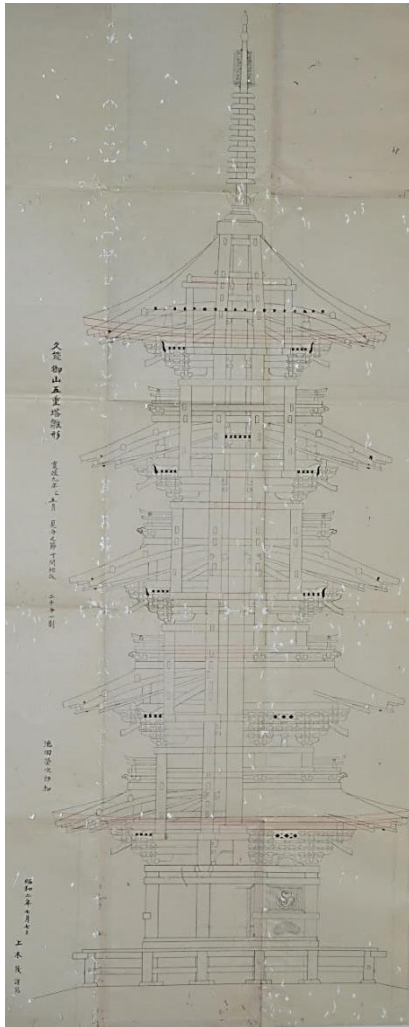
西暦	和暦	月日	事項	担当	氏名		史料
1752	宝暦2年		久能御宮向き所々破損見分	小普請	小普請方	杉浦吉左衛門	宝暦二年窺書
			本社屋根別条なし				
			御宮・拝殿外廻り塗り方、当分拭き漆、縁側土朱の分塗直し、高欄等金物取外し・鍍金差直し、唐門・五重塔余程大破				
			本地堂・宝蔵屋根下葺き、御供所大破				
1756	宝暦6年		修復（4/19外遷宮、10/22正遷宮）	小普請	奉行	堀田相模守正亮（老中）	棟札明細書・造営年譜・手伝記・上千木
			本社千木堅魚木修造		寺社奉行	鳥居伊賀守	
					作事奉行	鶴殿十郎左衛門（小普請奉行代）	
					目付	小菅猪右衛門（使番）	
					小普請方	窪田十郎左衛門	
					小普請方改役	名倉藤五郎	
				小普請方大工	村松飛弾棟貫		
				手伝奉行	松平伊豆守		
1765	明和2年		修復（3/19外遷宮、4/7正遷宮）	作事	寺社奉行	内藤大和守	造営年譜・雑録・近藤家文書
					作事奉行	正木志摩守	
					目付	村上三十郎	
					大工頭	千種庄兵衛	
					作事下奉行	小櫛七十郎	
					大棟梁	辻内遠江（肥後）	
					棟梁	平内八右衛門・浜松清七	
						花村清右衛門・海野佐右衛門	
					駿府棟梁	牧田定次郎	
1765	明和2年	4月	東照宮百五十回御忌				
1774	安永3年		久能山修復御用木			入嶋村八重垣山	梅ヶ島
1774	安永3年	5月	久能山御普請足代木等奉納（檜1本、槻1本、榎30本）			甲州八代郡	土橋家文書
1774	安永3年	9月	久能山修復御用木差上（槻1本、檜12本、榎70本）			甲州八代郡	土橋家文書
1775	安永4年	閏12月26日	修復（11/19外遷宮、閏12/25正遷宮）	作事	奉行	松平右近衛将監武元（老中）	棟札明細書・造営年譜・手伝記
					寺社奉行	土岐美濃守	
					作事奉行	山川下総守	
					目付	小長谷喜太郎	
					勘定組頭	中野藤十郎	
					大工頭	鈴木市十郎	
					作事下奉行	長沼千右衛門・矢島源四郎	
					大棟梁	甲良筑前棟村	
					手伝奉行	松平千太郎	
1777	安永6年		御宮内陣に鼠入り修復 （1/21外遷宮、5/22正遷宮）	作事	寺社奉行	牧野越中守	造営年譜
					作事奉行	河野信濃守	
					目付	田沼市左衛門	
1779	安永8年		坂石垣築直し 坊中7ヶ院所々修復				修復入用高
1780	安永9年		一之御門下山崩他修復				修復入用高
1781	安永10年		御供所・別当・坊中8ヶ院並びに一之門番所屋根修復				修復入用高
1783	天明3年		坂上長坂並びに松岩院山崩修復				修復入用高

[史料] 宝暦二年窺書…「宝暦二申年御修復見分之節窺書」久能山東照宮文書 3-28（『久能山叢書』第三編、所収）
棟札明細書…「御本社并五重塔御棟札明細書」久能山東照宮文書 3-35（『久能山叢書』第三編、所収）
上千木…「上千木加棟木法施」（『久能山叢書』第三編、所収）
雑録…「御宮外廻り五重塔并其外御修理被仰付候雑録」久能山東照宮文書 3-29（『久能山叢書』第三編、所収）
近藤家文書（明和2年）…久能山同心近藤家文書 2「懷中手控」（静岡県立中央図書館歴史文化情報センター提供）
梅ヶ島（安永3年）…「御吟味ニ付差上申書付（梅ヶ島村）」、「御吟味ニ付差出書状」、「御吟味ニ付差上申書付（入島村）」、「御尋ニ付奉申上候」（文政2年）、「文政五年午八月駿州安倍郡入島村差出シ明細帳」（新井正『梅ヶ島郷土誌』硯水泉、1990、所収）
土橋家文書（安永3年5月）…土橋國生家文書「九一色郷久能山東照宮普請足代木奉納願」（『山梨県史』資料編10 近世3、山梨県、2002、所収）
土橋家文書（安永3年9月）…土橋國生家文書「久能山東照宮修復御用木富士川川下げにつき触書」（『山梨県史』資料編10 近世3、所収）
修復入用高…「久能山御宮向其外御別当所坊中共御修復御入用高」
（「御城内外臨時御普請覚」『静岡市史』近世史料三、静岡市役所、1976、所収）

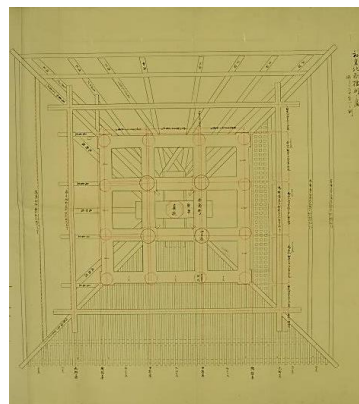
寛政九年（一七九七）五月、五重塔の見分が行なわれた。その際に建物実測調査が実施され、縮尺二十分の一で作成された絵図が「久能御山五重塔雛形」【図一・二・四】である。これは、昭和二年上木茂による写本であるが、そこに「池田栄次郎控」と記されている。この池田栄次郎とは駿府の大工棟梁である（第一部第三章参照）。

享和二年（一八〇二）十一月、修復のために外遷宮が執り行なわれた。今回は作事方によって御宮堂社の他、五重塔の修復も行なわれ、享和三年四月に正遷宮が執り行なわれた。寛政九年の五重塔見分および雛形作成によって、享和の五重塔修復へと繋がったのであろう。また修復を担当したのは、大棟梁甲良筑前棟村（甲良家八代目・明治十一年九月四日没）である。

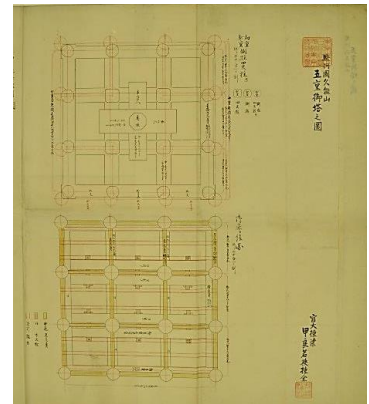
甲良家十代目甲良若狭棟全による「駿河国久能山五重御塔之図」（写本）【図一・二・五】も残り、「原図は甲良師より伝えたる図中にあり」と記されている（明治六年四月大島盈株写）。大島盈株は、甲良家七代目棟政の子光棟（大島家継承）の孫で十代目棟全から建築術を学んでいた⁶⁹。五重塔の図は、初重・二重の軸組平面図（縮尺二十分の一）、初重床組図（縮尺二十分の一）、初重化粧垂木割図（縮尺二十分の一）、初重・二重矩計図（縮尺十分の一）、初重隅断面図（縮尺十分の一）から成っている。



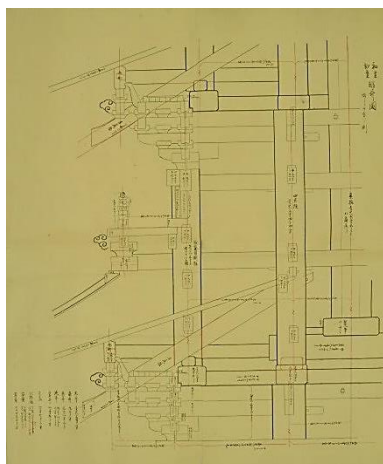
【図 1-2-4】久能御山五重塔雛形（写本）
（静岡市立中央図書館所蔵）



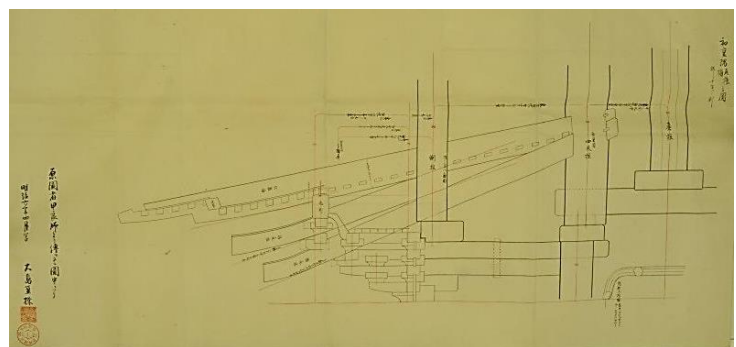
初重化粧垂木割図



初重・二重軸組平面図
初重床組図



初重・二重矩計図



初重隅断面図

【図 1-2-5】駿河国久能山五重御塔之図（写本）（東京志料（東 3374-1）東京都立中央図書館特別文庫室所蔵）

寛永十六年（一六三九）に建立された五重塔は、明治六年（一八七三）神仏分離によって撤去され、現在は基壇が残るのみである。日光東照宮に最初の五重塔が寄進されたのは慶安三年（一六五〇）で、現在五重塔は文政元年（一八一八）に再建されたものである。日光の五重塔は、塔の中心に立つ心柱が四重目から吊り下げられる懸垂式の塔として有名である。久能山東照宮の五重塔は、心柱を二重目から立てる形式で和様の塔であったことが絵図からわかる。三手先の組物で軒を深く出し、尾垂木を用い、木鼻を付し、支輪は菱形に造る。初重の中央間に扉を開き、脇間の連子窓には葵の紋を設え、腰壁に格狭間、中備は初重臺股、二重撥束とする。初重の天井は折上格天井、二重目から刎高欄付の縁を廻らし、組物には木鼻を付している。

久能山東照宮の主要な修復には、大名の手伝（助役）が命じられ、労働力を負担してきたが、享和以降は「金納手伝」として費用を負担することとなり幕末まで続いた。文化十二年（一八一五）の東照宮二百回御忌に向けて、同八年二月から修復願が提出された⁷⁰。これによると「久能山の儀は海辺の儀に御座候故、汐風烈敷別て、御山上は霧深く、御外廻り塗御彩色並御金物類等減金元損じ見苦敷相成」という状況で、御忌前の修復を願ひ出ている。翌九年九月には、本地堂・宝蔵・鐘楼堂塗り彩色、護摩堂・土蔵・御供所屋根、別当徳音院神殿等の破損箇所を把握していたが、儉約中であるため願ひ出ず、御宮修復見分の際に大破のみ修復が実施きできるよう嘆願した。実際のところ、御忌前に修復が行なわれたかは不明である。

西暦	和暦	月日	事項	担当	氏名	史料
1788	天明8年	5月22日	修復（正遷宮、1/21外遷宮）	作事	奉行 牧野備後守貞長（老中） 寺社奉行 稲葉丹後守 作事奉行 松平織部正＜釣灯笼＞ 目付 井上助之進＜釣灯笼＞ 勘定組頭 永田与左衛門 大工頭 河田安右衛門 作事下奉行 竹内半十郎 大棟梁 石丸隠岐充倚	棟札明細書・造営年譜・御暇参府之記・釣灯笼調書
1790	寛政2年		厩後御殿地溜池浚い 御供所・別当所他修復 大寿院座敷先石垣崩落所築直し			修復入用高
1793	寛政5年		禰宜食所・春屋・薪屋修復、坊中修復 御宮内陣向き、その他所々畳替薄縁等修復			修復入用高
1795	寛政7年		別当所修復			修復入用高
1797	寛政9年		一之門続矢来・坊中塀・御供所門・愛宕堂他修復			修復入用高
1797	寛政9年	5月	五重塔見分 寸間改め雛形作成（縮尺1/20）			五重塔雛形
1798	寛政10年		御宮修復	作事	作事方	修復入用高
1803	享和3年	1月	久能山修復奉納木願		甲州九一色郷	土橋家文書
1803	享和3年	4月2日	修復（正遷宮、享和2年11/22外遷宮）	作事	奉行 松平伊豆守信明（老中） 寺社奉行 脇坂淡路守 作事奉行 三上因幡守＜釣灯笼＞ 目付 山木若狭守 勘定組頭 水野藤九郎 大工頭 竹村七左衛門 作事下奉行 竹永市左衛門・橋本忠左衛門 大棟梁 甲良筑前棟村 金納手伝 仙石越前守・亀井隠岐守	棟札明細書・造営年譜・手伝記・釣灯笼調書
1803	享和3年	4月	五重塔（正遷座供養）	作事	作事奉行 三上因幡守 目付 山木若狭守 勘定組頭 水野藤九郎 大工頭 竹村七左衛門 作事下奉行 橋本忠左衛門 大棟梁 甲良筑前棟村	棟札明細書

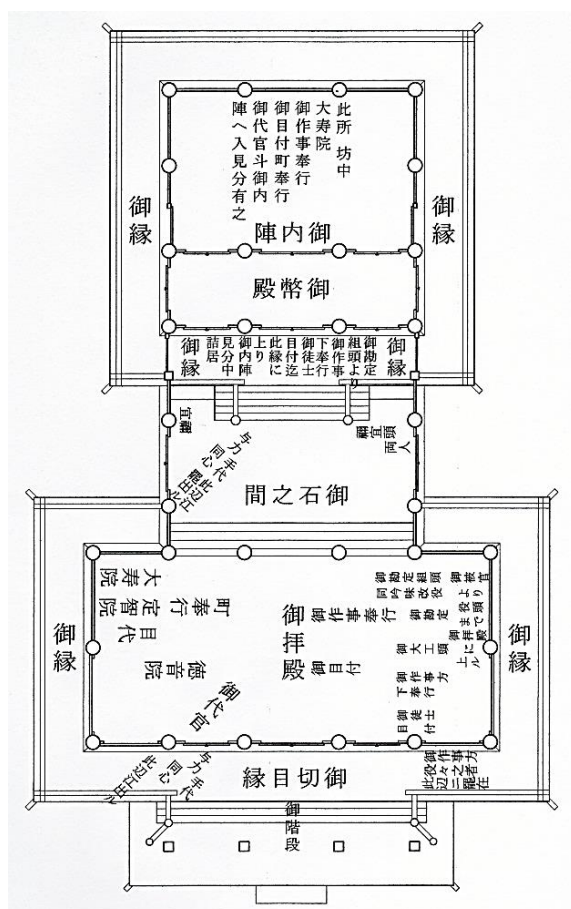
〔史料〕五重塔雛形…「久能山五重塔雛形」静岡市立中央図書館所蔵

土橋家文書（享和3年）…土橋國生家文書「九一色郷久能山東照宮普請献納につき一札」（『山梨県史』資料編 10

所収）

一八 天保四年（一八三三）の修復

天保二年九月、駿州久能山東照宮・三州滝山東照宮・大樹寺・松応寺（愛知県岡崎市）等の修復見分に勘定根岸三十郎、作事下奉行大越孫兵衛が命じられ、翌三年十一月久能山御宮の修復が行なわれることになった^{7.1}。その修復の実態について「天保御修復公私日録」^{7.2}から窺うことができる。十二月には勘定組頭・作事方大工頭・作事下奉行等諸役人が久能に入り、翌四年一月十七日に鉦始めが行なわれた。三月二日に御宮外遷宮、三日に奥院外遷座が執り行なわれた。三月十四日に一之門上番所の修復に取り掛り、四月五日には仮殿・本地堂その他全ての修復が始まり、御宮・奥院等には足代が掛けられた。六月二十一日、御宮・奥院・諸堂社・一之門・別当德音院・石垣等の修復が完了し、翌二十三日に作事奉行・目付・駿府町奉行・代官等諸役人による出来栄見分が行なわれている（資料十九）。作事方大棟梁石丸伊勢が案内し、大工棟梁児玉兄左衛門も同行した。御宮見分の際は、拝殿一畳目にて大棟梁石丸伊勢が出来方帳を読み上げ、内陣の見分は、坊中大寿院・作事奉行・目付・駿府町奉行・代官のみが許された。勘定組頭から作事下奉行・徒目付までは本殿正面縁上で待機した【図1-2-6】。引き続き山内の修復箇所の見分が実施された（資料二十）。駿府町奉行・代官によって作成された「修復見分帳」^{7.3}から、本殿は縁廻り及び千木・堅魚木の取り替え、御宮・諸堂社全体については柱根継ぎ、土台取り替え、彫刻・金物修復・塗り彩色・屋根の葺き替え等が行なわれたことが確認できる。この「修復見分帳」の作成には駿府の棟梁宗蔵・権十郎（第一部第三章参照）が関与している^{7.4}。七月一日夜に奥院正遷座が行なわれると、翌二日夜に御宮の正遷宮が執行された。三日には、下会所小屋地の取り払いと引き渡しが行なわれ、五日に作事奉行・目付等の諸役人や工匠たち全てが引き払っている。そして久能山内も落ち着いた頃（八旦）、仮殿をはじめ奥院拝殿、その他山上で処分される材木等が別当德音院より払い下げられることになり、知行所村々へも通達された^{7.5}（第二項参照）。



【図1-2-6】天保4年 久能山御宮見分の絵図
 （「出来栄見分之部 久能山御宮諸堂社一之御門并
 御別当所八ヶ院其外修復一件」中の図より作成
 『久能山叢書』第三編、所収）

西暦	和暦	月日	事項	担当	氏名	史料
1808	文化5年		御宮向き修復			修復入用高
			御供水井戸掘替			
			厩後溜池等浚い			
1809	文化6年		坂道石垣・別当所神殿向き他修復			修復入用高
1810	文化7年		諸堂社・神庫・御膳所・御供所・禰宜食所・禰宜番所他坊中8ヶ院畳替			修復入用高
1811	文化8年		二百回御忌前修復願			修復願紀
1815	文化12年		東照宮二百回御忌			
1831	天保2年		駿州久能・三州修復見分命	勘定	根岸三十郎	修復御沙汰書
				作事下奉行	大越孫兵衛	
1832	天保3年	11月	御宮修復命			修復御沙汰書
1833	天保4年	2月9日	久能山御宮修復御用材木（榎凡180本・栗凡300本）			梅ヶ島
		2月	久能山御宮修復御用材木上納願（檜1本・槻1本・榎30本）		甲州九一色郷	精進区有文書
		6月23日	御宮修復出来栄見分			出来栄見分
		7月2日	御宮修復（正遷宮、外遷宮3月2日）	作事奉行	水野出羽守忠成（老中格）	棟札明細書・造営年譜・修復御沙汰書・釣灯籠調書・出来栄見分・部・修復見分帳・天保公私日録
				作事奉行	川井長門守＜釣灯籠＞	
			修復箇所	目付	大久保讃岐守＜釣灯籠＞	
			宮殿・本殿・石之間・拝殿 千木堅男木取替	勘定組頭	村井栄之進	
			宝塔・銅色門・奥院・宝塔門	大工頭	大越孫兵衛	
			供廊下・玉垣・唐門・本地堂脇門・本地堂	作事下奉行	生田丈助・岡本良右衛門	
			神庫・荒神社・神樂所・御膳所・五重塔	大棟梁	石丸伊勢	
			鐘楼・山王社・庚申・弁天相社・神廐・楼門	大工棟梁	児玉児左衛門・高木吉次郎	
			禰宜番所・御供米蔵・禰宜食所・護摩堂		服部八十郎・上田儀兵衛	
			愛宕社・稲荷社・御供所・春屋・薪小屋	勘定役	鶴見淳助	
			林光院・松岩院・宝性院・大寿院・長円院	絵師	狩野梅軒	
			定智院・三明院	塗師棟梁	鈴木徳兵衛	
			一之門（渡櫓・与力番所・同心番所）	石方棟梁	亀岡阿波	
			別当所	畳大工見習	中村弥惣兵衛	
				畳方肝煎	土屋正作・関鉄五郎	
				神宝方棟梁	法橋少進・橋本太三郎	
				金納手伝	佐竹右京大夫→松平越前守	
					→松平老岐守・細川中務少輔	
				金納手伝	真田伊豆守・久世隠岐守	
				※駿府棟梁	宗藏・権十郎	

〔史料〕修復願記…「式百回御神忌前御修復願記」久能山東照宮文書 3-1（『久能山叢書』第三編、所収）
修復御沙汰書…「久能御修復御沙汰書」（『久能山叢書』第一編、所収）
梅ヶ島（天保4年）…「御用留史料（二）覚」（『梅ヶ島郷土誌』所収）
精進区有文書…上九一色村精進区有文書「九一色郷久能山東照宮修覆御用木上納願」（『山梨県史』資料編 10、所収）
出来栄見分・部…「久能山御宮諸堂社一之御門并御別当所八ヶ院其外御修復一件」（『久能山叢書』第三編、所収）
修復見分帳…「駿州久能山御宮諸堂社向其外共御修復出来栄見分の儀申上候書面」（『久能山叢書』第三編、所収）
天保公私日録…「天保御修復公私日録」（『久能山叢書』第一編、所収）

一十 天保十三年（一八四二）の修復

天保十二年三月二日の昼八つ時（十四時頃）駿府周辺で地震が発生した。久能山・駿府・清水・江尻（静岡市清水区）を中心とした震度五以上の地震で、久能山東照宮にも被害をもたらした。「駿州久能甚舖地震にて御座候処、御山内所々御損御座候付」⁷⁶とあり、また、花野井有年『辛丑雜記』によると、駿府城では石垣三十間もが崩壊した。「三保の浦の砂地に、小船の覆りたるもあり」と記され、津波の可能性を窺わせる。これが天保久能山地震である。

駿府町奉行加藤鞞負と久能山総門番神原越中守方が直ちに久能山の被害状況を、それぞれ老中方へ報告した（資料二十二）。御宮は少々漆塗りが剥がれ破損し、宝塔は無事であったが、宝塔前の石灯籠と銅灯籠が倒れる被害があった。楼門は所々破損し、銅鳥居は折れ、石灯籠は残らず倒損、護摩堂・愛宕社・御供所・土蔵・坊中八ヶ院は大破、御膳所は外壁破損、禰宜番所は倒損、一之門渡櫓・番所廻りも所々破損している。御宮同様に神庫・神楽所・五重塔・神廐・本地堂も漆塗りが剥がれ所々破損の状況である。

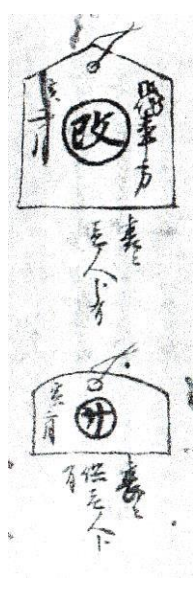
地震被害の報告を受けて、四月には駿府町奉行加藤鞞負と使番松平小豊次の見分が行なわれた。その際、駿府町奉行与力星野定之進、使番家来菅原新平並びに駿府石方棟梁善左衛門・左官方棟梁宗藏他人足四人も同行している。七月には作事方大工頭金田藤七郎・作事下奉行今井右左衛門・大棟梁辻内近江・諸棟梁等による見積見分が実施された。彼らは見分中、一之門を往來することになるため、作事方より門番中へ通行人の名前と作事方の通行鑑札が差し出された。また諸役人家来は供札を諸職人は腰札を携行し、一之門で鑑札と引き合わせる必要があった【図一・二七】。見分は七月四日から八月十七日まで行なわれた⁷⁷。

翌十三年二月半ばになってようやく修復役人が命じられた。同時期に日光東照宮の修復もあり、日光社参が四月又は七月に予定されているため、目付岩瀬内記が作事奉行代、使番山口勘兵衛が目付代を務めることになった。また、修復中から完成、正遷宮、供養までの見分は駿府町奉行加藤鞞負によって行なわれている

⁷⁸。修復予算に関して、御宮は本殿外廻り・石の間・拝殿の修復見積によるもので、本殿内部および屋根は外遷宮の調査で計上するとされている。諸堂社・一之門・別当徳音院・坊中八ヶ院等は木材共一式渡切となっている。全体の修復費用を抑え、仮殿・仮設物は坪数を減らして木材等級を下げ、八ヶ院もこれに倣うとある。すでに前年十二月末に、江戸からの修復御用木が近々着岸するというところで、久能山下の東に位置する駒越村（静岡市清水区）へ材木揚場の地所借用の掛け合いが行なわれた⁷⁹。また、地震によって倒損した灯籠の修復⁸⁰も作事方扱いで進めるなど徐々に修復の準備が整えられてきた（資料二十二）。



下物印鑑
(修復時)



腰札・供札
(修復時)



供札・腰札
(見分時)

【図 1-2-7】 作事方鑑札（久能山同心近藤家文書 3）

西暦	和暦	月日	事項	担当	氏名	史料
1841	天保12年	3月2日	大地震 駿州久能基だしき地震、山内所々破損有			造営年譜 天保壬寅公私日録
1841	天保12年	4月	御宮内陣・宝塔・拝殿その他山内見分	使番	松平小豊次	天保壬寅公私日録・修復御沙汰書・実紀
1841	天保12年	7月20日 ～8月4日	御宮・本地堂・その他地震破損箇所見分	作事	大工頭 金田藤七郎（蔵奉行格）	天保壬寅公私日録・修復御沙汰書・実紀・近藤家文書
			勘定		渡辺石郎	
			＜破損状況＞	作事下奉行	今井右左衛門	
			御宮（少々塗り破損）、楼門（所々破損）、	被官助	鶴見淳助	
			銅鳥居（折れ破損）、御供所・坊中（所々大破）、	仮役	中川要右衛門	
			石灯籠・禰宜番所（倒損）、一之門（少々破損）	勘定役	勝田久蔵	
			土蔵・護摩堂・愛宕社（大破）	大棟梁	辻内近江	
				大工棟梁	沢村儀三郎・服部八十郎	
				鋸棟梁	体阿弥日向	
				塗師棟梁	鈴木諸兵衛	
				瓦方	市川市兵衛	
				壁方	林喜太郎	
				建具方	吉田口次郎	
				足代方	桶崎庄右衛門	
				人足方	松本元次郎	
			※	駿府棟梁	石方善左衛門・左官方宗蔵	
		12月21日	駒越材木揚場借用			天保壬寅公私日録
1842	天保13年	2月9日	御宮其外修復入用高決定			天保壬寅公私日録
		2月	御宮其外修復御用の命			天保壬寅公私日録・修復御沙汰書
			久能山御宮修復御用材木上納願（檜1本・榎5本）		甲州八代郡右左口村	中道町右左口区有文書
1842	天保13年	6月29日	御宮修復（正遷宮、4/26外遷宮）	作事	奉行 水野越前守忠邦（老中）	棟札写・造営年譜・修復御沙汰書・釣灯籠調書・天保壬寅公私日録・近藤家文書
				寺社奉行	阿部伊勢守	
			＜修復箇所＞	作事奉行代	岩瀬内記（目付）→	
			宮殿・本殿・石之間・拝殿		中川勘三郎（目付）＜釣灯籠＞	
			宝塔門、供廊下、玉垣、唐門、本地堂脇門	目付代	山口勘兵衛（使番）＜釣灯籠＞	
			本地堂、神庫、荒神社、神楽所、御膳所	勘定組頭	都筑金三良（三郎）	
			五重塔、鐘楼、山王社、庚申・弁天相社、神厩	大工頭	村上与五郎	
			楼門、禰宜番所、御供米蔵、禰宜食所	作事下奉行	今井右左衛門・安西久次郎	
			護摩堂、愛宕社、稻荷社、御供所、春屋、薪小屋	大棟梁	辻内近江景頭	
			林光院、松岩院、玉泉院、宝性院、大寿院	被官	赤城清右衛門	
			長円院、定智院、三明院	被官助	鶴見淳助	
			一之門、与力番所、同心番所		林善太郎・服部八十郎	
				大工棟梁	浜松彦八郎	
				鋸棟梁	体阿弥日向	
				飾方	斉藤源左衛門	
				塗師棟梁見習	鈴木安太郎	
				瓦方	市川市兵衛	
				壁方	林喜太郎	
				建具方	吉田口次郎	
				人足方	松本元次郎	
				御口口師	望月徳助代	
				畳大工見習	中村弥惣兵衛	
				神宝方棟梁	堀井秀作	
					花村源左衛門・花村清右衛門	
				駿府棟梁	池田栄次郎	
				絵図師	五郎兵衛	

〔史料〕天保壬寅公私日録…「天保壬寅御修復公私日録」上（『久能山叢書』第一編、所収）

近藤家文書…久能山同心近藤家文書3「久能山大地震ニ而御破損書取調他」（静岡県立中央図書館歴史文化情報センター提供）

中道町右左口区有文書…中道町右左口区有文書「右左口村久能山御用木川下げにつき願書」（『山梨県史』資料編10、所収）

二月末から小屋組大工によって小屋下組が始まり、三月四日下作事小屋【図一・二一八】の内、会所・大工小屋・木挽小屋が屋根（柿葺き）を除いて完成。修復御用木等も積み入れられた。修復に携わる工匠は二百人程になる予定で、三月一日から順次諸役人・工匠が到着した。修復中、一之門往来は通行鑑札によって確認が行なわれた。また、木道具等を山上から山下の下作事小屋へ移す場合、作事方・目付方の印鑑を一之門で引き合わせ、下作事小屋への持ち出しが許された【図一・二一七】。

修復は、大工頭村上与五郎、それに前年見分に訪れている作事下奉行今井右左橋・大棟梁辻内近江・大工棟梁服部八十郎が担当することとなった。大工棟梁は林善太郎・浜松彦八郎も加わり、三月半ばからは、駿府棟梁花村源左衛門・花村清右衛門・池田栄次郎（第一部第三章参照）、絵図師五郎兵衛も参画している。途中、作事奉行代の岩瀬内記は病気のため目付中川勘三郎が作事奉行代を務め⁸¹、修復工事は進められた。三月十三日に諸堂社の仮殿が完成して、十四日遷座の予定となった。この頃から久能山内の本格的な修復が開始され、三月末に畳大工が到着、四月一日には下小屋にて新始めの儀式が行なわれた。その後、御宮仮殿が建てられ、二十六日に外遷宮が執行された。

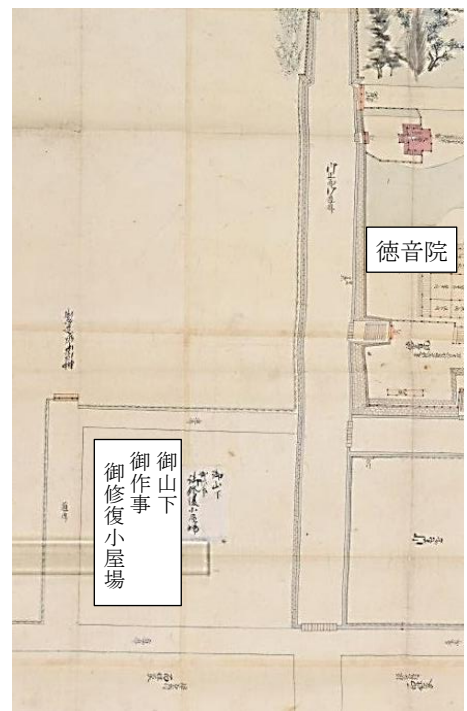
御宮仮殿は、鐘楼の下段の庚申弁天社と山王社の前に建築されていた【図一・二一九】⁸²。「御宮御仮殿」【図一・二一十】によると、御宮と同様に本殿（内々陣・内陣・幣殿）・石之間・拝殿から成り、向拝前には唐門を備えていたことがわかる。向拝の左右に武家詰所、石之間の右側に禰宜番所が設けられ、本殿横の御膳所と石之間を廊下で繋ぐなど、諸機能が付加されている。仮殿の断面図「御仮殿之図」【図一・二一十一】によると、石之間の床は拝殿より一段低く、天井高は同一であること。本殿は、幣殿・内陣・内々陣の順に床・天井が一段ずつ高く造られたことがわかる。仮殿の平面構成の基本は御宮と同様であるが、屋根の形状は最も簡易な逆T字型の大屋根を掛けている。一方、諸堂社の仮殿は、護摩堂横の石垣上に建てられたことが、「久能山惣絵図」【図一・二一九】の付箋から確認できる。



【図 1-2-9】 御宮及び諸堂社仮殿

(付箋年代不詳)

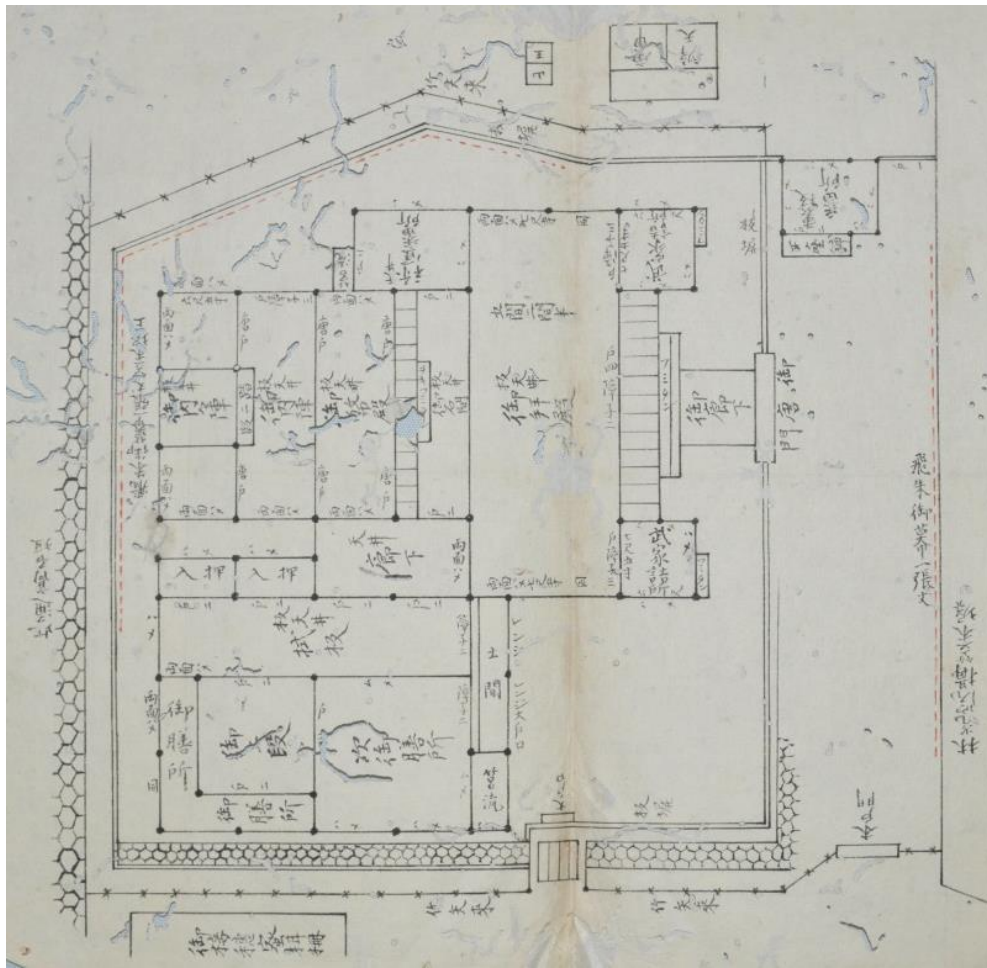
(「久能山惣絵図」(部分) 久能山東照宮所蔵)



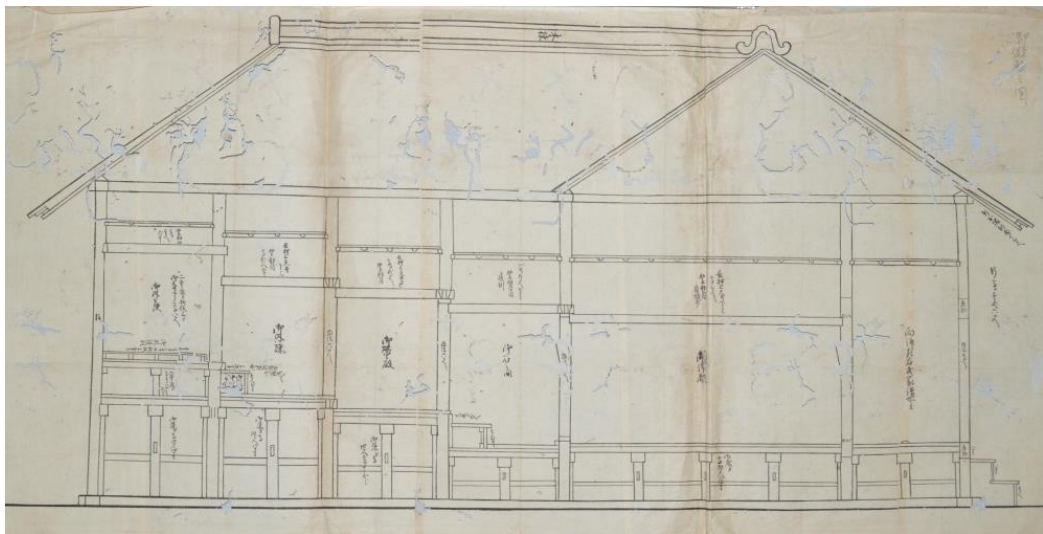
【図 1-2-8】 山下作事修復小屋場

(付箋年代不詳)

(「久能山惣絵図」(部分) 久能山東照宮所蔵)



【図 1-2-10】「御宮御仮殿」絵図（年代不詳）
 （久能山東照宮文書 3-21-4 久能山東照宮所蔵）



【図 1-2-11】「御宮御仮殿」絵図（年代不詳）
 （久能山東照宮文書 3-15 久能山東照宮所蔵）

その後、漆奉行組手代・神宝方棟梁・神秘職が到着し、現場も徐々に仕上げの段階に入ったことを示している。特に内々陣の修復は、神秘職にのみ許された。内陣の見分については、安永五年（一七七六）内陣へ鼠が入った際に作事奉行と目付には許され、それ以降、一度の見分に限り許可されるようになった⁸³。五月に入り、倒壊した鳥居の鋳立が始まると火を用いることから昼夜見廻りが行なわれた。この頃までに畳の修復は完了し、畳大工はこの時点で江戸へ引き上げている。次いで五月中旬になると大工事も過半が終了したため、江戸大工は引き払い、残りは駿府大工が担う形がとられた⁸⁴。大棟梁辻内近江そして駿府棟梁三名の下、大工事は続いた。いよいよ現場全体が仕上げの段階になると、一日八十人の漆工では間に合わず、江戸へ応援を要請している。この例からも、江戸と駿府の工匠は協同で現場を進めていたことがわかる。天保十三年の「駿府町方文書」中の町絵図⁸⁵から抽出できる駿府の大工数は百二十二人であった（第一部第一章参照）が、大工事を引き継いだ駿府大工とはどれほどだったのか、明らかではない。久能山総門番榊原越中守の石燈籠修復は、清水の石工松蔵が行なっている（資料二十三）。

六月中旬には、駒越村の用材揚場は返却されたが、塗り方の作業は続き、塗りが仕上がったのは正遷宮の六日前のことだった。二十二日町奉行加藤鞆負と代官池田岩之丞による出来栄見分が行なわれ、二十九日に御宮正遷宮、七月一日に供養が行なわれた。二日には諸役人が完全に引き上げ、修復が終了する。こうして久能山東照宮の修復は大勢の役人や工匠たちの尽力により、四ヶ月で終了した。木工事が終了すると、修復諸木・背板・鼻切類の払い下げが知行所村々へ通達された。払下げは入札をもって行なわれているが、一度で落札しないこともあった。古木類は通常別当德音院が拝領したが、一之門の古木については番人中へ配慮している（第二項参照）。

久能山東照宮の修復中には、多くの役人や工匠たちが久能山下に出入りしている。山下の村々は修復関係者の旅宿となつて、数ヶ月間人口が増大し、トラブル

が発生することも少なくなかった。そこで、修復関係者と地元の方々に御触が出されている。金銭に関する事項が多く、双方の接触や夜中の不要な外出についても厳しく禁じられていた。久能山下や駿府の人々は経済的な効果に期待を寄せていたが、これも御触によつて縛られたことも多かったはずである（第三項参照）。

一、十一 安政三年（一八五六）の修復

嘉永七年（一八五四）十一月四日辰刻（八時頃）最大震度七の巨大地震が発生した。これが安政東海地震である。久能における地震の様子について「安政丙辰地震損御修復公私日録」⁸⁶から詳細に窺い知ることができる【史料一―一五】。

【史料一―一五】「安政丙辰地震損御修復公私日録」安政元年十一月四日条⁸⁷

一 今朝月次見廻に付四つ時前供揃着仕替致居候処、俄に大地震有之候に付、即刻庭へ逃出、西の方梅林迄漸々罷越候処、梅林へ出候節は土蔵屋根の瓦も不残震い落、住居も、倒れ可申様子の処、二階は戸障子戸袋迄落散し壁も崩れ落、暫時の間に大地震五六度計続て震い、軽きは始終不相止、其内前浜津波起り、三度程打返し岸に打上、浜方住居の内迄打込、女子供は皆屋敷へ逃来、其内四つ半頃御山上御供所其外潰候注進有之、引続潰候御供所より出火の注進有之候に付、即刻火事具着用近習の者三四人召連登 山致、先 御宮相伺候処、最早御案、御長持へ御移申上、其外御大切の御品外御長持に入、御立退の儀、御別当德音院出府中故禰宜頭小山織部、一藹定智院自分へ問合有之候処、御供（所）火勢甚敷殊西風故御宮の方へ吹付。坊中は八院共不残潰れ、御坂通も地山欠落漸通行致候程の儀にて此上御樓門御膳所等に火移候ては中々以御立退六ヶ敷、今の内御立退可然。定智院、小山織部、目代杉江左近へも申談、御案へ御別当所前の山、清浄の場所へ暫時御宮附の者供奉致し、尤与力近藤栄次同心二人御先払申付。其後御供所へ罷越消防可致存候処、火勢壮にて中々消留がたく、先々統居候食所の方取崩、右御供所御春屋のみに

西暦	和暦	月日	事項	担当	氏名	史料
1854	嘉永7年	11月4日	四つ時前、俄に大地震有り 暫時の間に大地震五・六度続いて震い、軽い地震は 始終止まず、その内前浜津波起こり、三度程打ち返 し岸に打ち上げ、浜方住居の内迄打ち込む 四つ半頃、御供所より出火			安政公私日録
			駿府も大地震にて大火になる			安政公私日録
			駒越村方不残潰、府中江尻清水家不残潰大火、前海 より内海津波			斎藤家文書
1855	安政2年	4月26日	地震修復箇所見分	作事	勘定 猪俣英次郎	安政公私日録
			<被害状況> (安政公私日録)		大工頭 松田弥太郎	
			所々弛み…本殿・石の間・拝殿、本地堂、		作事下奉行 生田丈助	
			宝蔵・神楽所、御膳所、鐘楼台、一之門櫓		被官 大戸金右衛門	
			柱1.5尺開く…五重塔		大棟梁 甲良若狭	
			倒壊…愛宕堂、護摩堂、厩、禰宜番所		大工棟梁 岡徳三郎	
			禰宜食所、花所、薪部屋、坊中八ヶ院			
			大損…土蔵、焼失…御供所、春所			
1855	安政2年	10月2日	安政江戸地震			
1856	安政3年	8月25日	夜大風雨、大杉倒れ、山上大木は余程吹折 柵・塀吹倒、御宮諸堂社破損無し 大風雨、高波にて浜百姓家へ水押廻る 江戸も大風雨にて潰家有り			安政公私日録
1856	安政3年	9月26日	修復 (正遷宮、6/19外遷宮)	作事	奉行 阿部伊勢守正弘 (老中)	棟札写・造営年 譜・修復入用高・ 釣灯籠調書・安政 公私日録
				作事奉行代	松本十郎兵衛 (目付) <釣灯籠>	
				目付代	松平弾正 (使番)	
				勘定組頭	鈴木大之進	
				勘定吟味方改役	渡邊三十郎	
				勘定	根立助七郎・猪俣英次郎	
				大工頭	松田弥太郎	
				作事下奉行	生田丈助・那須喜兵衛	
				被官	大戸金右衛門	
				大棟梁	石丸祐次充久	
				寺社奉行	安藤長門守	
				畳大工	伊阿弥筑後	
				塗師棟梁	鈴木美作・見習堆朱喜一郎	
				深秘職棟梁	小山虎次郎	
				神宝方棟梁	戸田次郎吉・神谷孝十郎	
					林仁三郎	
				大工棟梁	八木沢市右衛門・岡徳三郎	
					重田万次郎・今西清蔵	
				駿府棟梁	花村与七郎・花村清右衛門	
					池田栄次郎	
				絵図師	常吉	
1858	安政5年	4月	久能山御宮修復御用材木上納願 (檜1本、檜1本他)		甲州八代郡	三珠町高萩区有文 書
1865	慶応元年		東照宮二百五十回御忌			

[史料] 安政公私日録…「安政丙辰地震損御修復公私日録」上 (『久能山叢書』第一編、所収)
斎藤家文書…斎藤家文書「從御上路末代之記録」静岡市所蔵
三珠町高萩区有文書…三珠町高萩区有文書「上九一色郷久能山東照宮修復御用材奉納につき添幹願」
(『山梨県史』資料編 10、所収)

て消留候含にて致差図候処、今日当番の与力は近藤栄次、高尾勘左衛門並当番同心供方の近習のみにて、浜方人足は嚴敷催促致候え共銘々の住居津波打込、東西へ逃走り一人も不欠（○駈）付漸四五人参合、御社人杯も手伝せ成丈焼草取除、其内半時程も立、与力同心追々欠付夫々消防致候処、大松三本に燃付、火消道具竜吐水等は御番所に差置、皆潰家の下に相成何一つ無之、漸屋敷より竜吐水差登せ、右にて追々消防致、昼九つ半（午後一時）頃は大に火勢低く相成、先々飛火も有之間敷少々致安心候。

これによると、暫くの間大地震が五・六度続き、小さい地震は始終止まず、その内、津波が起こつて久能海岸へ三度打ち上げて、浜の住居まで到達して全て潰れた。「駿府も大地震にて大火に相成」⁸⁸「駒越村方不残潰、府中江尻清水家不残潰大火、前海より内海津波」⁸⁹とあるように駿府・江尻・清水に至るまで、地震による倒壊・火災、そして沿岸部は津波によつて甚大な被害を蒙つた。十一月十二日になつても「地震今以折々有之、昼夜二三度、或は五度つつ有、此節は格別強きは無之」⁹⁰と余震が続いている。

久能山東照宮の被害報告書が地震発生から三日後の十一月七日付で作成され、同八日に別当德音院から駿府町奉行に提出された（資料二十四）。以下に、主要な建造物の被害状況をまとめた。

所々弛み	御宮向き（本殿・石之間・拝殿）、本地堂、宝蔵、神楽所、御膳所、鐘楼台、一之門櫓
柱一尺五寸開く	五重塔
潰（倒壊）	愛宕山御堂、護摩堂、厩、禰宜番所、禰宜食所・花所、薪部屋、坊中八箇院、同心番所（下番所）、別当所長屋
扉破損	楼門
大損	土蔵、与力番所（上番所）、別当所神殿向他

焼失 御供所、春屋

以上から御宮向きなど「所々御弛」とあるように五重塔を除く主要な建造物は、大きな被害は受けていなかったことが確認できる。地震後、御供所の台所から出火したため、御供所・春屋の二棟は焼失した。その後、別当德音院から寺社奉行安藤長門守へ提出された修復願箇所（資料二十五）によると、本殿・石之間・拝殿は羽目板・長押等全体にひび入り、弛んで隙間が生じ、本殿屋根の堅魚木の銅物は離れた状態であること。五重塔は、左の方の柱が一尺五寸程開き、天井は西から東へ一尺五寸片寄り、全体に隙間が生じていること。楼門は東の方へ倒れて弛みがあること等が報告されている。

八日には一之門下番所の仮屋組み立ての見分を、総門番家来山本卯左衛門が大工村与平を召し連れて行なつた。仮御供所も建てられていたが、あまりにも粗末であつたため、大工与平へ駿府に保管されている仮番所用の杉板十坪分と柱・貫等を廻すよう指示し、その後、仮御供所は大工与平が担当した。禰宜番所・坊中仮住居の絵図面が作成され、それによつて坊中は院内に古木を用いて仮住居を建て、禰宜番所も古木で小屋を組み始めた。久能山内の片付けに神領の人足が動員されたが、大梁等は容易に動かず、片付くまでは久能山の参詣は差し留められた。このように仮屋の建築と山内の片付けが地震発生から数日で開始された（資料二十六修復工程）。

十一月二十一日、目付・駿府町奉行・勘定組頭等が久能山の見分に派遣された。同時に駿府城内外・その他近国の地震被害状況の見分も実施された⁹¹。

安政二年（二八五五）四月、勘定方と作事方が修復のための見分を行なつたが、その後しばらく進まなかつた。これは安政二年十月二日に起きた安政江戸地震の処理に作事方・目付方等各職とも総動員されていたためである。安政東海地震発生から一年三ヶ月後の安政三年二月、ようやく久能山修復のための作事奉行代と目付代が任命されたのである。この修復には、駿府棟梁花村与七郎・花村清右衛

門・池田栄次郎の三名が参画している（第一部第三章参照）。

三月中旬、修復用材木・石揚場として駒越村芝地が引き渡された。その後、山上・山下小屋場が建設され、山下小屋場には、これまで通り作事方役人が泊まり、山上小屋場は、夕方、社人並びに与力同心に引き渡されて、夜間の警護が行なわれた。三月下旬、修復関係者が到着。四月から修復に取り掛り、六月十日には、宝塔前に仮殿が完成した。本地堂は彩色が終了、宝蔵も下地が大体でき、五重塔の周囲の足代は半分程度という進捗状況であった。さらに、外遷宮の際、役人の旅宿とするために、倒壊した坊中八ヶ院の内、玉泉院・法性院・大寿院・三明院の四ヶ院が再建された。定智院・林光院は追って再建の予定であるが、当時住職が不在の松岩院・長円院は、今回の修復から除かれた。この地震による火事で重要な役割を果たしたのが、水溜の堀であった。ここに水が溜っていたため火を消し止めることができた。山上に井戸はあるが水深が深く、最も水面が近いところで五丈（十五m）あるため、消火にはとても間に合わない。そこで二ヶ所の水溜の底を浚い、水が漏れないように修復することになった。そして、神楽所・上番所も完成し、楼門は塗り下地が出来、十九日に外遷宮が行なわれた。八月中旬には、五重塔の柱の修復は終わり、彩色もほとんど仕上がった。完成に近づいた同二十五日の夜、大風雨によって山上の太木が折れ、柵や塀が倒れる被害を受けたが、御宮諸堂社の破損はなく無事であった。九月上旬、神宝方を除いて修復は完成し、修復用材木揚場（駒越村）及び修復下拵小屋場の地所は返却された。九月十四日に駿府町奉行・代官によって出来栄見分が行なわれ、同二十六日、無事正遷宮が執り行なわれた。その後順次役人や工匠たちは引き上げている。作事奉行代・目付代は江戸へ戻ったが、勘定組頭・勘定・作事方大工頭松田弥太郎・作事下奉行生田丈助・大工棟梁八木沢市右衛門は駿府へ向かい、勘定吟味方改役・勘定・作事下奉行那須喜兵衛・大工棟梁岡徳三郎と今西清蔵は三州へ向かった。一方、国へ戻ることが叶わぬ者もあった。久能山下の現根古屋大日堂前に、安政三年九月九日と刻まれた墓石が残されている。これは修復がほぼ完成した頃で、作

事方大棟梁石丸祐次の寄附によって建てられた川越の田嶋藤吉の墓であった（資料二十七）。

安政の修復では、費用の節減と耐用年数の長期化が最大の課題であった。基本方針として、次の事項が挙げられている（資料二十八）。

- ・御宮向きと番所以以外の修復は皆減らす。
 - ・耐用年数を第一に考え、なるべく費用を減らすよう心掛ける。かつ、御宮内廻り、奥院並びに別当徳音院神殿等も尊敬に拘らない部分はなるべく省略し、費用を調整する。
 - ・地震破損箇所の修復のみではなく、次の根本的な修復まで手を入れる必要がないようにする。
- というように、耐用年数の長期化を第一に考え、修復費用を最大限節減する方針であったことが確認できる。

当初、木材は江戸から輸送されるはずだったが、差し止められ、全て地元で調達せざるを得なくなった。諸木は生木で、「下番所杯鑿穴より水出候と申位に御座候」⁹²という状況であった。厳しい儉約状態であったため、具体的に材料の種類・寸法等まで制限されている。檜は杉に、五寸角は四寸三分角に、三寸垂木は二寸に、瓦屋根の下地となる土居葺板は杉皮へ変更になった。さらに、杉・檜は特別で、当時の松木を用いた根太・梁は、耐用年数は期待できないとある（資料二十九）。同時期の江戸城御殿でも、梁はこれまで櫨だったが、近年の炎上後、修復は残らず松になった（資料三十一^①）というように、やむを得ない状況である。

地震後の幕府による本格的な修復の開始は大幅に遅れたが、生活用の建物については自ら古木を再利用して対処した。竣工後の勘定組頭鈴木大之進の話によると、諸堂社の修復でも古木を用いて材料費を抑えるよう指示されていた（資料三十二）。具体的には背板を貫に使用し、坊中の古木を買い取って土台等へ転用した。古木の再利用は、工匠たちの手間を増大させた。その損失とは、大工棟梁は請負八千人のところ一万八人掛り、五百両程の損失で（資料三十一^③）、木挽について

も余程の損失（資料三十一④）であった。工匠たちの申し立てにより全部で手当金二百五十両が支払われたが、十分なものではなかった。結果的に修復費は、木材の省略で二百五十両減、古木の再利用で六百五十両減、見積りよりも合計で千両程節減できたが、そのしわ寄せは工匠たちが蒙った。また、どれほど良く出来ても、それだけ費用が増えるのでは不出精であり、今回は費用を減らし、天保十三年（一八四二）の修復よりも立派に出来上がったと記されている。耐用年数の長期化と費用の節減が表向きは実現したことがわかる。

また、諸堂社の金物類はこれまでは全て金鍍金だったが、今回上真鍮へと変更になった（資料三十一⑥）。金鍍金は一年余で赤銅が出て見苦しく、かつ費用は格別に掛るという。また真鍮金物は、当時、江戸の台徳院御霊屋・文祿院御霊屋・慎徳院御霊屋で用いられていた。このように材質的な面と江戸の御霊屋の実例によっていることがわかる。一方、「久能山修葺記録」（資料三十二）によると、諸堂社向き高欄廻りの「銅物」は、天保四年の修復の際に、「漆減金」を「三篇本減金」に変更した。ところが天保十三年の修復時に破損状況を確認したところ、汐風が強く当たる場所であるため、決して良い状態ではなかった。そこで「漆箔」の方が耐久性に優れ、費用も削減できるということから、本地堂・神庫・楼門等は「漆箔」となった。今回も鐘楼・五重塔高欄廻り銅物は「漆箔」にすることになった。さらに漆塗りについても、日光東照宮の「中塗二度上ぬり」という事例を挙げ、神前向きは中塗り二度、上塗り一度行なっている（資料三十一⑦）。また、拝殿・内陣の画は、今回残らず彩色を剥がし、新規の画を狩野玉円へ申し付けた（資料三十一⑤）。

坊中は全て倒壊し、地震後材木等の片付けが進められた。この修復で再建することができたのは、八ヶ院中の六ヶ院であった。坊舎は、古来から京間で建てられており、少し空間に余裕があったが、田舎間にすることで、規模を縮小し、建坪を減らすことになった。屋根についても本瓦葺きから桧瓦葺きに変更された（資料三十一②）。檜の柱は全て杉の赤身とされた。修復前の話では、これまで建坪六

十〜七十坪であったものを、その約半分の三十六坪に減らすことになり、別当と坊中で論議となっていた（資料二十八）。「久能山修葺記録」（資料三十二）にも、全体的に省略し、木材等級を下げ、小屋・床廻り等は古木を割って使用すること。畳も再用するが、大破の建物は四ヶ月も潰れたままだったため、畳は蒸し腐り再用できない状態だったことが記されている。また、板塀を竹垣に変更することで、以降は山内の竹を用いて竹垣を維持することになった。

第二項 久能山東照宮の修営における古木

江戸時代の修営において、修復の際に出る古材及び仮設的建築物に使用されて不要になった材木類は再利用されてきた。これらの材木類を古木と呼び、久能山東照宮でも天保十二年（一八四一）の天保久能山地震、安政元年（一八五四）の安政東海地震の被害による修復において古木が積極的に利用された（第一項）。

一 古木の拝領

古木が拝領され、それを再利用する事例が、元禄八年（一六九五）三州鳳来寺「残り材木」拝領に関する書付に見られる【史料一―一六】。

【史料一―一六】『鈴木修理日記』元禄八年六月二十八日条

一兵助殿へ懸御目候へバ、此度鳳来寺残り材木之書付参候、弥此通先規之通被下可然哉吟味仕候様ニ被仰付、書付共受取、退出、先規之書付左之通。

御奉行太田備中守資宗

一慶安四卯年御造営之節、前本堂・鎮守・鐘楼・楼門等之古木、衆徒中へ配分仕候。

御奉行太田備中守資宗

一寛文四年御修復古木等不及御沙汰。

御奉行太田撰津守資次

一寛文拾貳子年、東照宮御葺替、此古板ヲ以松高院屋根御葺替被仰付候。

御奉行太田撰津守資次

一寛文拾三丑年、本堂御葺替、古板等衆徒中へ申談候。

御奉行青山和泉守忠雄

一天和三亥年、東照宮御修復其外鎮守・鐘楼・楼門・毘沙門堂并医王院屋根御葺替被仰付候、東照宮古木ハ松高院江被下候、医王院自坊之古物ハ

医王院江被下候、其外之古板・古木等ハ松高院・医王院へ被下置候、以上。

五月 日

鳳来寺

御修復

両役僧

御奉行衆中

鳳来寺の場合、慶安四年（一六五二）の造営から境内諸堂社の古木が衆徒中へ配分され、この時家光の発願によって建立されたのが鳳来山東照宮である。寛文十二年（一六七二）、鳳来山東照宮の屋根葺き替えが行なわれ、その古板を用いて天台宗方学頭松高院の屋根葺き替えが命じられている。天和三年（一六八三）には、鳳来山東照宮・諸堂社の修復並びに真言宗方学頭医王院の屋根葺き替えが行なわれた。東照宮古木は松高院へ、医王院の古木は医王院へ、諸堂社の古板・古木等は両院が拝領している。このように再利用されたのは材木類だけではなく、屋根葺材として使用されていた古板もあった。

『御触書天保集成』の中にも、文政十一年（一八二八）に行なわれた鶴岡八幡宮再建修復の「残木」について確認することができる【史料一―一七】。

【史料一―一七】文政十一年八月⁹³

寺社奉行え

鎌倉

荏柄天神別当

一 乗 院

一 槻梅樫栗赤松八拾四本

一 松杉丸太百拾六本

一 樅板貳百枚

一 背板千五百枚

一 古木拾五歩一

右、此度鶴岡八幡宮并諸堂社焼失跡御再建御修復残木之分、願之通被下候間、其段可被申渡候、尤須田大隅守可被談候、

六月廿日

右の段月番支配へ相達。

これは鎌倉荏柄天神別当一乗院（教王護国寺支配下）から寺社奉行へ宛てたもので、鶴岡八幡宮并諸堂社焼失跡の再建修復における「残木」を願い通り拝領したことを報告している。「残木」には、各樹種の材木、松・杉丸太、板、背板、古木が相当数挙げられている。荏柄天神社は、鶴岡八幡宮の東方に位置し、鎌倉時代初期から幕府との関わりが記録に残る神社である。元和年間に落雷で社殿を焼失していたところ、寛永元年（一六二四）の鶴岡八幡宮若宮社殿の造営に伴い、その旧本殿の建物を移築して再興された。よって現荏柄天神社本殿は、中世に遡った正和五年（一一三六）の建立である。江戸時代を通じて、鶴岡八幡宮から残材や古材を拝領し、修復が行なわれてきた荏柄天神社には、寛永三年（一六二六）から明治十九年（一九七六）まで八回の古木拝領の記録があり、その内の一回が文政十一年である⁹⁴。

一一一 久能山総門番方の古木拝領について

久能山東照宮においても古木は、別当德音院が拝領していた。その中で「一の御門古木の分」については、そこを持ち場としている久能山総門番榊原越中守に対して別当德音院が配慮している【史料一一一八】。

【史料一一一八】天保十三年六月二十日条⁹⁵。

一 院代本明房より文通。

以手紙致啓上候。然ば御修復に付、古木類共先格の通御別当へ拝領被致候間、一の御門古木の分は御番人中にて如何様共御取払御座候様御通達可被下候、右可得御意如此御座候、以上。

天保十三年（一八四二）の修復では、まず古木を別当德音院が拝領しており、特に一の御門の古木については「御番人中にて如何様共御取払御座候様」というように德音院が「番人中」に古木を配分している。これは德音院代本明房から久能山総門番榊原越中守へ文書で達しがあつたもので、それを総門番が月番支配へ通達している。

【史料一一一九】安政三年八月二十日条⁹⁶。

一 金右衛門御番所古坊取片付の儀、院代より達有之。右は例御番所詰のもののへ德音院より被呉候前例の処、其旨文面に無之故、前々の手紙写遣候処、此度も右同様と申来候に付、則月番支配へ申達候由、前々は品少々の処、此度は御櫓羽目大棟下番所不残ゆへ余程古木有之由。

安政の修復【史料一一一九】でも、天保十三年同様に総門番の持ち場「御番所」の古木について德音院代が配慮し、古木は番人中へ配分することを月番支配へ早速連絡した。しかし以前は古木が少量であつたため拝領できたが、今回は櫓門の羽目板・大棟、下番所全部と古木が多いため、被官大戸金右衛門方にて取片付けることになった。それについて、院代から総門番へ通達があつたのである。

このように古木が大量に出た場合は、別当へも拝領されなかったことがわかる。

二 古木の払下

久能山東照宮の場合、山内から出た古木を別当德音院が拝領するだけではなく、山内や知行所に対して払下げも行なわれた。払下げられた古木は、修復の際に出た古材および修復工事に際して建てられた仮設的な建築物の材木類だった。中で

も仮設的建築物を取り払う際に払い下げられている例が多くみられる。天保四年・天保十三年・安政三年の修復について記録された「御修復公私日録」⁹⁷から、三度の修復でどのように古木が払下げられていたか見ていきたい。

二一 天保四年（一八三三）の修復

天保四年の修復は、一月に始まり、七月に完成、正遷宮が行なわれた。修復が完了すると諸役人・工匠が引き払い、その後、「御山上御取捨に相成候品」の払下げが行なわれた。

【史料一〇一十】天保四年七月八日条⁹⁸

一 七月八日、御山上御取捨に相成候品、御仮殿を始、奥院御拝殿其外此度御別当所より相払度、望人有之候ば、入札致候様、領分へも違異候様、文通有之候に付、領分へも相達。今日山本卯左衛門・安藤弥右衛門登山、此方にて入用の品も有之候はば買入可申罷越候処、何れも用ひに相成候品無之、御仮殿外囲塀は用ひに相成候由に付、右塀高二間、三十坪に有之候間、右を三両に相求度由、卯左衛門より院代迄及懸合候処、承知にて九月廿三日引取。

【史料一〇一十】は、山上の仮殿をはじめ奥院拝殿他から出た古木を、別当德音院が「領分」の希望者にも入札をもって払下げるといふものである。またその日のうちに、総門番方も「入用の品」を買い入れるために、総門番家来の山本卯左衛門・安藤弥右衛門を登山させている。山本卯左衛門が仮殿外囲塀を三両で購入したい旨を德音院代に掛け合つたところ承認され、九月二十三日に引き取る事になった。他は予定通り「領分」へ払下げられたと思われる。このように、古木の管理は德音院代によって行なわれており、「天保四巳年は御仮殿御取捨物買入世話致候に付、院代へ為挨拶金二百足差遣」⁹⁹という記述からも明らかである。

以上より、「御山上御取捨に相成候品」の所有権は別当德音院にあり、「領分」への払下げの通達は、院代から総門番を経由して行なわれ、入札をもって払下げられたことがわかる。

天保四年の修復において、総門番方が最終的に買い入れた古木は、以下の通りであった。

【史料一〇一十一】¹⁰⁰

御払の品買入

- | | | |
|-----------|-------------|-------------|
| 一 六月十五日御払 | 杉丸太百四十本 | 金貳両 |
| 一 九月 | 御仮殿御囲板塀三十坪 | 金三両 |
| 一 十月廿日 | 長杉丸太五十本 | 二分二朱と二百七十二文 |
| 一 同 | 短丸太、長丸太取交百本 | 老両と七百四十一文 |
| 一 同 | 背板四十八枚 | 貳分貳朱 根古屋 |
| 一 御仮殿扉 | | 壺分二朱 |

二二 天保十三年（一八四二）の修復

天保十二年三月二日に発生した天保久能山地震で久能山東照宮も被害を受け、その修復は同十三年二月から開始された。同年六月末に正遷宮が行なわれたが、五月時点で大工工事が大半完了したため、江戸大工は引き上げ、その後の工事は駿府大工に委ねられた。木工事が終了すると、古木の払下げが行なわれた。

【史料一〇一二】天保十三年六月十日条¹⁰¹

- 一 下会所呼出に付山本卯左衛門出役の処、御被官鶴見淳助を以書付渡。

御宮其外共地震に付、御修復諸木、背板、鼻切類御払相成候間、望の者来る十四日、十五日の内、御山下小屋場へ罷出、入札可致旨、御知行所村々へ御申渡有之候様存候、此段申達候。

寅六月

【史料一・一二十二】では、「御修復諸木、背板、鼻切類」の払下げについて、「御知行所村々」へ申し渡されている。六月十四日・十五日、御山下小屋場において、入札の予定となっている。総門番方には、下会所にて被官鶴見淳助より総門番家来山本卯左衛門に書付を渡し、報告されている。

【史料一・一二十三】天保十三年六月十五日条¹⁰²

一 昨日入札に付村方へ申付入札為致候処落札無之、今日も又入札申付落札
栗背板 杉丸太 杉板

古木の入札は予定通り六月十四日に行なわれたが落札者はなく、十五日も実施し、「栗背板・杉丸太・杉板」が落札された【史料一・一二十三】。

二二三 安政三年（一八五六）の修復

安政元年（一八五四）十一月四日、安政東海地震が起き、久能山上・山下はもちろんのこと、駿府・江尻・清水までもが大きな被害を受けた。さらに同二年十月二日には安政江戸地震が発生したため、久能山東照宮の修復は同三年二月にようやく始まり、正遷宮は同年九月下旬に行なわれた。安政の修復は、着工までに時間が掛ったことに加えて、厳しい儉約条件で行なわれた。社殿・諸施設には、古木が積極的に使用され、費用の節減を目指した。この努力によって大幅な費用節減が表向きは実現した。古木を用いるということは、工匠たちの手間を増大させ、予定以上に人員を投入せざるを得なくなり、結局は、棟梁たちが大きな損失を受けたのであった。

修復も終盤になると古木の払下げが行なわれた【史料一・一二十四】。八月十五日、「御払材木」の入札が行なわれ、その夕刻、被官大戸金右衛門から総門番家来

野々村直右衛門へ連絡があった。これは、総門番方で「御払材木」の買入希望があれば受け付けるというものであった。それを受け、即刻大工竹村与平を召し連れて向かった。大工与平によって入用の古木が検討され、その日の内に残らず屋敷へ引き取っている。

【史料一・一二十四】安政三年八月十五日¹⁰³

一 今日下会所御払材木入札相済候に付、夕刻、大戸金右衛門より望有之候はば参見候様、直右衛門迄申来候に付、即刻与平召連罷越番附に認取持参致、右の分宜候はば相求可申、此内不用の品は相除可申、いづれ入用の品は明朝参、引受可申旨申聞。

一 此度下会所の御払木、同日不残屋敷へ引取。

一、脊枚類、松杉檜樅 六株 代百六十一匁六分八厘

一、大丸太 杉三四間打交 廿四本 代百四十四匁

一、小丸太 壹株 代三十二匁

一、杭丸太 杉四尺五寸、百本、五尺位一本、四割位太きもの有之 壹株 代廿五匁八分

一、角物 杉松檜樅、一間より九尺位打交、敷居鴨居に可成もの多 壹株 代廿一匁五分

ベ三百八十四匁七分八厘

此金六両一分二朱と二匁二分八厘

但此上二割増にて引取

右取入候御払板一覽の処、下料の物大丸太抔延よきは三間位五寸角位に成、短きも二間又は二間半、余程太き丸太も有之。尤何れも杉にて檜は無之。

大丸太の長いものは三間位で五寸角を取ることができ、短いものも二・二間半あり、太い丸太も含まれるが、何れも杉で檜はなかった。これらを二割増しで買い

入れている。

九月十二日には、「諸木背板木切類」の払下げについて「御知行村々」通達された。【史料一―二十五】。

【史料一―二十五】安政三年九月十二日条¹⁰⁴

御宮向其外共地震損御普請御修復に付、諸木背板木切類御払相成候間、望の者、来十五日より小屋場へ罷出入札可致、尤即日開札の積有之候間、早朝より罷出候様、此段御知行村々へ御申渡有之候様存候此段申達候

九月十二日

内容は、九月十五日に小屋場で古木の入札を行ない、即日開札する予定であるため、希望者は早朝に集合するようというものである。これについても、天保十三年の修復時と同様に、下会所から「御知行村々」へ直接通達あり、総門番方へも書面にて通知された。

そして九月二十四度目の古木払下げが行なわれた【史料一―二十六】。

【史料一―二十六】安政三年九月二十日条¹⁰⁵

一 竹村与平へ申付、此程上小屋御払に付、品々入用の品買入相成、尤受負人手代伊助と申もの、与平懇意にて右のものへ引合、左の品々取入。

一、丸竹 七八木結より二十木結迄 三十把

一、幅五寸六寸にて五分枚 二十八把

代三十三匁七分五厘

一、五寸角杉柱長一丈 十二本

代三十六匁

一、長丸太 百本

代二両二分

代四両二分 七分五厘

右の通引取屋敷迄相廻、右の外照久寺並石藏院下々住居仮小屋の買入も、右伊助へ与平より相談候処、未明不申候間、追て世話致可申聞約束致置候。

但御払木品最初御払口は只焚物に相成候位のものにて用立不申、八月十五日二度目御払の節多分に相求、三度目九月十五日御払の品も用立候品無之不相求候事。

上小屋の古木の内、使用可能なものについて総門番方も購入を希望している。やはり大工竹村与平に古木の選定を任せている。大工与平は「受負人手代伊助」と懇意であり、上記の品々を買取り、屋敷まで引取っている。さらに作事奉行代旅宿照久寺と目付代旅宿石藏院仮小屋等の古木の買入入れについても、受負人伊助へ大工与平から相談し、同様に便宜を図ってもらう約束をしている。

この時点で三度払下げが行なわれており、最初の古木は「焚物」にしかならないようなもので、二度目の八月十五日には古木を多分に買い取っている。三度目の九月十五日の払下げは使用できるものがなく見送り、四度目の今回（九月二十日）は、丸竹、板、角柱、長丸太を買い取ることができた。

先日約束済の、照久寺小屋及び石藏院湯殿の買入れが九月二十八日に行なわれた【史料一―二十七】。

【史料一―二十七】安政三年九月二十八日条¹⁰⁶

一 此度照久寺小屋四間半、石藏院湯殿ノ十九間、右一間一分の割、四両三分二朱と八十六文に談相整、是は受負人と与平懇意ゆへ与平より為談相整、石藏院方は一体御作事下奉行生田丈助被逢候処、此方より申込有之に付、中間部屋計被取入候由、是も一間一分の割合の由、右小屋取払候処木品左の通。

一、杉四分板 五十四坪

一、屋根板 五十把

一、杉丸柱 四十八本

一、桁 三間より六尺迄 廿四本

一、中貫 二間より一間迄 五十丁

一、杉二つ割 二間六尺 九尺 三十六本

一、明り障子 二本

一、敷居鴨居 六丁

一、厚板 馬屋敷板 十枚

外に窓、刀懸の類

右の通に取入相成、照久寺地坪、十四坪七合五勺

仮建家湯殿共三箇所、戸障子十六本、

石蔵院地坪四坪五合

坪数 十九坪七合五勺、但一坪銀十五匁づつ

右懸合骨折候に付、受負世話人へ百疋、与平へ百疋差遣す。

受負人伊助と大工与平が相談のうえ、買入れ金額が決まった。石蔵院方は、作事下奉行生田丈助と逢ったが、総門番方から申し込みがあるため、中間部屋のみを買入れとなった。総門番方は、受負人伊助と大工与平に謝礼として百疋ずつ遣わしている。

【史料一―丁十八】安政三年九月三十日条（資料二十九より抜粋）

一、山本卯左衛門、伝聞

一、德音院へ被下と相成候足代丸太、是は御本社 of 足代也。一本三匁の御買上の処、御山上げ下げ二本一人持にて一本一匁にも払に無之ては引合不申故買人無之由。

一、野々村直右衛門、伝聞

上下普請小屋前々五両位にて落札の処、当八月の大荒にて望人多く、買人よりせり上廿五両の御払相成候由、且又本多豊前殿仮番所受負方へ払にて三分の払に候由、是は定直段受負引取候由。

【史料一―丁十八】は、本社の足代丸太を拝領した別当德音院が、それを払下げるといふものである。しかし一本当たり三匁で買い取ったとしても、山の上げ下げは一人二本持ちで一匁を支払うと引き合わない。そのため、買手が付かない状態であつたことがわかる。

安政期の修復の払下げについては、以前よりも希望者が多く、買入金額も高額な場合もあつたようだ。上下普請小屋の場合、これまで五両位で落札していたところ、安政三年八月の大風雨によつて希望者が多く、二十五両で落札したという。

以上から、安政期の修復の際は山内でも資材不足で、社殿以外の建物に関しては自ら修復を行なうしかなかった。そのため「古木」の必要性は高かつた。古木の入札には被官が関与しており、また、総門番方が古木を購入する際には、大工竹村与平に古木の選定及び購入を任せていた。この大工与平と懇意の受負人伊助の存在が総門番方にとって重要であつたといえる。

久能山東照宮において古木が拝領されたのは、基本的に別当德音院のみであつた。古木の払下げは入札で行なわれ、別当德音院から総門番を通じて知行所へ通達されていた場合と、被官から知行所及び総門番等へ通達した場合があつたことがわかつた。後者の払下げには、「受負人」が存在している。また地震などによつて建造物等の被害が広範囲に及ぶ場合は、何れの場所でも古木の必需性が高かつたといえる。

第三項 久能山東照宮における修復関係者の旅宿

久能山東照宮の主要な修復は、幕府の公儀作事として行なわれた。修復のたびに役人や工匠たちが久能山へ派遣され、期間中は久能山周辺に滞在した。彼らの滞在场所として久能山下の根古屋村、安居村にある寺院と民家が割り当てられた。また修復関係者と周辺の村々に対して、相互に問題が生じないよう、そして修復に支障を来さないよう、御触れが出された。

一 旅宿の整備

久能山東照宮の天保四年（一八三三）・天保十三年（一八四二）・安政三年（一八五六）の修復時の様子を主に記した「御修復公私日録」から修復関係者の旅宿について窺い知ることができる。中でも旅宿となった照久寺と石蔵院については、具体的にどのように整備が行なわれたのか記録に見ることができる。両寺院を取り上げ、旅宿の整備に関して考察する。

照久寺は、寛保年中（一七四一～三）の修復から旅宿として使用され、天保四年から安政三年の修復まで作事奉行の旅宿となった。同じく石蔵院も目付の旅宿として使用されている。

これらの旅宿の統括をしていたのは、別当德音院だった。旅宿として修復関係者に引き渡す前に、先ず德音院へ引き渡された。また事前に絵図面を用いて、旅宿として引渡す部分を示し、増築または仮設が必要な部分が検討された。特に、坪数の変更があるのかどうかは必ず確認されている。つまり、使用に支障を来す場合があるためである。照久寺の場合、基本的な建物は寛保年中から天保十三年までの間変更はないが、天保四年の修復以前に納戸の方へ八畳増築していた。そこで、この増築部分が問題となった。天保四年の修復の際、八畳増築部分は、当初旅宿の対象外として扱われていた。しかし、作事奉行川井長門守の依頼により、増築部分も旅宿として使用することとなった。その経験から、天保十三年の修復

【表 1-2-3】照久寺・石蔵院旅宿割り

	照久寺	石蔵院
天保 4 年	作事奉行 川井長門守	目付 大久保讃岐守
天保 13 年	作事奉行代 岩瀬内記 →中川勘三郎	目付代 山口勘兵衛
安政 3 年	作事奉行代 松本十郎兵衛	目付代 松平弾正

時、照久寺側が、増築部分も旅宿に必要なだと判断して引渡している。以上のように既存建物のみでは旅宿として不足であるため、仮設建築物等の設置及び整備が行なわれた。一番の問題は、誰が費用を負担するかであった。

【史料一―丁十九】安政三年九月二十八日条¹⁰⁷
天保四巳年御作事奉行川井長門守照久寺旅宿の節は、出立の節宿料銀十枚湯殿上下二ヶ所被災、石蔵院方大久保讃岐守は宿料同様、外に畳桶類被災候由。但此節迄は湯殿、中間部屋、馬屋等御作事奉行御目付代自分入用にて仮立被致候処、天保十三寅年御目付岩瀬内記日光の例申立、公儀御入用にて湯殿其外都て仮立被相願、夫より以来此度も公儀御入用にて出来故取払に相成、寺へは不被下相成候事。

【史料一―丁十九】によると、天保四年の修復時までは、湯殿、中間部屋、馬屋等の仮設は作事奉行・目付の自普請で行なわれており、旅宿を出る際に、宿料と共に仮設建築物や使用済の品々を各旅宿へ引渡していたことがわかる。天保十三年の修復になると、「尤日光表在勤の者多く候間宿坊に有之、右旅宿取繕仮物取建等、日光奉行支配向にて取繕御入用に相立候旨に御座候、」（資料三十三）と日光東照宮の例を持ち出し、仮設建築物等の費用は公儀負担とすることになった。そのため、天保四年には奉行の判断で仮設建築物等を各旅宿へ引き渡すことができたが、天保十三年は、仮設建築物は全て取り払うことになった。その後に起きた安政大地震の被害は甚大なものであった。江戸も被害を受け、同時期に復旧作業

を行なっていたため、地震から一年以上経つてようやく久能山東照宮の修復に取り掛かる準備が始められた。旅宿として使用される両寺院は地震により大破し、少々ずつ復旧は行なわれたが、不十分な部分も多く残っていた。そこで仮設の建築につて、「仕様の儀は精々省略、可成雨露を凌候にて丸柱羽目杉板にて削り立不申其儘相用、囲等は葭簀にて出来の積りに御座候。」（資料三十三）と簡略な仕様で、天保十三年の例を取り上げて公儀費用での建築を願ひ出ている。結果的に安政三年の修復も公儀負担になった。

二 旅宿割り

修復関係者の旅宿割りにも別当德音院が関与していた。天保四年・天保十三年・安政三年の修復において、作事奉行が照久寺、目付が石蔵院を旅宿にしていることは、先に述べた通りであるが、それ以前の「久能山 御宮御普請の節、御奉行御旅宿先」が「久能御修復御暇参府之記」¹⁰⁸に記録されており、【表一―一―四】にまとめた。

【表 1-2-4】久能御宮普請奉行旅宿先

年代	普請奉行	旅宿
1704 宝永元年	鈴木伊兵衛（小普請奉行）	德音院長屋
	曲淵伊左衛門（小普請奉行）	
	太田撰津守（手伝奉行）	
1707 宝永4年	間宮播磨守（小普請奉行）	不明
	横山藤兵衛	
1713 正徳3年	土岐縫殿介	德音院長屋
	松浦伊右衛門	
1716 正徳6年	村瀬伊左衛門	駿府
	小林又左衛門	
1721 享保6年	天野兵八郎	德音院長屋
	近藤平八郎	
1723 享保8年	小長谷喜八郎	德音院長屋
	松浦与次郎	
1726 享保11年	大岡三次郎	御殿場小屋詰
	松平兵庫	
1728 享保13年	岩瀬吉左衛門	御殿場小屋詰
	曲淵市太夫	
1732 享保17年	松平帯刀	御殿場小屋詰
	多賀外記	
1735 享保20年	榊原一郎右衛門	駿府
	小沢彦太夫	
1736 享保21年	高井五兵衛	御殿場小屋詰
	寛平三郎	
1742 寛保2年	井戸伊勢守（作事奉行）	照久寺
	稲生七郎右衛門（目付）	
		石蔵院

作事奉行と目付の旅宿に両寺院が充てられるようになったのは、寛保二年（一七四二）の修復からであることが、「久能御修復御暇参府之記」からも確認できる。それ以前は德音院長屋や「德音院御扣の内、御殿場に御小屋懸右の場所に被成御座候。」とあるように御殿場的小屋、「駿府より御通被成御座候」駿府からの通いの場合もあったことがわかる。

天保十三年の旅宿割りの例では、照久寺と石蔵院ともに、各奉行のほか上下二十四人ずつが割り振られた。しかし席順によつては一軒に複数の役職の者が滞在する場合もあった【史料一―一―二十】。

【史料一―一―二十】天保十三年二月二十七日条¹⁰⁹

一 久能山御宮其他地震に付御修復御用罷越候旅宿割

岩瀬内記 上下廿四人 山口勘兵衛 上下廿四人

老軒、御勘定組頭 老軒 同吟味方改役出役

都築金三郎 上下十人 吉田条太郎 上下七人

同 御勘定 同 御大工頭

渡辺石郎 同七人 村上与五郎 同八人

老軒、御作事下奉行 老軒 御作事下奉行

今井右左衛門 同七人 安西久次郎 同七人

同 御被官 同 御被官助

赤城新右衛門 同五人 鶴見淳助 同四人

（後略）

このような状況の中、旅宿の引き替えを申し出る者もあった。【史料一―一―二十一】から、作事下奉行今井右左衛門が手狭なことを理由に德音院代へ旅宿の引き替えを願ひ出ている。

【史料一―一二二一】天保十三年三月二日条¹¹⁰

一 今井右左橋旅宿手狭にて難儀に付引替の儀頼候段、院代を以申聞候処、右は席順に相渡候儀、外には何分旅宿無之旨及断候処、権右衛門宅の儀懸合候処、是は御賄炊出御代官へ追て引渡候間難相渡旨申述候処、段々懸合有之、鶴見淳助を以、左候はば炊出の節は外へ引退可申、尤其旨は御代官へ右左橋方より直懸合致、決て此方へ心配かけ申間敷旨申聞候、左候えは故障無之、権右衛門引渡可申旨相答。尚又院代へ罷越其旨溝守懸合弥右に治定、院代立合引渡し候旨談整候由。

この時点では旅宿割りが決定していたため、変更は認められなかったが、交渉の末、作事下奉行今井右左橋は旅宿を確保することができている。その旅宿に上がったのは、賄炊出代官が炊出しを行なう権右衛門宅だった。炊出し時は退出することを条件に、作事下奉行が直接代官へ掛け合ったところ、迷惑を掛けないことを条件に交渉が成立している。旅宿引渡しの際は德音院代が立ち会うことになった。ところが、翌日の【史料一―一二二二】によると、

【史料一―一二二二】天保十三年三月三日条¹¹¹

一 今井右左橋旅宿の儀権右衛門方治定の処、同人孫死去未服中の趣に付其段申聞候処、左候はば見合可申趣にて院代相對にて御殿地百姓則神宝方旅宿に相成候処、此宿神宝方着迄借用致度趣にて談整候趣故、右は院代相對の事故此方にては最初引渡候百姓家右左橋旅宿と心得候段申述承置、

権右衛門宅は忌中のため、神宝方の旅宿となる農家を、神宝方の到着まで作事下奉行の旅宿にすることになった。このように、旅宿割りは、修復関係者の都合と宿を提供する寺院や農家側の都合があり、その調整役を務めていたのが別当德音

院であった。

修復役人の旅宿の宿代はどのように支払われていたのだろうか。安政三年の修復の際に、村役人に報告を求め、宿料割書付が提出されている【史料一―一二二二三】。

【史料一―一二二三】安政三年十月三日条¹¹²

一 此度御修復に付、御役人旅宿手宛方如何の振合に候哉、村役人へ相尋候処、其筋より村役人へ相渡候宿料割書付差出。

根古屋村

安居村

名主へ

宿代の覺

壹ヶ月

一、金貳百疋 御勘定組頭

一、同百五十疋 御大工頭

一、同百疋づつ 吟味方改役 御勘定

一、同三朱づつ 御被官同格 勘定役仮役 御被官 御徒目付

一、銀五匁づつ 吟味方下役 御普請役

但合旅宿に付如此

一、金貳朱づつ 御勘定役同格 小役同格

但一人旅宿に如此 定普請同心

一、銀五匁づつ 手代

一、同三匁五分五厘づつ 御小人目付、定普請同心、組頭定普請同心

右の通銘々旅宿へ相渡候の事

但、十五日後着、並十五日前立、払は半月

(中略)

一 寺社奉行安藤長門守殿よりは下宿十軒へ金五百足賜候由。

宿代は一ヶ月単位の支払いで、十五日以降に到着並びに十五日前に出立の場合は、半月払いであった。勘定組頭は金二百足、大工頭は金百五十足、作事下奉行は金百足、普請役は銀五匁とあるが、旅宿一軒当たりの人数や位によって宿代の算出方法が異なっている。寺社奉行は、下宿十軒へ金五百足を支払っている。

また、御宮遷宮の際には、公儀名代・門主名代・役人等が久能山に滞在することになり、その宿坊割りも行なわれている。天保四年の正遷宮の場合は【史料一・二一二十四】、

【史料一・二一二十四】天保四年六月二十三日条¹¹³

一 六月廿三日、正 遷宮の節、宿坊御別当所へ頼込候処、左の通申来。

公儀御名代	玉泉院
御門主御名代	大寿院
寺社奉行	三明院
越中守様・駿府町奉行	林光院
御作事奉行・御目付	定智院
御固方	宝性院
御賄御代官	松岩院
御修復御役人	長円院

久能山上には坊中八ヶ院があり、各坊が宿坊として割り当てられた。

ところが、安政東海地震の際には、坊中八ヶ院は大破し、外遷宮の際、役人の旅宿とするために、倒壊した坊中八ヶ院の内、玉泉院・宝性院・大寿院・三明院の四ヶ院が先ず再建された。そして正遷宮までに定智院・林光院も完成され、六

ヶ院が宿坊として割り当てられている【史料一・二一二十五】。

【史料一・二一二十五】安政三年九月五日条¹¹⁴

覚

御宮正遷 宮の節宿坊割	
公儀御名代	玉泉院
御門主御名代	大寿院
寺社御奉行	三明院
榊原越中守・御固方	宝性院
駿府町奉行・御賄御代官	林光院
御作事奉行代・御目付代	定智院
御修復懸諸役中	
右の通り御座候	以上

これによると、公儀名代は玉泉院・門主名代は大寿院・寺社奉行は三明院というように天保四年の通りであるが、その他の役人は、先例を踏まえつつ調整が行なわれたことがわかる。

三 久能山修復と村々

久能山東照宮修復の際には、修復関係役人や諸職人等大勢の人が久能山下の村々へ出入するため、問題が起きないよう御触れが出された。

天保十三年二月末、修復の開始に合わせて、浜六ヶ村並びに東十ヶ村に久能山修復の際の御触れが通達された(資料三十四)。要点は以下の通りである。

- ・修復中は大勢が出入するため、喧嘩口論博奕は勿論、諸勝負事は一切禁止。
- ・新規の湯屋・髪結床他商売禁止
- ・御用宿は勿論、火の用心。

- ・日雇賃・請負物・商物等不相応な高値禁止。
- ・竹木その他全て諸品値上げ禁止。

・従来の商い屋共諸色値下げ。

・諸棟梁並びに職人は勿論、作事方支配向家来まで、万時現金の取引のみ。

・請売り酒屋は従来の酒屋のみ。煮売り居酒屋禁止。

・従来以外の諸品の販売禁止。

・銭相場は、駿府・江尻・清水へ承合。

・質物一切禁止。

このように、修復に乗じた商売や、金銭トラブルの原因となる事項を禁止した。

特に、根古屋村・安居村・蛇塚村については、役人呼び出し、以上の事項の他に、御用宿の者は勿論、村内の者は、役人に対する無礼な行ないや、諸職人との酒宴等交流は堅く禁じられた。

新規の湯屋・髪結床等を禁じた条項により、昨年来根古屋村にある髪結和平について問題となった(資料三十五)。髪結和平は、駿府弥勒町破風屋六兵衛の二男で、村方からの依頼によって、天保十二年の修復目論見見分の時から根古屋村で髪結をしている者である。今回の御触れによって、髪結与平の仕事は差し留められたが、役人をはじめ諸職人が差支える状況となっていた。そこで、被官へ懸け合い、髪結和平一人は従来からの髪結であるため、次のような条件を付して髪結を続けることを許された。

- ・髪結床を張らず、道具を風呂敷に包み、目立たぬよう依頼先を廻ること。
- ・弟子取り等の禁止。
- ・依怙最賃ないこと。
- ・役人旅宿へ行く際は失礼がないこと。かつ当地の雑説等はせず言葉少なく。
- ・髪結料値下げのこと。

結局、髪結和平は、髪結床を構えない出張営業を許され、髪結料については十八文となった。

諸色値下げの条項を受けて、根古屋村・安居村の商店へ値下げが通達された。この頃駿府でも一同値下げが行なわれており、根古屋村の李兵衛・万屋権右衛門他より、諸色値下げ金額と実際の売上金額について報告された(資料三十六)。

根古屋村李兵衛によって、酒・豆腐・炭・醤油等の値段に関する書付が五月に提出され、これによると並酒は、一升に付、百四十文のところ百三十文に値下げしている。六月には、並酒一升に付、百二十四文とさらに安値となった。

この傾向は全ての商品に共通しており、根古屋村の万屋権右衛門からは、米・豆・酒・半紙・醤油・油の値段について報告されている。この他に根小屋村の利吉・糸右衛門・長五郎・彦次郎、安居村の栄蔵・甚兵衛からも同様に書付が提出された。

以上のように、久能山修復によって、久能山下は単に修復関係者が増えるだけではなく、御触れを遵守させ様々な対応を取っていたことがわかる。

久能山東照宮は、家康の遺言通り大工棟梁中井大和守正清によって建立され、寛永期に五重塔の造立、石造宝塔の建立、諸堂社は銅瓦葺屋根となり、正保三年に山内の諸施設が整った。その後の主要な修営は幕府作事方・小普請方によって幕末まで行なわれ、棟札には記されない駿府棟梁の参画も明らかになった。久能山は四度の大地震に見舞われるが、天保久能山地震・安政東海地震の被害による修復は、幕府の財政が逼迫する中で行なわれ、修復方針として費用節減と耐用年数の長期化が掲げられた。

天保十三年の修復から古木の払下げが行なわれ、安政の修復では古木も積極的に活用されたが、古木の再利用は、工匠たちの手間を増大させる結果となった。

久能山修復の際には、修復役人や工匠の旅宿として久能山下の寺院と民家が割り当てられた。遷宮の際には、公儀名代・門主名代・役人衆が久能山上に滞在し、坊中八ヶ院が宿坊となっていた。旅宿・宿坊は役職で宿所が定められている。また、修復に乗じた商売や金銭トラブルが起きないよう御触れが出された。

第三節 静岡浅間神社

第一項 静岡浅間神社の修営

現在、神部神社・浅間神社・大歳御祖神社を総称して「静岡浅間神社」と呼んでいる。大歳御祖神社は、奈良時代に開かれていた安倍の市（現在の呉服町から七間町）の中にあつたが、市の衰退とともに現在地（宮ヶ崎町）に移されたものといわれ、「奈吾屋社」とも称された。神部神社は、延喜式内社で、古くから賤機山麓にあつたものと考えられ、「駿河国惣社」とされる。この二社は古くから祀られていたが、浅間神社は延喜元年（九〇一）年、醍醐天皇の勅願によって富士山本宮浅間大社より勧請したと伝えられ、「富士新宮」とも称されている。既に平安時代末にはこの三社を総称して「惣社」といつていた。境内社麓山神社は、賤機山の丘陵上にあり「山宮」と呼ばれた。境内社八千戈神社は、家康が携帯していた摩利支天を祀ったことにより、もとは「摩利支天社」といわれていた。境内社少彦神社は、「神宮司社」または「神宮寺薬師社」とも呼ばれていた¹¹⁵。

静岡浅間神社は鎌倉幕府、今川氏などに保護されたが、武田・徳川の攻防戦で臨済寺とともに焼き払われた。

徳川家康は、慶長八年（一六〇三）江戸幕府を開くと、その翌年、徳川家の祈願所として静岡浅間神社の造営を行なっている。その境内においては、猿楽や勧進能等が催され、家康も足を運び観覧していた¹¹⁶。

三代将軍徳川家光の寄進によって寛永の大造営が行なわれ、寛永十八年（一六四一）に社殿が完成された。幕府作事方大工頭木原木工允義久¹¹⁷の下、駿府の大工棟梁花村長左衛門・清右衛門、屋根葺新五郎・清左衛門が造営に参画した¹¹⁸。

その後、宝暦七年（一七五七）には諸堂社が破損し、修復料金千五百四十四両と檜六万挺が下賜されている。しかし、「当時延滞なしがたき所のみ修理すべしなり」¹¹⁹と、全てを修復するには十分なものではなかった。安永二年（一七七三）

一月十日夜、材木町からの出火によって諸堂社末社まで四十一ヶ所が類焼し¹²⁰、大歳御祖神社のみ焼失を免れたのであった。別当惣持院・社僧玄陽院も自力での修復は困難であることから、十ヶ年賦で返済することを条件に、「惣社浅間修復料溜金」から修復費用を拝借している¹²¹。翌三年、静岡浅間神社・久能山東照宮・宝台院の目論見見分が勘定組頭倉橋与四郎・勘定方普請役・作事方役人によって実施された¹²²。久能山においても「可成たけ仕様省略致、御入用相減候様申渡候間」¹²³と、儉約の状態であることが読み取れる。翌四年、久能山と宝台院の修復は行なわれるものの静岡浅間神社に関しては「御再建之儀も大造之事ニ候得は、木揃其外積方等急ニは出来致間鋪趣ニ相聞候」¹²⁴と、大規模な再建は難しく、応急的な修繕のみ行なわれた。天明八年（一七八八）十一月、片羽町から再び出火し社殿は全焼したのである¹²⁵。

十一代将軍徳川家斉の時、文化度の大造営で再建されたのが現在の社殿で、文化元年（一八〇四）から慶応元年（一八六五）まで六十余年かけて完成されたものである。

文化度大造営は、享和三年（一八〇三）閏正月、駿府城代松平信濃守・駿府町奉行牧野靱負が、設計書や見積書等を添えて幕府へ再建を上申し、享和三年（一八〇三）十二月再建が命じられたのである。費用は「浅間金」¹²⁶を貸し付けて利倍増殖を図り、その利金を充てたものである。寛政八年（一七九六）から準備が進められ、五ヶ年間で利金六千五百両が蓄えられたところで、大造営に向けて動き出したのであった。毎年交付される利金によって造営が継続的に行なう計画で、六十余年の年月をかけて社殿が完成された。

明治に入り、神仏分離によって護摩堂・鐘楼等多くの建物が撤去され、末社は境内社の八千戈神社・少彦名神社に合祀された。

昭和二十年（一九四五）の空襲で一部焼失し、現在の姿となった。

第二項 静岡浅間神社文化度造営と工匠

静岡浅間神社の文化度大造営は、駿府城代松平信濃守と駿府町奉行加藤鞆負が尽力し、寛永年間の姿をできる限り再現しようと、当時の仕様帳・図面等を取り寄せて計画が進められた。工匠は、寛永の造営を担当した駿府棟梁家の由緒を調査し、その結果、後継者に棟梁を務めさせた。諸職人も駿府近郊の者を登用する方針が示されている（資料三十七）。彫物大工は当地にいないため、信州の彫物大工に試みとして本社の彫刻のみ依頼している¹²⁷。これが立川内匠で、その後、社殿の彫刻を立川一門が手掛けることになる。また、木材に関しても、駿州黒川山並びに安倍山中・藁科山中の御林の内、立木のままの寄附が予定されている¹²⁸。再建は、文化元年（一八〇四）二月から始まり、五月には安倍山中の入島村・梅ケ島村の寄附木材の下見が、大工棟梁清右衛門他三名によって行なわれた。天保期には、梅ケ島村から母材伐出の記録が残る（第三部第一章第三節参照）。

文化度大造営がどのように順次進められていったのか。【表 1-3-1】静岡浅間神社造営年表と【表 1-3-2】同造営期間にまとめた。神部浅間両社本殿及び両社拝殿の造営から始まり、引き続き両社回廊・楼門・総門・舞殿が建立された。その後は、境内社麓山神社と大歳御祖神社の造営がほぼ併行して進められている。境内社八千戈神社・少彦名神社、宝蔵・神廐等が幕末にかけて順次整えられていった。

【表 1-3-1】静岡浅間神社社殿造営年表

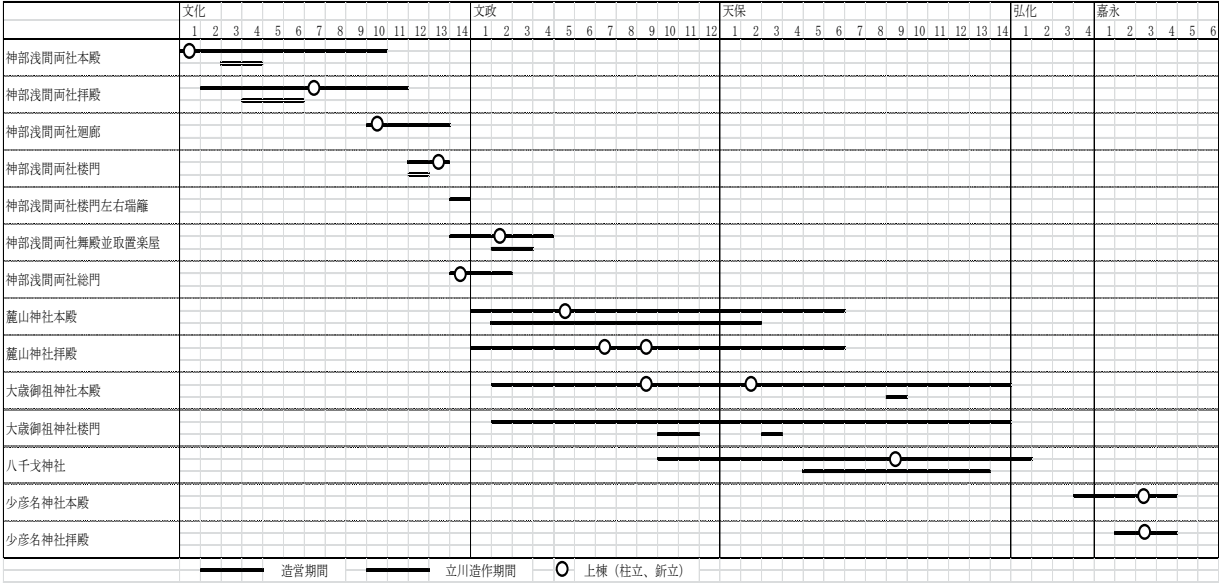
西暦	和暦	月日	社殿	
1641	寛永18	12月27日	浅間大神（浅間神社）	上棟
			惣社大神（神部神社）	上棟
			奈吾屋神社（大歳御祖神社）	上棟
			山宮神社（麓山神社）	上棟
			八千戈神社（摩利支天社）	上棟
1804	文化1	12月14日	神部浅間両社本殿	上棟
1810	文化7	4月11日	神部浅間両社拝殿	上棟
1813	文化10	3月26日	神部浅間両社廻廊	新立
1816	文化13	4月13日	神部浅間両社楼門	上棟
1817	文化14	1月	神部浅間両社総門	新立
1819	文政2	7月25日	神部浅間両社舞殿	柱立
1822	文政5	5月11日	麓山神社本殿	柱立
1824	文政7	9月14日	麓山神社拝殿	上棟
1826	文政9	5月27日	大歳御祖神社本殿	柱立
1831	天保2	3月19日	大歳御祖神社本殿	上棟
1838	天保9	12月5日	八千戈神社	上棟
1850	嘉永3	9月19日	少彦名神社	上棟
1854	嘉永7	9月13日	宝蔵	柱立
1861	万延2	2月1日	神廐	柱立

※【表 1-3-1】【表 1-3-2】は修理工事報告書等（註 115）と『神部神社・浅間神社・大歳御祖神社造営史料並同解説』（同社務所編、1966）より作成した。

※【表 1-3-1】の造営年月日は棟札等による。

※【表 1-3-2】に示した造営期間については、史料により差異が認められる。

【表 1-3-2】静岡浅間神社社殿造営期間



寛永大造宮の駿府棟梁後継者として今回登用された棟梁は、大工棟梁花村与七郎、屋根方棟梁三寺与右衛門、屋根方棟梁花村富左衛門、大工棟梁花村清右衛門の四名であった。棟札等史料から工匠を抽出し（資料三十八）、棟梁を抜粋して担当社殿一覧表【表一・二・三】を作成した。四名の棟梁によって、神部浅間両社本殿・拝殿から門・舞殿までが担当された。大工棟梁花村与七郎は、全体を把握し監理する棟梁であった（第三章参照）。信州の彫物大工立川一門の出入りや作料にも関与していたことが、『御再建場所日記』¹²⁹に認められ、三寺与右衛門と共に掛棟梁であった。花村与七郎の名が棟札に見られるのは、大歳御祖神社までであるが、慶応二年の御入用決算書¹³⁰に筆頭棟梁として名が記されている。文化から慶応の造宮において、八〜十代目の与七郎が携わったと思われる。

大工棟梁花村清右衛門は、神部浅間両社の内、廻廊に名が見られないが、拝殿と楼門造宮の狭間であったからだろうか。その後、大歳御祖神社を終えると、神部浅間両社宝蔵・神廐の建立に携わっている。

大工棟梁池田栄次郎・池田権十郎・花村源左衛門、そして左官棟梁宮嶋宗蔵は、神部浅間両社終了後から勤めている。大工棟梁池田栄次郎は、慶応二年の決算書で花村与七郎に次いで名が記されている。左官棟梁宮嶋宗蔵は、文政十三年（一八三〇）から再建掛りとなり、幕府へ提出した仕様・注文・入用積・小内訳帳等の書類の副本が「宮嶋控」¹³¹として残されている。さらに、安政の駿府城修復でも宮嶋宗蔵は積算を担当した¹³²。

屋根方棟梁でも三寺与右衛門は、神部浅間両社の一連の造宮まで勤めた。一方、屋根方棟梁の花村富左衛門は、その後も多くの社殿への関与が認められる。

静岡浅間神社の社殿の彫刻は、立川内匠（初代立川和四郎富棟¹³³と二代和四郎富昌¹³⁴）とその一門によって完成された。『御再建場所日記』に立川一門の仕事についても記録されており、神部浅間両社本殿の彫刻に始まり、本殿と唐門の彫刻が同時に進められた。文化三年六月十八日条に「彫物方内匠碁打仙人彫物、和蔵天人彫物、弟子市蔵息吹仙人彫物、当所文助、相三鷹彫物仕上げ仕事」とあ

り、彫物仕事と担当が具体的に記されている。当所の文助・相三も鷹の仕上げを行っていたようだ。また、「当地彫物方惣蔵・文助」という記述も認められる。この頃から、神部浅間両社拝殿の彫刻も始まり、拝殿は「両本社二階拝殿」と称されていたことがわかる。その後立川一門は、楼門、唯一素木造りの舞殿、大歳御祖神社、麓山神社、少彦名神社の彫刻も手掛けた。

静岡浅間神社の文化度造宮には、多数の駿府の棟梁と工匠たち、そして彫物大工立川内匠の下、その倅や弟子たちも携わったことが一部の史料から明らかになっている。今後、造宮史料のさらなる調査・分析によって、文化度造宮における工匠たちの活動実態が解明されることが期待できる。

【表 1-3-3】静岡浅間神社文化度造営社殿担当一覧表

	神部 浅間 両社 本殿	神部 浅間 両社 拝殿	神部 浅間 両社 回廊	神部 浅間 両社 楼門	神部 浅間 両社 総門	神部 浅間 両社 舞殿	麓山 神社 本殿	麓山 神社 拝殿	大歳 御祖 神社 本殿	大歳 御祖 神社 拝殿	八千 戈神 社本 殿	少彦 名神 社本 殿	神部 浅間 両社 宝蔵	神部 浅間 両社 神廐
大工棟梁花村与七郎	*1	○	○	○	○	○	○	○	○					
大工棟梁花村清右衛門	*1	○		○	○	○	○	○	○	○			○	○
大工棟梁伊藤太郎次	○	○	○	○	○	○								
大工棟梁池田栄次郎	○							○	○			○		
大工棟梁池田権十郎									○	○	○			
大工棟梁花村源左衛門												○	○	
屋根棟梁三寺与右衛門	*1	○	○	○	○	○								
屋根棟梁花村富左衛門	*1	○	○	○	○			○	○	○	○		○	
屋根棟梁花村富八							○							
屋根棟梁長次郎												○	○	
左官棟梁宮嶋宗蔵									○	○	○		○	
左官棟梁甚左衛門	○													
木挽棟梁次郎右衛門	○													
木挽棟梁左右衛門	○													
木挽棟梁正次郎												○		
日用棟梁与五兵衛	○													
日用棟梁太助	○													
日用棟梁惣正衛門	○													
日用棟梁甚右衛門	○													
日用棟梁葉山伊左衛門								○	○					
日用棟梁葉山儀左衛門									○	○				
日用棟梁五郎兵衛												○		
塗師絵大石周我	○			○	○									
石棟梁宗七	○													
石棟梁完戸善左衛門									○	○	○			
畳棟梁権右衛門	○													
鍛冶棟梁久左衛門	○													
鍛冶棟梁友右衛門												○	○	
樋棟梁惣右衛門	○													
棟梁秋蔵													○	
棟梁正平														○
棟梁勝太郎														○
棟梁新八郎														○
棟梁宗七郎														○
棟梁下山菱右衛門														○
棟梁惣左衛門														○
棟梁覚平														○
*1 棟束刻銘														
*2 絵方墨書														

駿府における主要な公儀作事として、駿府城、久能山東照宮、静岡浅間神社の建築普請活動の実態を個別に検証してきた。

駿府城に関しては、宝永大地震後の修復に駿府棟梁と工匠が参画し、駿府城の定式御用は両大工町や町方大工が勤めた。

久能山東照宮については修営の実態と組織について通覧してきた。幕府作事方と駿府棟梁の関わりや、駿府町奉行・代官の下で駿府棟梁が見分や修復見分帳の作成に関与していることが判明した。

静岡浅間神社の文化度再建は駿府城代・町奉行を奉行に、寛永度社殿を再現すべくその造営に携わった駿府棟梁の後継者が登用された。彫刻については、当地に彫刻大工が無いため諏訪の立川一門が担当している。再建費用は「浅間金」を貸付けた利金を充てて継続的に造営が行なわれ、六十余年をかけて全社殿が完成された。

以上のように駿府の工匠の公儀作事への参画が明らかになった。駿府における数々の建築普請に多数携わる駿府棟梁が判明し、彼らの個別の活動について次章で検討する。

註

- 1 黒板勝美・國史大系編集会『新訂増補國史大系 徳川実紀』第一篇、吉川弘文館、一九八一。(以下『徳川実紀』)
- 2 『徳川実紀』第一篇、慶長十一年(一六〇六)十月二十六日条。
- 3 『徳川実紀』第一篇、慶長十二年一月二十五日条「その経営を越前美濃。尾張。三河。遠江の諸大名に課せて人夫を出さしめらる。」
- 4 『徳川実紀』第一篇、慶長十二年一月二十五日条。
- 5 谷直樹「大工頭中井大和守正清と久能山東照宮二(一) 駿府城の造営」『久能山誌』静岡市、二〇一六。
- 6 『静岡県史』通史編3 近世一、静岡県、一九九六。
- 7 鈴木棠三・保田晴男『近世庶民生活史料 未刊日記集成 鈴木修理日記』三一書房、一九九七。八。(以下『鈴木修理日記』)
- 8 『鈴木修理日記』三「元禄十六年(二七〇三)八月九日条、大工頭鈴木修理の「御城廻り見分之覚」に「わらしな石」と見える。十月二十五日条の鈴木修理による駿府城内外の見分に関する覚書の中に、「原(ママ)科石性あしく相見へ申候間、丈夫向之御石垣築直候節は、直段少々高値二御座候得共、伊豆堅石二而築立可然奉存候、只今迄駿府二而遣候伊豆堅石と申候は、伊豆あわ島より出候石二而同国二而も江戸二而も遣候堅石二而は無御座候事」とある。駿府城の石垣は「原科石」(薬科石)にて築かれ、その石の性質は悪く見えるという。そこで石垣を丈夫に築き直す際には、「伊豆堅石」を用いるよう記されている。薬科川流域の石材は砂岩で、堅石におよぶ石質ではなかった。
- 9 『徳川実紀』第一篇、慶長十二年三月二十五日条。
- 10 『徳川実紀』第一篇、慶長十二年五月二十日条。
- 11 『徳川実紀』第一篇、慶長十二年五月二十三日条。
- 12 『徳川実紀』第一篇、慶長十二年六月七日条。「遠藤但馬守慶隆は駿府城造営により。信濃国木曾山に赴き木材をえらび。駿府に至て其事を勤るの処。」
- 13 『徳川実紀』第一篇、慶長十二年七月三日条。
- 14 『徳川実紀』第一篇、慶長十二年八月十五日条。
- 15 『徳川実紀』第一篇、慶長十二年十月条。
- 16 『徳川実紀』第一篇、慶長十二年十二月二十二日条。
- 17 『徳川実紀』第一篇、慶長十二年十二月二十二日条。
- 18 『徳川実紀』第一篇、慶長十二年十二月二十九日条。
- 19 『徳川実紀』第一篇、慶長十三年一月条。

²⁰『徳川実紀』第一篇、慶長十三年三月三日条。
²¹『徳川実紀』第一篇、慶長十三年三月十一日条。
²²『徳川実紀』第一篇、慶長十三年八月二十日条。「駿城七重の天守上棟あり。大工中井大和正清太刀一振。孔方千貫文。銀子八袋（廿枚づゝこれにいる）かつけられ。爵給はり守になる。其以下の諸工人皆禄かつけらる。」
²³『徳川実紀』第一篇、慶長十三年八月二十二日条。「駿城の二丸にて 御所を饗せられ猿樂あり。」
²⁴『徳川実紀』第一篇、慶長十三年条。「小堀作助政一遠江守と称し。共に従五位下に叙す。政一は駿城作事奉行を勤めたる故とぞ。」
²⁵谷直樹「大工頭中井大和守正清と久能山東照宮 二（二）駿府城の造営」
²⁶『徳川実紀』第一篇、慶長十五年十月九日条。
²⁷『静岡県史』通史編3 近世一。
²⁸『徳川実紀』第二篇、寛永十二年（一六三五）十二月二日条。
²⁹『徳川実紀』第二篇、寛永十五年六月九日条。
³⁰『徳川実紀』第二篇、元和二年（一六一六）四月十七日条。「已刻 大御所駿城の正寝に薨じ給ふ。台寿七十五。御遺命により夜中 尊体を久能山にうつしてまつる。（中略）町奉行彦坂久兵衛光正。黒柳寿学。大工中井大和守正次（ママ）。先達て山にのぼり仮殿を経営す。」
³¹『徳川実紀』第二篇、元和二年四月十九日条。「仮殿経営成る。其制は仮殿三間四方。鳥居。井垣。灯籠二を置。」
³²『徳川実紀』第二篇、元和二年四月二十二日条。「御本社いそぎ構造つかふまつるべきむねを。中井大和守正次に面命せらる。御本社は大明神造り。千木。堅魚木を備ふべし。次に拝殿。次に巫女屋。次に神供所。次に舞殿。次に御廨。次にあぜくら。次に神籬。次に楼門を建えし。新に杣木を曳べしとて。杣入のことを命ぜらる。この構造成功するまで衆人参拝を禁ずべしとて。山下に番所を設け。是を警護すべしと命ぜらる。」
³³元和二丙辰年「一、宮御造営古坊四院 大寿院・三明院・定智院・宝性院 御建立」（『久能山御造営年譜』『久能山叢書』第一編、久能山東照宮社務所、一九七〇、所収。）
³⁴「久能山御造営年譜」（資料九）には「鉋之釘打納」とあり、「駿州久能山之事」には「鉋之釘打納」とある。
³⁵「駿州久能山之事」（資料十）に「甲良出雲守宗次」と記される。
³⁶田邊泰「江戸幕府大棟梁甲良氏に就いて」『建築雑誌』六〇九、一九三六。
³⁷『徳川実紀』第三篇、寛永十六年七月二十六日条。
³⁸「五重塔棟札写」久能山東照宮文書三六七二一〜二、久能山東照宮所蔵。
³⁹田邊泰「江戸幕府大工頭木原氏に就いて」『建築雑誌』五九六、一九三五。

⁴⁰『新訂寛政重修諸家譜』続群書類従完成会、一九八〇。
⁴¹「久能山御宮堂舎造営覚」（御城内外臨時御普請覚）『静岡市史』近世史料三、静岡市役所、一九七六、所収。）
⁴²「寛永十七八辰巳兩年 御宮堂舎檜皮葺銅瓦二被 仰付之右之御宝塔新御建立其外山中所々御修復
大奉行 水野監物
奉行 竹中左京
荒尾平八郎
「釣灯籠調書」久能山東照宮文書三一〇七四（『久能山叢書』第三編、久能山東照宮社務所、一九七三、所収。）
御石の間 四箇
駿河国久野
東照大権現
寛永十八辛巳年九月十七日
「久能山御造営年譜」
「正保三丙戌年」
「護摩堂 御膳所 禰宜番所學頭及新坊四院 玉泉院・林光院・松岩院・長円院 新に御造立、古坊四院御再建 同年より翌亥年迄御普請あり 但榊原大内記照久病死に付山上御改、越中守照清依願照久家居及家族共山下へ引候様被仰出、照清急引之已後、學頭新坊古坊都合九院共に御造立、其外惣御普請あり。
「久能山御宮堂舎造営覚」
「正保三四戌亥兩年
（中略）
同年御山惣絵図木形張貫二被 仰付御大工頭相調上ル
「久能山御普請覚」久能山東照宮文書三三三九（『久能山叢書』第三篇、所収。）
「久能山御造営年譜」
「寛文十二壬子年」
一、御宮廻り土朱塗被仰付、御本社銅瓦取替候故正外遷宮有之。其外堂塔、學頭、坊中惣御修復並惣疊替被仰付、閏六月新始同年十月造畢。
奉行 榊原越中守
御被官大工正 吉本嘉右衛門
遷宮御名代 榊原越中守
「久能山御普請覚」
一、寛文十一子ノ年御宮廻り土朱塗二成ル、社堂所々修復。坊中屋台葺替、下廻り修復、社堂坊中総疊床共二新規ニ出来。

奉行 榊原越中守

吉本加右衛門

是ハ公儀御大工来ル

47 『鈴木修理日記一』

48 「久能山御普請覚」

一、天和二壬戌年御宮外廻り、うるみ朱塗被 仰付。其外御宮銅瓦等之繕。依之、正外之御遷宮有之。并諸堂房中学頭已下御修覆有之。

附総量之表替被仰付所奉行御番替近付故御神前向斗表替有之。其外相残所は翌年出来。

49 漆朱塗り。「久能山御宮堂舎造営覚」にも同様の修理の記録が記され、「御宮

外廻宇留美朱塗被 仰付付其外御宮銅瓦等繕有之ニ付正外 御遷宮有之并諸堂坊中学頭不残御修復」とある。

50 「元禄十年五月遠州舟明山榑木中勘定目録」秋鹿家文書『磐田市史』史料編

四、磐田市、一九九五、所収。

51 『鈴木修理日記』において、作事方配下の江戸の棟梁は、「棟梁」「町棟梁」が併用されており、本稿では地元棟梁と明確に区別するために「江戸町棟梁」を用いた。

52 「久能山御宮堂舎造営覚」

53 同右。

54 「久能山御普請覚」

55 「久能山御宮堂舎造営覚」

56 「雑簿 末元禄十六年申宝永元年」久能山東照宮文書三二二『久能山叢書』第三編、所収。

57 同右。

58 同右。

59 「宝永元年遷宮日時達書」久能山東照宮文書三二二一三二。

60 「宝永元年正遷宮諸職人棟梁拝礼之件」(『久能山叢書』第二篇、久能山東照宮社務所、一九七二、所収。)

61 「霧除関係 四通」久能山東照宮文書三二一〇四六、三六六一、三六六三、三一〇四二三『久能山叢書』第三編、所収。

62 「久能山御造営年譜」

63 『徳川実紀』第六篇、宝永四年(一七〇七)十月二十七日条。

64 「五重塔其他銅屋根雨洩の件」『久能山叢書』第三編、所収。

65 「御修復見分之節窺書其他」『久能山叢書』第三編、所収。

66 『徳川実紀』第九篇、宝暦六年(一七五六)三月二日条。

67 久能山同心近藤家文書二「懷中手控」(静岡県立中央図書館歴史文化情報セン

ター提供)

68 「釣灯籠調書」

69 田邊泰「江戸幕府大棟梁甲良氏に就て」

70 「式百回御神忌前御修復願記」(『久能山叢書』第三編、所収。)

71 「久能御修復御沙汰書」(『久能山叢書』第一編、所収。)

72 「天保御修復公私日録」(『久能山叢書』第一編、所収。)

73 「駿州久能山御宮諸堂社向其外共御修復出来栄見分の儀申上候書面」(『久能山叢書』第三編、所収。)

74 「久能山御宮諸堂社一之御門并御別当所八ヶ院其外御修復一件」(『久能山叢書』第三編、所収。)

75 「天保御修復公私日録」

76 「天保壬寅御修復公私日録」(『久能山叢書』第一編、所収。)

77 天保十二年(一八四一)三月六日条。

78 久能山同心近藤家文書三「久能山大地震二而御破損書取調他」(静岡県立中央図書館歴史文化情報センター提供)

「天保壬寅御修復公私日録」

天保十三年六月六日条。

一 臨時御修復中には為見廻、駿府町奉行加藤鞞負見廻登 山有之。

天保十三年六月十四日条。

一 駿府町奉行加藤鞞負月次定式見廻登 山。

天保十三年六月十九日条。

一、御修復下突合出来栄見分町奉行加藤鞞負様、御代官池田岩之丞様被仰付候趣。

79 「天保壬寅御修復公私日録」天保十二年十二月二十日条。

一 久能德音院々代修行房より在役へ文通、此度御修復御材木江戸廻の分近々着岸に付、駒越物揚場へ地所借用の懸合有之。

80 「天保壬寅御修復公私日録」天保十二年十二月十三日条。

久能 御宮へ諸家献備御灯籠、此度地震損候に付修復の儀其家々より申立の有無に不拘、新規修復共御作事方手限にて取扱、此節より石伐出等の手繰致、場所差支無之様取計可申旨越前守殿被仰渡候。

「天保壬寅御修復公私日録」

81 「天保壬寅御修復公私日録」

82 「図一・一九」の他に遷宮関係図(三) (六)『久能山叢書』第二編、所収。

83 「天保壬寅御修復公私日録」天保十三年五月三日条。

但御内々陣の御修理は神秘職の外入候事不相成、見分も両奉行の外は不相成、且両奉行も前々は見分不相成候処、安永度より見分無之ては不都合の儀も有

8 4 之に付、御門主より御差免にて両奉行計一度見分有之候由。

8 4 「天保壬寅御修復公私日録」天保十三年五月十一日条。

一 当御修復も過半御出来に付、江戸大工は来十五六日の頃迄引払、残りは

駿府大工引受候由、

8 5 「駿河国駿府町方文書」(S〇九二・二/三)町絵図、静岡県立中央図書館所蔵。

8 6 「安政丙辰地震損御修復公私日録」『久能山叢書』第一編、所収。

8 7 十一月二十七日に安政へ改元されたため、安政東海地震は正確には嘉永七年

十一月(一八五四)四日の発生である。

8 8 「安政丙辰地震損御修復公私日録」安政元年(一八五四)十一月四日条。

8 9 斎藤家文書「從御上路末代之記録」静岡市所蔵。

9 0 「安政丙辰地震損御修復公私日録」安政元年十一月十二日条。

9 1 「安政丙辰地震損御修復公私日録」安政元年十一月二十日条。

以切紙致啓上候、然ば此度駿府表地震に付、御城内外損所仮御締向、久能山

御宮其外近国取締見分爲御用、去る十五日当表へ致到着候、右に付明廿一日

其御山内、御宮向其外共爲見分、拙者并支配向且御勘定方共別紙名面の通罷

越候間、此段相達申候。右可得御意如此御座候、以上。

十一月廿日 大久保右近將監

榊原越中守様

印

「安政丙辰地震損御修復公私日録」安政元年十一月二十一日条。

一 今朝四つ時前、御目付大久保右近將監、町奉行貴志孫太夫、御勘定組頭其

外、昨日名面の通、德音院へ着、御目付は先払足輕兩人差出、德音院へ被相

揃、即登 山九つ時頃一同下 山、九つ半頃当所出立、此方にて何も取計向

無之、在役呼出尋等も無之。

9 2 「安政丙辰地震損御修復公私日録」安政三年五月十五日条。

9 3 高柳眞三・石井良助編『御触書天保集成下』岩波書店、一九五八、所収。

9 4 四五〇四 文政十一年(一八二八)八月。

9 4 国指定文化財等データベース(文化庁) 荏柄天神社本殿(重要文化財) 詳細

解説。

9 5 「天保壬寅御修復公私日録」天保十三年六月二十日条。

9 6 「安政丙辰地震損御修復公私日録」安政三年八月二十日条。

9 7 久能山総門番榊原照成が編集した『久能経営記』中の「御修復公私日録」に

久能山内の天保四年・天保十三年・安政三年の修復をめぐる記録が納められ

ている。

9 8 「天保御修復公私日録」天保四年七月八日条。

9 9 「天保壬寅御修復公私日録」天保十三年七月初日条。

天保四巳年は御仮殿御取捨物買入世話致候に付、院代へ為挨拶金二百疋差

遣。此度は右様の世話不致候え共、度々御別当へ罷越世話に成候間百疋遣。
これによると、天保十三年の修復の際には、院代は古木の世話を行なわなかつたと思われる。

1 0 0 「天保御修復公私日録」巻末。

1 0 1 「天保壬寅御修復公私日録」天保十三年六月十日条。

1 0 2 「天保壬寅御修復公私日録」天保十三年六月十五日条。

1 0 3 「安政丙辰地震損御修復公私日録」安政三年八月十五日。

1 0 4 「安政丙辰地震損御修復公私日録」安政三年九月十二日条。

1 0 5 「安政丙辰地震損御修復公私日録」安政三年九月二十日条。

1 0 6 「安政丙辰地震損御修復公私日録」安政三年九月二十八日条。

1 0 7 「安政丙辰地震損御修復公私日録」安政三年九月二十八日条。

1 0 8 「久能御修復御暇参府之記」6「寛保元辛酉年」御修復前年(旅宿懸合)、7

「寛保二壬戌年」『久能山叢書』第一編、所収。

1 0 9 「天保壬寅御修復公私日録」天保十三年二月二十七日条。

1 1 0 「天保壬寅御修復公私日録」天保十三年三月二日条。

1 1 1 「天保壬寅御修復公私日録」天保十三年三月三日条。

1 1 2 「安政丙辰地震損御修復公私日録」安政三年十月三日条。

1 1 3 「天保御修復公私日録」天保四年六月二十三日条。

1 1 4 「安政丙辰地震損御修復公私日録」安政三年九月五日条。

1 1 5 財団法人文化財建造物保存技術協会編『重要文化財 神部神社・浅間神社・

大歳御祖神社 第一期修理工事報告書』重要文化財静岡浅間神社修理委員会、

一九七七。

財団法人文化財建造物保存技術協会編『重要文化財 神部神社・浅間神社・

大歳御祖神社 第二期修理工事報告書』重要文化財静岡浅間神社修理委員会、

一九八二。

財団法人文化財建造物保存技術協会編『重要文化財 神部神社・浅間神社・

大歳御祖神社 第三期修理工事報告書』重要文化財静岡浅間神社修理委員会、

一九八八。

宝鑑出版委員会『宝鑑 静岡浅間神社の文化財・社宝目録』浅間神社御鎮座

千百年奉祝会、二〇〇一。

1 1 6 『徳川実紀』第一篇。

1 1 7 寛永棟札による(註112及び、中村高平『駿河志料二』歴史図書社、一九

六九、所収。)

1 1 8 「静岡浅間神社再建棟梁由緒」『重要文化財 神部神社・浅間神社・大歳御

祖神社 第三期修理工事報告書』所収。

1 1 9 『徳川実紀』第九篇、宝暦七年(一七五七)五月条。

- 120 高柳真三・石井良助編『御触書天明集成』岩波書店、一九五八（二二二二）
- 121 『御触書天明集成』（二二一九）
- 122 『御触書天明集成』（二二二二・二二二四・二二二五）
- 123 『御触書天明集成』（二二二四）
- 124 『御触書天明集成』（二二二二）
- 125 黒板勝美・國史大系編集会『新訂増補國史大系 続徳川実紀』第一篇、吉川弘文館、一九八二。（以下『続徳川実紀』天明八年十一月十二日条。
- 126 「浅間金」は、駿府在番・加番の奉納金・追放神主の配当高・残木材払下金等を修復料として蓄積し、利殖を図った資金である。奉納金は元文五申年（一七四〇）から修復料として蓄えられ、代官が貸付け、利殖を図ってきた『静岡市史』近世、静岡市役所、一九七九。安永二年（一七〇五）の『御触書』の中では、「惣社浅間修復料溜金」とあり、その内から修復料が貸与され、「金渡方は駿府代官へ申し渡す。」と記されている（『御触書天明集成』二二一九）。
- 127 「彫物大工之儀当地に無之信州之者ニ而御座候右ニ付為手見之ため本社斗之儀者少々之御入用ニ而御座候間試旁為彫申候様ニ御座候」（『静岡市史』近世、所収。）
- 128 「御寄附ニ相成木品之儀者駿州黒川山並安倍山中藁科山中御林之内立木之儘御寄附有之筈ニ候」（『静岡市史』近世、所収。）
- 129 文化度造管は、駿府城代・町奉行・破損奉行の下で行なわれ、破損方によって記録された現場日記で『御再建場所日記』と呼ばれている。文化元年から慶応三年までの工程や工匠の出入り、作料等、現場の状況が記録されている。『神部神社・浅間神社・大歳御祖神社造営史料並同解説』（同社務所編、一九六六）の中で立川一門に関して抜粋されている。
- 130 「駿府浅間惣社両本社其外諸社御再建出来箇所並遣払金高仕訳取調帳」（慶応二年）（『静岡市史』近世、所収）
- 131 「宮島家文書」静岡浅間神社所蔵。宮島控の造営関係帳四十六冊。
- 132 「安政三年以降安倍郡左官棟梁苗字御免願書」『静岡県史』資料編十二近世四、一九九五、所収。
- 133 信州諏訪の桶屋の塚原忠右衛門の二男で、宝暦七年（一七五七）江戸の初代立川小兵衛富房の門弟となり、建築の腕を上げると立川姓を許された。その後、諏訪に戻り、彫刻を得意とする大隅流の活動を見て、再び江戸の中沢五兵衛の下で彫刻を学んだ。明和五年（一七六八）帰郷し、小沢屋として宮大工の仕事をはじめた。諏訪大社下社秋宮等、諏訪を拠点として活動をしていたが、寛政期から遠方での仕事も手掛けるようになった。立川内匠と称する。延享元年（一七四四）〜文化四年（一八〇七）。（平井聖他『社寺彫刻―立川

134 流の建築装飾―』淡交社、一九九四。）
彫刻師として遠国でも活躍し、立川内匠を襲名する。天明三年（一七八三）〜安政三年（一八五六）。（同右）

第三章 駿府棟梁の活動

第一節 駿府棟梁と公儀作事

駿府の町は、徳川家康在城時に行なわれた慶長十三〜四年（一六〇八〜九）の町割りを基盤としており、町人地が半分近くを占めていた。その中には、職業を表す町名（職人町）が在り、大工や木挽の集住の形態が見られた（第一部第一章参照）。駿府の工匠たちは、久能山東照宮や駿府城・静岡浅間神社等の公儀作事にどのように関わってきたのか、駿府棟梁の活動を通じて見ていきたい。

駿府棟梁と幕府の関わりについては、幕府作事方大工頭の『鈴木修理日記』¹から、その一端を窺い知ることができる。

寛文十一年（一六七二）、久能山破損所の見分が被官吉本加右衛門によって行なわれた。「脇々江遣候ニハ棟梁入候得共、駿府ニ居申候棟梁つかひ候様ニ可仕候、左候得ば、御伝馬も不入由申上候得バ、一段之由被仰、」²これによると、久能山見分には、江戸の棟梁ではなく、伝馬が不要の駿府の棟梁を同行させるよう提案されており、駿府棟梁の存在が確認できる。

延宝二年（一六七四）には、清水の材木が上方に回漕された。この際、材木の長さが問題となった。間敷の指定がある場合は、駿府棟梁が材木を清水で切り揃え、船頭へ渡す段取りとなっている。しかし今回は、材木五本をそのまま大坂経由で京都へ運送することになった³。清水湊から江戸・大坂等各方面へ材木・石材が回漕されていたが、駿府の棟梁も含めて対応していたことがわかる。

同じ頃、駿府棟梁から幕府へ、宝台院（静岡市葵区）及び静岡浅間神社（静岡市葵区）に関する訴状が提出された。特に宝台院の修復に関しては、駿府棟梁花村長左衛門・惣棟梁・木挽中が、駿府棟梁の入札機会を大工頭鈴木修理家来まで書状をもって嘆願している⁴。その後の延宝九年（一六八二）、作事方鈴木長兵衛

（二代目鈴木修理）・被官大工河辺六左衛門により駿府・久能山の見分が行なわれた。その時彼らを迎えたのが花村長左衛門であった⁵。当時、花村長左衛門は駿府の棟梁や木挽を束ねる存在であったことが読み取れる。

遠州一宮（周智郡森町の小國神社・天宮神社）・村山浅間神社（富士宮市）の見分が、元禄九年（一六八六）、作事方によって行なわれ、翌年、三社は作事方より同時に同組織で造営が行なわれた（第二部第一章参照）。この造営は、作事方大棟梁甲良豊前宗賀の下、弟の大工棟梁甲良次郎左衛門を筆頭に、駿府棟梁花村与七郎が続き、江戸町棟梁松井八郎左衛門も三社に携わった。遠州一宮の造営においては、さらに六名の棟梁と遠州一宮の大工棟梁高木助右衛門が参画している。このように駿府棟梁花村与七郎の役割は駿河に留まらず、遠江の公儀作事にも関与していたことが明らかである。

元禄十六年（一七〇三）、久能山破損所の見分が行なわれることになった。被官増田清右衛門・坂本七左衛門の内一人に、作事方大棟梁甲良豊前宗員を差し添えて、久能山へ派遣するというものである。今回は、江戸の町棟梁を召連れず、駿府の棟梁花村与七郎以下の者を同行させるよう指示されている【史料一三二一】。

【史料一三二一】『鈴木修理日記三』元禄十六年一月二十九日条

覚

御被官 増田清右衛門
同 坂本七左衛門

右之内老入ニ、大棟梁甲良豊前被差添、久能江可被差遣候哉、何も服穢無御座候、町棟梁義は此度被遣候ニ及間敷候哉、駿府ニ罷有候棟梁花村与七已下之者共召遣申候様ニ可仕候、毎々其通ニ御座候。

正月廿九日

鈴木修理

その後、三月中旬に小普請奉行曲淵伊左衛門と鈴木伊兵衛が久能山の見分を命じられ、三月二十一日に久能山に到着して見分を実施した⁹。八月二十八日、久能山修復の手伝奉行に太田撰津守、小普請奉行曲淵伊左衛門、鈴木伊兵衛が任じられた⁹。修復の下拵えは柳原小屋（江戸）で行ない、鉦始めは九月二十七日となった¹⁰。三月の見分に同行した小普請方大工棟梁大谷甲斐がこの度病気のため、同じ小普請方の大工棟梁村松淡路が棟梁の代わりを務めることになった¹¹。実際の修復は小普請方が担当することになったため、駿府棟梁花村与七郎から、幾許でも修復御用を勤めさせて欲しい旨の要望があり、それを受けて大工頭鈴木修理長頼が参加を要請している【史料一三二二】。

【史料一三二二】『鈴木修理日記三』元禄十六年十月二十五日条

覚

一此度、駿州久能御宮御修復ニ付、駿府ニ罷在候大工棟梁花村与七郎儀、権現様御他界之以後、御宮御建立之節より、毎度御普請之砌、御用被仰付仕来候間、此度も少分ニ而も小普請方棟梁共ニ被差加、御用相達候様ニ被仰付被下候様ニと、願ニ罷下り候間、此旨被仰上、伊左衛門殿江被仰達、相加里御用 達候様ニ被仰付可被下候、尤与七郎儀、御城中・久能御用共、只今ハ壹人ニ 而相達申候、其外並棟梁・木挽も御座候、是共ニ此度少分ニ而も御用被仰付候様ニと奉存候、委細は別紙ニ申上候、以上。

十月廿五日 鈴木修理

覚

花村与七郎
並棟梁 八人
木挽 三人
右之者共、権現様駿府御入国之砌より、御城中其外御用相達申候間、此度

駿州久能御宮之儀、小普請棟梁ニ被指加、少分之儀ニ而も御用被仰付被下候様ニ奉願候、取分御宮之義は、祖父花村長左衛門、御建立之節、大工棟梁ニ而御宮御普請仕、夫より代々外之者不相加、御宮大工同前ニ被仰付、相達申候、

十月廿五日

鈴木修理

以上。

これによると、駿府の大工棟梁花村与七郎は、徳川家康薨去以後、久能山東照宮建立の時から普請の度に御用を勤めてきた。この度も少しでも小普請方棟梁と共に修復御用を勤めさせて欲しいということである。与七郎は、駿府城中・久能御用共に、現在は一人で勤めているが、駿府には家康駿府入国時より駿府城他の御用を勤めてきた並棟梁八人と木挽三人がおり、彼らの参入も嘆願している。

この駿府の並棟梁・木挽の存在は、同年の鈴木修理による江戸から五畿内寺社までの見分の条に確認できる。八月八日、鈴木修理が「駿府伝馬町問屋望月治右衛門所着、与七郎父子・棟梁・木挽共ニ出ル。」¹²とある。また、鈴木修理の五畿内寺社等見分の旅程が日記に記録されている。

【史料一三二三】『鈴木修理日記三』元禄十六年十月朔日条

八月八日 雨天 駿府着

花村与七郎

同長左衛門

棟梁 五兵衛

同 清右衛門

同 長右衛門

同 孫右衛門

同 安右衛門

木挽 太左衛門

同 五右衛門
同 十左衛門

八月九日 雨天、巳刻より霽 駿府逗留

焼鮎一籠 花村与七郎

扇子一箱 同長左衛門

(中略)

塩鮎一箱 棟梁木挽八人持参

(中略)

十日 霽 駿府逗留

同 (見廻) 花村与七郎

【史料一三二三】によると、鈴木修理の駿府到着を迎えたのは、花村与七郎・同長左衛門、棟梁五兵衛・清右衛門・長右衛門・孫右衛門・安右衛門の五人と木挽太左衛門・五右衛門・十左衛門の三人であつたことが判明する。駿府での見分箇所は、駿府城内外¹³、二日目に八幡村八幡宮・蓮永寺・臨濟寺・静岡浅間神社および同所の薬師堂・宝台院であつた¹⁴。駿府城内外の見分では、石垣についても指摘しており、特に使用石材について「伊豆あわ島石」ではなく「伊豆堅石」を用いるよう指図している(第三部第二章参照)。

宝永二年(一七〇五)、久能山東照宮の修復が完了した後、久能御宮の霧除の設置が行なわれた。小普請奉行曲淵越前守より駿府棟梁花村与七郎も立ち会うよう指示があり、江戸から大工・肝煎・鉄鍛冶が久能へ到着すると与七郎立会いの下、霧除の作業が進められた(第一部第二章第二節参照)。このような仮設的な作業は、江戸から小普請方棟梁を派遣するのではなく、駿府棟梁がその役割を担ったことがわかる。

また、幕府によって各棟梁の職務状況や各地の大工・木挽作料・飯米の調査も行なわれている。

【史料一三三四】『鈴木修理日記三』元禄十年四月五日条

一三七登城、小三郎左衛門殿江懸御目、然処二三郎左衛門殿御申候ハ、今日豊後守殿被仰候ハ、長兵衛ハ御被官衆先規之由緒委細ニ書付、組誰々、又上方中井主水其外大坂与助・駿河花村与七郎杯之務之様子、具ニ書付、早々持参被致候様ニ、早速豊後守殿江可申上之旨被仰。

【史料一三三四】は、上方中井主水その他に大坂(山村)与助と駿河花村与七郎等の職務状況を詳細に報告するよう指示されたものである。さらに、宝永三年(一七〇六)、曲淵越前守から大工頭鈴木修理(新五兵衛)が、京都中井主水・大坂山村与助・駿河花村与七郎が在る三ヶ所の大工木挽作料・飯米について、江戸並であるかどうか調査を依頼された(資料三十九)。大工頭から各棟梁へ同様の書状が送られ、花村与七郎宛の【史料一三三五】によると、

【史料一三三五】『鈴木修理日記三』宝永三年六月三日条

一筆申入候、然ば御作事奉行衆被仰候は、其御地大工木引作料・飯米、江戸並ニ尅々五分・尅升五合ニ而候哉、請取手形、其方名判ニ而被請取候哉、焼出しも其方被致候哉、委細之訳御聞被成度由、我等方より申越候様ニと被仰候間、具ニ訳書付可被指越候、恐惶謹言。

六月三日 鈴木新五兵衛

花村与七郎殿

尚々、大工木引作料・飯米請取手形、表判・裏判認様、是又書付可被指越候、以上。

江戸の作料一匁五分、飯米一升五合を示し、各地の作料・飯米とその設定理由の報告が求められている。以上からも花村与七郎は、駿府に在住する町棟梁ではなく、京都・大坂と並び駿河の作料についても関与する棟梁であつたことがわかる。

宝永四年（一七〇七）十一月四日に発生した宝永大地震によって、久能山東照宮と駿府城が被害を受け、普請奉行と小普請奉行が任命されると、翌五年一月から両所で修復が開始された。久能山は正外遷宮を行なわない修復であったが、駿府城の修築¹⁾には、幕府作事方と駿府の工匠が携わった。閏一月「駿府町棟梁組頭」花村与七郎に三百疋、棟梁に二百疋宛が与えられている。幕府作事方は、被官、勘定役、大棟梁甲良豊前宗員、棟梁川合利兵衛・石丸仁右衛門・桑原伝八、石方亀岡石見が担当した【表1-3-1】。石塁の修築も行なわれ、丸子（静岡市駿河区）から割栗石が、伊豆から石材三千本が清水湊に到着している。五月には駿府城の修築が成り、普請所の見分が行なわれた。その際、作事方棟梁三名と花村与七郎は行動を共にしている。普請の褒美は、作事方棟梁川合利兵衛と花村与七郎が銀三枚、作事方棟梁石丸仁右衛門・桑原伝八が銀二枚であった。駿府棟梁は五百疋、小屋棟梁・壁方棟梁三百疋、屋根方棟梁・木挽方棟梁二百疋ということから、「駿府町棟梁組頭」が作事方棟梁相当であったことがわかる【表1-3-2】。

【表 1-3-1】宝永 5 年（1708）駿府城修復組織（建築関係）

被官	坂本七左衛門・内山惣右衛門
勘定役	村田茂右衛門・佐藤善助
大棟梁	甲良豊前
棟梁	川合利兵衛・石丸仁右衛門・桑原伝八
甲良豊前方肝煎	3人
石方	亀岡石見
同肝煎	3人

『静岡市史』近世、第1編第2章「次之間御張紙」より作成

【表 1-3-2】宝永 5 年（1708）駿府城修復褒賞（建築関係）

銀3枚	棟梁	川合利兵衛
銀2枚	棟梁	石丸仁右衛門・桑原伝八
300疋宛	豊前下肝煎	5人
銀3枚	駿府棟梁組頭	花村与七郎
500疋	駿府棟梁	川本仁右衛門・石川安右衛門・細井伝次郎
300疋	小屋棟梁	細井五兵衛・花村清兵衛・望月長右衛門・池田長十郎
	壁方棟梁	七右衛門・甚左衛門
200疋	屋根方棟梁	与右衛門・清左衛門
	木挽方棟梁	牧田太左衛門・西嶋十左衛門
銀3枚	木挽方棟梁	塩津五右衛門
200疋宛	小普請方手代	8人
	代官手代	5人
500疋	石方	四郎左衛門・次郎左衛門・三郎兵衛
200疋宛	石方下請負	15人
銀2枚	石方	甚右衛門（巻上下式具）
200疋	下肝煎	1人
300疋宛	小田原石方	4人
200疋宛	ちゃん方	3人
200疋	通方棟梁	長十郎・茂左衛門

『静岡市史』近世、第1編第2章「一、御普請御仕廻ニ付被下物覚」より作成

その後の駿府では、静岡浅間神社の再建が文化元年（一八〇四）から慶応二年（一八六六）まで六十余年を掛けて行なわれた。同社は、寛永十八年（一六四一）、家光によって再建されたが、安永二年（一七七三）と天明八年（一七八八）の二度の大火で全焼した。享和二年（一八〇二）、駿府城代松平信濃守・駿府町奉行牧野靱負が幕府に再建を上申し、文化元年から着手することになった。寛永年間の姿に再建するため、当時の仕様帳・図面を取り寄せて計画が進められた。もちろん工匠も優秀な棟梁を登用したいと、寛永の再建に携わった棟梁家の由緒を調査している（資料三十七）。これによって、寛永から享和まで続く棟梁家が判明する。大工棟梁花村与七郎（第二節第一項参照）を筆頭に、屋根方棟梁与右衛門、屋根方棟梁富左衛門、大工棟梁清右衛門（第二節第二項参照）の四名である。彼らは、往古より駿府城内外の「破損方本斗」を勤め、寛永年中、静岡浅間神社造営に参画した。元文二年（一七三七）から破損方御用を勤め棟梁職として続く家柄である。寛永度造営に携わったのは、大工棟梁花村長左衛門（当代与七郎の六代前）、屋根葺新五郎（当代与右衛門の四代前）、屋根葺清左衛門（当代富左衛門の六代前）、大工棟梁清右衛門（当代清右衛門の五代前で、元祖清右衛門）であった。文化度造営は、神部浅間両社本殿・拝殿・廻廊・門・舞殿の棟梁を彼らが勤めている。ひじょうに厳しい財政状況で行なう再建であるため、棟梁や諸職人は、なるべく駿府並びに近郊の者を登用する方針であった。結果、彫刻大工信州立川一門を除き、すべて駿府の棟梁によって再建が進められた（第一部第二章第三節参照）。

駿府の工匠及び駿府棟梁花村家の活動を【表一三三四】にまとめた。久能山東照宮に関しては、明和・天保・安政期の修復に駿府の棟梁が関与している。

明和二年（一七六五）の修復では、駿府棟梁花村清右衛門・海野佐右衛門・牧田定次郎の三名が幕府作事方に参画している。

天保四年（一八三三）の修復では、完成前に駿府町奉行および代官によって出来栄見分が行なわれ、「修復見分帳」が作成された。それを担ったのが棟梁宗蔵・

棟梁権十郎であった。天保十二年（一八四二）の天保久能山地震によって久能山東照宮も被害を受けた。その破損箇所の見分が使番と駿府町奉行によって行なわれた。その見分には、駿府町奉行与力に加え、駿府石方棟梁善左衛門・左官方棟梁宗蔵も同行している。彼らは駿府町奉行の見分に関わる業務を担っていたと推察される。

天保十三年、作事方によって修復が行なわれ、そこには駿府棟梁花村源左衛門・花村清右衛門・池田栄次郎が関与している。この修復では、大工工事が過半終了すると江戸大工は引き上げ、その後完成まで駿府大工が担当した。作事方大棟梁辻内近江の下、駿府棟梁の役割も大きかったと考えられる。

安政東海地震後の安政三年（一八五六）の修復では、駿府棟梁花村与七郎および、先の修復に携わった花村清右衛門・池田栄次郎の名が確認できる。

彼らの多くは、文化元年から静岡浅間神社再建にも携わっていた【表一三三三】。

【表 1-3-3】久能山東照宮・静岡浅間神社担当年表

	大工棟梁					左官方棟梁宮嶋宗蔵	年代 (棟札等による)		
	花村与七郎	花村清右衛門	花村源左衛門	池田栄次郎	池田権十郎				
久能山東照宮		○					明和2	1765	修復
両社本殿	○	○		○（肝煎）			文化元	1804	上棟
両社拝殿	○	○					文化7	1810	上棟
回廊	○						文化10	1813	新立
楼門	○	○					文化13	1816	上棟
総門	○	○					文化14	1817	新立
舞殿	○	○					文政2	1819	柱建
麓山本殿	○	○					文政5	1822	柱建
麓山拝殿	○	○		○			文政7	1824	上棟
大歳御祖本殿	○	○		○			文政9	1826	柱建
〃 本殿・拝殿		○			○	○	天保2	1831	上棟
久能山東照宮					●	●	天保4	1833	見分帳
八千戈本殿			○		○	○	天保9	1838	上棟
久能山東照宮						●	天保12	1841	見分
久能山東照宮		○	○	○			天保13	1842	修復
少彦名本殿			○	○			嘉永3	1850	上棟
宝蔵		○				○	嘉永7	1854	柱建
久能山東照宮	○	○		○			安政3	1856	修復
神厩舎		○					万延2	1861	柱建

(久能山東照宮棟梁のみ抜粋)

【表 1-3-4】駿府の工匠及び駿府棟梁花村与七郎家年表

西暦	和暦	月	事 項	駿府棟梁花村家	駿府工匠	史料
1612	慶長17年		箱根権現社・曾我社建立（中井正清）	初代 長左衛門		駿河志料
1614	慶長19年		大坂の陣	初代 長左衛門		駿河志料
1615	元和元年		破船没	初代 長左衛門		駿河志料
1616	元和2年		久能山東照宮造営		長左衛門	修理日記
			江戸で没	2代 長左衛門		駿河志料
1632	寛永9年～		駿府城内外修復拜命（大工頭鈴木近江より）	3代 長左衛門		駿河志料
1641	寛永18年		静岡浅間神社再建	3代 長左衛門	屋根葺 新五郎・清左衛門 大工棟梁 清右衛門	市史近世
1671	寛文11年		宝台院御用駿府棟梁共訴状		駿府棟梁共	修理日記
			駿府棟梁共訴状並びに浅間宮の書付		駿府棟梁共	修理日記
			久能破損所見分に駿府棟梁同行の案		駿府棟梁	修理日記
1674	延宝2年	4月	静岡浅間神社 奈吾屋社石鳥居寸法		駿府棟梁共方	修理日記
		6月	清水材木5本 大坂經由京都へ廻す		駿府棟梁	修理日記
1676	延宝4年	7月	宝台院破損見分帳写	3代 長左衛門	惣棟梁・惣木挽方	修理日記
1681	延宝9年	2月	久能御宮破損所見分	3代 長左衛門		修理日記
1697	元禄10年	4月	京都中井・大坂山村・駿河与七郎職務状況調査	4代 与七郎		修理日記
		9月	村山浅間本地堂大棟梁諸末社造営		与七郎	棟札写1
		12月	小國神社修営		与七郎	棟札写2
		12月	天宮神社修営		与七郎	棟札
1703	元禄16年	1月	久能山破損所見分、甲良豊前へ与七郎以下同行		与七郎	修理日記
		8月	鈴木修理江戸より五歳内寺社見分（駿府見分）		与七郎 長左衛門	棟梁 五兵衛・清右衛門・長右衛門 ・孫右衛門・安右衛門 木挽 太左衛門・五右衛門 ・十左衛門 修理日記
		10月	久能御宮修復小普請方棟梁へ与七郎参加願		与七郎	並棟梁8人、木挽3人 修理日記
1706	宝永2年		久能御宮霧除取外		与七郎	霧除四通
1706	宝永3年	6～8月	京都中井・大坂山村・駿河与七郎へ作料調査		与七郎	修理日記
1707	宝永4年	11月4日	宝永大地震			
1708	宝永5年	閏1月	駿府城普請手伝		与七郎	棟梁
		5月	駿府城普請褒賞		与七郎	棟梁 川本仁右衛門・石川安右衛門 ・細井伝次郎 小屋棟梁 細井五兵衛・花村清兵衛 ・望月長右衛門 壁方棟梁 七右衛門・甚左衛門 木挽方棟梁 牧田太左衛門・西嶋十左衛門 ・塩津五右衛門 石方 四郎左衛門・次郎左衛門・三郎兵衛 近藤家02
1765	明和2年		久能山東照宮修復 東照宮百五十回御忌			棟梁 花村清右衛門・海野佐右衛門 牧田定次郎 近藤家02
1802	享和2年		静岡浅間神社再建申請	8代 与七郎	屋根方棟梁 与右衛門・富左衛門 大工棟梁 清右衛門	市史近世
1804	文化元年		静岡浅間神社再建	与七郎		報告書
1866	慶応2年					
1833	天保4年		久能山東照宮修復見分帳作成		棟梁 宗蔵・権十郎	出来栄見分之部
1841	天保12年		久能山東照宮見分		石方棟梁 善左衛門 左官方棟梁 宗蔵	近藤家03
1842	天保13年		久能山東照宮修復		棟梁 花村源左衛門・花村清右衛門 ・池田栄次郎	近藤家03
1856	安政3年		久能山東照宮修復		与七郎	花村清右衛門・池田栄次郎
1861	文久元年			10代 与七郎		駿河志料

【史料】駿河志料…中村高平『駿河志料一』歴史図書社、1969。修理日記…鈴木棠三・保田晴男『近世庶民生活史料 未刊日記集成 鈴木修理日記』1997～8。市史近世…『静岡市史』近世、静岡市役所、1979。棟札写1…静岡県伝統建築技術協会『史跡富士山「村山大日堂」保存修理工事報告書』富士宮市教育委員会、2015。棟札写2・棟札…静岡県伝統建築技術協会『静岡県指定有形文化財天宮神社本殿及び拝殿修理工事報告書』天宮神社、2013。霧除四通…『霧除関係 四通』『久能山叢書』第三篇、久能山東照宮社務所、1973。普請記録…『静岡市史』近世（第1編第2章「駿府御城普請記録」）。近藤家02…久能山同心近藤家文書 02「懐中手控」（静岡県立中央図書館歴史文化情報センター提供）。報告書…『神部神社・浅間神社・大歳御祖神社造営史料並同解説』神部神社・浅間神社・大歳御祖神社社務所、1966。文化財建造物保存技術協会『重要文化財神部神社浅間神社大歳御祖神社第1～3期修理工事報告書』重要文化財静岡浅間神社修理委員会、1977～1988。出来栄見分之部…「久能山御宮諸堂社一之御門并御別当所八ヶ院其外御修復一件」『久能山叢書』第三編。近藤家03…久能山同心近藤家文書 03「久能山大地震二而御破損書取調外」（静岡県立中央図書館歴史文化情報センター提供）。安政日録…「安政丙辰地震損御修復公私日録」『久能山叢書』第一編久能山東照宮社務所、1970

第二節 駿府の棟梁

第一項 駿府棟梁 花村与七郎【表一三三四】

花村家については、文久元年（一八六一）駿府浅間新宮前神主の中村高平によつて著わされた『駿河志料』¹⁶（資料四十）に見ることができる。駿府の馬場町に今川・武田時代から住む大工職の旧家であり、初代～三代目までは長左衛門、四～十代目までは与七郎を襲名した。花村長左衛門は、家康在城の時から修復等に関わり、慶長十七年（一六一二）には、中井正清と箱根権現社・曾我社の建立に携わっている。寛永九年（一六三二）三代目長左衛門は、大工頭鈴木近江から駿府城内外の修復を命じられ、静岡浅間神社の寛永の造営にも参画した。文久元年当時、十代目与七郎は大工棟梁職を継承していたと記録されている。また、同書によると、中井正清の中井屋敷が上魚町北側にあったとされ（資料四十二）、元文三年の上魚町絵図にも「北側中井主水控屋鋪」が認められる。

『鈴木修理日記三』元禄十六年十月二十五日条の久能山東照宮修復に関する記録に、「祖父花村長左衛門、御建立之節、大工棟梁ニ而御宮御普請仕、夫より代々外之者不相加、御宮大工同前ニ被仰付、相達申候、」とあり、長左衛門は久能山東照宮建立時に大工棟梁として携わり、それ以来普請の際は宮大工同然に勤めていたと記されている。与七郎についても「御城中・久能御用共、只今ハ老人ニ而相達申候、」とあるように、駿府城中・久能山東照宮の御用を一人で行なっているという記述が認められる。

文化度静岡浅間神社再建時の与七郎は八代目で、神部浅間両社本殿・拝殿の造営をはじめ主要な社殿の再建に携わった【表一三二三】。彫刻だけは、信州諏訪の彫刻大工立川一門が担当し、造営中、与七郎は工匠たちの出勤状況を把握して作料にも関与している。再建が成った慶応二年（一八六六）、花村与七郎は十代目を数えた。

第二項 大工棟梁 花村清右衛門

大工棟梁花村清右衛門家は、【史料一三三六】の「元祖大工棟梁清右衛門」の記述から代々清右衛門を襲名する棟梁家であることが判明する。

【史料一三三六】（資料三十七より抜粋）

大工棟梁 清右衛門

右清右衛門元祖大工棟梁清右衛門儀

御城外内本斗御用相勤五代以前之清右衛門儀寛永年中浅間御造営之節大工方御用相勤相続仕居候処元文二巳年より右同断棟梁職相続罷在候

清右衛門は、久能山東照宮の三度（明和・天保・安政）の修復にその名が認められ、二度（寛永・文化）の静岡浅間神社再建にも関与している。静岡浅間神社文化度造営では、大工棟梁として花村与七郎と共に、神部浅間両社・麓山神社・大歳御祖神社という主要な社殿造営に携わった。

天保十三年駿府町絵図¹⁷によると、新通大工町（下大工町）に居住していたことがわかる。「大工棟梁 清右衛門」とあり、軒役は「老軒半役」である。当時、新通大工町には大工棟梁清右衛門も含め十二人の大工が集住していた。遡って、延享四年（一七四七）に上下両大工町が発起人となって太子講を結んだ際には、下大工町の丁頭となっている（第一部第一章参照）。

第三項 大工棟梁 池田栄次郎

「久能山五重塔雛形」(寛政九年(一七九七))に「池田栄次郎控」と認められる。池田栄次郎は、その後の天保十三年(一八四二)と安政三年(一八五六)の久能山東照宮の修復にも参画しており、さらに、静岡浅間神社の文化度造営にも携わった。神部浅間両社本殿の棟札には「大工方肝煎 新通五丁目 栄次郎」とある。文政期の麓山神社拝殿と大歳御祖神社本殿の造営では、花村与七郎・花村清右衛門と共に大工棟梁として参加している。少彦名神社においては、天保十三年の久能山東照宮修復に共に携わった花村源左衛門に続き「大工棟梁栄次郎」の名が認められる。慶応二年(一八六六)の入用決算書¹⁸には、「棟梁花村与七郎」に続き「同池田栄次郎外十四名略」と記されていることから、文政期から幕末にかけて活躍した大工棟梁であったことが窺える。

『静岡市史編纂資料』¹⁹によると池田栄次郎は呉服町二丁目に居住する大工の棟梁である。天明七年(一七八七)には江戸へ登城し、大歳御祖神社・久能山東照宮・宝台院・本覚寺の造営に携わったと記録されている。『静岡市史編纂資料』発行当時(一九二七)、町絵図や久能山五重塔・代官屋敷・町奉行屋敷等の設計図を所蔵していたということからも、江戸後期から池田栄次郎を襲名し、近代には荒物商を営みつつも大工として活躍した旧家であることが窺える。

第四項 左官方棟梁 宮嶋宗蔵

左官方棟梁宮嶋宗蔵は、天保四年(一八三三)、大工棟梁池田権十郎と共に駿府町奉行・代官の下、久能山東照宮修復の出来栄えを記録した「修復見分帳」の作成に携わっている。彼らは天保二年に花村清右衛門と共に、静岡浅間神社の大歳御祖神社本殿・拝殿(天保二年上棟)の造営に参加し、久能山の業務を挟んで、

八千戈神社本殿(天保九年上棟)を手掛けている。その後、天保十二年に地震が発生し、久能山東照宮が被害を受ける。駿府町奉行と使番によって地震被害状況の見分が行なわれたが、その際に、駿府町奉行与力と使番と共に、駿府石方棟梁善左衛門・左官方棟梁宗蔵他人足四人が同行している。

「安政三年以降安倍郡左官棟梁苗字御免願書」²⁰によれば、宮嶋宗蔵は文化五年(一八〇八)より棟梁職に就き、安政六年(一八五九)七十一歳まで五十二年間勤め上げた。文政十三年(一八三〇)から静岡浅間神社再建掛りとなり、天保十四年(一八四三)には御入用金仕法替えを命じられ、勘定合わせを勤めた。駿府城本丸御殿・櫓・門・石垣や宝台院の修復にも携わり、安政東海地震後の駿府城修復では積算を担当したことが記されている。このように宗蔵は、年老いてから活躍した棟梁であった。

駿府における幕府の修営には、駿府棟梁花村与七郎家が深く関わってきた。与七郎は、駿府に留まらず、遠州一宮や村山浅間神社の造営(第二章第二章参照)にも携わっており、公儀の作事に関しては県内の広範囲に及んでいたと考えられる。さらに、駿河の花村は、京都の中井・大坂の山村と共に、その地の作料・飯米に関与していた。宝永頃には、駿府には並棟梁八人・木挽三人があり、宝永大地震後の駿府城修復は、幕府作事方と駿府町棟梁組頭花村与七郎の下、駿府の棟梁たちの働きも大きかったと推察される。久能山東照宮の主要な修復は、幕府作事方・小普請方が担当し、棟札に駿府棟梁の名は見られないものの、諸史料から駿府棟梁の参画も明らかになり、駿府の各棟梁の活動実態についても少しずつ判明してきたといえる。駿府の棟梁および工匠たちが、町方と公儀においてどのような組織の下で建築普請を行っていたのか、実態の一面を把握することができた。

- ¹ 鈴木棠三・保田晴男『近世庶民生活史料 未刊日記集成 鈴木修理日記』三一書房、一九九七、八。(以下『鈴木修理日記』)
 - ² 『鈴木修理日記一』寛文十一年(一六七二)五月二十日条。
 - ³ 『鈴木修理日記二』延宝二年(一六七四)六月十九日・二十一日条。
 - ⁴ 『鈴木修理日記一』延宝四年(一六七六)七月四日条。
 - ⁵ 『鈴木修理日記一』延宝九年(一六八二)二月二十八日条。
 - ⁶ 『鈴木修理日記二』元禄十二年(一六九九)一月二十七日条。
 - ⁷ 『鈴木修理日記三』元禄十六年三月十日条、小普請奉行曲淵伊左衛門へ久能山見分の命。同年三月十五日条、鈴木伊兵衛へ久能山見分の命。
 - ⁸ 『雑簿一』『久能山叢書』第三篇、久能山東照宮社務所、一九七三、所収。
 - ⁹ 同右。
 - ¹⁰ 『鈴木修理日記三』元禄十六年九月二十七日条。
 - ¹¹ 『雑簿一』元禄十六年九月二十一日条。
 - ¹² 『鈴木修理日記三』元禄十六年八月八日条。
 - ¹³ 『鈴木修理日記三』元禄十六年八月九日条。
 - ¹⁴ 『鈴木修理日記三』元禄十六年八月十日条。
- 久能御宮御修復御手斧始、柳原小屋二而有之
前方久能見分の節、甲斐召連候え共、此頃病氣に付、右の替に当分淡路申付候由
- 駿府城の見分は「二之丸より御書院御番衆番所前、大手より入、御殿不残、御本丸・御天守台見分、夫より二之丸・西ノ丸見廻り、惣御郭へ出、松平甚三郎殿小屋江何も立寄、暫休息、夫より又何も御同道申、草深御門前石垣大崩之所見分、」
- 八幡村八幡宮・貞松山蓮永寺・宮内之薬師堂・大竜山臨濟寺・浅間・宝台院

見分。

- ¹⁵ 『静岡市史』近世、静岡市役所、一九七九(第一編第二章「駿府御城普請記録」)
 - ¹⁶ 中村高平『駿河志料一』歴史図書社、一九六九、所収。
 - ¹⁷ 『駿河国駿府町方文書』(S〇九二・二/三)町絵図、静岡県立中央図書館所蔵。
 - ¹⁸ 『静岡市史』近世、所収。
 - ¹⁹ 静岡市史編纂課『静岡市史編纂資料』第六卷、静岡市、一九二七、所収。
 - ²⁰ 池田屋栄次郎 大工の棟梁で呉服町二丁目の角に居た。天明七年の二月十一代將軍家斎代替の節、御祝儀惣代として、野崎彦左衛門と共に江戸に登城し、時服を拝領した。又奈古屋神社・久能山東照宮・宝台院霊屋・豊田本覚寺の建築御用を勤めた。現代は新吉氏といひ今旧邸地続きに荒物商を営みつゝ傍大工をして居て、今猶ほ往年の町図や久能山の五重塔・代官屋敷・町奉行屋敷などの設計図を所蔵する。
- 『静岡県史』資料編十二近世四、静岡県、一九九五、所収。

Vertical line on the right side of the page.

第二部 駿河国とその周辺における建築普請活動

遠江国の遠州一宮（小國神社・天宮神社）と駿河国の村山浅間神社の造営には、駿府棟梁花村与七郎が関与していることが判明した。三社は幕府作事方によって同時造営が行なわれており、その造営の実態と組織について述べる。

富士山西麓には駿州一宮富士山本宮浅間大社や日蓮宗寺院の富士五山があり、甲州の工匠による建築普請は知られている。富士宮市内全域の棟札等史料を分析し、富士山西麓における建築普請活動について考察する。

先年の調査・研究によって明らかになった以上二つの事例を取り上げ、駿河国とその周辺地域に範囲を広げて建築普請活動の実態を探る。

第一章 遠州一宮・駿州村山浅間の同時造営

第一節 元禄十年遠州一宮・村山浅間の造営組織

第一項 元禄十年造営の概要

現在の「遠州一宮」とは静岡県周智郡森町にある小國神社のことであるが、「天ノ宮・小國大明神由緒書」（資料四十二）によると、「同國同郡一ノ宮小國大明神天ノ宮大明神右両社者異に他候宮ト御由緒一同之儀御座候旧記仁相見江候通奉言上候」とあり、小國神社と天宮神社の両社は、同一の由緒であることが旧記に見られると記されている。小國神社は天正十一年（一五八三）（資料四十三）、天宮神社は天正十七年（資料四十四）に徳川家康によって再興された。その後、元禄十年（一六九七）に五代将軍徳川綱吉によって、両社の造営が行なわれた。つまり両社の造営は、幕府の作事方の下、地元の棟梁たちも協同で進められたのである。小國神社は、元禄十年十二月四日に正遷宮が執り行なわれ（資料四十五）、

天宮神社は五日後、十二月九日の正遷宮であった（資料四十六）。両社の棟札から奉行以下の造営組織も同様であったことが確認できる。さらに元禄の造営に先立った見分に関する史料「一ノ宮造営奉行之覚」（資料四十七）に「天宮御奉行衆右同断」とあり、小國神社の造営奉行と天宮神社も同様であったことが明らかである。この元禄十年の造営について、幕府作事方大工頭の鈴木修理長常・長頼父子によって書かれた『鈴木修理日記』¹⁾にも見ることができ、この日記には、江戸をはじめ、日光、遠国の作事に関する事項が記録されており、「遠州一之宮」も登場する。「遠州一之宮」とは、『鈴木修理日記』でも小國・天宮両社を指しており、元禄十年の造営は公儀作事として両社一体で行なったものと解釈できる。さらに『鈴木修理日記』によると、静岡県東部の富士宮市村山にある「駿州村山浅間」と静岡県西部の「遠州一之宮」は、同時に修復見分・造営が行なわれたことが記されている。

天宮神社の現社殿は、元禄十年に建立されたことが、棟札（資料四十六・四十八）からも明らかである。「天ノ宮・小國大明神由緒書」（資料四十二）によると、寛保三年（一七四三）に修繕の記述があり、明治二十四年（一八九一）の「天宮神社修繕願」（資料四十九）にも、寛保三年の修繕について認められる。寛保期以前の記事では「御建立」及び「御造営」と書かれるが、寛保三年については「御繕」「御修繕」と記されるため、屋根の葺替え等の修繕が施された可能性が考えられる。一方、小國神社は、明治十五年（一八八二）の火災で焼失し、現社殿は明治十九年（一八八六）に上棟されたもので、当初流造りであった本殿は、大社造りとなった²⁾。焼失以前の境内の様子を「遠江國一宮全図」（小國神社蔵）から知ることができる。これによると、小國神社本殿は、天宮神社本殿同様、流造りの本殿が描かれている。さらに屋根については、「遠州一ノ宮屋根御仕様帳」（年代不詳）には「御本社」は「五分棚」とあり、「遠州一宮御修復仕様帳」（宝暦二年（一七五二））には「御本社」は「是は屋桝五分とち葺」と見られることから、棚葺きの本殿であったことが確認できる。天宮神社本殿（三間社流造り）において

は、平成二十五年（二〇一三）の修復の際、本殿の小屋裏から柿板が発見され、さらに元禄十年の屋根棟札（資料五十）から薄板葺きであったことが判明したため、屋根は檜皮葺きから柿葺きに復原された^{※3}。本殿形式や屋根材によっても小國神社と天宮神社は、両社一体の造営方式で建てられたことがわかる。

元禄十年の小國・天宮両社の造営を伝える両社の棟札には、奉行以下造営に携わった幕府作事方、地元の棟梁等が記されている。さらに、「遠州一之宮」と共に幕府作事方の造営として進められた「駿州村山浅間」の棟札写（資料五十一）を加え、三社の造営体制を検討する【表2-1-1】。

【表 2-1-1】元禄 10 年の棟札に見る造営組織

	天宮神社	小國神社	村山浅間神社
奉行	西尾隠岐守忠成	西尾隠岐守忠成	太田撰津守資直
	(横須賀藩主)	(横須賀藩主)	(田中藩主)
	河原清兵衛正真	河原清兵衛正真	佐々木長右衛門
	豊原佐助勝喜	豊原佐助勝喜	甲賀十太夫秀成
	内山七兵衛永貞（中泉代官）	内山七兵衛永貞	
被官	内山清左右衛門由茂	内山清左衛門由茂	(内山清左衛門) ※1
大棟梁	甲良豊前宗賀	甲良豊前宗賀	(甲良豊前) ※1
棟梁	甲良次郎左右衛門	甲良次良左衛門宗俊	甲良次郎左衛門
	花村与七郎	花村与七郎元貞	花村与七郎
	市川治郎部左右門	市川治部左衛門良直	
	清水喜兵衛	清水喜兵衛	
	桑原万五郎	桑原万五郎	
	松井八郎左右門	松井八郎左衛門	松井八郎左衛門
	久村甚三郎	久村甚三郎	
	大木太郎左右門	大木太郎左衛門	
	柴川藤左右門	柴川藤左衛門	
	高木助右衛門		
木挽棟梁	今村七左右門	今村七左衛門	
	川口清右衛門	川口清右衛門	
木挽	宮谷小右衛門		
	村松五郎助		
御修理大工		高木助右衛門	
御修理木挽		宮谷小右衛門	
御修理鍛冶		山崎吉右衛門	

天宮大明神社頭一字御修営棟札（資料 43）、小國神社棟札写（資料 42）、『富士山興法寺大鏡坊記録』棟札写（資料 48）より作成。

氏名は棟札記載の通り（源・藤原姓は省略）。

※1 『鈴木修理日記』による。

※2 （ ）内は、本文中の関連史料による。

※3 太字は、三社の棟札等に記載の者および遠州一宮の大工。

第二項 天宮神社の造営組織

遠州一宮の造営奉行は、遠江国横須賀城（掛川市横須賀）の城主西尾隠岐守忠成である。『一宮記録写』（資料五十二）に「手傳西尾隠岐守」とあることから、大名が修復の労働力を提供する手伝普請であったことがわかる。西尾隠岐守が奉行を命じられたのは九月のことであるが（資料五十三）、『徳川実紀』⁴によると二月の時点で、遠州一宮の修復助役（手伝）には、遠江国掛川城主井伊兵部少輔直朝が命じられている。以上により西尾隠岐守は、九月から竣工までの間、手伝奉行の役を担ったことになる。

他三名の奉行衆が続くが、河原清兵衛・豊原佐助は、元禄九年（一六九六）九月の見分、そして翌年の三月には神宝方と共に訪れている（資料四十七）。もう一人の奉行内山七兵衛は中泉代官であり、遠州の天領を支配した代官の一人で、現磐田市中泉に代官所を置いていた。内山七兵衛は、元禄九年に勘定組頭から中泉代官に就任し、在任期間は元禄十一年までと短期間であった⁵。また、遠州一宮・村山浅間神社造営の際、内山七兵衛と甲良清兵衛は見廻りを行なったということ⁶で、竣工後の十二月二十八日に褒美を賜っている⁶。

被官内山清左衛門は、元禄九年八月から遠州一宮・村山浅間の見分を担当し、見分仕様帳・見積書の作成、入札時の立ち会いも行なうなど、造営の始終に携わった幕府作事方の被官である。元禄十年七月には、この他に三州伊賀八幡が加えられ、先の元禄九年には上州世良田の見分を行なうなど、遠国各地の見分から造営までを担当した。

そして実際の造営を束ねるのが、作事方大棟梁甲良豊前宗賀であり、その下に棟梁十人の名が書き連ねられる（資料四十六）。筆頭の甲良次郎左衛門は大棟梁甲良豊前の弟⁷で、四月に大棟梁甲良豊前と共に、遠州一宮・村山浅間神社の造営を命じられている。「一ノ宮造営奉行之覚」（資料四十七）中に「元禄九年九月二十一日江戸御見分衆御越」として、奉行河原清兵衛、被官内山清左衛門に続き、

「当領衆甲良次郎左衛門・大木太郎左衛門・松井八郎左衛門」と記される。さらに「棟梁桑原清兵衛・清水喜兵衛」は、八月十四日、江戸から遠州へ向けて出発しており⁸、彼らは江戸町棟梁（第三章第二節第一項参照）である。ただし、桑原清兵衛は棟札に見られず、記載されているのは「桑原万五郎」である。甲良次郎左衛門に続いて記される花村与七郎は駿府棟梁、そして最後の高木助右衛門は遠州一宮大工である。

天宮神社には、もう一枚の棟札（資料四十八）が存在する。これには、願主徳川綱吉、奉行は手伝奉行である西尾隠岐守忠成、神主中村左京重次、大工甲良豊前宗賀の四名が記され、造営組織を詳細に伝える棟札（資料四十六）と性格を異にするものである。

さらに屋根の棟札（資料五十）も残され、元禄十年十一月には、屋根が葺き終わったことがわかる。「摂州四天王寺檜皮御大工藤原朝臣家次氏」と記されるが詳細は不明で、その下方に屋根肝入江戸鞘町の金右衛門、棟梁江戸霊岸嶋銀町檜皮屋の忠松与兵衛、板粉肝入江戸桶町の弥次兵衛が並ぶ。江戸鞘町は、刀剣の鞘を作る職人が集住していたことに由来し、寛文期（一六六一〜七二）には、北鞘町（中央区日本橋）と南鞘町（中央区京橋）があった。南鞘町は、大鋸町・南塗師町・本材木町に隣接する町である。霊岸嶋銀町（中央区新川）は、明暦の大火（明暦三年（一六五七）一月十八〜十九日）後、霊巖寺跡地に築かれた本白銀町の代地である。江戸桶町（中央区京橋）は、桶職人が集住していたことに由来し、南大工町（中央区八重洲・京橋）に隣接する。屋根に関する三名は江戸の者で、さらに棟札の裏面には屋根方十七名、板粉方十二名の名が書き連ねられている。

屋根と同じ年記の木札（資料五十四）には、「掛塚村とびのもの」として十名が並ぶ。掛塚は、天竜川河口の港で、天竜川上流域の材木や樽木等を各地へ送る拠点であった。屋根が完成すると鳶の仕事も終わり、社殿はほぼ完成、後は遷宮を控えて仕上げの段階ということになる。

第三項 小國神社の造営組織

元禄十年の小國神社の造営を伝える棟札写（資料四十五）によると、征夷大將軍徳川綱吉によって「御修営」が行なわれ、十二月四日に遷宮が執行された。そこには「遠江國一宮小國事任神社一字」とあり、先に述べた通り、棟札に記された奉行衆及び造営組織は、天宮神社とほぼ同様である。

小國神社の造営組織で注目すべき点は、作事方大棟梁甲良豊前宗賀を筆頭に天宮神社と同じ棟梁九名が続く。遠州一宮の大工高木助右衛門は、「御修理大工」という肩書が付き、「棟梁」九名とは、はっきり区別されている。「御修理大工」に続き「同木挽」「同鍛冶」「同葺師」記され、「同木挽 宮谷小右衛門」は、天宮神社棟札では村松五郎助と共に「木挽」として登場する。小國神社において「御修理」を付した肩書を持つ高木助右衛門以下四名は遠州一宮の者で、『遠州周智郡一宮記録』¹⁾に、「宮鍛冶 山崎吉右衛門・宮大工 高木助右衛門」として現れる。小國神社にも、天宮神社同様に、もう一枚の棟札写（資料五十五）が伝わる。「征夷大將軍正二位内大臣源朝臣綱吉公御修造」「従五位下隠岐守源姓西尾氏忠成奉之」と書かれ、これは手伝奉行西尾隠岐守忠成によって納められた棟札であると考えられる。

第四項 村山浅間神社の造営組織

遠州一宮と同時に幕府の作事として行なわれた村山浅間神社は、『富士山興法寺大鏡坊記録』中に、元禄十年造営の棟札写（資料五十一）がある。

村山浅間神社は、『鈴木修理日記』中で遠州一宮・村山浅間御用として、作事方被官組頭鈴木与次郎、被官内山清左衛門、大棟梁甲良豊前宗賀、棟梁甲良次郎左衛門が命じられ、棟札写にも「大工甲良次郎左衛門」が見られる。「摂津守太田氏源朝臣資直」は駿河国田中城（藤枝市田中）の城主で、修復助役「手伝奉行」で

あり、被官内山清左衛門と共に入札に立ち会っている。大工三名は、大棟梁甲良豊前弟の大工棟梁甲良次郎左衛門、駿府大工棟梁花村与七郎、そして松井八郎左衛門は遠州一宮の元禄九年九月の見分（資料四十七）で、甲良次郎左衛門と並び記される「棟梁」で、江戸町棟梁である。

第五項 三社の造営組織

遠州一宮・村山浅間神社は、元禄九年の見分に始まり、同十年まで、幕府の建築普請として、同時に、同造営組織で行なわれたことが確認できる。大棟梁甲良豊前の下、大工棟梁甲良次郎左衛門が筆頭で三社の造営を取り仕切り、駿府棟梁花村与七郎がそれに続くのが注目すべき点である。花村家（第一部第三章参照）は、徳川家康の駿府在城時から公儀作事を担ってきたが、この駿府のみではなく、駿河・遠江両国の幕府の建築普請に、地元の棟梁として関与していたということである。さらに、遠州一宮については、一宮の大工が作事方の下、実際に造営に当たっていたことになる。もう一名、三社に携わっているのが、江戸の大工棟梁松井八郎左衛門であった。

第二節 元禄十年遠州一宮・村山浅間造営

元禄十年の一連の造営経緯について、『鈴木修理日記』『徳川実紀』に見ることができ、各神社の史料を加え、元禄十年の遠州一宮・村山浅間造営に関して年表【表2-1-2】にまとめた。

元禄十年の造営に向けた初見は、『鈴木修理日記』元禄九年八月二十一日条で、「遠州一之宮・駿州富士浅間為見分、内山清左衛門可被遣之旨、御作事奉行衆被仰渡之。」とある。「遠州一之宮・駿州富士浅間」の見分に、被官内山清左衛門を派遣することが、作事奉行衆に命じられ、これにより造営に向けて進められている。そして、『徳川実紀』九月十日条に、「駿州村山浅間社、遠州一宮修理の事に

【表2-1-2】元禄10年遠州一宮・村山浅間造営年表

年月日	事 項	出典
元禄9年(1686)		
8月22日	遠州一之宮・駿州富士浅間見分役 (被官)内山清左衛門	鈴木修理日記
9月10日	駿州村山浅間、遠州一宮修復のため、勘定被官を派遣	徳川実紀
9月21日	天宮神社見分 (奉行)川原清兵衛、(被官)内山清左衛門 (棟梁)甲良次郎左衛門・太木太郎左衛門・松井八郎左衛門	資料47
11月26日	一ノ宮見分仕様帳・目録等提出 (被官)内山清左衛門→(老中)土屋相模守政直 (作事奉行)加藤兵助 (大工頭)鈴木修理長頼	鈴木修理日記
11月28日	遠州一宮、駿州浅間社見分の勘定、江戸帰着	徳川実紀
12月1日	遠州一之宮・浅間御用 (被官)内山清左衛門、明日登城	鈴木修理日記
12月2日	一之宮・浅間修復来春実施、材木等見積 (被官組頭)鈴木与次郎・(被官)内山清左衛門、登城	鈴木修理日記
12月18日	遠州一之宮の宮大工・木挽3人訴詔持参 来春、由緒等書付持参	鈴木修理日記
元禄10年(1687)		
1月18日	遠国見分大積目録 (被官組頭)鈴木与次郎より(作事奉行)加藤兵助へ提出 遠州一之宮 (9月見分) (被官)内山清左衛門 金3,107両、材木蔵木、掛塚樽木30,580挺 駿州村山浅間 (9月見分) (被官)内山清左衛門 金1,645両、材木蔵木、掛塚樽木15,300挺	鈴木修理日記
2月4日	駿州村山浅間両社修復助役 太田摂津守資直(田中藩主) 遠州一宮修復助役 井伊兵部少輔直朝(掛川藩主)	徳川実紀
2月7日	井伊兵部少輔より(大工頭)鈴木修理長頼へ、 遠州一之宮修復の指図依頼	鈴木修理日記
2月9日	鎌倉八幡・伊豆・箱根方御用 (被官組頭)片山三七郎 遠州一之宮・村山浅間御用 (被官組頭)鈴木与次郎	鈴木修理日記
閏2月26日	一ノ宮・村山両所仕様書 2/24、(被官)内山清左衛門より(作事奉行)小幡三郎左衛門へ提出	鈴木修理日記
3月16日	遠州一宮・三州大樹寺什物調査 漆奉行	徳川実紀
3月23日	遠州村山浅間入札報告 (手伝奉行田中城主)太田摂津守資直、(被官)内山清左衛門	鈴木修理日記
3月24日	遠州一宮 神宝奉行・御宮普請方奉行衆見分 大奉行川原清兵衛・豊原左助	資料47
4月15日	遠州一之宮御修復下奉行(井伊兵部家来) 江原仁右衛門・西堀夫左衛門 江戸到着	鈴木修理日記
4月19日	遠州一ノ宮・駿州村山浅間修復御用 (大棟梁)甲良豊前、(棟梁)甲良次郎左衛門	鈴木修理日記
4月21日	遠州一之宮・村山浅間両所修復御用 (大棟梁)甲良豊前 銀5枚	鈴木修理日記
06月	遠州一宮請負手形 釘鉄物塗師方請負 山本忠太夫・松嶋武助(遠州一宮) 請人 三右衛門(岡津村) (井伊兵部家来)江原仁右衛門・西堀夫左衛門へ提出	資料56
7月5日	遠三両国寺社什物調査 漆奉行	徳川実紀
7月6日	参州伊賀八幡・遠州一ノ宮・駿州村山浅間修復御用 (被官)内山清左衛門 銀10枚・朱印・伝馬・扶持方添状 駿州村山浅間普請御用 (棟梁)甲良次郎左衛門 朱印・伝馬・扶持方添状	鈴木修理日記
7月14日	天宮神社 神宝見分	資料47
07月	村山浅間 本樽木15,168挺(船明山より) (大棟梁)甲良豊前	田代家文書
8月6日	朱印(人足1人、伝馬1疋、江戸より遠州一之宮・駿州村山浅間) 高100俵、 7人扶持(遠州一之宮・駿州村山浅間普請)	鈴木修理日記
8月13日	棟梁桑原清兵衛・清水喜兵衛 8/14遠州へ出発	鈴木修理日記
8月22日	(大棟梁)甲良豊前 遠州へ出発	鈴木修理日記
08月	遠州一ノ宮・天宮 上樽木43,000挺(船明山より) 上樽木9,988挺(船明山より、丑年分)	田代家文書
09月	一之宮普請奉行 西尾隠岐守(横須賀藩主) 9月より普請	資料53
9月7日	棟梁衆 甲良次郎左衛門・倉見豊前・太木太郎左衛門	資料47
9月28日	村山浅間修復出来、遷宮	鈴木修理日記
10月6日	一之宮普請人足出す(横須賀藩)	資料53
11月12日	一之宮普請人足終了(横須賀藩)	資料53
11月	天宮神社 屋根完了	資料50・54
12月4日	遠州一之宮正遷宮	鈴木修理日記
12月9日	天宮神社 正遷宮	資料46・48
12月10日	遠州一之宮普請完了(被官)内山清左衛門江戸到着	鈴木修理日記

より、勘定被官の徒をつかはさる。」と見られる。同二十一日には、遠州一宮の見分が行なわれ、訪れたのは奉行及び被官内山清左衛門、そして大工棟梁甲良次郎左衛門・大木太郎左衛門・松井八郎左衛門の三名である。九月に見分が行なわれると、被官内山清左衛門によって、十一月に見分仕様帳・目録等が提出された。遠州一宮・村山浅間の造営は、来春の予定となり、十二月二日に材木等の見積が指示されている。

同十八日の『鈴木修理日記』には、遠州一宮の宮大工・木挽三人が江戸へ嘆願に訪れたことが記されている【史料二一―一】。

【史料二一―一】『鈴木修理日記三』元禄九年十二月十八日条

一 遠州一之宮之宮大工・木挽三人、此程訴詔持参致、今日も参候而何とぞ御左右承候而、当年在所へ罷帰、来春参度由申二付、未此方江は兎角之被仰付無之候間、先罷帰、何ぞ由緒らしき書付杯有之候ハズ、持参候様ニと申遣。

結局、本年は遠州一宮へ戻り、来春、由緒書等を持参することとなった。遠州一宮の宮大工とは誰なのか。小國・天宮両社の天正期の棟札（資料四十三・四十四）に「当社大工」と見られる高木氏が考えられる。元禄十年の天宮神社棟札には、九人の棟梁に続いて「高木助右衛門」の名が記され、小國神社棟札では、九人の棟梁とは別に「御修理大工 高木助右衛門」とある。これに「同木挽 宮谷小右衛門」も続き、この「御修理」を付す四名は、遠州一宮の者である。これらにより、江戸へ上がった遠州一宮の宮大工は、高木助右衛門が推測されるが、直接的な史料は見出されていない。

元禄十年一月には、「遠国所々見分大積之覚」¹⁾が被官組頭鈴木与次郎から作事奉行加藤兵助へ提出される。これは、元禄七年七月から元禄九年九月までに見

分が実施された十六ヶ所の見積と修復の状況で、造営規模等の比較をすることができる【表二一―二三】。遠州一宮の造営費用は金三千百七両で、鎌倉八幡宮の金七千二百八十両に次ぐ規模である。同時に見分が行なわれた村山浅間神社の金千六百四十五両の二倍近い見積ということになる。しかし、造営費用について『一宮

【表 2-1-3】「遠国所々見分大積之覚」一覧表（元禄 10 年 1 月 17 日付）

年 代	見分地	金 (両)	材木	掛塚樽木 (挺)	担 当	修復	備 考
元禄7年7月	三州鳳来寺	550	材木その他一式	35, 229	前沢藤兵衛	済	
元禄7年8月	鎌倉八幡宮	7, 280	材木は蔵木	64, 330	坂本三郎兵衛	中	
元禄7年8月	伊豆権現	1, 195	材木は蔵木	39, 371	坂本三郎兵衛	中	
元禄7年8月	箱根権現	870	材木は蔵木	22, 744	坂本三郎兵衛	中	
	新田大光院	528	材木は蔵木	45, 664	大石忠左衛門	中	※1
元禄9年3月	上州世良田	290	材木は蔵木	6, 150	内山清左衛門	中	
元禄9年4月	三州大樹寺	1, 850	材木は蔵木	30, 100	谷田清三郎	中	
元禄9年4月	三州信光明寺	950	材木は蔵木	15, 750	谷田清三郎	未	
元禄9年4月	三州松応寺	1, 000	材木は蔵木	19, 100	谷田清三郎	未	
元禄9年4月	日光御飯殿	1, 888	材木は蔵木	16, 160	豊田次郎兵衛	済	
	日光下御廐	37	材木は蔵木	720	豊田次郎兵衛	済	
	駿府城代 御役屋舗	988	材木その他一式	33, 820	前沢藤兵衛	修復料	
元禄9年6月	駿府町奉行衆 御役屋舗	355	材木その他一式	8, 980	前沢藤兵衛	修復料	
元禄9年6月	駿府町奉行衆 御役屋舗	306	材木その他一式	9, 210	前沢藤兵衛	修復料	※2
元禄9年9月	遠州一之宮	3, 107	材木は蔵木	30, 580	内山清左衛門	未	
	駿州村山浅間	1, 645	材木は蔵木	15, 300	内山清左衛門	未	
惣金高 金22, 840両、銀13匁 惣樽木高 493, 209挺 ※3							

『鈴木修理日記』元禄 10 年 1 月 18 日「遠国所々見分大積之覚」より作成

※1 金 528 両 2 分、銀 13 匁 ※2 金 306 両 2 分

※3 惣金高・樽木高は「遠国所々見分大積之覚」の通り

記録写』(資料五十二)では、「御宮御神宝其外一色」について「御入用金七千兩余二而御造栄被 仰付候」とあり、金七千兩余で造営が命じられている。また樽木について「掛塚樽木」(第三部第一章参照)と記されるのも注目すべき点である。

二月に入り、駿州村山浅間修復助役として田中城主太田摂津守資直が、遠州一宮修復助役として掛川城主井伊兵部少輔直朝が命じられた。早速、井伊兵部少輔より大工頭鈴木修理へ遠州一宮の修復について諸事指図を願いたいと依頼があった。これにより、遠州一宮の造営が進み始める。四月には井伊兵部家来の江原仁右衛門と西堀夫左衛門が「遠州一之宮御修復下奉行」として江戸を訪れている。

幕府の作事を担う作事方では、被官組頭鈴木与次郎が遠州一宮・村山浅間の普請、被官組頭片山三七郎が鎌倉八幡・伊豆・箱根方の普請を担当することになった。さらに、閏二月下旬には、遠州一宮・村山浅間両社の仕様帳が被官内山清左衛門より作事奉行小幡三郎兵衛へ提出された。

四月になると、幕府作事方の実務を担う棟梁へも、遠州一宮・村山浅間普請御用の命が下った。大棟梁甲良豊前と棟梁甲良次郎左衛門である。両名は棟札にも奉行衆に次いで記され、甲良豊前宗賀は甲良家三代目に当たり、その弟が甲良次郎左衛門である。棟梁衆の遠州出発の記録もあり、八月十四日に「棟梁桑原清兵衛・清水喜兵衛」、それに遅れて同二十二日に大棟梁甲良豊前が江戸を発っている。

幕府作事方の造営体制が整えられた六月、遠州一宮の山本忠太夫・松嶋武助が入札によって釘鉄物塗師方を請負うこととなった。ただし、岡津村(掛川市岡津)の三右衛門が請人となり、注文入札と異なる場合は、三右衛門の田地を差し上げることとなっている。これは「差上ヶ申御請負手形之事」(資料五十六)として、遠州一宮修復下奉行の江原仁右衛門と西堀夫左衛門に宛てられたもので、このように田地質を入れなければ地元請負が叶わなかったということが伝えられる。

材料については、「見分大積」にあった樽木が、七月に村山浅間神社、八月に遠州一宮に搬出されたことが、天竜川中流の北鹿嶋村(浜松市天竜区二俣町)の名主田代家の文書「万高書上帳」¹²⁾【史料二一・一】に確認できる。貞享二年(一

六八五)四月から元禄十二年七月までに船明山から出された樽木が記録されており、各村の庄屋十二名から中泉代官野田三郎左衛門へ提出されたものである。

【史料二一・一】「万高書上帳」元禄十二年八月

(表紙)

元禄十式年

遠州船明山より御樽木方々江御出シ被遊候万高書上帳

卯八月

(本文)

(前略)

丑七月

一本樽木 壱万五千百六拾八丁 村山浅間

(中略)

丑八月

一上樽木 四万三千丁 遠州一ノ宮・天宮

(中略)

丑ノ年

一上樽木 九千九百八拾八丁 遠州一ノ宮・天宮

小以 九拾貳万貳千三百拾貳丁 丑ノ年分

(後略)

元禄十年七月には、村山浅間神社へ本樽木が一万五千百六十八挺出されており、「見積大積」の掛塚樽木一万五千三百挺とほぼ同量である。同時造営が行なわれている遠州一宮については、「遠州一ノ宮・天宮」と記されている。同年八月に上

樽木四万三千挺、丑ノ年として上樽木九千九百八十八挺、合計五万二千九百八十八挺となる。「見分大積」では、三万五百八十挺と見られるが、実際はそれ以上の樽木が使用されたことになる。

天竜川左岸の内陸に位置する遠州一宮には、船明山からどのように樽木が運搬されたのだろうか。元禄十年八月に、十三ヶ村の庄屋から中泉代官内山七兵衛へ宛てて「一之宮修復用樽木筏乗下げ賃金の増額願」¹³が提出された。「当国一之宮」の樽木は、船明山から出し、鹿嶋下流左岸の下野部（磐田市下野部）まで筏で流し、陸揚げされた樽木は、さらに東に位置する遠州一宮まで搬送されたのである。

九月に、横須賀城主西尾隠岐守が遠州一宮の手伝奉行に任じられ、十月六日から「一之宮普請人足」を出し、十一月十二日に終了した。この十一月には屋根が無事完了し、掛塚村の「とびのもの」も役目を終えている。

十二月四日、『鈴木修理日記』によると「遠州一之宮正遷宮」が執り行なわれた。これは小國神社の正遷宮であり、九日の天宮神社正遷宮については『鈴木修理日記』には記されず、十二月十日条に「遠州一之宮御普請出来、内山清左衛門、今日罷帰ル。」とある。

造営は社殿のみではなく、「本社末社及至神宝祭祀神器悉仁御再興」（資料五十七）とあるように、神宝や祭祀神器に至るまで全て再興が行なわれた。そのため元禄十年三月に、それらの見分も実施されている。『徳川実紀』によると、漆奉行によって遠州一宮と三州大樹寺の什物調査が行なわれた。遠州一宮においては、神宝奉行・御宮普請方奉行衆の見分が実施された（資料四十七）。神宝奉行の他に「かさり屋」「ぬり方」「い物師」「佛師」等が同行し、その後、「御神宝御見分衆七月十四日二御越」とある。神宝・祭祀神器の修復のための受取りが行なわれており、本尊や舞楽面等の諸道具は「大佛師 宮内・同 中川左近」（資料五十八）が、装束類については「萬屋太郎兵衛」（資料五十九）と、三月の見分で「糸方」

として登場する「折戸小左衛門・坂本や武兵衛」（資料六十）が受取り、それぞれ修復を担当した。

第三節 遠州一宮の大工高木助右衛門

元禄十年の天宮神社・小國神社両社の造営に携わった高木助右衛門は、遠州一宮の大工棟梁である。高木氏は、江戸時代を通じて小國神社が鎮座する現一宮地区を中心に、隣接する園田地区・森地区で主に活動をした大工職の旧家である。高木氏の名が見られる棟札は五十枚を超え、幕末の慶応二年（一八六六）までの約三百年間で、五十件以上の社寺の造営を行なっている。その中のほとんどが神社建築である¹⁴。

小國・天宮両社においては、天正十一年（一五八三）の小國神社棟札写（資料四十三）に「当社大工高木五郎左衛門・助右衛門」と確認できる。徳川家康によって「小國一宮鹿園大菩薩」が、天正十一年十二月七日に造立され、「大工福島新左衛門」の名も認められる。天宮神社も由緒の通り、徳川家康によって天正十七年十二月十八日「天宮菩薩社頭一宇所」の造営が行なわれた。その棟札写（資料四十四）には、「大工福島新左衛門」に続き、「当社大工高木五郎左衛門・助右衛門」の二人の名が記されている。

文化十四年に小國神社神主鈴木重年がまとめた『一宮小國神社記』（資料六十二）に、小國神社の造営について記され、天正十一年の造営については、「大工福島新左衛門・当社大工高木助右衛門」とあり、ここでも「当社大工」と記される。その後の慶長十四年（一六〇九）には、徳川家康によって棲門が建立されるが、これは「大工高木助右衛門」による造営である。元和七年（一六二一）の徳川秀忠による再建も「大工高木助右衛門」が手掛けている。先に述べたが、延宝八年（一六八〇）『遠州周智郡一宮記録』には、「宮鍛冶 山崎吉右衛門・宮大工

高木助右衛門」と記され、高木助右衛門は小國神社の大工として代々造営に携わって来たことは明らかである。

また、高木助右衛門と五郎左衛門との詳細な関係は不明であるが、同族の大工であつたとみられ、その後の慶安三年（一六五〇）と同五年には「一ノ宮大工助右衛門・五郎左衛門」から「大工職相論に関する返答書」が提出されている。これらは、一ノ宮大工と偽って出入を企てた者を訴えたもので、高木氏が「一ノ宮大工」である由縁が記され、ほぼ内容は同じもので、慶安五年の返答書【史料二一・一二】（資料六十二）は大工頭木原木工允義久へ宛てたものである。

【史料二一・一三】大工職相論に関する返答書（慶安五年） 抜粋

乍恐返答書を以申上候御事

一 権現様浜松御入国之初一ノ宮御造立

被為成候御時御大工福嶋新左衛門殿如前、大工

我等先祖ニ被仰付只今ニ迄大工仕候儀

其かくれ無御座候其上 権現様御大工

福嶋新左衛門殿鈴木近江守殿片山三七郎殿

御証文御座候事

（後略）

これによると、徳川家康が浜松入国後、遠州一宮の造立が行なわれた。その際、高木氏の先祖は「御大工福嶋新左衛門」から、これまでの通り遠州一宮の大工を命じられ、今まで造営に携わってきたと記され、「当社大工」という肩書が肯ける。さらに、家康の大工である福嶋新左衛門・鈴木近江・片山三七郎の「御証文」を持つことも書き添えられている。鈴木近江と片山三七郎は、家康と行動を共にしてきた大工の中の二人であるが、筆頭の福嶋新左衛門については明らかではない。

偽って一ノ宮大工を名乗っていたのは、一宮に隣接する米倉村の清十郎で、「木原殿之御証文杯申由申上候」というが、高木氏はこの返答書で、清十郎の偽りの経緯を訴えている。「木原殿」とは、作事方大工頭を務めた木原氏で、元は鈴木姓であつたが、二代目吉頼の時に遠江国山名郡木原村（袋井市木原）を賜り、三代目吉次の代に、家康の命によって「木原」と改めた。元龜元年（一五七〇）の浜松築城の普請方を務めると、その後は総奉行として、家康の造営組織を率いることになる¹⁵。この木原吉次を助けたのが、鈴木近江長次であり、木原・鈴木両氏は縁戚関係であつたと見られる。その鈴木近江長次は、寛永九年（一六三二）に六代目木原木工允義久と共に幕府作事方大工頭に任じられた。その後大工頭は、八代目木原内匠重弘を最後に、鈴木修理長常の一人役となり、その跡を元禄十年の造営について日記に記した鈴木修理長頼が務めた。宝永二年（一七〇五）に修理長頼が没すると、木原内匠重弘の子の新五兵衛を養子に迎え、大工頭鈴木新五兵衛の名が『寛永以来御作事奉行御大工頭代々録』¹⁶に見られる。その後の宝永五年には、被官組頭であつた片山三七郎三國が大工頭となり、享保八年まで務めたのである。片山氏は、『新訂寛政重修諸家譜』によれば、國次を初代とすると、五代満國まで（三代目國久（清十郎）を除く）「三七郎」を襲名し、木原・鈴木氏と共に、代々幕府作事方に属し、務めたものである。

さらに返答書には、「一ノ宮天宮両社之棟札并村々氏神之棟札共指上申候へハ則御覽被成、前々通り被仰付候処」とあり、天正期の両社の棟札に「当社大工」とあつたように、「一ノ宮天宮両社」が一体であつたことが示される。慶安三年の返答書¹⁷には、棟札と共に「大工場」についても書き記されている。

遠州一宮大工の大工場については、「鈴木近江守作事場判物写」【史料二一・一四】が伝わり、ここにも「一ノ宮」「雨ノ宮」とはつきり表われる。

【史料二一四】鈴木近江守作事場判物写¹⁸

前々申来候大工場朱印之事

一ノ宮 連花寺

大当院 雨ノ宮

草川村 あわ蔵村

谷川村 中田村

うしかい村 かや場村

河井村 米蔵村

右之分此村々寺々、不相替仕可申候

三月廿一日

鈴木近江守

長以判
(マ)

さらに、片山三七郎と鈴木近江が神主に宛てた大工場についての連署状【史料二一五】によると、

【史料二一五】一宮大工棟梁に関する片山三七外連署状¹⁹

以上

其以来者久不申通候、付而ハ様子承候、其元之儀者不存候へ共、如前々大工場相替り不申候、其上寺々迄も不相替仕来候、其元之儀縦何様之儀を申候共前々仕来候大工ニ可被仰付候、委細者口上ニ可申達候

八月廿三日

片山三七

名乗判

神主殿

貴報

鈴木おゝみ

名乗判

以前の通り大工場は替わらず、さらに寺々迄も替わらずに、前々から勤めてきた大工に仰せ付けられるべきであるとしている。前掲の両史料に年記はないが、鈴木近江が没する寛永十二年（一六三五）以前のことである。

以上から、小國神社・天宮神社の両社は、天正期から徳川幕府の庇護の下、遠州一宮の大工高木氏によつて造営が行なわれてきた。そして、元禄十年の両社同時造営においては、幕府作事方の下、高木助右衛門は大工棟梁の一人として務めた。特に、小國神社の棟札には「御修理大工高木助右衛門」というように、他の「棟梁」とは分けて記された。高木氏は、幕末まで遠州一宮の大工として、森町の一宮地区を中心に活動し、小國神社関連の造営に携わったのである。

第二章 富士山西麓における建築普請活動―富士宮市と山梨県の交流

富士山の西麓に位置する富士宮市は、昭和十七年（一九四二）以前は、上出村・白糸村・上野村・北山村・富士根村・富丘村・大宮町の一町六村に分かれていた【図二二一】。現在の富士宮市は、西隣の芝川町と平成二十二年に合併し、市域がさらに広がっている。そこには、富士五山と総称される日蓮宗寺院の大石寺（日蓮正宗）・妙蓮寺（日蓮正宗）・北山本門寺（日蓮宗）・小泉久遠寺（日蓮宗）・西山本門寺（日蓮宗）があり、富士五山の末寺とともに身延久遠寺の末寺も多い。



【図 2-2-1】 富士宮市旧町村区分（昭和 17 年以前）と主要寺社

富士山を信仰の対象とする浅間神社の総本社で駿河国一宮の富士山本宮浅間大社が大宮町に鎮座しており、各地に浅間神社が点在している。富士登山道の村山口には、現在村山浅間神社と大日堂が残るが、明治初年までは興法寺という寺院で、富士山を修行の場とする修験者「村山修験」の拠点となっていた。

第一節 工匠の建築普請活動

一町・六村の各寺社や民家に残る棟札等史料²⁰から、建築普請活動について窺い知ることができる【表二二一】。表を一覧すると、甲州の工匠の名が散見される。地元の工匠と甲州や他国の工匠との交流の状況についても着目していく²¹。

【図二二一】

第一項 大石寺と甲州下山大工

日蓮正宗総本山大石寺の御影堂・三門には、身延山北麓の下山（山梨県南巨摩郡身延町）の大工石川氏が関与していた。御影堂においては、寛永九年（一六三二）石川與十郎家次、同十二年御影堂宮殿は石川久左衛門家次とあるが、同一人物で、御影堂と宮殿は一連の造営として石川家次によって行なわれたことがわかる。元禄十二年（一六九九）の修復には、二男の石川五左衛門重吉が携わった。享保二年（一七一七）の三門造営は、石川万右衛門亮重が担当したが、それに先立ち正徳二年（一七一二）、富士山に木材を求め、榎・樅以下の雑木の伐出しが許されている²²。下山を拠点とする大工集団を「下山大工」と呼び、戦国大名穴山氏の城下であった時代から大工集団として認められる。石川氏は竹下氏と並び、中世以来の棟梁家であり、身延久遠寺の造営にも関わりを見ることが出来る。寛延二年（一七四九）に完成した五重塔の大工棟梁は、中野市左衛門と伝えられる。

第二項 北山本門寺と甲州下山・波木井・大野村の大工

日蓮宗北山本門寺の享保十年（一七二五）仏殿造営・客殿修営においても、大工棟梁に下山大工の石川久左衛門、脇大工棟梁に舎弟七郎左衛門が認められる。石川久左衛門は大石寺御影堂に携わった家次の後継者と考えられる者である。文化九年（一八一二）に『匠家雛形増補初心伝』を著した下山大工の石川七郎左衛門重甫は有名であるが、明和七年（一七七〇）の生まれであることから、舎弟七郎左衛門は、それ以前の大工棟梁であることが判明する。

江戸末期の棟札には棟梁松原氏の名が記される。天保十五年（一八四四）には、番匠棟梁松原新兵衛・富田伊兵衛・渡辺久右衛門が造営を担当し、二月十六日に上棟している²³。二年後の弘化三年（一八四六）、庫裏の造営が行なわれるが、それにも棟梁松原新兵衛重光・長谷川重蔵が引き続き携わった。年代は記されていないが、大庫裏の棟札にも棟梁松原久兵衛重光・長谷川重蔵の名が見られる。庫裏と大庫裏に見られる松原重光は同一人物であると考えられ、松原・長谷川両棟梁によって庫裏および大庫裏の造営が行なわれたと推測される。文久三年（一八六三）の本堂の造営は、甲州波木井（身延町）の佐野真次郎源辰光が棟梁で行なわれた。この波木井大工佐野真次郎と共に、肝煎として松原久兵衛も関与している。波木井は身延山の南東に位置する村で、波木井大工の名は、山梨県内では甲州市勝沼町の大善寺鎮守社（天保十二年）等にも見られる。

富士宮市における波木井大工の初見は、宮内八幡宮の寛政三年（一七九一）の棟札である。「甲州巨摩郡西河内領波木井村 大工棟梁 佐野直右衛門福影」とあり、弟子五名の名が左右に書き連ねられている。この棟札は、「社僧 重須 蓮行坊 時之住日円」によって書かれたもので、「重須 蓮行坊」とは、北山本門寺塔頭蓮行坊である。波木井村の大工棟梁佐野直右エ門は、天保二年（一八三一）身延久遠寺御真骨宝蔵の棟札に見えるが、同一人物とは考え難く、後継者と推測される。

さらに、北山の八幡神社板倉は、波木井の南に位置する大野村の棟梁松野重郎右エ門義路・権棟梁保坂芳太郎が担当した。大野村には久遠寺二十二世日遠によって創建された本遠寺があり、このように、日蓮宗寺院と甲州の工匠の関係が北山本門寺周辺の神社にも表われているといえる。



【図 2-2-2】富士宮市周辺図（甲州との交流）

【表 2-2-1】工匠一覧表（『富士宮市の棟札集成』より作成）

分類	建造物名	所在地	和暦	西暦	職名	氏名	住所	現在住所	備考
上・社	1	1 根原浅間神社本殿	根原	文久1	1861	大工棟梁	功金利八	常葉邑	山梨県 身延町 旧下部町
上・社	1	1 根原浅間神社本殿	根原	文久1	1861	大工脇棟梁	治左衛門	車田邑	山梨県 身延町 旧下部町
上・社	1	1 根原浅間神社本殿	根原	文久1	1861	桶工	喜右エ門	当所	富士宮市 根原
上・社	1	4 根原浅間神社本殿	根原	明治11	1878	大工棟梁	伊藤宮内右衛門	山梨県20区八代郡古閑村	山梨県 身延町 旧下部町
上・社	1	4 根原浅間神社本殿	根原	明治11	1878	大工脇棟梁	伊藤清作	山梨県20区八代郡古閑村	山梨県 身延町 旧下部町
上・社	1	4 根原浅間神社本殿	根原	明治11	1878	大工脇棟梁	藏野宗左エ門	山梨県20区八代郡古閑村	山梨県 身延町 旧下部町
上・社	1	4 根原浅間神社本殿	根原	明治11	1878	大工脇棟梁	伊藤米造	山梨県20区八代郡古閑村	山梨県 身延町 旧下部町
上・社	2	9 麓東照宮	麓（金山）	大正9	1920	大工	田中泰松父子	山梨県西八代郡古閑村	山梨県 身延町 旧下部町
上・社	3	1 伊勢神明宮	猪之頭	嘉永2	1849	大工	伊藤豊兵衛源実昌	甲斐国八代郡東川内古閑村	山梨県 身延町 旧下部町
上・社	3	1 伊勢神明宮	猪之頭	嘉永2	1849	桶工	植松五郎兵衛	当国富士郡井之頭村	富士宮市 猪之頭
上・社	3	1 伊勢神明宮	猪之頭	嘉永2	1849	桶工	植松直藏	当国富士郡井之頭村	富士宮市 猪之頭
上・社	3	2 伊勢神明宮	猪之頭	嘉永7	1854	工匠	伊藤豊兵衛源実昌	甲州八代郡東川内古閑邑	山梨県 身延町 旧下部町
上・社	3	2 伊勢神明宮	猪之頭	嘉永7	1854	子手	伊藤平次エ門	甲州八代郡東川内古閑邑	山梨県 身延町 旧下部町
上・社	3	2 伊勢神明宮	猪之頭	嘉永7	1854	桶工	植松五郎兵衛	当村	富士宮市 猪之頭
上・社	5	1 鷲鷹曾我八幡宮	猪之頭（宮道）	嘉永6	1853	工匠	伊藤豊兵衛源実昌	甲州八代郡東川内古閑村	山梨県 身延町 旧下部町
上・社	5	1 鷲鷹曾我八幡宮	猪之頭（宮道）	嘉永6	1853	子手	伊藤平次右衛門	甲州八代郡東川内古閑村	山梨県 身延町 旧下部町
上・社	5	1 鷲鷹曾我八幡宮	猪之頭（宮道）	嘉永6	1853	桶工	植松直藏源永清	当村	富士宮市 猪之頭
上・社	10	2 芝山浅間神社	上井出（芝山）	大正14	1925	大工	小林正信		
上・社	16	1 上井出稻荷神社	上井出（上峯）	安政4	1857	大工	藤原吉朝喜三郎	甲州西川内葉袋村	山梨県 早川町
上・社	16	1 上井出稻荷神社	上井出（上峯）	安政4	1857	棟梁	井出忠左衛門	当村	富士宮市 上井出
上・社	16	1 上井出稻荷神社	上井出（上峯）	安政4	1857	棟梁	井出利兵衛	当村	富士宮市 上井出
上・社	16	5 上井出稻荷神社	上井出（上峯）			屋根屋	辰巳伊右エ門		（富士宮市）（野中）
上・社	16	5 上井出稻荷神社	上井出（上峯）			屋根屋	塩川忠八		
上・社	16	5 上井出稻荷神社	上井出（上峯）			屋根屋	辰巳市郎右エ門		
上・社	16	5 上井出稻荷神社	上井出（上峯）			大工	藤原家次小児勘兵衛		
上・社	16	7 上井出稻荷神社奥殿	上井出（上峯）			刻者	善左衛門	山梨県南巨摩郡下山村	山梨県 身延町 下山村
白・社	2	1 白山神社正殿・拝殿	佐折	明和8	1771	大工	池上源右エ門	甲州身延町	山梨県 身延町
白・社	2	1 白山神社正殿・拝殿	佐折	明和8	1771	仕手	池上藤藏	甲州身延町	山梨県 身延町
白・社	2	1 白山神社正殿・拝殿	佐折	明和8	1771	仕手	池上口次郎	甲州身延町	山梨県 身延町
白・社	3	1 内野神社（足形氏神社）	内野	貞享1	1684	大工	吉川平口		
白・社	3	1 内野神社（足形氏神社）	内野	貞享1	1684	大工	渡部半口		
白・社	3	4 内野神社（山神社）	内野	享保20	1735	大工	石川新左衛門	内野村	富士宮市 内野
白・社	3	4 内野神社（山神社）	内野	享保20	1735	大工	伊藤奎兵衛	内野村	富士宮市 内野
白・社	3	4 内野神社（山神社）	内野	享保20	1735	大工	平岡九左衛門	猪之頭	富士宮市 猪之頭
白・社	3	4 内野神社（山神社）	内野	享保20	1735	大工	遠藤政右衛門	佐折村	富士宮市 佐折
白・社	3	5 内野神社（内野氏神社） 拝殿	内野	延享2	1745	大工	万右衛門	甲斐川内領	山梨県
白・社	3	5 内野神社（内野氏神社） 拝殿	内野	延享2	1745	大工	惣左衛門	甲斐川内領	山梨県
白・社	3	5 内野神社（内野氏神社） 拝殿	内野	延享2	1745	大工	幸右衛門	甲斐川内領	山梨県
白・社	3	5 内野神社（内野氏神社） 拝殿	内野	延享2	1745	大工	新左衛門	下内野村	富士宮市 内野
白・社	3	5 内野神社（内野氏神社） 拝殿	内野	延享2	1745	大工	奎兵衛	下内野村	富士宮市 内野
白・社	3	8 内野神社（山神社）	内野	寛延1	1748	大工	石川新左衛門		（富士宮市）（内野）
白・社	3	8 内野神社（山神社）	内野	寛延1	1748	大工	伊藤奎兵衛		（富士宮市）（内野）
白・社	3	12 内野神社（足形氏神社）	内野	寛延2	1749	大工	奎兵衛	下内野村	富士宮市 内野
白・社	3	12 内野神社（足形氏神社）	内野	寛延2	1749	大工	基五左衛門	横手沢	富士宮市 横手沢
白・社	3	13 内野神社（横手沢氏神社）	内野	宝暦8	1758	大工	門齊甚五左衛門	横手沢	富士宮市 横手沢
白・社	3	14 内野神社（山神社）	内野	安永3	1774	大工	五左衛門	下山	山梨県 身延町 下山村
白・社	3	16 内野神社（山神社）	内野	文化3	1806	大工	忠藏	精進川	富士宮市 精進川
白・社	3	16 内野神社（山神社）	内野	文化3	1806	大工	次郎右衛門	原村	富士宮市 原
白・社	3	18 内野神社（内野氏神社）	内野	弘化4	1847	大工	吉右衛門		（富士宮市）（内野）
白・社	3	19 内野神社（内野氏神社）	内野	嘉永3	1850	大工	治郎左エ門	足形	富士宮市 足形
白・社	3	20 内野神社（内野氏神社）	内野	嘉永3	1850	大工匠方	佐野治郎左衛門		（富士宮市）（足形）
白・社	3	21 内野神社（内野氏神社）	内野	嘉永5	1852	大工	佐野次郎左衛門	芦形村	富士宮市 足形
白・社	3	21 内野神社（内野氏神社）	内野	嘉永5	1852	大工	石川吉右衛門	下内野	富士宮市 内野
白・社	3	22 内野神社（横手沢氏神社）	内野	嘉永7	1854	匠美	佐藤太市良藤原環	豆州君沢郡八木沢	伊豆市 八木沢 旧土肥町
白・社	3	22 内野神社（横手沢氏神社）	内野	嘉永7	1854	匠美細工人	佐藤仙助		（伊豆市）（八木沢）（旧土肥町）
白・社	3	22 内野神社（横手沢氏神社）	内野	嘉永7	1854	匠美細工人	佐藤佐太郎		（伊豆市）（八木沢）（旧土肥町）
白・社	3	22 内野神社（横手沢氏神社）	内野	嘉永7	1854	匠美細工人	小山亀太郎		（伊豆市）（八木沢）（旧土肥町）
白・社	3	22 内野神社（横手沢氏神社）	内野	嘉永7	1854	匠美細工人	加山新助		（伊豆市）（八木沢）（旧土肥町）
白・社	3	23 内野神社（内野氏神社）	内野	慶応3	1867	大工	伊藤治右エ門	下内野	富士宮市 内野
白・社	3	27 内野神社（山神社）	内野	明治15	1882	祠掌	中村實直		
白・社	3	27 内野神社（山神社）	内野	明治15	1882	大工方	石川忠藏		
白・社	3	27 内野神社（山神社）	内野	明治15	1882	大工方	伊藤永藏		
白・社	3	27 内野神社（山神社）	内野	明治15	1882	大工方	伊藤拾五郎		
白・社	3	27 内野神社（山神社）	内野	明治15	1882	大工方	保坂久平		
白・社	3	27 内野神社（山神社）	内野	明治15	1882	桶入方	土橋喜十郎		
白・社	3	27 内野神社（山神社）	内野	明治15	1882	桶入方	渡辺道太郎		
白・社	3	27 内野神社（山神社）	内野	明治15	1882	桶入方	門齊佐太郎		
白・社	3	27 内野神社（山神社）	内野	明治15	1882	桶入方	伊藤平八		
白・社	3	27 内野神社（山神社）	内野	明治15	1882	桶入方	伊藤喜作		
白・社	3	29 内野神社（山神社）	内野	明治44	1911	大工棟梁	伊藤庄五郎	甲斐国西八代郡古閑村大字中ノ倉	山梨県 身延町 旧下部町
白・社	3	29 内野神社（山神社）	内野	明治44	1911	屋根職	渡辺光太郎	本村半野	富士宮市 半野
白・社	6	1 琴平神社宮殿	半野	承応2	1653	大工	吉川喜兵衛		
白・住	4	2 井出家高麗門及び長屋	狩宿	嘉永1	1848	大工	喜三郎	甲州摩郡西川内領葉袋村	山梨県 早川町 北長屋裏甲墨書
野・社	2	1 日吉神社（上条）	上条	弘化2	1845	棟梁	古屋常兵衛		
野・社	5	1 名称不詳神社	上条（角ヶ谷戸）	昭和18	1943	棟梁	望月久作		
野・社	5	1 名称不詳神社	上条（角ヶ谷戸）	昭和18	1943	石工	高村銀太郎		
野・社	5	1 名称不詳神社	上条（角ヶ谷戸）	昭和18	1943	石工	渡辺源作		
野・社	7	10 精進川浅間神社	精進川	寛政9	1797	大工	忠藏		（富士宮市）（精進川）
野・社	7	11 精進川浅間神社	精進川	寛政9	1797	工匠	忠藏		（富士宮市）（精進川）
野・社	7	19 精進川浅間神社鳥居	精進川	昭和7	1932	石工	斉藤富作		

野・寺	4		大石寺御影堂	下条	寛永9	1632	大工	石川与十郎家次		(山梨県)	(身延町)	(下山村) ※1
野・寺	4		大石寺御影堂宮殿	下条	寛永12	1635	大工	石川久左衛門尉家次	甲州下山住	山梨県	身延町	下山村 ※1
野・寺	4		大石寺御影堂	下条	元禄12	1699	(大工)	石川五左衛門重吉		(山梨県)	(身延町)	石川与十郎家次の二男 ※1
野・寺	4		大石寺御影堂	下条	元禄12	1699	棟梁	石川五左衛門		(山梨県)	(身延町)	小屋梁墨書 ※1
野・寺	4		大石寺御影堂	下条	元禄12	1699		万左衛門				小屋梁墨書 ※1
野・寺	4		大石寺御影堂	下条	元禄12	1699		喜三郎				小屋梁墨書 ※1
野・寺	4		大石寺御影堂	下条	元禄12	1699		七郎右衛門				小屋梁墨書 ※1
野・寺	4		大石寺御影堂	下条	元禄12	1699		松左衛門				小屋梁墨書 ※1
野・寺	4		大石寺御影堂	下条	元禄12	1699		善左衛門				小屋梁墨書 ※1
野・寺	4		大石寺御影堂	下条	元禄12	1699		与五右衛門				小屋梁墨書 ※1
野・寺	4		大石寺御影堂	下条	元禄12	1699	鋳物師	宇田川善兵衛				擬宝珠銘 ※1
野・寺	4		大石寺三門	下条	享保2	1717	大工	石川万右衛門亮重	下山住	山梨県	身延町	下山村 ※2
野・寺	4		大石寺五重塔	下条	寛延2	1749	大工棟梁	中野市左衛門				※2
野・寺	4		大石寺御影堂	下条	明治34	1901	大工	寺嶋竹三郎	安積郡小田原村	福島県	郡山市	破風板墨書 ※1
野・寺	4		大石寺御影堂	下条	明治35	1902	大工	石川栄重郎				※1
野・寺	4		大石寺御影堂	下条	明治42	1909	(鋳物師)	武井熊次郎	東京住人	東京都		擬宝珠銘 ※1
野・寺	4		大石寺御影堂	下条	明治以降		彫刻	後藤富八	神奈川縣橘樹郡	神奈川県	横浜市・川崎市	西郷、向拝彫刻銘 ※1
野・寺	4		大石寺御影堂	下条	明治以降		彫刻	後藤正英	神奈川縣橘樹郡	神奈川県	横浜市・川崎市	向拝彫刻銘 ※1
北・寺	3	6	北山本門寺仏殿・客殿	北山	享保10	1725	大工棟梁	石川久左衛門	甲州下山村	山梨県	身延町	下山村
北・寺	3	6	北山本門寺仏殿・客殿	北山	享保10	1725	脇大工棟梁	倉弟七郎左衛門	甲州下山村	山梨県	身延町	下山村
北・寺	3	9	北山本門寺	北山	天保15	1844	番匠棟梁	松原新兵衛				
北・寺	3	9	北山本門寺	北山	天保15	1844	番匠棟梁	富田伊兵衛				
北・寺	3	9	北山本門寺	北山	天保15	1844	番匠棟梁	渡辺久右衛門				
北・寺	3	9	北山本門寺	北山	天保15	1844	木挽	渡辺藤右衛門				
北・寺	3	10	北山本門寺庫裏	北山	弘化3	1846	棟寮	松原新兵衛重光				
北・寺	3	10	北山本門寺庫裏	北山	弘化3	1846	棟寮	長谷川重藏				
北・寺	3	12	北山本門寺本堂	北山	文久3	1863	棟梁	佐野真次郎源辰光	甲州波木井	山梨県	身延町	波木井
北・寺	3	12	北山本門寺本堂	北山	文久3	1863	後見	鈴木国太郎				
北・寺	3	12	北山本門寺本堂	北山	文久3	1863	後見	古屋常兵衛				
北・寺	3	12	北山本門寺本堂	北山	文久3	1863	肝煎	笠井半兵衛				
北・寺	3	12	北山本門寺本堂	北山	文久3	1863	肝煎	松原久兵衛				
北・寺	3	12	北山本門寺本堂	北山	文久3	1863	袖方	小林藤吉				
北・寺	3	12	北山本門寺本堂	北山	文久3	1863	袖方	藤田八右衛門				
北・寺	3	12	北山本門寺本堂	北山	文久3	1863	彫物師	佐野喜久平正行				
北・寺	3	12	北山本門寺本堂	北山	文久3	1863	車力	杉本藤七				上加貫村？
北・寺	3	12	北山本門寺本堂	北山	文久3	1863	車力	山本平七				上加貫村？
北・寺	3	12	北山本門寺本堂	北山	文久3	1863	車力	品川房吉				上加貫村？
北・寺	3	13	北山本門寺宝蔵	北山	明治19	1886	大工	長谷川重助	北山	富士宮市	北山	
北・寺	3	13	北山本門寺宝蔵	北山	明治19	1886	大工	望月善藏	甲斐	山梨県		
北・寺	3	14	北山本門寺大門	北山	明治33	1900	大工棟梁	長谷川利平				
北・寺	3	14	北山本門寺大門	北山	明治33	1900	大工棟梁	佐野作平				
北・寺	3	14	北山本門寺大門	北山	明治33	1900	木挽	石川源助				
北・寺	3	14	北山本門寺大門	北山	明治33	1900	木挽	杉山金石工門				
北・寺	3	15	北山本門寺宮殿	北山	明治41	1908	大工棟梁	鈴木多吉				彫刻俱
北・寺	3	16	北山本門寺大庫裏	北山	大正1	1912	大工棟梁	長谷川利平				
北・寺	3	16	北山本門寺大庫裏	北山	大正1	1912	大工棟梁	高橋徳之				
北・寺	3	16	北山本門寺大庫裏	北山	大正1	1912	垂鉛工	野毛甚太郎				
北・寺	3	17	北山本門寺宝蔵	北山	大正3	1914	大工	保坂源太郎	当村	富士宮市	北山	
北・寺	3	17	北山本門寺宝蔵	北山	大正3	1914	石工	斉藤兼吉	上井出村	富士宮市	上井出	
北・寺	3	17	北山本門寺宝蔵	北山	大正3	1914	石工	斉藤留吉	上野村	富士宮市	上野	
北・寺	3	18	北山本門寺開山堂	北山	大正6	1917	棟梁	若林市助	富士郡大宮町山本	富士宮市	山本	
北・寺	3	18	北山本門寺開山堂	北山	大正6	1917	袖	藤田重松	富士郡北山村北山	富士宮市	北山	
北・寺	3	18	北山本門寺開山堂	北山	大正6	1917	石工	望月喜市	富士郡富丘村	富士宮市	富丘	
北・寺	3	18	北山本門寺開山堂	北山	大正6	1917	瓦師	杉山熊次郎	庵原郡飯田村	静岡市	清水区	
北・寺	3	18	北山本門寺開山堂	北山	大正6	1917	工事監督	鈴木多吉	吉原町西新田	富士市	西新田	
北・寺	3	20	北山本門寺大庫裏	北山			棟梁	松原久兵衛重光				
北・寺	3	20	北山本門寺大庫裏	北山			棟梁	長谷川重藏				
北・社	4	1	十羅刹女神社	北山	安政2	1855	大工	利兵衛	上井出	富士宮市	上井出	
北・社	4	1	十羅刹女神社	北山	安政2	1855	大工	嘉右衛門	棧敷	富士宮市	北山棧敷	
北・社	5	7	八幡神社板倉	北山			棟梁	松野重郎右工門義路	甲斐国巨摩郡大野村	山梨県	身延町	
北・社	5	7	八幡神社板倉	北山			権棟梁	保坂芳太郎	甲斐国巨摩郡大野村	山梨県	身延町	
北・社	8	7	大久保八幡宮拝殿	北山（大久保）	明和4	1767	大工	味噌尾吉兵衛				
北・社	8	10	大久保八幡宮	北山（大久保）	文化13	1816	大工	勝左衛門				
北・社	8	11	大久保八幡宮	北山（大久保）	安政3	1856	袖	渡辺安兵衛		富士宮市		氏子中
北・社	8	11	大久保八幡宮	北山（大久保）	安政3	1856	大工	笠井半兵衛		富士宮市		氏子中
北・社	8	11	大久保八幡宮	北山（大久保）	安政3	1856	大工	鈴木国太郎		富士宮市		氏子中
北・社	14	2	天満宮	北山	昭和5	1930	社掌	井出寅作				
北・社	20	2	堀之内八幡宮	北山（堀之内）	弘化4	1847	大工棟梁	朝日安治郎	当村	富士宮市	北山（堀之内）	
北・社	24	2	山神宮	山宮（西村）	明治26	1893	大工	藤原幸作				
北・社	28	1	宮内八幡宮	山宮	寛政3	1791	大工棟梁	佐野直右衛門福影	甲州巨摩郡西河内領波木井村	山梨県	身延町	波木井
北・社	28	1	宮内八幡宮	山宮	寛政3	1791	弟子	渡辺万右衛門	甲州巨摩郡西河内領波木井村	山梨県	身延町	波木井
北・社	28	1	宮内八幡宮	山宮	寛政3	1791	弟子	望月弥平次	甲州巨摩郡西河内領波木井村	山梨県	身延町	波木井
北・社	28	1	宮内八幡宮	山宮	寛政3	1791	弟子	石川園八	甲州巨摩郡西河内領波木井村	山梨県	身延町	波木井
北・社	28	1	宮内八幡宮	山宮	寛政3	1791	弟子	大田与惣二	甲州巨摩郡西河内領波木井村	山梨県	身延町	波木井
北・社	28	1	宮内八幡宮	山宮	寛政3	1791	弟子	小田切宇平二	甲州巨摩郡西河内領波木井村	山梨県	身延町	波木井
根・寺	5	1	妙円寺表門	小泉	天保2	1831	大工	片倉藤藏	中野郷	富士市		中野村？中之郷？
根・寺	5	1	妙円寺表門	小泉	天保2	1831	大工	源藏	吉原	富士市	吉原	
根・寺	5	2	妙円寺	小泉	昭和7	1932	請負人	佐野久芳	大宮町	富士宮市	大宮町	
根・寺	5	2	妙円寺	小泉	昭和7	1932	大工棟梁	佐野鎌吉	大宮町	富士宮市	大宮町	
根・寺	5	2	妙円寺	小泉	昭和7	1932	銅工	佐野寅市	大宮町	富士宮市	大宮町	
根・社	6	1	子之神社	粟倉	寛政10	1798	大工棟梁	戸嶋惣左衛門	神成村	富士宮市	北山神成	
根・社	8	5	諏訪神社	村山	明治30	1897	大工	森下善平				

根・社	9	9	神明宮社殿	村山	昭和2	1927	請負者大工	渡辺倉之丞				
根・社	16	1	箕輪八幡宮	大岩	寛政3	1791	大工棟梁	惣助	豆州君沢部八木沢村	伊豆市	八木沢	旧土肥町
根・社	16	3	箕輪八幡宮	大岩	天保5	1834	大仏師	法橋高松玄甫藤原季實	三島宿市々原町住人	三島市	大社町	
根・社	16	5	箕輪八幡宮	大岩	天保14	1843	大仏師	長沢梅之進金保	中川原			
根・社	17	1	上小泉八幡宮	小泉	明治32	1899	大工棟梁	望月長太郎	大宮町	富士宮市	大宮町	
根・社	35	1	杉田子安神社	杉田	昭和11	1936	工匠	藤田国誉	当村千貫松	富士宮市	杉田	
根・社	35	1	杉田子安神社	杉田	昭和11	1936	請負者	上杉牧太郎				
丘・寺	3	2	安立寺客殿	青木	元文5	1740	大工	望月半左衛門				
丘・社	1	1	八幡宮（青木）拝殿	青木	安永8	1779	大工	□右衛門				
宮・寺	6	1	万松院	光町	大正14	1925	棟梁	渡辺栄作				
宮・寺	7	1	大頂寺宝庫	東町	文政2	1819	工匠	勝呂栄蔵豊治	伊豆国住人			
宮・寺	7	1	大頂寺宝庫	東町	文政2	1819	工匠	勝呂直蔵宗豊	伊豆国住人			
宮・寺	7	2	大頂寺本堂	東町	安政1	1854	工師	清七	神田住	富士宮市	神田	
宮・寺	7	2	大頂寺本堂	東町	安政1	1854		与作	甲斐国住人	山梨県		
宮・寺	7	2	大頂寺本堂	東町	安政1	1854		金平	甲斐国住人	山梨県		
宮・寺	7	4	大頂寺本堂	東町	明治35	1902	大工棟梁	市川金六照重	大宮町住人	富士宮市	大宮町	
宮・寺	7	4	大頂寺本堂	東町	明治35	1902	設計并彫刻	勝呂万之輔浪義	豆州田方郡小土肥住人	伊豆市	小土肥	
宮・寺	12	1	大泉寺殿堂	野中	慶長14	1609	大工	石川左兵衛尉				
宮・寺	12	2	大泉寺殿堂	野中	慶長19	1614	大工	石川左兵衛門				
宮・寺	14	2	善能寺物置	野中	明和6	1769	大工	坪井氏庄兵衛尉	当邑住人	富士宮市	野中	
宮・寺	14	3	善能寺本堂	野中	寛政2	1790	工匠	松村藤左衛門	黒田村住	富士宮市	黒田	
宮・寺	14	9	善能寺庫裏	野中	昭和10	1935	大工	塩川幸太郎	大宮町松山町	富士宮市	大宮町	
宮・寺	14	11	善能寺礼盤	野中	寛政2	1790	大工	森嶋作兵衛	下山住	山梨県	身延町	下山村、墨書
宮・寺	14	12	善能寺鑿子台	野中	寛政3	1791	大工	作兵衛	下山	山梨県	身延町	下山村、墨書
宮・社	1	1	琴平神社	万野原新田	天保15	1844	柚	□河要八郎	当村	富士宮市	万野原新田	
宮・社	1	1	琴平神社	万野原新田	天保15	1844	柚	日原伝右衛門	当村千貫松	富士宮市	万野原新田	
宮・社	1	1	琴平神社	万野原新田	天保15	1844	棟梁	大河原□弁蔵重春	栗倉村	富士宮市	栗倉	
宮・社	1	1	琴平神社	万野原新田	天保15	1844	仕手大工	秀兵衛	甲州川内中山村	山梨県	身延町	
宮・社	1	1	琴平神社	万野原新田	天保15	1844	仕手大工？	遠藤□松	甲州川内中山村？	山梨県？	身延町？	
宮・社	1	1	琴平神社	万野原新田	天保15	1844	仕手大工？	遠藤倉蔵	甲州川内中山村？	山梨県？	身延町？	
宮・社	1	1	琴平神社	万野原新田	天保15	1844	仕手大工？	□□芳巳	甲州川内中山村？	山梨県？	身延町？	
宮・社	1	1	琴平神社	万野原新田	天保15	1844	仕手大工？	□□牛七	甲州川内中山村？	山梨県？	身延町？	
宮・社	1	1	琴平神社	万野原新田	天保15	1844	仕手大工？	精五郎	甲州川内中山村？	山梨県？	身延町？	
宮・社	3	1	富知神社本殿・幣殿・拝殿	朝日町	昭和13	1938	工事請負人	岩崎菊次郎				
宮・社	3	3	富知神社本殿・幣殿・拝殿	朝日町	昭和13	1938	大工	鈴木峯吉				
宮・社	9	1	富士山本宮浅間大社	宮町	寛政8	1796	檜皮大工棟梁	宇右衛門	駿河国富士郡野中村	富士宮市	野中	
宮・社	9	1	富士山本宮浅間大社	宮町	寛政8	1796	檜皮大工	喜兵衛	駿河国富士郡立宿町	富士宮市	大宮町	
宮・社	9	1	富士山本宮浅間大社	宮町	寛政8	1796	檜皮大工	彦五郎	駿河国富士郡東新町	富士宮市	大宮町	
宮・社	9	1	富士山本宮浅間大社	宮町	寛政8	1796	普請奉行	小見文左衛門源安興				
宮・社	9	2	富士山本宮浅間大社	宮町	昭和4	1929	工事監督	土屋純一				
宮・社	9	2	富士山本宮浅間大社	宮町	昭和4	1929	殿内装飾	井上清				宮地直一監修
宮・社	9	2	富士山本宮浅間大社	宮町	昭和4	1929	工事主任	宮田善助				
宮・社	9	2	富士山本宮浅間大社	宮町	昭和4	1929	工事主任助手	田方為吉				
宮・社	9	2	富士山本宮浅間大社	宮町	昭和4	1929	工事主任助手	成瀬寅之助				
宮・社	9	2	富士山本宮浅間大社	宮町	昭和4	1929	大工	鈴木卯之助				
宮・社	9	2	富士山本宮浅間大社	宮町	昭和4	1929	大工	鈴木峯吉				
宮・社	9	2	富士山本宮浅間大社	宮町	昭和4	1929	樵夫	織田富作				
宮・社	9	2	富士山本宮浅間大社	宮町	昭和4	1929	葺工	友井長次郎				
宮・社	9	2	富士山本宮浅間大社	宮町	昭和4	1929	銅工	斉藤弥作				六角紫水指導
宮・社	9	2	富士山本宮浅間大社	宮町	昭和4	1929	塗工	鎌田博夫				
宮・社	9	2	富士山本宮浅間大社	宮町	昭和4	1929	基礎	宮杉正三				
宮・社	9	2	富士山本宮浅間大社	宮町	昭和4	1929	石工	佐野政蔵				
宮・社	9	2	富士山本宮浅間大社	宮町	昭和4	1929	金具	磯村才次郎				
宮・社	9	2	富士山本宮浅間大社	宮町	昭和4	1929	雑作	渡井梅吉				
宮・社	9	2	富士山本宮浅間大社	宮町	昭和4	1929	彫刻	西田光治				
宮・社	15	1	神田蔵屋敷稲荷神社	大宮町	大正12	1923	工事監督	野村徳兵衛				
宮・社	15	1	神田蔵屋敷稲荷神社	大宮町	大正12	1923	工事監督	前田七兵衛				
宮・社	15	1	神田蔵屋敷稲荷神社	大宮町	大正12	1923	工事監督	佐野真七				
宮・社	15	1	神田蔵屋敷稲荷神社	大宮町	大正12	1923	工事監督	佐野市太郎				
宮・社	15	1	神田蔵屋敷稲荷神社	大宮町	大正12	1923	工事請負人	鈴木卯之助				
宮・社	15	1	神田蔵屋敷稲荷神社	大宮町	大正12	1923	棟梁	鈴木峰吉				
宮・社	15	1	神田蔵屋敷稲荷神社	大宮町	大正12	1923	墨根職	朝比奈米作				
宮・社	15	1	神田蔵屋敷稲荷神社	大宮町	大正12	1923	石工	栗田伊三郎				
宮・社	20	3	御国稲荷神社	東町	昭和9	1934	製作人	佐野仁作	大宮町御殿町	富士宮市	大宮町	
宮・社	22	2	天満宮（東町）	東町	嘉永6	1853	大工	亀蔵	伊豆之国住人			
宮・社	22	2	天満宮（東町）	東町	嘉永6	1853	大工	平兵衛	駿河之国住人			
宮・社	26	1	恵王子神社	阿幸地	文化3	1806	工棟梁	池上加賀八藤原宗房	甲斐国巨摩郡身延山下住人	山梨県	身延町	
宮・社	26	1	恵王子神社	阿幸地	嘉永7	1854	工棟梁	亀吉	豆州土肥	伊豆市	土肥	
宮・社	29	1	小浅間神社	弓沢町	昭和11	1936	設計士	鈴木多吉				
宮・社	29	1	小浅間神社	弓沢町	昭和11	1936	石工	星野春敬				
宮・社	29	1	小浅間神社	弓沢町	昭和11	1936	石工	池上藤次郎				
宮・社	29	1	小浅間神社	弓沢町	昭和11	1936	大工	遠藤□□				
宮・社	29	1	小浅間神社	弓沢町	昭和11	1936	大工	佐野信義				
宮・社	29	1	小浅間神社	弓沢町	昭和11	1936	大工	望月喜久				
宮・社	29	1	小浅間神社	弓沢町	昭和11	1936	左官	小林植長				
宮・社	29	1	小浅間神社	弓沢町	昭和11	1936	左官	小林隆次				
宮・社	29	1	小浅間神社	弓沢町	昭和11	1936	左官	望月国造				
宮・社	29	1	小浅間神社	弓沢町	昭和11	1936	左官	和田吉蔵				
宮・社	29	1	小浅間神社	弓沢町	昭和11	1936	瓦職	岡本定造				
宮・社	29	1	小浅間神社	弓沢町	昭和11	1936	墨職	佐野賢次				
宮・社	34	4	天満宮（黒田）	黒田	安政4	1857	大工大棟梁	佐野重兵衛	甲州巨摩郡西川内夫細村住	山梨県		
宮・社	36	1	田中神社	田中町	文政10	1827	大工	直蔵	大宮中宿	富士宮市	大宮町	
宮・社	37	7	黒田八幡宮	黒田	寛政10	1798	大工	佐七	当村	富士宮市	黒田	
宮・社	40	4	八幡宮	沼久保	宝暦14	1764	大工	古屋藤左衛門	甲州塩沢	山梨県	南部町	

第三項 内野神社と工匠

旧白糸村に鎮座する内野神社には、内野氏神社・足形氏神社・横手沢氏神社・山神社が合祀され、各社の棟札三十二枚が納められている。

最も古い貞享元年（一六八四）足形氏神社棟札には□村大工吉川平□・渡部半□とあるが、大工について詳しく知ることはできない。

享保二十年（一七三五）山神社棟札には、内野村の大工石川新左衛門・伊藤奎兵衛そして、内野村の北に位置する猪之頭村の大工平岡九左衛門、南に位置する佐折村の遠藤政右衛門の四名の地元の大工が造営に当たったことが確認できる。

延享二年（一七四五）の内野氏神社拝殿の造営は、「甲斐川内領」の大工万右衛門・惣左衛門・幸右衛門と下内野村の新左衛門・李兵衛が協同で行なっている。「甲斐川内領」は白糸村の西側に連なる天子山地を越えた現山梨県の河内地域である。下内野村の両名は、享保二十年に山神社を手掛け、さらに寛延元年（一七四八）にも山神社に携わっている。翌二年の足形氏神社には伊藤奎兵衛と横手沢村の門齊甚五左衛門が、宝暦八年（一七五八）の横手沢氏神社は同村の大工門齊甚五左衛門が担当した。

その後の安永三年（一七七四）、山神社勧請の札には、「大工下山五左衛門」とあり、内野神社において唯一の下山村の大工である。

文化三年（一八〇六）山神社は、内野村の南の原村の大工次郎右衛門とさらに南下した精進川村の大工忠蔵による。大工忠蔵は、寛政九年（一七九七）に地元の精進川浅間神社を手掛けている。

弘化四年（一八四七）と嘉永五年（一八五二）の内野氏神社には、下内野村の石川吉右衛門が関与している。嘉永三年・五年の内野氏神社棟札には、足形村の佐野治郎左衛門の名が見られる。

嘉永七年の横手沢氏神社の造営には、豆州君沢郡八木沢の「匠美」佐藤太市良藤原環の他、「匠美細工人」四名が関わっている。彼らは旧土肥町（伊豆市）八木

沢の住人で、既に寛政三年（一七九一）に同所の大工棟梁惣助が箕輪八幡宮の造営に関わっている。隣接する甲州の工匠ではなく、西伊豆の工匠とどのような関わりがあったのだろうか。

慶応三年（一八六七）には、下内野村伊藤治右エ門の名が認められる。

以上のように、内野神社は主に地元の大工たちによって建立され、なかでも甲州の大工と地元大工との協同の造営が行なわれているのは着目すべき点である。

第四項 白山神社と甲州身延大工

白山神社は、内野神社の南方の佐折に鎮座する。明和八年（一七七二）の正殿・拝殿の棟札に、甲州身延町大工池上源右エ門、同国仕手池上藤蔵・池上□次郎が認められる。身延門前町の池上氏といえば、中世以来、身延久遠寺の造営に専属的に携わって来た大工である。悪王子神社の文化三年（一八〇六）棟札にも「甲斐国巨麻郡身延山下住人 工棟梁 池上加賀八藤原宗房」と見られる。彼らの名は身延久遠寺の棟札に見られないが、居住地からも一族であったと推測される。

第五項 善能寺と甲州下山大工

善能寺は、日蓮宗西山本門寺の末寺で、寛政二年（一七九〇）の棟札に記された再建縁起によると、天明六年（一七八六）午歳より材木を集め、寛政元年酉二月に新始め、当寺開山の忌日である十一月二十六日に本堂が成就したという。この本堂の再建を手掛けた工匠は、野中村の東に位置する地元黒田村の松村藤左衛門であった。再建の際に、礼盤と鑿子台が新調され、そこには墨書が残る。礼盤には「大工下山住森嶋作兵衛」、鑿子台にも「大工□□下山作兵衛」とあり、下山大工の関わりを窺うことができる。

第六項 大頂寺と伊豆の工匠

大宮町の浄土宗大頂寺は、伊豆の工匠勝呂氏の関わりが見られる。文政二年（一八一九）の宝庫の新築に「工匠 伊豆国住人 勝呂栄蔵豊治・同国住人 勝呂直蔵宗豊」が携わった。

安政二年（一八五五）の本堂棟札によると、安政元年（一八五四）十一月四日に発生した安政東海地震によって本堂は大破し、安政二年五月十三日から二十一日にかけて修復が行なわれた。これは浅間大社門前神田の工師精七と甲斐国住人による応急的な修復であったと思われる。

その後、本堂屋根瓦葺替・向拝増築工事が明治四十三年（一九一〇）七月八日に起工し、翌三十五年十月十五日に竣工している。大工棟梁は「大宮町住人市川金六照重」であるが、「設計并彫刻 豆州田方郡小土肥住人 勝呂万之輔浪義」と記され、向拝部分の設計および彫刻を担当したものであると思われる。小土肥（伊豆市）は旧土肥町の沿岸北部に当たり、西伊豆の工匠との交流が大頂寺でも見られる。

第七項 妙円寺と富士の大工

妙円寺は、日蓮宗小泉久遠寺の末寺で、その本寺の西側に位置する。天保二年（一八三一）に駿州富士郡中野村（富士市大淵）の後藤善蔵によって表門が寄附された。その際、表門の建立を担当した大工は「中野郷 片倉藤蔵・吉原 源蔵」である。「吉原」は富士市の旧吉原宿で、「中野郷」は施主と同郷の「中野村」であろうか。いずれにしる富士宮市に隣接する富士市大淵の施主自らを知る大工に表門を建立させ、寄附した事例であるといえる。

第八項 井出家と甲州薬袋村大工

狩宿の井出家は、鎌倉時代に富士の巻狩りの本陣となった狩宿で代々名主をつとめた家柄である。屋敷の正面中央には高麗門を開き、両脇に茅葺きの長屋が建ち並ぶ。先年の高麗門及び長屋の修復の際に、北長屋の裏甲から墨書が発見された。それにより、嘉永元年（一八四八）十二月十七日に高麗門及び長屋が建立されたことが判明した²⁴。そこには、「甲州摩郡 西川内領薬袋村 大工喜三郎」と記されていた。薬袋村は、現在の山梨県南巨摩郡早川町薬袋で、下山からさらに西に入った早川沿いの村である。『山梨県棟札調査報告書』に薬袋村大工が三名認められるが²⁵、いずれも江戸中期の大工で大工喜三郎の名は見られない。

大工喜三郎の仕事が、井出家の北に位置する上井出稻荷神社本殿に見られる²⁶。安政四年（一八五七）の本殿棟札に「大工甲州西川内薬袋村 藤原吉朝 喜三郎」とある。現本殿は、安政元年（一八五四）の安政東海地震後に再建されたことが棟札によって判明する。井出家の高麗門及び長屋を手掛けた大工喜三郎は、安政東海地震によって被害を受けた上井出稻荷神社の建築を依頼されたのだろう。上井出稻荷神社は、大工喜三郎と「当村棟梁 井出忠左衛門、同 井出利兵衛」の協同で造営され、二間社流造りの本殿が現在も鎮座している。

第九項 上井出村の神社と甲州古関村大工

上井出村の神社には江戸末期から近代にかけての棟札が納められており、それらによると甲州古関村（身延町）の大工が嘉永年間から大正年間まで造営に関与していたことが明らかになった。古関村は、本栖湖を西に下った村で下部温泉の北に位置する（旧下部町）。

嘉永年間、猪之頭村の伊勢神明宮と鷲鷹曾我八幡宮に古関村の大工伊藤氏が関与している。嘉永二年（一八四九）伊勢神明宮再建棟札に「甲斐国八代郡東川内

古関村 大工 伊藤豊兵衛源実昌」と認められるのが初出である。この再建において、杣は「当国富士郡井之頭 杣 植松五郎兵衛・同 植松直蔵」とあり、森林資源が豊富な猪之頭村において木材は、地元の杣によって切り出されていたことがわかる。同七年に伊勢神明宮御殿が上棟され、古関村の工匠伊藤豊兵衛・子手伊藤平次エ門が、当村の杣植松五郎兵衛が携わった。さらに伊勢神明宮近隣の鷲鷹曾我八幡宮でも嘉永六年、古関村の工匠伊藤豊兵衛・子手伊藤平次エ門が御殿の造営を行ない、杣は植松直蔵であったことが棟札から確認できる。

古関村の工匠伊藤氏の甲州での活躍の様子を『山梨県棟札調査報告書』²⁷から窺うことができる。工匠伊藤豊兵衛は、古関村において弘化五年（一八四八）諏訪神社本殿、嘉永二年に諏訪神社本殿（額）、同四年に天神宮（根子）の造営に携わっている。安政六年（一八五九）には、伊藤豊兵衛・伊藤平治右衛門の兩人で伊勢大神宮御殿（中之倉）の再建を行なった。慶応四年（一八六八）工匠伊藤豊兵衛は、古関村の北に位置する市川大門（市川三郷町）の伊勢神明宮御殿に小工伊藤平左衛門と共に関わっている。このように古関村の工匠伊藤豊兵衛をはじめとする伊藤氏は、幕末期に甲州古関村とその周辺地域、さらに駿州上井出村で活躍していたことが明らかになった。

上井出村最北端の根原浅間神社棟札にも旧下部町の大工が見られる。文久元年（一八六一）棟札には、旧下部町内の常葉邑の大工棟梁功金利八、車田邑の大工脇棟梁治郎左エ門と記され、杣は当所の喜右エ門であった。明治十一年（一八七八）には本殿・拝殿の再々建が行なわれ、そこには古関村の工匠を認めることができる。大工棟梁は伊藤宮内右衛門、脇棟梁伊藤清作・磯野宗左エ門・伊藤米造である。嘉永年間に猪之頭村で活躍した古関村の伊藤氏を継ぐ者だろうか。

また、先に触れた内野神社（第三項参照）山神社の明治四十四年（一九一一）棟札にも古関村大字中ノ倉の大工棟梁伊藤庄五郎が認められる。

上井出村の麓東照宮でも、大正九年（一九二〇）の棟札に古関村の大工田中春松父子の名が見られる。

上井出村・白糸村は、昭和初期まで西に連なる天子山地を越えて甲州との行き来が頻繁に行なわれており、日常的な交流もあったと言われる。したがって、建築普請に関しても同様に甲州の工匠との交流が深かったと考えられる。

第十項 沼久保八幡宮と甲州塩沢の大工

富士川の左岸に位置する沼久保には、八幡宮が鎮座している。宝暦十四年（一七六四）の造営には、甲州塩沢（南部町）の大工古屋藤左衛門が当たっている。

古屋藤左衛門の仕事は、地元南部町塩沢でも見られる。天明六年（一七八六）天満天神社本殿と、寛政元年（一七四二）の八幡宮本殿および天満宮本殿棟札に藤左衛門とある。南部町は山梨県でも最南端の富士川沿いの町で、沼久保はその下流に位置することから、他の地域とは異なり、富士川による繋がりがあったと考えられる。

第二節 屋根屋の甲州での活動

甲州の工匠の富士宮市域への進出については前節で明らかになった。一方、当地の工匠の甲州における活動はどのようなものであったか。『山梨県棟札調査報告書』より富士郡の工匠を抽出したところ、数名の屋根屋の名が確認されるのみであった。

富士山北麓の忍野村（山梨県南都留郡）にある浅間神社の延享三年（一七四六）拝殿棟札²⁸には、下吉田村（富士吉田市）大工萱沼氏²⁹に続き「駿州富士野中村家根屋 辰巳伊右門」と記されている。その後の天明二年（一七八二）同社本殿屋根葺替棟札にも、「家根屋富士野 岡村市郎兵衛」とあった。その内、屋根屋辰巳伊右門を上井出稲荷神社の棟札（年代不明）に発見することができた。棟札に

は「屋根屋 辰巳伊右エ門・同断 塩川忠八・同断 辰巳市郎右エ門」と記されており、屋根屋辰巳氏の存在を確認することができる。野中村の屋根屋という点では、富士山本宮浅間大社の寛政八年（一七九六）の棟札に、「檜皮御大工住 駿河国富士郡 野中村 棟梁藤原朝臣 宇右衛門・同国同郡立宿町 喜兵衛・同国同郡東新町 彦五郎」と記され、野中村に檜皮大工の棟梁が在ったことを知ることができる。宇右衛門に続く二名は、浅間大社門前の住人である。

天保六年（一八三五）の景德院（甲州市）山門葺替棟札³⁰には、「下工師 駿河国大宮佐野半兵衛正長」と記され、浅間大社門前大宮町の屋根屋の甲州への進出が見られる。

このように、甲州への屋根屋の進出の事例はいくつか認められたが、大工については甲州の棟札に確認することはできなかった。

第三節 甲州の神主内藤氏

これまで工匠の甲州との交流の実態について見てきたが、上井出村・白糸村の神社については、甲州の神主内藤氏の営業域であったことが【表2-2-2】から確認できる。内藤氏は、美濃守・土佐守・兵庫・嗟と称され、天子山地の西麓の現市川三郷町の住人である。棟札をよく見ると神主内藤氏と甲州の工匠が並んで記されているものもあるが、必ずしも同じ工匠ではなかった。

【表 2-2-2】甲州の神主内藤氏一覧表（『富士宮市の棟札集成』より作成）

分類	建造物名	所在地	和暦	西暦	職名	氏名	住所	現在住所	備考
白・社	3 9 内野神社（足形氏神社）	内野	寛延2	1749	（神主）	内藤美濃守			
白・社	3 13 内野神社（横手沢氏神社）	内野	宝暦8	1758	神主	内藤美濃守	甲州鴨狩村	山梨県 市川三郷町	
白・社	2 1 白山神社正殿・拝殿	佐折	明和8	1771	（神主）	内藤美濃守	甲州鴨狩村	山梨県 市川三郷町	大工身延池上氏
白・社	3 16 内野神社（山神社）	内野	文化3	1806	神主	内藤土佐守			
白・社	3 17 内野神社（足形氏神社）	内野	弘化2	1845	神主	内藤兵庫	甲州八代郡桶南村	山梨県 市川三郷町	
上・社	3 3 伊勢神明宮	猪之頭	安政2	1855	神主	内藤美濃守			
上・社	16 1 上井出稲荷神社	上井出（上峯）	安政4	1857	神主	内藤美濃守	甲斐国八代郡桶南村	山梨県 市川三郷町	
上・社	16 2 上井出稲荷神社	上井出（上峯）	安政4	1857	神主	内藤美濃守	甲斐国八代郡桶南村	山梨県 市川三郷町	大工業袋村喜三郎
上・社	1 1 根原浅間神社本殿	根原	文久1	1861	神主	内藤土佐守藤原吉致	甲陽八代郡鴨狩村	山梨県 市川三郷町	大工常葉邑・車田邑
上・社	1 2 根原浅間神社拝殿	根原	文久1	1861	神主	内藤土佐守藤原吉致	甲陽八代郡鴨狩村	山梨県 市川三郷町	
上・社	10 1 芝山浅間神社	上井出（芝山）	慶応2	1866	神主	内藤土佐守			
上・社	16 3 上井出稲荷神社	上井出（上峯）	慶応3	1867	神主	内藤土佐守藤原吉致	甲斐国八代郡川内鴨狩村	山梨県 市川三郷町	
上・社	16 4 上井出稲荷神社	上井出（上峯）	慶応3	1867	神主	内藤土佐守吉致			
白・社	3 24 内野神社（内野氏神社）	内野	明治2	1869	神主	内藤土佐藤原吉致	甲斐国八代郡鴨狩津向村	山梨県 市川三郷町	
白・社	3 25 内野神社（足形氏神社）	内野	明治2	1869	神主	内藤土佐吉致	甲斐国八代郡東川内鴨狩津向村	山梨県 市川三郷町	
白・社	3 26 内野神社（足形氏神社）	内野	明治2	1869	神主	内藤土佐藤原吉致	甲斐国八代郡鴨狩津向村	山梨県 市川三郷町	
上・社	1 3 根原浅間神社本殿・拝殿	根原	明治11	1878	祠官	内藤吉致	山梨県20区鴨狩津向村	山梨県 市川三郷町	大工古関村
上・社	1 5 根原浅間神社鳥居	根原	明治22	1889	祠官	内藤吉致	山梨県西八代郡鴨狩津向村	山梨県 市川三郷町	
白・社	3 29 内野神社（山神社）	内野	明治44	1911	社掌	藤原朝臣内藤暲	甲斐国西八代郡鴨狩津向村	山梨県 市川三郷町	大工古関村
上・社	2 9 籠東照宮	籠（金山）	大正9	1920	社掌	内藤暲	山梨県西八代郡鴨狩津向村	山梨県 市川三郷町	大工古関村
上・社	10 2 芝山浅間神社	上井出（芝山）	大正14	1925	社掌	内藤暲			
上・社	16 6 上井出稲荷神社	上井出（上峯）			神主	内藤			

駿河国とその周辺地域に範囲を広げて建築普請活動の事例を検証した。

元禄十年（一六九七）の遠州一宮・駿州村山浅間の三社同時造営は、作事方大棟梁甲良豊前の下その弟甲良次郎左衛門が取り仕切り、それに続いて駿府棟梁花村与七郎の名が認められる。花村与七郎家は駿府において公儀作事に参画してきたが、駿河・遠江両国の公儀作事にも地元の棟梁として携わっていたことが判明した。江戸町棟梁松井八郎左衛門も三社造営に関与している。さらに遠州一宮両社の造営には、大工棟梁高木助右衛門をはじめとした遠州一宮棟梁も参画した。

富士山西麓の富士宮市の棟札等史料から工匠を抽出し、当地における建築普請活動と工匠について分析した。幕府による公儀作事の事例は棟札に見られなかったが、山梨県河内地域の工匠の進出がさらに明らかになった。日蓮宗寺院と甲州工匠の関係が富士宮市の寺社にも表われ、富士宮市北部の上井出村・白糸村では、西側に連なる天子山地を越えて甲州との行き来が頻繁に行なわれたことから、甲州の工匠との交流が認められる。富士川左岸の沼久保においては、富士川上流沿岸域の甲州塩沢大工による仕事が見られた。

註

- 1 鈴木棠三・保田晴男『近世庶民生活史料 未刊日記集成 鈴木修理日記』三一書房、一九九七～八。（以下『鈴木修理日記』）
 - 2 北島恵介「小國・天宮社の歴史的概要」（特定非営利活動法人静岡県伝統建築技術協会『静岡県指定有形文化財 天宮神社本殿及び拝殿修理工事報告書』天宮神社、二〇一三、第一章第二節）
 - 3 『静岡県指定有形文化財 天宮神社本殿及び拝殿修理工事報告書』（以下『天宮神社報告書』）
 - 4 黒板勝美・國史大系編集会『新訂増補國史大系 徳川実紀』第二篇、吉川弘文館、一九八一。（以下『徳川実紀』）
 - 5 『磐田市誌シリーズ 第六冊 中泉代官』磐田市誌編纂委員会、一九八一。
 - 6 『鈴木修理日記三』元禄十六年十二月二十八日条。
 - 7 『鈴木修理日記三』元禄十二年一月二十七日条。
 - 8 一大棟梁棟梁甲良豊前弟次郎左衛門、只今迄御扶持方不被下候得ども、大棟梁並ニ諸事相勤来申候、
 - 9 『鈴木修理日記三』元禄十六年八月十四日条。
 - 10 『東京都の地名』日本歴史地名大系第十三巻、平凡社、二〇〇二。
 - 11 『遠州周智郡一宮記録』延宝八年（一六八〇）、小國神社蔵。
 - 12 『鈴木修理日記三』元禄十年一月十八日条。
 - 13 『天竜市史 続資料編1 田代家文書一』天竜市教育委員会、一九九九、所収。
 - 14 「一之宮修復用樽木筏乗下げ賃金の増額願」同右、所収。
 - 15 建部恭宣「棟札と大工の活動状況」『森町史資料編別冊 森町の棟札・金石文』森町、一九九八。
 - 16 統群書類従完成会『新訂寛政重修諸家譜』八木書店、一九八五。
 - 17 『寛永以来御作事奉行御大工頭代々録』国立国会図書館蔵。
 - 18 『森町史』資料編三近世、森町、一九九三、所収。
 - 19 『天宮神社報告書』所収。
 - 20 同右、所収。
- 日本建築専門学校編『富士宮市の棟札集成』富士宮市教育委員会、二〇〇一。
- 日本建築専門学校編『富士宮市の伝統建築』富士宮市教育委員会、二〇〇〇。
- 特定非営利活動法人静岡県伝統建築技術協会『富士宮市指定有形文化財井出家高麗門及び長屋修復整備工事報告書』富士宮市、二〇一六（以下、『井出家報告書』）。
- 波多野純建築設計室『甦れる往代の威容 総本山大石寺御影堂大改修工事全記録』大日蓮出版、二〇一六。

- 21 甲州の工匠については、『山梨県史資料叢書 山梨県棟札調査報告書』山梨県、一九九六～二〇〇五、を参照した。
- 22 『徳川実紀』第七篇、正徳二年（一七二二）五月三十日条。
駿河国富士郡大石寺山門再興によて。主僧日有願ひのまゝに。富士山の梅樅以下の雑木伐取事をゆるさる。
- 23 表面は「天保十五甲辰稔 二月十六日 上棟」と記された曼荼羅で建造物名はないが、もう一枚同年同日「天保十五甲辰歳二月十六日祭棟」「客殿一字再建」棟札が存在する（北・寺三八 北山本門寺客殿棟札『富士宮市の棟札集成』。後者には工匠は記されていないため、【表二・三二一】には示していない。
- 24 拙稿「井出家高麗門及び長屋の建立年代」（『井出家報告書』）
25 二五四 本照寺（山梨県西八代郡市川三郷町落居）
長屋・雪隠 寛政四年（一七九二）棟札
「大工早河入葉袋村住人水野源八同源治造之」
- 『山梨県史資料叢書 山梨県棟札調査報告書 郡内Ⅱ・河内Ⅱ・補遺』
四九 玉諸神社（甲府市国玉町）
本殿 享和三年（一八〇三）棟札
「葉袋村大工 望月喜右衛門」
- 26 『山梨県史資料叢書 山梨県棟札調査報告書 国中Ⅰ』
27 拙稿「大工喜三郎と甲州との交流」（『井出家報告書』）
28 『山梨県史資料叢書 山梨県棟札調査報告書 郡内Ⅱ・河内Ⅱ・補遺』
一三〇 浅間神社（南都留郡忍野村忍草）
拝殿 延享三年（一七四六）造立棟札
- 29 『山梨県史資料叢書 山梨県棟札調査報告書 郡内Ⅱ・河内Ⅱ・補遺』
奈良文化財研究所『北口本宮富士浅間神社建造物総合調査報告書』北口本宮浅間神社、二〇一六
- 30 四二八 景德院（甲州市）山門 天保六年（一八三五）葺替棟札
『山梨県史資料叢書 山梨県棟札調査報告書 国中Ⅰ』

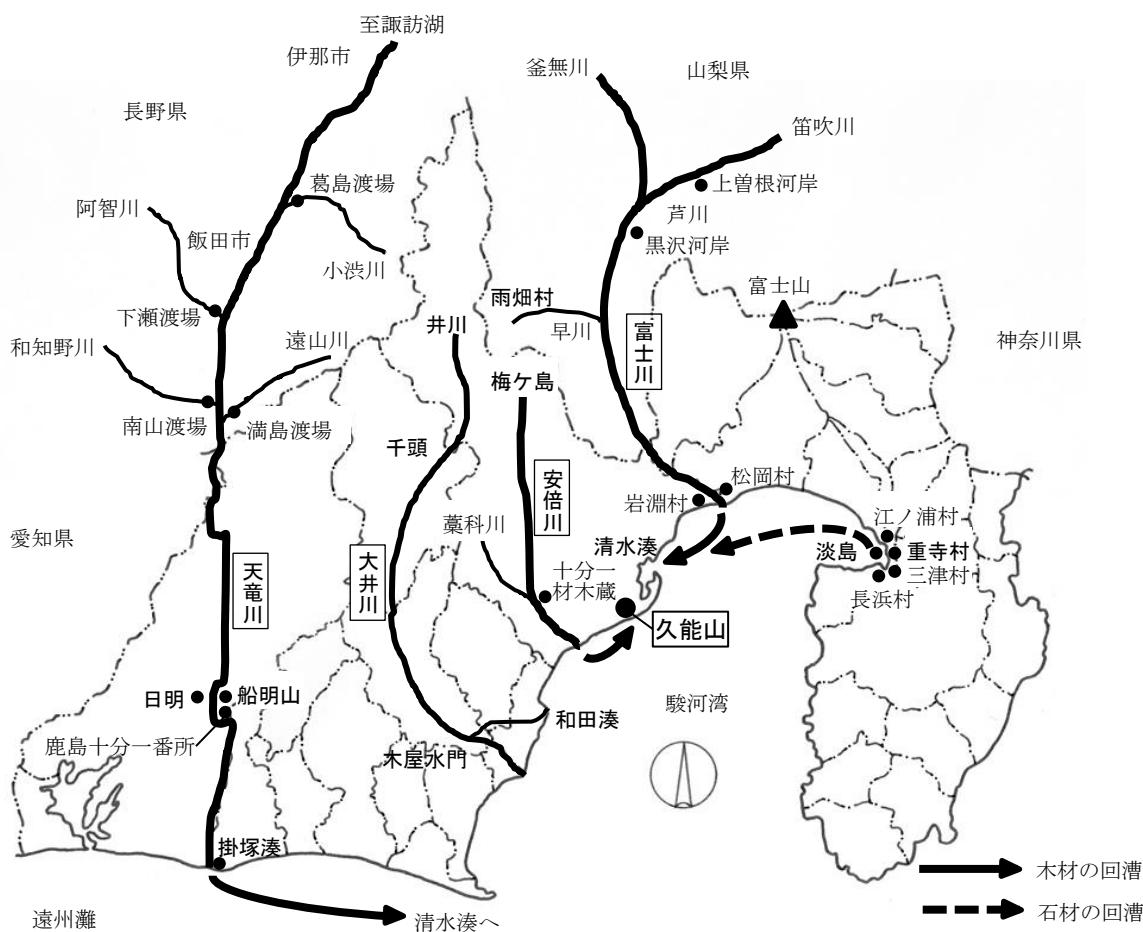
第三部 建築用材の流通―木材と石材

静岡県には、天竜川・大井川・安倍川・富士川の四大河川が流れ、その上流域には豊かな山林が広がっている。古くから、その山林からは建築用材が切り出されてきた。明治二十二年（一八八九）に東海道本線が開通するまで、建築用材は川を利用して河口まで筏下げされ、その後廻船で江戸をはじめ各方面へ運送されていた。また、石材は伊豆半島の各地から切り出され、その多くは「伊豆石」と呼ばれて広く重用されてきた。駿河国およびその周辺の修営において、木材・石材はどこからどのように調達されたのだろうか。各地に残る史料から、その一端を窺うことができる。

天竜川上流域からは、修営用の木材と榑木が河口の掛塚湊まで川下げされた。掛塚湊で廻船に積み込まれ、駿府をはじめ、江戸・大坂等東西各地に建築用材は運送された。久能山東照宮の修営の際には、清水湊まで榑木等が回漕されている。木材は大井川上流の井川山（静岡市葵区）・千頭山（川根本町）からも伐出された。大井川を川下げし、道悦島村（島田市）から木屋水門に入り、木屋川を下って、和田湊（焼津市小川港）に至り、そこから廻船にて各方面へと運ばれた。安倍川上・中流域（静岡市葵区）から切り出された建築用材も駿府・久能山をはじめ、清水湊から各地へ回漕された。久能山修復用材は、安倍川を筏下げされ、駿府の十分一材木蔵にて材木を改められ、その後、河口まで下げられると、沿岸を通じて久能山下に着岸している。

富士川においては、山梨県の富士川流域・富士山北西麓から久能山へ建築用材が奉納されている。笛吹川の上曾根河岸や甲州三河岸の一つ黒沢河岸から川下げされた材木は、富士川河口から沿岸を通り清水湊へ運ばれた。

石材は「伊豆石」が重用され、久能山及び駿府城へは、西伊豆の重寺村（沼津市内浦）から切り出された石材が搬入されている。重寺村は、駿河湾を挟んで清水湊の東に位置し、当地産の伊豆石は清水湊を経由して江戸へも回漕されていた。



【図 3-1】木材・石材の流通地図

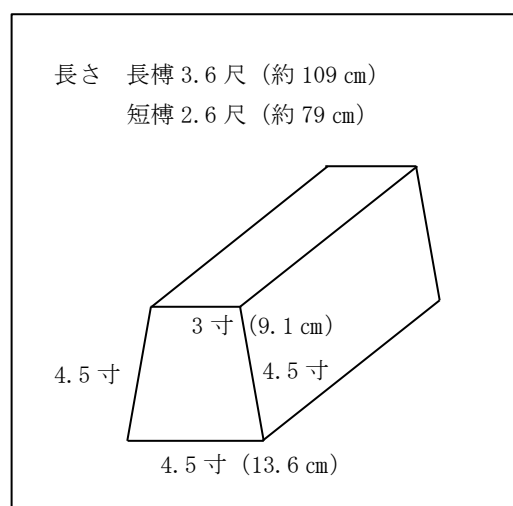
第一章 大河川による木材流通

第一節 天竜川筋の木材と樽木

信州・遠州を流れて遠州灘へ注ぐ天竜川は、その上流域に広がる山林から伐出された大量の木材及び樽木を運ぶ一大動脈であった。天竜川河口左岸の掛塚湊（磐田市）は江戸・駿府をはじめ東西各方面へ向かう廻船の拠点となった。幕府の命によって、信州諏訪から遠州掛塚湊までを開削し、天竜川の通船を可能にしたのは、角倉了以で慶長十二年（一六〇七）のことである¹。

大坂城・江戸城等の御用木として、近世初頭から木材・樽木は盛んに川下げされた。駿府城御用木としては慶長十四年（一六〇九）²と元和五年（一六一九）の記録がある。「元和五年駿府城御用木諸払勘定帳写」（資料六十三）が、天竜川中流の北鹿島村（浜松市天竜区二俣町）の名主田代家に残っている。当家は、江戸時代を通じて筏の受け継ぎ問屋であり、船荷や筏に十分の一の税をかける鹿島十分一番所の役目を務めたこともあった。元和五年、駿府城に運送された御用木は二百十八本で、長さ二間半の六寸角が六十六本、長さ二間の五寸角が七十二本、その他三寸七分角までの材木が納められた。御用木は、鹿島から掛塚湊まで川下げされ、掛塚湊で廻船へ積み込まれ清水湊へ着き、駿府へ運送されている。

久能修復御用木については、「寛保二壬戌年万留帳」³に見ることが出来る。寛保二年（一七四二）二月二十五日から二十七日にかけて掛塚湊沖で、掛塚八郎左衛門船に御用木三百本、樽木三千挺の積み込み作業が行なわれていた。全樽木と木材二百五く六本を積んだところ、波に取られ、渥美半島の赤羽根村（愛知県田原市）沖で破船した。この事故を受け、近年の御用木破船について元禄九・十三・十四年の留帳を吟味する、と記されている。このような破船はたびたび起ったため、御用木の引き揚げ等について、随時浦触れが出されていた。



【図 3-1-1】樽木（元禄 12 年（1699）手本木）
（所三男「江戸幕府初期の営林事業」
『徳川林政史研究所研究紀要』1977）

良質な樽木は信州伊那から産出されている。樽木とは、榎・檜・杉などの良材で、主に板状に剥いで屋根板として使用された。丸太を短く切って、蜜柑のように割り、さらに断面が台形（三辺四寸五分、一辺（腹）三寸）になるように作ったもので、長さ三尺六寸の長樽と、二尺六寸の短樽の二種類があった【図三-1-1】。山から御用木を伐出し、山許で樽木に製材された。そこから天竜川の合流地点の集積所「渡場」まで支流を利用して流し蓄積した。渡場の樽木は、まとめて天竜川に「渡入れ」され、鹿島の北に位置する「船明山」と呼ばれる樽木集積所に蓄えられた。船明は天竜川の左岸で、対岸の日明との間に綱を張り、上流域から管流し（木材・樽木を一本ずつバラバラに流す方法）された樽木を留めて、陸揚げする場所であった（享保十年（一七二五）以降は筏下げ）。船明に揚げられた樽木は、樽木奉行によって、品質・長短など検査・分類され、二千挺を一棚として船明山に棚積みし、勘定目録が作成された。これらの樽木は幕府の命で必要に応じて、筏組み又は船積みで、掛塚湊へ川下げされた⁴。

【表 3-1-1】樽木の渡入れと納入先一覧表

渡入れ年		納入先	種類	数量	筏賃(船明-掛塚)	運賃(掛塚-)	備考
				(挺)	(/ 6千挺)	(/ 千挺)	
延宝元年丑	(1673)	遠州浜松五社・諏訪修復	本樽木	42,285	金1両		
		遠州新井御殿修復	本樽木	682	金1両		317+682+175=1174
延宝2年寅	(1674)						
延宝4年辰	(1676)	遠州新井御殿修復	本樽木	154			
延宝7年末	(1679)	駿州清水舟蔵	本樽木	8,207	金1両	金1両1分銀8匁2分5厘 (-清水)	
		駿府城	本樽木	50,000	金1両	金1両1分銀8匁2分5厘 (-清水)	
		駿府城	本樽木	50,000	金1両	金1両3分2朱 (-清水)	
		駿府城代・城番・町奉行屋敷	本樽木	63,800	金1両	金2両1分 (-清水)	
		久野御宮坊中	本樽木	20,000	金1両	金2両1分 (-清水)	
		来宮御殿	本樽木	50,000	金1両	金2両3分銀13匁 (-大坂)	
		三州鳳来寺・松応寺・信光明寺修復	本樽木	52,943			
天和3年亥	(1683)	駿府城	本樽木	5,000	金1両	金1両2分銀2匁5分 (-清水)	
		駿府城	本樽木	5,000	金1両	金1両3分銀2匁5分 (-清水)	
		駿府宝台院修復	本樽木	15,000	金1両	金1両2分銀5匁 (-清水)	
		駿府宝台院脇寮六ヶ寺葺替	本樽木	10,000			
		尾州熱田御宮修復	本樽木	80,000	金1両	金1両3分銀7匁5分 (-尾州白鳥)	
		大坂城	本樽木	10,000	金1両	金2両3分銀13匁 (-大坂)	
		三州六所明神・高月院修復	本樽木	30,660	金1両	金1両3分 (-三州平坂)	
貞享3年寅	(1686)	駿府城・久能御宮坊中	本樽木	30,000	金1両	金1両2分銀5匁 (-清水)	
		駿府城	本樽木	8,000	金1両	金1両2分銀5匁 (-清水)	
		駿府城	本樽木	27,000	金1両	金1両2分銀5匁 (-清水)	
		駿府城	本樽木	6,000	金1両	金1両3分 (-清水)	
		駿府城・宝台院修復	本樽木	43,000	金1両	金1両3分 (-清水)	
		駿府浅間御宮修復	本樽木	100,000	金1両	金1両2分銀5匁 (-清水)	
		駿州清水舟蔵	本樽木	1,650	金1両	金4両2分銀9匁3分9厘3毛 (-清水)	相届候運賃
		相州大山不動修復	本樽木	48,630			
		江戸南萱場町売人	本樽木	500,000			
		江戸三拾間堀材木屋又右衛門	悪樽木	1,000,000			
元禄2年巳	(1689)	駿府城	本樽木	10,000	金1両	金1両3分 (-清水)	
		駿府町奉行衆屋敷修復	本樽木	52,010	金1両	金1両3分 (-清水)	
		駿府久能山坊中修復	本樽木	20,000			
		駿州清水役屋敷修復	本樽木	10,000			
		遠州気賀番所修復	本樽木	3,296			
		今切閑所修復・奉行衆役家普請	本樽木	6,069			
		三州鳳来寺修復	本樽木	31,078	金1両		
「元禄二年七月遠州舟明山樽木中勘定目録」(秋鹿家文書『磐田市史』史料編4近世追補(1))							
「元禄十年五月遠州舟明山樽木中勘定目録」(同上)							
※筏賃・運賃空欄は、史料中に記載無							

秋鹿・千村両樽木奉行によって「遠州舟明山御樽木中勘定目録」⁵が作成された。延宝元年(一六七三)から元禄二年(一六八九)までの樽木の渡入れと納入先が記され、十七年間に七回渡入れが行なわれたことがわかる。江戸・大坂はもちろんのこと、三州・相州、そして駿府城をはじめとした駿州、地元の遠州にも大量の樽木が送られている。公儀の普請に関わるものを【表三・一】にまとめた。

駿府城と久能山東照宮には、ほぼ毎回本樽木が納入され、駿府においては宝台院と静岡浅間神社、遠州では浜松五社・諏訪神社および各関所関連の修復用として本樽木が搬送された。

延宝七年(一六九七)に天竜川上流から出された樽木の内、「久野御宮坊中樽木」として二万挺が搬送されている。「久能山御宮堂舎造営覚」⁶によると、翌八年に、別当德音院の居間・台所・物置・蔵の屋根の葺き替えに使用されたことが確認できる。

この勘定目録には運賃についても記され、船明山から掛塚湊までの「川下シ筏乗賃」として、樽木六千挺に付き金一両とあり、これは変動することがなかった。一方、掛塚湊から各地への運賃については、駿府行きの場合、掛塚湊から清水湊までの「積廻候運賃」は千挺に付き、金一両一分から金二両二分までの幅がある。駿州清水舟蔵については、金四両二分銀九匁三分九厘三毛と突出しており、「相届候運賃」と他と区別されている。大坂までは、金二両三分銀十三匁となっている。延宝元年(一六七三)の浜松五社・諏訪神社及び新井御殿については、掛塚からの運賃の記載はなく、筏賃のみであることから、陸送されたと考えられる。

元禄十年八月、樽木筏乗下げ賃金について、十三ヶ村の庄屋から中泉代官内山七兵衛へ宛てて、「一之宮修復用樽木筏乗下げ賃金の増額願」【史料三・一】が提出された。

【史料三一―一】「一之宮修復用樽木筏乗下げ賃金の増額願」⁷

乍恐以書付奉願候事

一 今度當国一之宮御修覆御入用御樽木、船明山より御出し被遊、下野部迄筏川下シ就被仰付候ニ、筏賃金之儀欠塚迄之道程之積りを以、下野部迄者筏鎮金欠塚迄之三分一敷三分二敷と願申候様ニ被仰付候へ共、新井御番所・氣賀御関所御修覆御用御樽木并鳳来寺御修復御樽木も鹿嶋・中之町屋へ御揚被遊候へ共、欠塚並と金老両ニ六文引積り、筏賃金被下置候、殊ニ御樽木撰立筏ニ攪キ申候へハ、大分手間も掛り申事ニ御座候間前々之通下野部迄も筏乗賃金之儀、弥欠塚並ニ賃金被下置候様ニ奉願候、以上

元禄十年丑八月

舟明村 庄や七左衛門（印）

（他十二名略）

内山七兵衛様

これは、遠州一宮（周智郡森町の小國神社・天宮神社）の造営に用いられる樽木筏乗下げ賃金の増額を願ひ出たものである。遠州一宮は天竜川左岸の内陸に位置するため、船明山から筏下げされた樽木は、鹿島下流左岸の下野部（磐田市下野部）で陸揚げされ、さらに東に位置する遠州一宮まで陸送されている。ここで問題になっているのは、天竜川河口の掛塚湊に至らずに陸揚げする場合の筏賃金である。【表三一―一】によると、元禄二年（一六八九）までの船明く掛塚湊の筏賃は、樽木六千挺に付き金一両であった。今回、下野部までの運賃は、掛塚の三分の一か、三分の二にするよう命じられ、これについて、先例を掲げて賃金の増額を願ひ出ている。天竜川西岸の東海道「新井御番所」（湖西市新井町）・姫街道「氣賀御関所」（浜松市北区細江町）・「鳳来寺」（愛知県新城市）の場合は、鹿島等で陸揚げしたが、掛塚並みであったという。さらに船明山で樽木を選び筏に組むには大分手間が掛ると書き加え、下野部まで筏乗下げの場合も、掛塚並みの賃金への増額を嘆願している。

また、当地の者が富士川にて筏乗りをすることもあった（資料六十四）。これは、元禄十年九月、甲州佐野山（山梨県南部町）から伐出される材木を堺屋加兵衛が請負うこととなった。そこで、甚平他四名が富士川長筏の乗り手として、九月から十二月まで召し抱えられたものである。

また、各村の庄屋十二名から中泉代官野田三郎左衛門へ宛てた「万高書上帳」【史料三一―一】には、貞享二年（一六八五）から元禄十二年（一六九九）までに船明山から出された樽木の行き先と種類・数量が記されている。

【史料三一―一】「万高書上帳」（元禄十二年八月）⁸

（表紙）

元禄十弐年

遠州船明山より御樽木方々江御出シ被遊候万高書上帳

卯八月

（本文）

貞享二丑四月

一 上樽木 貳拾万挺

江戸御用

小以

丑ノ年分

寅二月

一 上樽木 五千挺

駿府御用

寅三月

一 本樽木 五千挺

駿府御用

（前略）

丑七月

一 本樽木 壹万五千百六拾八丁

村山浅間

【表 3-1-2】樽木納入一覧表（「万高書上帳」より作成）

西暦	和暦		種類	挺	納入先
1685	貞享2年丑	4月	上樽木	200,000	江戸御用
			合計	200,000	
1686	貞享3年寅	2月	上樽木	5,000	駿府御用
		3月	本樽木	5,000	駿府御用
		4月	上樽木	80,000	尾州熱田
		9月	上樽木	100,000	江戸御用
		10月	本樽木	10,000	大坂御用
			合計	200,000	
1687	貞享4年卯	6月	上樽木	200,000	江戸御用
		11月	本樽木	15,000	駿府御用宝台院
			合計	215,000	
1688	元禄元年辰	3月	上樽木	200,000	江戸御用
		4月	本樽木	10,000	駿府御用宝台院
		11月	上樽木	200,000	江戸御用
		12月	上樽木	20,000	大坂御用
			合計	430,000	
1689	元禄2年巳	11月	上樽木	150,000	江戸御用
		5月	上樽木	30,000	駿府御用
			合計	180,000	
1691	元禄4年未	3月	上樽木	100,000	江戸御用
		7月	本樽木	100,000	駿府御用
		11月	上樽木	100,000	江戸御用
		12月	上樽木	20,000	駿府御用
			合計	320,000	
1692	元禄5年申		上樽木	150,000	江戸御用
			上樽木	150,000	江戸御用
			合計	300,000	
1693	元禄6年酉		本樽木	7,000	駿府御用
		5月	本樽木	48,630	相州大山不動
		9月	上樽木	150,000	江戸御用
			上樽木	150,000	江戸御用
			合計	355,630	
1694	元禄7年戌	3月	本樽木	43,000	駿府宝台院
		6月	上樽木	150,000	江戸御用
		6月	上樽木	6,000	駿府御用
		8月	上樽木	1,650	駿府御用
		8月	上樽木	150,000	江戸御用
		12月	本樽木	3,296	遠州気賀御閑所御用
		12月	本樽木	30,000	駿府御用
			合計	383,946	
1695	元禄8年亥	2月	本樽木	31,078	三州鳳来寺御用
		7月	上樽木	150,000	江戸御用
		9月	本樽木	10,000	駿府御用
			合計	191,078	
1696	元禄9年子	3月	本樽木	10,000	駿府御用
		6月	上樽木	200,000	江戸御用
		7月	本樽木	180	新居御閑所
		8月	上樽木	150,000	江戸御用
		8月	本樽木	25	新居御閑所
		8月	本樽木	5,864	新居御閑所
		10月	本樽木	52,010	駿府御用
			合計	418,079	
1697	元禄10年丑	2月	本樽木	110,000	駿府御用
		2月	上樽木	200,000	江戸御用
		2月	上樽木	164,330	鎌倉御用
		7月	本樽木	15,168	村山浅間
		7月	上樽木	30,082	三州大樹寺
		7月	本樽木	19,180	三州松応寺
		8月	上樽木	150,000	上野御入用
		8月	上樽木	43,000	遠州一ノ宮・天宮
		8月	上樽木	31,250	三州滝山寺
		9月	上樽木	200,000	江戸御用
		10月	上樽木	13,756	三州大樹寺
		10月	上樽木	20,000	駿府御用
		10月	本樽木	15,630	駿府御用
			上樽木	9,988	遠州一ノ宮・天宮
			合計	1,022,384	※922312（史料合計）
1698	元禄11年寅	2月	上樽木	20,000	駿府御用
		6月	上樽木	150,000	江戸御用
			上樽木	909	新居御番所
			上樽木	17,102	三州信光明寺
		9月	上樽木	2,910	三州信光明寺
		9月	上樽木	8,158	三州伊賀八幡
		9月	上樽木	150,000	江戸御用
		12月	短樽木	143,853	江州多賀
		12月	悪樽木	13,000	江戸御用
		12月	上樽木	10,000	駿府御用
			合計	515,932	
1699	元禄12年卯	4月	悪樽木	202,720	江戸御用
		4月	短樽木	97,280	江戸御用
		4月	悪樽木	13,000	江戸御用
		7月	悪樽木	300,000	江戸御用
		7月	悪樽木	10,000	大坂御用
			合計	623,000	

右者貞享貳丑ノ年より元禄七戌ノ年迄拾ケ年平均 壹ケ年ニ貳拾五万
 八千四百五拾七丁宛御樽木出申候、元禄八亥ノ年より同拾貳年卯七月迄
 五ケ年之内、平均壹ケ年ニ五拾三万四千八拾丁宛御樽木出申候、跡々之
 儀者御樽木少々宛出申候得共、扣帳無御座候故書上ケ不申候、右之通り
 少茂相違無御座候、以上

（中略）

丑ノ年
 一 上樽木 九千九百八拾八丁
 小以 九拾貳万貳千三百拾貳丁 丑ノ年分
 遠州一ノ宮・天宮

野田三郎左衛門様

（中略）
 一 上樽木 四万三千丁
 遠州一ノ宮・天宮

元禄拾貳年卯八月

船明村 喜兵衛 印
 鮎釣村 佐次兵衛 印
 雲名村 権兵衛 印
 横山村 惣右衛門 印
 月 村 新次郎 印
 伊砂村 孫左衛門 印
 日明村 太郎右衛門 印
 大藪村 甚兵衛 印
 渡ヶ嶋村 権兵衛 印
 西鹿嶋村・瀬崎村・佐崎野村
 吉太夫 印
 北鹿嶋村七郎左衛門 印
 川口村 孫十郎 印

樽木は、「上樽木・本樽木・短樽木・悪樽木」の四種類に分けられ、その搬送先は、掛塚湊を経由して、駿府をはじめ東は江戸・鎌倉・相州、西は三州・尾州・江州・大坂など東西広域に及んでいた【表3-1-2】。江戸御用として毎年「上樽木」が二十万挺もしくは十五万挺という単位で搬送されている。また、「駿府御用」として、ほぼ毎年「上樽木」と「本樽木」が納入されている。「万高書上帳」によると、貞享二年（一六八五）～元禄七年（一六九四）の十ヶ年の平均は二五八、四五七挺／年、元禄八年～十二年の五ヶ年の平均は五三四、〇八〇挺／年で、元禄八年以降に樽木の数量が倍増している。特に元禄十年が最も多く、合計九二二、三一二挺と記録されている。幕府作事方によって同時造営が行なわれた「村山浅間」と「遠州一ノ宮・天宮」の他に、三州、鎌倉、上野御用も見られる。元禄十二年については江戸および大坂御用として「悪樽木」「短樽木」が納められている。

元禄十年（一六九七）一月に、「遠国所々見分大積之覚」が被官組頭鈴木与次郎から作事奉行加藤兵助へ提出された。これは、元禄七年七月から元禄九年九月までに見分が実施された十六ヶ所の見積と修復の状況を示したものである【表3-1-2】。造営費用が突出している鎌倉八幡宮は、元禄十年当時修復中である。この中に、駿府城代屋敷・町奉行屋敷も含まれ、「遠州一之宮」と「駿州村山浅間」も見られる（第二部第二章参照）。

【表3-1-1】樽木納入先一覧表と【表3-1-3】「遠国所々見分大積之覚」一覧表とを照合することができる。【表3-1-3】に挙げられた見積見分実施の寺社を【表3-1-2】に確認することができる（太字表記）。掛塚樽木の見積量と納入量について【表3-1-3】で検討してみたい。三州鳳来寺は、元禄十年時点で修復は完了しているが、掛塚樽木三五、二二九挺の見積に対して、同量が納入されたことが確認できる。鎌倉八幡宮については「鎌倉御用」の内に含まれると考えられ、十万挺は鎌倉の他所、端数の六四、三三〇挺は見積通りの納入である。三州大樹寺・三州松応寺・村山浅間神社は、見積量とほぼ同量の納入である。三州信光明寺と遠州一之宮については、見積以上の樽木が納入されている。

【表 3-1-3】「遠国所々見分大積之覚」一覧表（元禄 10 年 1 月 17 日付）

年 代	見分地	金 (両)	材 木	掛塚樽木 (挺)	担 当	修 復	備 考
元禄7年7月	三州鳳来寺	550	材木その他一式	35,229	前沢藤兵衛	済	元禄8年2月本樽木35,229挺納入
元禄7年8月	鎌倉八幡宮	7,280	材木は蔵木	64,330	坂本三郎兵衛	中	元禄10年2月「鎌倉御用」上樽木164,330挺納入
元禄7年8月	伊豆権現	1,195	材木は蔵木	39,371	坂本三郎兵衛	中	
元禄7年8月	箱根権現	870	材木は蔵木	22,744	坂本三郎兵衛	中	
	新田大光院	528	材木は蔵木	45,664	大石忠左衛門	中	※1
元禄9年3月	上州世良田	290	材木は蔵木	6,150	内山清左衛門	中	
元禄9年4月	三州大樹寺	1,850	材木は蔵木	30,100	谷田清三郎	中	元禄10年7月上樽木30,082挺納入
元禄9年4月	三州信光明寺	950	材木は蔵木	15,750	谷田清三郎	未	元禄11年上樽木17,102挺納入 元禄11年9月上樽木2,910挺納入
元禄9年4月	三州松応寺	1,000	材木は蔵木	19,100	谷田清三郎	未	元禄10年7月本樽木19,180挺納入
元禄9年4月	日光御仮殿	1,888	材木は蔵木	16,160	豊田次郎兵衛	済	
	日光下御廄	37	材木は蔵木	720	豊田次郎兵衛	済	
	駿府城代 御役屋舗	988	材木その他一式	33,820	前沢藤兵衛	修復料	
元禄9年6月	駿府町奉行衆 御役屋舗	355	材木その他一式	8,980	前沢藤兵衛	修復料	
元禄9年6月	駿府町奉行衆 御役屋舗	306	材木その他一式	9,210	前沢藤兵衛	修復料	※2
元禄9年9月	遠州一之宮	3,107	材木は蔵木	30,580	内山清左衛門	未	元禄10年8月上樽木43,000挺納入 元禄10年上樽木9,988挺納入
	駿州村山浅間	1,645	材木は蔵木	15,300	内山清左衛門	未	元禄10年7月本樽木15,168挺納入
惣金高 金22,840両、銀13匁 惣樽木高 493,209挺 ※3							

『鈴木修理日記』元禄 10 年 1 月 18 日「遠国所々見分大積之覚」より作成

※1 謹 528 両 2 分、銀 13 匁 ※2 金 306 両 2 分 ※惣金高・樽木高は史料の通り
備考欄の樽木納入記録は、田代家文書「万高書上帳」より【表 3-1-2】参照

第二節 大井川筋の木材

大井川筋は、上流の井川山（静岡市葵区）・千頭山（本川根本町）から木材が伐出されてきた。

元禄五年（一六二九）の史料（資料六十五）によると、慶長十九年（一六一四）初めて大井川の支流の寸又川によって駿府城本丸御用木を出したとある。この時、百姓に槻・柏・檜二万五千本を伐出するよう命じ、奉行は海野弥兵衛と朝倉六兵衛、手代西村源兵衛で、材木には極印[⊕]が押されたと記される。寛永十三年（一六三六）からは、三ヶ年かけて静岡浅間神社再建の御用材木が伐出されている。請負人は駿河孫左衛門他三人で、槻・柏・檜が六万本余「浅間御用木」の極印が押され送られた。寛永十六年には、江戸城本丸御用木として、檜・榿一万二千本余を二ヶ年かけて伐出している。さらに万治元年（一六五八）にも江戸城本丸御用木が一万二千本余を二ヶ年かけて伐出されたと記録されている。

元禄四年（一六九二）七月、上野寛永寺根本中堂建立のための御用木の入札が行なわれた。それに落札したのが、紀伊国屋文左衛門である。駿府の豪商松木新左衛門の弟郷蔵が元締めとなり、大井川上流から御用材の伐出しを行なったのである。「御立山書上帳」¹⁰に「右御立山二而、元禄五申年より同九子年迄、松木屋郷蔵紀伊国屋文左衛門、井川山御請負仕、同十一年寅年より同十四年迄紀伊国屋文左衛門跡山御請負、御用木出申候有木如此」とあり、元禄五年から九年まで、紀伊国屋文左衛門と松木屋郷蔵によって井川山の御用木の伐出しが行なわれ、元禄十一年から十四年までは、紀伊国屋文左衛門によっていることがわかる。

大井川上流の木材はどのように運送されていたのだろうか。管流しされてきた木材は、大井川の支流が合流する千頭で筏に組み換えられ、大井川河口まで筏下げ、住吉湊（榛原郡吉田町）から江戸へ御用木が回漕されるのが通常ルートであった。しかし、住吉湊での御用材木の船積みは容易なものではなかった¹¹。また、向谷水門に材木を集め、竜泉寺川へ流し、さらに伊太川から栃山川、木屋川を経

て和田湊（焼津市小川港）に送られていたとも伝えられるが、長大な材木を流すのは不可能であった¹²。その当時、大井川の水を道悦島村前の木屋水門から引き込む灌漑水路工事が行なわれていた。それを見た紀伊国屋文左衛門は、工事を全額負担して、御用木を木屋水門から栃山川・木屋川を経て和田湊まで送る運河¹³の建設に乗り出したのであった。運河が完成すると、水門を通過する木材は水門通過料を支払うことになった。

また、御用木が川下げされる際には、川舳が沿岸の村々へ出された。寛政十二年（一八〇〇）の資料六十六によると、水戸殿御用木は井川の百姓林から伐出され、大井川を川下げして和田湊から江戸まで廻船で搬送の予定である。その途中、川の出水によって御用木が散乱した場合や、海上で船が難破した時は、その場所へ御用材を集め置き、駿府安西の水戸殿材木用場に報告するよう通達されている。同時に川下げの経路も確認することができる。井川の小河内村前から大井川へ入れ、道悦島村から木屋水門に入り、木屋川を下って和田湊へ出ている。船積みされた御用木は、江戸深川木場まで搬送されることになっている。この川舳は、小河内村から大井川河口左岸の飯淵湊（焼津市）までの大井川沿岸の村々と、木屋水門から和田湊までの村々、そして海辺の村々に通達されたものである。

安政七年（一八六〇）にも、尾張殿御用材が伐出された（資料六十七）。井川の小河内村百姓持林から檜・赤松・栗・榿を尺締¹⁴三万本程伐出し、江戸深川木場まで回漕されるというものである。この度も、沿岸の村々へ御舳れが出され、御用材が散乱した場合、今度は引請人である江戸神田九軒町庄三郎まで報告することとされている。

第三節 安倍川筋の木材

静岡市内を流れる安倍川の上・中流域からは、駿府・久能山はもとより、清水湊を経て各方面へ建築用材が回漕されている。

安倍川上流には、幕府直轄の「御林山」があった。入島村の八重垣山、梅ヶ島村の仏山・いもじ山・天神森山である。村で管理する山は「百姓山」、個人管理の山は「百姓持山」と呼ばれた。寛政二年（一七九〇）の農業間副業についての調査によると、男は「百姓持山」の木品を伐採し、筏に組んで安倍川を下げ、駿府にて売り捌いていたという^{15）}。

駿府では、寛永十年（一六三三）、安倍川・蘆科川山中から伐出された材木の十分一の運上を徴収する十分一役所が、材木町に設置された。寛文三年（一六六三）には、安西五丁目にも十分一材木蔵が建てられ、前者を上十分一材木蔵、後者を下十分一材木蔵と呼んだ^{16）}。幕府の御用木も、一度ここで改められ、無分一（無税）で再び筏下げされている。

久能山修復御用木を享保元年（一七一六）に梅ヶ島村藤兵衛が請負った記録がある。これによると、梅ヶ島から久能山まで川下げるため、久能山普請奉行を務める駿府町奉行と駿府代官より、久能山下から安倍川河口、そして安倍川兩岸の村々へ御触れが出された。満水高浪で極印の材木筏が流れ散った場合、川筋の村々にて材木を取り上げ、久能普請所へ急ぎ報告することを求め、材木を隠したり、盗み取るとは堅く禁じたのである（資料六十八）。このように、破船や流木等の対応について、海辺の村々には浦触れが、川辺の村々には川触れが、その都度出された。

久能山修復御用木の見分・吟味が、安永三年（一七七四）「御林山」で行なわれた。梅ヶ島村の天神森山からは、明和七年（一七七〇）、京都御用木として檜四十三本・榎一本が伐出されたため、節木・曲木・枝木が残るのみで、いもじ山にも材木になるものはなかった。仏山には、榎五十五本（長さ一間半〜四間半、目通

り八寸〜二尺八寸廻り）の立木があり、内十六〜七本は使えそうに見えるが、山が険しく切り出しが困難であった（資料六十九）。一方、入島村の八重垣山には、御用木になりそうな立木が百十九本（檜二本・槻三本・樅九本・榎百五本）あった。その内、榎・樅が「字八幡をねはやらし」に約五十本あるが、やはり難所である。伐出に棧手（木材を滑走させる装置）を用いれば可能であるが手間が掛り、川下げ・久能山までの運賃は計り知れず、村請けは困難な状況であった（資料七十）。通常両村は、杉・松・雑木の丸太や小角材等を安倍川端周辺から伐出し川下げしていたが、御用木は嶮岨の場所にしかなく、伐出・川下げ・久能までの運賃を見積もることは困難で、両村はその旨を島田代官手代へ訴えている（資料七十一）。

結局は、入島村八重垣山「御林山」から、久能山・駿府宝台院修復の普請御用木が伐出された（資料七十二）。久能山御用木の切り出しは、材木町の左右衛門が請負ったという（資料七十三）。江戸後期になると、梅ヶ島の「御林山」には、御用木に伐出できる立木がほとんどない状況であったことが記録からも窺える。

また、静岡浅間神社の文化度造営のための寄附木材が、駿州黒川山並びに安倍山中・蘆科山中の御林の立木から伐出されることになっていた^{17）}。社殿の造営は文化元年（一八〇四）二月から始まり、五月「右は駿府浅間惣社御再建二付、御寄附の御林木為下見分、来ル十六日駿府出立、入嶋村梅ヶ嶋村御林へ相越候條、」（資料七十四）と、安倍山中の入島村・梅ヶ島村に寄附木材を求めるため下見が行なわれた。見分には、大工棟梁清右衛門・大工清吉・木挽半七・人足一人が派遣の予定である。大工棟梁清右衛門は、静岡浅間神社の主要な再建に携わった花村清右衛門（第一部第三章参照）と思われる。大工清吉は、神部浅間両社本殿棟札に見える「大工方棟梁 清吉」であろうか。その後の天保三年（一八三二）には、梅ヶ島村百姓山より「駿府浅間惣社、其外諸社御再建御入用」として榎三百五十本が伐出されることになった（資料七十五）。木材は横山村から筏下げし、上下十分一材木蔵前へ着木の予定で、筏下げが差支えなく行なわれるよう、沿岸の

村々へ通達されたものである。神部浅間両社の主要な社殿は、文政期までに完成しているが、天保期には大歳御祖神社や八千戈神社の造営が続けられていた。

天保四年（一八三三）、久能山修復御用木が安倍川上・中流域から伐出された。今回は、梅ヶ島村・中平村・俵沢村管理の「百姓山」から、梅約百八十本、栗約三百本が切り出された。木材は山許から安倍川を筏下げし、上下十分一材木蔵前へ着木、改めを受け再び安倍川を通り河口まで筏下げされる。この筏下げが差支えないよう、梅ヶ島村から河口の中島までの村々へ駿府紺屋町役所より廻状をもつて通達されている（資料七十六）。これに先立って、久能山修復に当たっている勘定方支配向きから川役人へ、木品員数書付と印鑑三枚が渡されている。修復が無事完了すると印鑑三枚は返却の手続きが取られた（第一部第二章第二節参照）¹⁸⁰。

万延元年（一八六〇）、梅ヶ島村の「御林山」三ヶ所の見分が行なわれ、普請役によって御用木になる木品寸間が書き上げられている¹⁸¹。

安永年間には御用木となる木材が不足し、天保期には百姓山から久能山東照宮・静岡浅間神社の御用木が伐出されていた。安永期から八十年以上が経過した万延元年には、林の状態も変化していたと考えられる。

また、文久四年（一八六四）、江戸城西丸普請のため、木挽杣職人が急ぎ雇出された。召集の範囲は、遠江・駿河・伊豆・相模・上総・下総・下野・武蔵の八ヶ国におよんでいる。この御触れは、駿府紺屋町役所から村々へ通達されたものである。また、各国には作事方大鋸棟梁石山佐渡、普請方大鋸棟梁南川伊預が派遣された（資料七十七）。

第四節 富士川筋の木材

富士川上流の山梨県からも建築用材が川下げされた。富士川の下流側には「岩淵河岸」（富士市）が、上流側に「甲州三河岸」と呼ばれる「鰍沢・黒沢・青柳河岸」（山梨県富士川町）という主要な河岸があった。甲府から岩淵までの船路は、天竜川と共に、慶長十二年（一六〇七）角倉了以によって開かれた²⁰⁰。江戸城普請献納木²¹と久能山修復御用木及び奉納木が富士川流域及び富士山北西麓から切り出され、川下げされた記録が残る。久能山東照宮修復に関わる木材について見ていきたい。

久能山修復御用木として、安永三年（一七七四）、甲州八代郡上曾根村龍華院（甲府市）より槻一本、田野村景德院（甲州市）より檜十本、梅四十本、九一色郷（富士山北西麓）十四ヶ村より檜二本、梅三十本が、川下げされることになった。その経路は、上曾根村から笛吹川を通り、九一色郷からは芦川を通り、富士川に出て岩淵村まで下げる。富士川河口からは沿岸を通って清水湊に着木するというものであった。笛吹川・富士川を通る場合、東岸か西岸を通るかも御触書によって定められている。富士川の東岸を通ると「松岡村」（富士市）に、西岸を通ると「岩淵村」に着くことになる。このような川下しの際、出水や南風等によって木材が流された場合、川通り並びに海辺の村々名主・組頭・百姓は、木材の流失がないよう、極印の木材を取り揚げ置くように、と御触れが出されている²²⁰。また、八代郡十ヶ村・同郡田安四ヶ村は、徳川家康が甲州へ入国した際に、人馬御用を勤めた。同村には、山中を案内した褒美として、諸商売並びに諸役御免の朱印が与えられた。その冥加として安永三年（一七七四）、久能山東照宮へ檜一本（長四間、目通り五尺五寸廻り）・槻一本（長四間、目通り五尺七寸廻り）・梅三十本（長二間、五寸角）の奉納を願い出た。川下げも村の負担で行なうというもので、黒沢河岸から清水湊までの村々へ触れを依頼している²³⁰。同年、久能山修復御用木の奉納について「右は久能山 御宮向御修復之儀及承、材木差上候二

付、被下候間」と龍華院銀七枚、景德院銀二枚、二ノ宮神主銀二十枚、他各村々へ褒美が下されたのだった²⁴。

享和三年（一八〇三）の修復御用木の奉納については、清水湊で久能山普請掛役人中へ上納できるよう書き加えている²⁵。天保四年（一八三三）修復の際にも、九一色郷十四ヶ村より御用木奉納願が提出されているが、員数・寸法は、安永三年と同様であつた²⁶。

天保十三年（一八四二）久能山修復の際には、八代郡右左口村（甲府市）より、檜一本（長五間）、槻二本（長四間）、槻三本（長三間）の修復御用木の奉納願が提出された²⁷。また、富士川の中流に西から注ぐ早川の上流雨畑村（早川町）からも久能山御用材木が伐出されている²⁸。

静岡県の大山河川上流域からは、建築用材が伐出されて、各方面へ納められていた。江戸後期になると、「御林山」には御用木となる木材が不足し、その後は「百姓山」から伐出された。久能山東照宮の主要な修復の際には、山梨県から御用木が奉納されている。安政東海地震後の久能山東照宮の修復では、江戸から材木が搬入される予定であつたが、江戸も大地震による甚大な被害を蒙り資材不足に陥った。結局、久能山東照宮の修復は地元の生木を使用せざるを得ない状況となつたが、その木材はどこから調達されたのか、現在のところ判明していない。

第二章 石材の流通―伊豆「あわ島石」

伊豆半島は、古くから石材の産出地として知られ、その石は「伊豆石」と呼ばれている。明治二十二年（一八八九）の東海道本線開通までは、廻船が主な運送手段であつたため、「伊豆石」は各地へ大量に回漕された。「伊豆石」と言っても、

産地によつて種類が異なる。

伊豆半島西岸の重寺村（沼津市内浦）産の「伊豆石」の中で、特に淡島のもは「あわ島石」と呼ばれている²⁹。当地から久能山や駿府城の石が切り出された記録が「室伏家文書」³⁰に見られる。

寛文九年（一六六九）、久能御宮門の水道御用石を内浦筋から切り出すよう、久能山目代新見市左衛門並びに勘定所から代官伊奈兵右衛門に通達された³¹。石数は合計三百五十本で、二百四十本が「青石」、百十本が「堅石」とある。「御用石切出に関する書状」³²によると、江戸弥兵衛が請負っている。

寛文十二年（一六七二）には、久能御宮修復御用石を江戸石川七郎兵衛が請負った。六月二十七日付の書付には、奉行榊原越中守（久能山総門番）とあり、平石（計九百五十本）と土台石（長六尺より五尺迄、幅厚共二七寸宛を六十本）が書き上げられている³³。八月五日、三津（沼津市内浦）石切忠兵衛・昨兵衛、重寺伊右衛門、古宇（沼津市西浦）長四郎の石切四名によつて、次本孫四郎のもとへ石切りの見積覚が提出された³⁴。同史料および八月八日付の重寺村伊右衛門による「御請負申駿州久能御用石之事」³⁵によつて、石切りの値段を確認することができた【表三-2-1】。

石材の長さが三尺のものは、百本当たり金三両一分とし、長さ五尺五寸の石材は一本銀八匁となっている。長さ三尺の石材は、一本約一・九五匁の計算になる。

【表 3-2-1】 寛文 12 年（1672）久能御用石切賃（重寺村伊右衛門）

石材（尺）			石切賃		備考
長	幅	厚			
3	1.9	0.9	金3両1分	／100本	銀1.95匁／1本
2.9	1.7	0.7	金2両2分	／100本	銀1.50匁／1本
1.5	1.3	0.6	金1両3分	／100本	銀1.05匁／1本
5.5	0.9	0.5	銀8匁	／1本	
5.2	0.9	0.5	銀7匁	／1本	
5	0.9	0.5	銀6匁	／1本	
3.7	0.9	0.5	銀5匁	／1本	
3.5	0.9	0.5	銀4匁5分	／1本	
3.35	0.9	0.5	銀4匁	／1本	

延宝九年（一六八二）、幕府作事方によって久能御宮破損所の見分があり、天和二年（一六八二）に修復が行なわれた。「久能御山御普請石数之事」³⁶によると、天和元年十二月朔日に、修復用の石が書上げられている【表三二一二】。これを大谷村（静岡市駿河区）次郎左衛門・平屋町（静岡市葵区）源二郎・材木町（静岡市葵区）又左衛門の三名が請負った。

大谷村田中治左衛門の「久能山御用石あわ嶋山取石数舟積」³⁷から石材の船積みと請負状況について知る事ができる【表三一三三】。

淡島で切り出され、用途別に加工された石材は、天和二年二月九日から四月二十一日まで八回に分けて、船で搬送された。船は、三津村二郎左衛門が四回出しており、石材が百本を超える場合、長浜村（沼津市内浦）中三郎、江ノ浦村（沼津市江浦）善右衛門が各二回ずつ担当したようだ。今回の石工事は、宝塔道両脇の石矢来・鐘楼堂土台石・御供所敷石・石井筒・築地下敷石・石高欄・石垣足石であった。その内、主要な石材は治左衛門が請負っている。大きい石材は、鐘楼土台石で長さ一間、九寸角。石井筒は五尺三寸四方、高さ二尺五寸、上部の厚さ五寸である。敷石は正方形の石板で、御供所では一辺一尺七寸、厚さ五寸が六十四枚となっている。

【表 3-2-2】天和元年（1681）久能山普請石数（「久能御山御普請石数之事」より作成）

石材		寸法（尺）			石数	治左衛門 請負
		長	巾	厚		
宝塔道両脇石矢来38間	土台下敷石	1.5	0.8	0.7	304	253
	土台石	1間	1	0.8	38	38
	柱石	3	0.5	0.5	152	160
	控柱石	5	1.2	0.6	38	30
	笠石	1間	0.7	0.5	38	38
鐘楼堂	□石		0.4	1.5	38間分	
	土台石	1間	0.9	0.9	16	17
供所	敷石	1.7	1.7	0.5	64	64
井戸5.3尺四方（二口分）	石井筒	5.3	2.5	上0.5 下0.7	8	8
築地	下敷石	1.5	1.5	0.8	405	245
石之高欄橋	笠石・控柱				3	
石垣（築直し）	足石				215	80
	？	1.8	1.8		12	

※治左衛門請負…駿州大谷村田中治左衛門請負分【表 3-2-3】参照 田中治左衛門が全て請負の石

【表 3-2-3】天和2年（1682）久能山普請石数及船積（駿州大谷村田中治左衛門請負）

船積			石数計 (本)	笠石	柱石	控柱石	土台石	角石	鐘楼堂 土台石	築地下 敷石	供所 敷石	井筒石	土台下 敷石	石垣 足石
2月9日	三津村	次郎左衛門	76	8	39	12	4	2	1	7	3	0	0	0
2月18日	三津村	次郎左衛門	85	3	28	7	6	0	1	34	6	0	0	0
3月10日	三津村	次郎左衛門	89	2	35	2	3	0	2	37	6	2	0	0
3月晦日	長浜村	忠三郎	158	3	23	3	1	0	6	59	39	0	24	0
4月2日	三津村	次郎左衛門	63	12	0	0	7	0	2	0	0	2	0	40
4月5日	江ノ浦村	善右衛門	145	2	3	1	7	0	4	24	3	0	86	15
4月9日	長浜村	忠三郎	133	5	10	4	2	2	0	60	7	4	39	0
4月21日	江ノ浦村	善右衛門	188	3	22	1	8	0	1	24	0	0	104	25
合 計			937	38	160	30	38	4	17	245	64	8	253	80
総 数				38	152	38	38		16	405	64	8	304	215

※総数…久能山普請石総数【表 3-2-2】参照

（「久能山御用石あわ嶋山取石数舟積」より）

石の切り出しに関しては、御用石材として書上げられた数量・寸法のみが許され、それ以外は一本たりとも切り出すことは禁じられていた。淡島から切り出された石材の大きさは、長いもので六〇七尺の土台石、長さ三尺×一・八尺×一尺の平石、断面の一边が一尺を越えるものもあり、大量に搬出された。久能山御用石請負者として、江戸・駿府・久能山下の石屋の名が確認でき、石切賃・日用賃・運賃等は、請負者との間で取り決めることになっている。

淡島で産出された「あわ島石」は、駿府城石垣にも用いられてきた。「あわ島石」について、『鈴木修理日記』に駿府城石垣に関する記述が認められる。元禄十六年（一七〇三）八月九日、幕府作事方大工頭鈴木修理長頼と被官・被官見習・町棟梁三名によって駿府城の見分が行なわれた（五畿内寺社等見分）。鈴木修理提出の「御城廻り見分之覚」³⁸によると、駿府城の石垣は水吐けが悪く、石垣が所々はらんでいる。二ノ丸御門櫓は全体が傾き、門と櫓のバランスが悪い。草深ノ方・艮ノ方の大崩の石垣について吟味し、築き直す必要があると記されている。その後、十月に鈴木修理によって駿府城に関する覚書【史料三一〇二】が作成されている。

【史料三一〇二】『鈴木修理日記』元禄十六年十月二十五日条

覚

- 一 駿府御城内外見分仕候処ニ、御石垣・御多門・櫓・堀等年々御修復、先規之核ニ随ひ御修復被申付候故、江戸向之御修復之格ニ違ひ御座候事。
- 一 御石垣見分仕候処、最前対馬守殿御順見被遊候通、築様不宜様ニ奉存候間、重而は御注文被遣、其通築立候様ニ被仰付可然奉存候、則注文仕立申候事。
- 一 御本丸之内、水吐三ヶ所御座候得共、惣裏面石垣ニ雨落水無御座候故、水吐江水ぬけ不申候ニ付、御石垣江水ふくミ、孕も出来候様ニ奉存候間、連々雨落水、原料石ニ而成共、被仰付可然奉存候、且又原料石性あしく

相見へ申候間、丈夫向之御石垣築直候節は、直段少々高値ニ御座候得共、伊豆堅石ニ而築立可然奉存候、只今迄駿府ニ而遣候伊豆堅石と申候は、伊豆あわ島より出候石ニ而同国ニ而も江戸ニ而も遣候堅石ニ而は無御座候事、以上。

十月

鈴木 修理

これによると、駿府城は江戸の修復方法とは異なり、築き方が宜しくないところ。本丸の内には水吐が三ヶ所あるが、排水できていないため、石垣が水を含んで孕みが見られる状況であった。石垣は「原料石」（藁科石力）にて築かれ、「原料石」は性質が悪く見えるという。石垣は丈夫である必要があるため、高値であっても、「伊豆堅石」にて築くべきである。只今、駿府で使用している「伊豆堅石」とは伊豆あわ島より産出された石で、同国や江戸で用いられている堅石とは異なると指摘されている。また、「御城廻り見分之覚」にも「只今請負之者寄セ置候ハ、伊豆阿わ島石と申候而、石之生悪敷、わらしな石同前ニ御座候間、御用ニ達申間敷と奉存候事。」とあり、「伊豆あわ島石」は石の性質が悪く、「わらしな石」同然であると記されている。藁科川流域の石は砂岩であり、「わらしな石」がそれに当てはまるとすれば、堅石におよぶ石質ではない。十月の「覚書」には「原料石」と記されているが、これも砂岩の「藁科石」のことである推測される。伊豆半島産出の石材は、大きく分けると安山岩と凝灰岩の二系統があり、安山岩系のものが「伊豆堅石」と呼ばれていた。淡島は、安山岩と凝灰岩、さらに扇石と呼ばれる玄武岩の柱状石も混在している³⁹。当時、淡島から切り出された「伊豆あわ島石」と呼ばれた石は、凝灰岩に近い安山岩であったと考えられる。

第三部では、建築普請に用いられた木材・石材の調達と流通について、地元産出資材の地元使用を中心に扱った。

四大河川の上流域から伐出された木材は、江戸をはじめ東西各地へ回漕されたが、特に天竜川河口の掛塚湊から送り出される樽木については「掛塚樽木」と称され、各地で重用されている。「掛塚樽木」は清水湊経由で駿府や久能山東照宮へも送られ、使用された。安倍川上流域の幕府直轄「御林山」には、安永年間にもなると御用木となるような木材が充足しておらず、安永以降は村で管理する「百姓山」から久能山東照宮・静岡浅間神社の木材が伐出されている。久能山東照宮への木材運送は、安倍川河口まで川下げされると、沿岸を航行して久能山下に着岸された。富士川上流の甲州からは、久能山東照宮修復に際して奉納木が川下げされ、富士川河口から沿岸を通り清水湊まで送られている。

「伊豆石」もまた、江戸城をはじめ各地へ搬送されていたが、久能山東照宮と駿府城に西伊豆の石材が用いられていることが重寺村の石切文書から判明していた。内浦湾に浮かぶ淡島産出の石材は特に「あわ島石」呼ばれ、切り出された石材は用途別に加工されると船積みし、清水湊を経由して江戸へも回漕されていた。大工頭鈴木修理によると「あわ島石」は、元禄期の駿府では「伊豆堅石」として扱われていたが、蘆科川流域の砂岩「わらしな石」と同然で石質が悪いという。これらは、凝灰岩に近い安山岩であったと推測され、当時から多種多様な「伊豆石」が使用されていたと思われる。

各種史料から、これら地元産出の木材や石材は各地へ搬送される他、当地でも広く重用されていた。

註

- 1 黒板勝美・國史大系編集会『新訂増補國史大系 徳川実紀』第一篇、吉川弘文館、一九八一。(以下『徳川実紀』慶長十二年(一六〇七)条。
- 2 角倉与一光好(剃髪号了以)富士川の舟路をひらき、駿州岩淵より甲府に至るまでの運漕を通ず。国人皆これを便なりとす。又仰により信濃国諏訪より遠江国掛塚まで。天竜川通船の事をも勤む。
- 3 村瀬典章『天竜川水運と樽木』建設省中部地方建設局天竜川上流工事事務所、一九九三。
- 4 竜洋町史編さん委員会『竜洋町史』資料編一、磐田市、二〇〇七、所収。
- 5 『天竜市史 上巻』天竜市役所、一九八一。
- 6 竜洋町史編さん委員会『竜洋町史』通史編、磐田市、二〇〇九。
- 7 『磐田市史』史料編四近世追補(二)、磐田市、一九九五、所収。
- 8 秋鹿家文書「元禄二年七月 遠州舟明山樽木中勘定目録」
- 9 秋鹿家文書「元禄十年五月 遠州舟明山樽木中勘定目録」
- 10 「久能山御御宮堂舎造宮覚」(『静岡市史』近世史料三、静岡市役所、一九七六「御城内外臨時御普請覚」所収)
- 11 「一之宮修復用樽木筏乗下賃金の増額願」『天竜市史 続資料編1 田代家文書一』天竜市教育委員会、一九九九、所収。(以下『田代家文書』)
- 12 「元禄十二年卯八月遠州船明山より御樽木方々江御出シ被遊候万高書上帳」『田代家文書』所収)
- 13 鈴木棠三・保田晴男『近世庶民生活史料 未刊日記集成第五巻 鈴木修理日記三』三一書房、一九九八。(以下『鈴木修理日記』元禄十年一月十八日条。
- 14 二〇六「享保二年正月 御立山書上帳」(本川根町史編さん委員会『本川根町史』資料編3近世二、本川根町、二〇〇〇、所収。)
- 15 本川根町史編さん委員会『本川根町史』通史編2近世、本川根町、二〇〇五。
- 16 浅井治平『大井川とその周辺』いずみ出版、一九六七。
- 17 中村高平『駿河志料一』歴史図書社、一九六九、所収。
- 18 「道悦嶋村前にて、大井川を堰入れ、田水とす、木屋水門と云、大塚樋あり、公用材江戸に出すに、此川に流し入れ、和田湊に出づ、」
- 19 木材の体積の単位。一尺角二間材の体積。(中川根町史編集委員会『中川根町史』静岡県榛原郡中川根町、一九七五)
- 20 「御尋二付申上候書付 下書」(新井正『梅ヶ島郷土誌』硯水泉、一九九〇、所収。)
- 21 阿部正信『駿國雜誌一』吉見書店、一九七六。『静岡市史編纂資料』第六巻、静岡市役所教育社会課、一九二九。
- 22 『静岡市史』第二巻、静岡市役所、一九三一。

- 17 「寄附二相成木品之儀者駿州黒川山並安倍山中蘂科山中御林之内立木之儘
御寄附有之筈二候」〔『静岡市史』近世、静岡市役所、一九七九、所収。〕
- 18 「久能山御宮諸堂社一之御門并御別当所八ヶ院其外御修復一件」
〔『久能山叢書』第三編、久能山東照宮社務所、一九七三、所収。〕
- 19 「村方明細取調書上帳」〔『梅ヶ島郷土誌』所収。〕
- 20 「徳川実紀」第一篇、慶長十二年（一六〇七）条。註1参照。
- 21 「山梨県史」資料編十近世。三山梨県、二〇〇二。
- 22 上九一色村土橋國生家文書「久能山東照宮修覆御用木富士川川下げにつき触
書」〔『山梨県史』資料編十近世三、山梨県、二〇〇二、所収〕
- 23 上九一色村土橋國生家文書「九一色郷久能山東照宮普請足代木奉納願」（同右、
所収）
- 24 高柳眞三・石井良助『御触書天明集成』岩波書店、一九五八。（資料二七〇二）
- 25 上九一色村土橋國生家文書「九一色郷久能山東照宮普請献納につき一札」
〔『山梨県史』資料編十近世三、所収。〕
- 26 上九一色村精進区有文書「九一色郷久能山当所宮御修復御用木上納願」
（同右、所収）
- 27 中道町右左口区有文書「右左口村久能山東照宮御用木川下げにつき願書」
（同右、所収）
- 28 資料四十「乍恐以書付奉願上候」（早川町教育委員会『早川町誌』早川町誌編
纂委員会、一九八〇、所収）
- 29 『鈴木修理日記三』元禄十六年（一七〇三）八月九日条。
- 30 「室伏家文書」沼津市歴史民俗資料館所蔵。
- 31 室伏家文書七〇〇「御用石切出指図状」
- 32 室伏家文書七〇一「御用石切出に關する書状」
- 33 室伏家文書六五五「久能御宮御修覆御用石指図覚」、六五二「久能御用石見積
覚」、六五三「御請負申駿州久能御用石之事」
- 34 室伏家文書六五二「久能御用石見積覚」
- 35 室伏家文書六五三「御請負申駿州久能御用石之事」
- 36 室伏家文書六六〇「久能御山御普請石数之事」
- 37 室伏家文書六六一「久能山御用石あわ嶋山取石数舟積」
- 38 『鈴木修理日記三』元禄十六年（一七〇三）八月九日条。
- 39 高木浅雄「重寺村の石切文書」『沼津市歴史民俗資料館紀要』五、一九八一。

第四部 駿河国とその周辺の寺社造営における

公儀作事とその組織

江戸時代の駿河・遠江・伊豆の各所では、駿府棟梁・浜松棟梁・遠州一宮棟梁・三島棟梁等がそれぞれ活動していた。徳川家康・秀忠・家光代において公儀の造営が行なわれ、家綱・綱吉代では主として寺社等公儀の修営が進められている。その後、幕府によって造営された主要寺社は、度重なる地震等災害によって大規模な修営を行なう必要に迫られた。これらの公儀作事は、江戸幕府の作事方・小普請方が担当し、地元の工匠たちによる種々の関与も認められている。

幕府の直轄領である駿府を中心とした駿河、家康が拠点とした浜松城を擁する遠江、江戸や各地に伊豆石を搬出した伊豆において、江戸幕府の作事がどのように行なわれていたのか、また地元の工匠たちは、どのような組織の下で作事に携わっていたのか見ていきたい【表四・一・一】参照、引用史料は年表に記載。

第一章 主要寺社の修営と幕府

駿河・遠江・伊豆には、江戸幕府の庇護を受ける徳川家ゆかりの寺社や各国一宮が在った。徳川家康が祀られる久能山東照宮、徳川家祈願所の静岡浅間神社、秀忠の産土神である遠江の五社神社・諏訪神社、遠州一宮（小國神社・天宮神社）、駿州一宮（富士山本宮浅間大社）、豆州一宮（三嶋大社）、それぞれの修営における幕府の関わりに着目し、概要を個別に述べてみたい。

第一節 久能山東照宮の修営（第一部第二章第二節参照）

久能山東照宮における修営の全貌については、第一部第二章第二節で述べた。本節では、幕府作事方・小普請方の江戸・遠国での活動を踏まえつつ、久能山東

照宮への関わりについて考察を加えるものである。一方、日光東照宮も幕末まで幕府によって主要な修営が行なわれていたが、幕府方と日光方（日光棟梁）によって分担され、工事方式の変化が見られることなどを川村由紀子氏が明らかにしている¹⁾。このような日光東照宮の事例も踏まえつつ、幕府による久能山東照宮の修営について整理していきたい。

第一項 久能山東照宮の成立期

徳川家康は、慶長十二年（一六〇七）駿府に隠居し、元和二年（一六一六）四月十七日駿府城で薨去した。家康の遺言通り、大工棟梁中井大和守正清によって久能山に仮殿が建立され、翌三年には権現造りの現社殿が完成された。久能山内に三代將軍家光の寄進によって五重塔が建立され、寛永十六年（一六三九）供養が執り行なわれた。棟札から作事方大工頭木原木工允義久の造営と知られる。さらに同十八年、廟所の木造宝塔を石造とし、社殿・諸堂社の屋根は檜皮葺きから銅瓦葺きに葺き替えられた。寛永十三年造替の日光東照宮現社殿も当初は檜皮葺きであったが、久能山の葺き替えから十三年後の承応三年（一六五四）、銅瓦葺きに改められた。久能山内の諸施設は、正保三年（一六四六）までに整えられたと解される。

第二項 江戸中期の久能山東照宮修復における幕府作事方と小普請方

久能山内の伽藍が成った後、主要な修復は幕末まで幕府作事方または小普請方によって行なわれ、修復への駿府棟梁の参画も認められる。作事方は寛永九年（一六三二）に設置され、小普請方は貞享二年（一六八五）に正式な役職として成立した。作事方は幕府関係の建築物の造営を行ない、小普請方は修復を担当していた。明暦の大火（一六五七）以降修復工事が増加し、小普請方が力を伸ばして造

営も行なうようになり、作事方を圧倒するまでになった。江戸時代中期の久能山東照宮の修復も小普請方によって行なわれており、久能山をめぐる作事方と小普請方の勢力関係について見ていきたい。

元禄十六年（一七〇三）一月に作事方被官と大棟梁甲良豊前、駿府棟梁花村与七郎以下による久能山修復見分が行なわれた。その後、三月に小普請奉行曲淵伊左衛門・鈴木伊兵衛・定棟梁大谷甲斐によって再見分が行なわれ、久能山の修復は小普請方が担当するようになった。

元禄当時の作事方と小普請方の勢力関係を作事方大工頭鈴木修理日記【史料四・一・一】から窺うことができる。

【史料四・一・一】『鈴木修理日記三』元禄十五年八月二十八日条

（前略）

一 古来より拙者共支配ニ被仰付候平内大隅・鶴飛驒・甲良豊前・辻内茂兵衛
四人大棟梁代々家職ヲ専ニ仕罷有候付、新規之社堂御作法之御家之分ハ、
何も御作事被仰付、古法之曲尺ヲ以仕立候、近年は大立候御普請も、小普
請方之棟梁共ニ計被仰付候故、其段々御作事奉行衆迄奉願候処、去ル元
禄十年丑閏二月十九日御書付を以被仰渡候通、御当地ニ而大御作事其外遠
国之寺社等、弥以拙者共支配之大棟梁并町棟梁等ニ可被仰付候旨ニ御座候
処ニ、中堂、護持院・護国寺両護摩堂等之大伽藍、小普請棟梁ニ被仰付、
拙者共支配之大棟梁共家職を失ひ、内外困窮仕候間、先規之通被仰付被下
候様奉願候事。

作事方大棟梁平内大隅・鶴飛驒・甲良豊前・辻内茂兵衛四人は家職として「新規之社堂御作法之家之分」は「古法之曲尺」にて造営してきたが、「大立候御普請」も小普請方棟梁ばかり命じられるようになり、度々作事奉行衆まで嘆願していた。元禄十年、江戸の大作事・遠国の寺社等は、大工頭支配の大棟梁並びに町棟梁等

の担当になったはずであった。しかし、元禄十五年、寛永寺中堂、護持院・護国寺両護摩堂が小普請方棟梁に命じられ、大棟梁たちは家職を失い困窮する事態になっている。このような状況下にあつて、元禄十六年の久能山東照宮の修復は、小普請方が担当することとなったのである。

久能山東照宮の修復材の加工は江戸の柳原小屋で行なわれ、元禄十六年九月二十七日に鉦始めとなった。三月の見分に同行した小普請方定棟梁大谷甲斐が病のため、同じく定棟梁の村松淡路が代わりを務めている。十一月には材木運送の準備が進められた【史料四・一・二】。

【史料四・一・二】「雑簿」元禄十六年十一月二日条

（前略）

此度、久能御宮御修復御材木下拵出来次第、廻船志水（註、清水港）へ致着船、久能迄相届、榊原越中守組与力同心立合、久能山 御殿地へ入置筈に候間。右の節、星伝右衛門立合相改候様、伝右衛門へ可被相達候。尤相尋候儀も有之候はば曲淵伊左衛門へ承合候様に、是又、伝右衛門へ可被申達候事。

未十一月

江戸での材木下拵が出来次第、材木は廻船で清水湊に着くと、久能まで運ばれて久能山総門番榊原越中守組与力同心立ち会いの下、久能山御殿地へ運び入れることになり、目代星伝右衛門による確認も要した。

日光東照宮の元禄度造替（元禄三年（一六九一）も江戸で木材加工が行なわれ、御用木は役舟で江戸から乙女河岸（栃木県小山市）まで運送されている。材木と諸色は江戸で入札が行なわれる幕府主導の直営工事であった）。

元禄十六年十一月二十三日大地震が発生し、宝永元年（一七〇四）九月、江戸で護持院普請場を担当していた小普請方定棟梁大谷甲斐が久能山の修復を命じら

れた。その間、護持院の見廻りは、作事方大棟梁甲良豊前宗員が行なうことになり、当時小普請方が優位な立場にあったことが解る。駿府棟梁花村与七郎の小普請方棟梁への参加願が作事方大工頭鈴木修理長頼を通じて小普請奉行に提出されていることから、久能山東照宮の修営に参画してきた駿府棟梁の存在も危うくなっていたようにも見える。修復には奉行稲垣対馬守重富（若年寄）、手伝奉行に田中城主太田撰津守資直、作事奉行松平安房守、小普請奉行曲淵越前守・鈴木伊兵衛、小普請方定棟梁大谷甲斐・大谷出雲が携わったことが棟札等から判明している。若年寄を奉行に頂き、それに属する小普請方が担当したことになるが、一方作事奉行の関与も窺える。実際に修復に当たった棟梁以下については記録に見られないため、駿府棟梁の参画が叶ったかどうかを確認することはできない。しかし修復後の宝永二年には、小普請奉行曲淵越前守より駿府棟梁花村与七郎は御宮霧除設置の立ち会いを命じられ、江戸から運送される材木の置場や下拵場の確保を行なっている。駿府棟梁花村与七郎の下、江戸大工十人・肝煎二人・鍛冶一人が霧除の作業を進めていることから、駿府棟梁花村与七郎は宝永元年の修復にも関与していたと考えるのが自然であろう。

さらに宝永四年（一七〇七）十月四日宝永大地震が起き、十一月二十三日には富士山が噴火した。即刻駿府城内外・久能山東照宮について被害状況が報告され、翌五年一月から久能山東照宮と駿府城の修復が開始されている。久能山東照宮は小普請奉行間宮播磨守の下、正外遷宮を伴わない修復が行なわれ四月に完了した。駿府城は作事方大棟梁甲良豊前宗員の下、駿府棟梁花村与七郎をはじめ駿府の工匠たちも参画して修復が進められ五月に完成している（第一部第二章第一節参照）。作事方と小普請方の勢力関係はこの後も変わらず、享保三年（一七一八）作事方の嘆願によって、江戸における作事方と小普請方の場所分けが行なわれた。担当場所が二分され、以後両者によって幕府の修営は実施されていく。以降の久能山東照宮における修営は、寛保二年（一七四二）作事方、宝暦六年（一七五六）小普請方が担当し、明和期以降幕末までは再び作事方が修営を担った。

第三項 江戸後期の久能山東照宮建築普請方式

明和二年（一七六五）の百五十回御忌に向けた修復が、久能山東照宮と日光東照宮で行なわれた。久能山東照宮の修復は、作事方によって行なわれ、作事方大棟梁辻内遠江の下、江戸町棟梁平内八右衛門・浜松清七が担当し、そこに駿府棟梁花村清右衛門・海野佐右衛門・牧田定次郎が参画した。

日光東照宮でも宝暦十一年（一七六一）の大風被害による諸堂社の修復並びに明和二年の百五十回御忌のための修復が宝暦十二年から行なわれていた。川村氏によると、多種大量の修復は、作事方大棟梁の一式請負、建物別の修復一式、場所別の一式請切、商人資本による請負、という建築普請方式が採用されている。大棟梁一式請負の場合は、江戸方・日光方で場所割・工割を行ない、勤料も割りあう方式であった。その後、日光山内の修営は、作事方・日光方の分担が定まり、日光棟梁は幕末まで日光山内の建築修復に関与したことが明らかにされている。一方、久能山東照宮における建築普請方式に関しては「御修復公私日録」⁴に断片的に記される。また、主要な修復においては、大名が手伝（助役）を命じられ労働力を負担してきたが、享和期以降幕末まで「金納手伝」に変わり、大名には修復費用の負担が課せられた。

天保十二年（一八四一）に発生した天保久能山地震によって、久能山は被害を受け作事方の下で修復が行なわれた。修復予算に關しての記述から、御宮においては、本殿外廻り・石の間・拝殿の見積で、本殿内部および屋根は外遷宮後の調査で計上するとされている。諸堂社・一之門・別当德音院・坊中八ヶ院等は木材共一式渡切の方式となっている。全体の修復費用を抑え、仮殿・仮設物は坪数を減らし、木材等級を下げる方針で進められた。作事方に駿府棟梁花村源左衛門・花村清右衛門・池田栄次郎が参画し、大工工事の過半が終了すると江戸大工は引き払い、大棟梁辻内近江と駿府棟梁の下、駿府大工によって修復は完成された。

駿府棟梁と大工が具体的にどのように関わったかは記録に見られない。また、地震被害状況の見分から修復中、正遷宮・供養までの見分は駿府町奉行加藤鞆負によって行なわれた。地震被害の見分には、駿府石方棟梁善左衛門・左官方棟梁宗蔵等が同行している。宗蔵は、天保四年（一八三三）の修復において駿府町奉行・代官の下「修復見分帳」の作成に携わった駿府棟梁である。

安政元年（一八五四）、さらに大きな地震が襲った。安政東海地震である。即刻被害状況が幕府に報告されると、作事方によって破損所の見分が行なわれた。久能山修復の準備を進める最中の翌二年、今度は安政江戸地震が発生した。江戸においても資材・人材が不足する状況下、久能山の修復は延引され、修復が開始されたのは安政三年のことである。安政の修復方針として費用の節減と耐用年数の長期化が掲げられ、古木も積極的に利用された。「安政丙辰地震損御修復公私日録」安政三年九月晦日条（資料三十）に「此度御山上御修復御入用高、並風聞の条」として、修復費用についての記述が見られる。「御修復御入用。御作事方一万五千両、神宝方三千両、惣御扶持五千石余、其外諸御役人御金拝領、此御入用は別段」ということから、幕府作事方による修復であることが確認できる。天保久能山地震による修復費用について、「当御山天保十三寅年御修復老万両欠け候由。」の記述より、地震被害の規模の違いは明らかである。費用節減の取り組みについては、木材の種類・等級・寸法を制限して二百五十両減らし、古木の再利用で六百五十両減らし、合わせて見積りよりも千両程の節減が実現している（資料三十一）。しかし、古木の再利用は工匠たちの手間を増大させた。「大工棟梁此度御損致候由、右は此度惣受負八千人に御扶持六百石のつもりにて受候処、老万人かかり五百両程の損毛の由。」「木挽方四百両、三十石の受負の処、是も余程損失の由。」（資料三十）大工棟梁と木挽方はそれぞれ請負であったため損失は大きかった。大工については五百両程の損失で、工匠たちの申し立てによって手当金二百五十両が支払われたが十分なものではなかった。久能山の修復が完了すると、大工頭・大工棟梁は、地震被害による次の修復のために、直接駿府あるいは三州へ向かった。

第四項 久能山東照宮修営における石工事

久能山東照宮の修営に用いられた石材として、伊豆半島西岸の重寺村（沼津市内浦）産の「伊豆石」があり、特に淡島産出のものは「あわ島石」と呼ばれた。これら石材の切り出し記録が「室伏家文書」⁵に見られる（第三部第二章参照）。また、久能山東照宮修復における石工事入札の一端を「斎藤家文書」⁶から窺うことができ、石材に関わる入札と請負の概要についてまとめる。

久能山東照宮御用石の切り出し請負に関する史料は江戸中期頃まで存在する。寛文九年（一六六九）の御用石切り出しは、江戸弥兵衛が、同十二年は江戸石川七郎兵衛が請負った。天和二年（一六八二）の久能山東照宮普請石材は、久能山下大谷村の次郎左衛門と駿府の源二郎・又左衛門の三名が請負っている。石の切り出しは地元の石切が請負い、切り出された石材は地元船で清水湊まで搬送された。これらの石切賃・日用賃・運賃等は、請負者と各職の間で取り決められた。久能山東照宮修復における石工事について、「駿州久能山 御宮其外御修復
「⁷」を見ていく。小普請方役所から通達された石工事入札のための竖帳である【史料四・一・三】。一番御本社并御拝殿向拝共にはじまり、二番御唐門、三番御本地堂と続き、十三番別当德音院、十五番社僧坊舎まで石工事の計画である。「布敷石不陸直し目漆喰共仕」「四半石八本足石居直目漆喰仕」というように敷石や石段・石垣・石高欄等の修復箇所が記されている。

【史料四・一・三】「駿州久能山御宮其外御修復」 「」（斎藤家文書）

（表紙）

駿州久能山

御宮其外御修復「」 「」

小普請方

(本文)

(前略)

右注文之通仕様以差図申付次第職人并肝煎等付置仕形吟味改ヲ請御日限之通相仕立於所々みこミ増仕事有之候共増金申加間敷候万一注文之内御場所之御減等相成候所は吟味直段より割下ケ之御直段を以減金相立候事

一入札開之節落札人方銀高二准シ拾ヶ壺之敷金差加可申事

但札開之日証人召連印形持參可致候同直段は先披之方落札相立候事

一古石取放候節銘々改ヲ請たるへし掘取出来方取付之節はちきり穴明廻シ差出事

但ちきりなまり請方之儀は鋸方にて致候事

一諸石并割栗石沙漆喰等煉方調從御役所可相渡事

一石小屋水縄高足代手伝人足等是又同断可有事

一石下水并高石垣其外共仕置ニ相成候御場所出来以後崩換等於有之は年数三ヶ年之内無代ニ而仕立置可差出事

右之外諸宮手伝人足足代等并石口駒越場所より久能上下小屋場迄引付持運共右方一式にて積銀可差出事

但注文通は別紙可認事

小普請方

御役所

史料には年記がないが、石工事が久能山全域に及んでいることから、小普請方が関与した久能山修復の中でも、宝永元年（一七〇四）または宝暦六年（一七五六）の修復と推測される。石工事は、仕様通り行ない吟味改めを受け、予定通り完了することとあり、仕事が増えた場合も予算内で実行し、仕事が減った場合は設定値段より割安で行なうこととある。落札銀高の十分一を敷金として差し加えるこ

と、入札高が同額の場合は先披きの者が落札と記されている。石工事の保証は三ヶ年と取り決められ、手伝人足・足代や駒越から久能上下小屋場までの石材運送も一式で入札することとなっている。

このように石工事は、石材の切り出しから清水湊までの運送を江戸・駿府・久能山下の石屋が一式で請負い、石工事請負人は久能山下の駒越からの石材運送も含んで一式請負った。駒越は久能山修復の際には材木揚場にもなる地である。

久能山東照宮は、江戸時代を通じて幕府によって優先的に修営が行なわれてきた。久能山には日光棟梁のような常用の棟梁はなく、駿府棟梁が幕府方または、駿府町奉行方として久能山の修営に関与してきたことが明らかになってきた。各職の請負に関する史料は石工事関係のみで、請負の事態は不明な点が多い。ただし、久能山への修復関係者の出入りは一之門で管理された。

第二節 静岡浅間神社の修営（第一部第二章第三節参照）

静岡浅間神社（神部神社・浅間神社・大歳御祖神社）は、徳川家の祈願所として家康により慶長九年（一六〇四）に再建され、その後、寛永十八年（一六四二）、再び三代將軍家光によって造営が行なわれた。大工頭木原木工允義久の下、駿府の大工棟梁花村長左衛門・清右衛門、屋根葺新五郎・清左衛門が参画する大造営であった。百年余を経た宝暦七年（一七五七）、諸堂社の破損は著しく、修復料と檜六万挺が下賜されるが、全てを修復するには不十分であった。

安永二年（一七七三）一月十二日夜の火災により、諸堂社末社四十一ヶ所が類焼する被害を受け、翌三年見分が実施されている。

【史料四・一・四】『御触書天明集成』安永三年三月

寺社奉行え

駿府浅間惣社其外末社共四拾ヶ所、去巳正月十二日夜類焼ニ付、社堂御

再建、祭器装束御新調相願候処、御修復料溜り金之内を以、御再建被仰付候積、此度勘定組頭倉橋与四郎、御勘定方御普請役并御作事方役人被差遣、見分目論見申渡二付、及対談候様、両神主え可被申渡候、尤勘定奉行、作事奉行可被談候、

静岡浅間神社は、勘定組頭倉橋与四郎他によつて目論見見分が行なわれることになった。久能山東照宮・宝台院も同時に見分が実施され、両所の修復は行なわれたが、静岡浅間神社は大規模な再建となるため、応急的な修繕のみとなっている。その後再度の火災により、天明八年（一七八八）十一月十二日、静岡浅間神社は悉く焼失した。

享和三年（一八〇三）、駿府城代と駿府町奉行が再建を上申し、寛永期の姿を再現する大造営が文化元年（一八〇四）から始まった。造営費は「浅間金」⁸を貸付けた利金を充てるというもので、寛政八年（一七九六）から準備が進められていた。造営は毎年交付される利金で継続的に行なわれ、全社殿が完成したのは慶応元年（一八六五）のことである。棟梁は寛永大造営に参画した駿府棟梁の後継者である大工棟梁花村与七郎・花村清右衛門、屋根方棟梁三寺与右衛門・花村富左衛門が登用され、彫刻のみ諏訪の立川一門が担当した。六十余年におよぶ造営によって竣成したのが現社殿である。

第三節 五社神社・諏訪神社と府八幡宮の修営

遠江の五社神社・諏訪神社（浜松市）は二代将軍秀忠の産土神で、元和元年（一六一五）自らの発願によつて造立された。御大工鈴木近江守長次の下、両社同時に造営が行なわれたことが棟札に認められる。五社神社の棟札には「処之大工佐藤左衛門尉吉直・小工杉浦図書助吉次」とあり、諏訪神社の棟札にも「処之大工都筑左衛門太輔家次・新村右近丞盛家」と当地浜松の大工の名が記されている。

遠州中泉（磐田市）の府八幡宮においても、家康薨去後造営が行なわれた。元和三年には、秀忠の娘東福院の寄進により社殿が、同七年には秀忠により鳥居の造営が行なわれた。両度の造営は、御大工鈴木近江守長次の下、先年の五社神社棟札に見られた「小工杉浦図書頭吉次」が関与している。

秀忠建立の諏訪神社は、寛永十八年（一六四二）、五社神社の南隣りに移され、五社神社と共に再建された¹⁰。両社の造営には、大工頭木原木工允義久が関与し、元和造営に携わった両社各大工が造営に参画している。五社神社は「大工佐藤左衛門尉吉直」、諏訪神社は「大工都筑左衛門尉家次・新村右近丞成家」である。大工・鍛冶大工・瓦大工は両社に関与しており、元和度の両社及び府八幡宮の造営にも携わっている。

延宝元年（一六七三）、浜松城主太田摂津守資次と秋鹿長兵衛¹¹、幕府作事方大工頭鈴木修理長常・木原内匠重弘によつて、五社神社・諏訪神社の見分が行なわれた。翌二年には被官によつて仕様帳が作成され、「五社方・諏訪方惣入用高」が示されている。両社の修復は、太田摂津守を奉行に、大工頭兩人の下、作事方配下の棟梁の中でも浜松大工の系譜を引く大工棟梁が派遣され、彼らは『杉浦系譜』に「江戸町棟梁」と記されている¹²。『鈴木修理日記』においても「棟梁」「町棟梁」が併用されており、本稿では地元棟梁と明確に区別するために「江戸町棟梁」（第二章第二節第二項参照）を用いる。両社の修復は、江戸町棟梁の清水兵左衛門・浅原庄右衛門¹³・市川治部左衛門・桑原万五郎の四人と木挽棟梁二人が修復を担当した。翌四年、両社の棟の雨漏りが報告されると、修繕については大工頭兩人と大工棟梁を勤めた清水兵左衛門・浅原庄右衛門によつて検討されている。元禄十一年（一六九八）、五社神社と諏訪神社は、寺社奉行へ社殿の修復を願い出たが、その見分は五年後の元禄十六年に、大工頭鈴木修理長頼による江戸から五畿内までの寺社等見分の一環として実施された（第二章第一節参照）。見分には被官大石貞右衛門、被官見習鈴木源五郎、江戸町棟梁河合利兵衛・久村甚左衛門・松井八郎左衛門が派遣されている。駿府見分の後、鈴木修理が金谷に到ると、

五社・諏訪両社の各社家と諏訪宮大工都築五郎太郎・五社宮大工佐藤伊右衛門・木引治右衛門が迎えている。両宮大工は、元和・寛永の両社棟札に認められ、五社神社は大工佐藤氏、諏訪神社は大工都築氏が確認できる。浜松の見分一日目に五社神社破損見分・間数等改、二日目に諏訪神社破損見分(天井・床下他)・間数等改が実施された。しかし同年元禄大地震が、続いて宝永大地震(一七〇七)が起きたため、両社の修復は延引された。享保十二年(一七二七)、ようやく両社に修復料金五百両宛が下賜されたが、それを元金に貸付けた利金で修復せざるを得なかった。諏訪神社は、享保十三年から十ヶ年、五社神社は享保十六年から十ヶ年にて修復を完了した。享保期に幕府の援助の方針が転換され、本殿を中心とした修復助成となった。これまで両社一同で修復が依頼されてきたが、以降は幕末まで各社は、朱印地からの年貢収納・貸付利金・勸化等によって最低限の維持・管理を行なうしか術はなかった。

第四節 遠州一宮・駿州村山浅間神社の同時造営(第一部第一章参照)

元禄九年(一六九六)八月、作事方被官内山清左衛門によって遠州一宮(小國神社・天宮神社、周智郡森町)と駿州村山浅間神社(富士宮市)の破損所見分が行なわれた(第二章第一節参照)。九月には被官内山清左衛門に江戸町棟梁甲良次郎左衛門・太木太郎左衛門・松井八郎左衛門が遠州一宮の見分(資料四十七)を訪れ、翌十年、遠州一宮・駿州村山浅間神社の造営が同時に進められることとなった。三社には、被官内山清左衛門、大棟梁甲良豊前宗賀、江戸町棟梁甲良次郎左衛門・松井八郎左衛門、駿府棟梁花村与七郎が関与した。

小國神社と天宮神社は両社同一の由緒があり、遠州一宮として両社一体で造営が行なわれた。江戸町棟梁八人に加え、遠州一宮の大工棟梁高木助右衛門・木挽宮谷小右衛門・鍛冶・葺師が参画している。横須賀城主西尾隠岐守は、遠州一宮の助役を命じられ、一ヵ月余り「一之宮普請人足」を派遣した。

第五節 豆州一宮(三嶋大社)の修営

豆州一宮三嶋大社は、伊豆・箱根両権現と並び鎌倉時代から武家の尊崇が厚かった。寛永に大造営が行なわれるが¹⁴、慶安元年(一六四八)の火災により延焼し¹⁵、承応三年(一六五四)作事方大工頭木原木工允義久・鈴木修理長常の下で造営が行なわれた。宝永大地震後の宝永八年(一七一二)には作事方大工頭片山三七郎¹⁶の下、修復が行なわれている。

寛文十一年(一六七二)に修復が行なわれたが、その残金は三島代官に委ねられて、利倍増殖を図った利金をその後の小破損修復に充てることとなった。享保十八年(一七三三)には、小破損修復は拝借金を元金に貸付けて利殖を図り、一ヶ年の利金でその年の修復を行なうことになっている。利金が修復費として十分な場合は修復を翌年に延期し、余った利金は元金に加えられた。残金や拝借金の運営は三島代官が行ない、「三島宮金」と称された¹⁷。寛保二年(一七四三)になると社殿大破のため修復の助成として勸化を出願し、七ヶ国勸化が許されている。その後も修営の状況に応じて材木や修復料が下賜されているが、このように資金を蓄えて造営費用に充て、不足分は勸化や富興行で補った。宝暦九年(一七五九)に三島代官が廃止されると、葦山代官江川太郎左衛門に統合され、三島宮金の運営や三嶋大社の見分等にも江川太郎左衛門が関与、その体制は幕末まで続いた¹⁸。

安政東海地震(一八五四)によって三嶋大社の社殿は悉く倒壊した。安政四年(一八五七)に造営資金調達のため十五ヶ国勸化が許され、翌五年から社殿の造営が開始されている。この造営は、三嶋大社の宮大工井口宗左衛門¹⁹の下、小土肥村(伊豆市)の大工平田伝之輔、彫物は後藤芳治良と江奈村(賀茂郡松崎町)の小沢半兵衛²⁰が担当して進められた。慶応二年(一八六六)、現在の本殿・幣殿・拝殿が竣成、同三年上棟祭が執行された。その後、明治二年(一八六九)までかけて順次境内が整えられている。

第六節 徳川家ゆかりの寺社と駿州一宮（富士山本宮浅間大社）

徳川家ゆかりの寺社として、駿府には秀忠生母西郷局菩提寺の宝台院、家康の祖母源応尼菩提寺の駿府華陽院が、遠州二俣（浜松市）には家康の嫡男松平信康の廟所清瀧院が所在する。これら寺社にも修復の助成として修復料または手当金が下賜されていた（表四・一・一【参照】）。

駿州一宮富士山本宮浅間大社（富士宮市）の現本殿は、慶長九年（一六〇四）家康によって造営され、寛文十二年（一六七二）には修復が行なわれた。宝永大地震と噴火（一七〇七）により大きな被害を受け、翌宝永五年（一七〇八）六月九日、駿府城修築を終えた大棟梁甲良豊前宗員によって見分が行なわれている。

【史料四・一・五】「当山本宮記」²¹

一同五戊子年六月九日当社為見分、甲良豊前殿□□、同本宮御修理被仰付、金貳千両拝領。

一同七寅年御修履相済。下文略

富士山本宮浅間大社は社殿の修復を命じられ、金二千両を拝領して同七年修復を完成した。

文化十一年（一八一四）には、諸寺社から幕府へ修復願いが出されていた。しかし当時幕府の財政が逼迫していたため、手当の銀子の助成が精一杯の状況であった。以降幕末まで修復費の不足分は諸国勸化に頼り、最低限の修繕を行ない、維持せざるを得なかった。

第二章 公儀作事の組織と工匠

江戸時代前半までは、徳川家ゆかりの寺社や駿府城内外の諸施設、各国一宮は、幕府の庇護を受けてきた。その中でも、幕府作事方の下、地元の棟梁が修営に参画していたことが史料から判明している。特に作事方配下の棟梁と駿府棟梁・浜松棟梁がどのように公儀作事に関与していたのか述べたい（表四・一・一【参照】）。

第一節 江戸中・後期における幕府の寺社見分

江戸幕府による修営においては、幕府作事方および小普請方によって見分が実施された。江戸時代中・後期における幕府の寺社等見分については、『鈴木修理日記』等史料から三度の主要な見分を確認することができる。

『鈴木修理日記』に大工頭以下の職務について記され、見分についても触れられている。【史料四・二・一】

【史料四・二・一】『鈴木修理日記三』元禄十五年八月二十八日条

覚

一拙者共、代々御役儀相勤候儀、御存知被遊候通、寛永六年より拙者祖父、御作事方之諸色御勘定致上ゲ候御役儀、御赦免被成候様ニ願上ゲ相叶、品々之役儀、外之衆中新規御役人被仰付候、御作事方元々吟味之儀計相勤来候事。

一遠国・御当地、新規・修復ニよらず表立候義、拙者ども并御被官大棟梁被差遣新規之儀は地形より見立、御作事方絵図指図古法を致吟味申付、御作事奉行迄相達、御老中様方御吟味之上相極り、諸奉行人被仰付、右之仕様絵図・差図・目録帳面共ニ、拙者共方より奉行中江相渡、其上大分之義ハ拙者共御加江、小分之儀は御被官被差添、御作事終候迄、諸色之吟味仕候

事。(後略)

寛永六年より大工頭鈴木修理の祖父近江が作事方の諸色勘定を勤め、代々大工頭は、作事方の元締めとして作事の吟味を行なってきた。遠国・江戸において新規・修復共に大工頭は被官・大棟梁を伴って見分を実施し、仕様・絵図・指図・目録等の作成を行なった。作事の規模が大きい場合は大工頭も関与し、小規模の場合は被官を派遣、作事終了まで諸色の吟味を行なっていたことがわかる。このように駿河国周辺の公儀作事の際にも、大工頭をはじめ被官・大棟梁・江戸町棟梁によって修復の目論見見分が実施されている。

元禄七年(一六九四)から九年にかけて、被官による遠国十六ヶ所の寺社等の見分が行なわれた。これらをまとめたのが「遠国所々見分大積之覚」(表二・一・三参照)で、被官組頭から作事奉行へ提出されている。その中に伊豆権現(現伊豆山神社、熱海市)・遠州一宮・駿州村山浅間神社が含まれている。伊豆権現は、箱根権現並鎌倉八幡宮(鶴岡八幡宮)と共に見分が行なわれ、三社は元禄十年に修復が行なわれることになった。遠州一宮・駿州村山浅間神社の三社同時造営(第一章第四節参照)も被官と江戸町棟梁による元禄九年九月の見分の結果、翌十年に造営の運びとなっている。

元禄十六年(一七〇三)には、江戸から五畿内の寺社等見分が、二ヶ月にわたる作事方大工頭鈴木修理長頼によって行なわれている。見分には被官大石貞右衛門、同見習鈴木源五郎、江戸町棟梁河合利兵衛・久村甚左衛門・松井八郎左衛門が同行し、三島、駿府、浜松においても見分が実施された。三嶋大社では宮大工惣兵衛が、駿府では駿府棟梁花村与七郎・長左衛門・棟梁五人・木挽三人が迎えている。鈴木修理は駿府において、駿府城内外・八幡村八幡宮・蓮永寺・宮内之薬師堂・臨濟寺・静岡浅間神社・宝台院の破損や修復状況の見分を行なった。駿府見分の後、金谷(島田市)で五社・諏訪両社の各社家と諏訪宮大工都築五郎太郎・五社宮大工佐藤伊右衛門・木引治右衛門が出迎え、破損所見分は各一日行な

われた。元和・寛永の両社棟札に、五社神社は大工佐藤氏、諏訪神社は大工都築氏が認められる。

安永三年(一七七四)三月、駿府において静岡浅間神社・久能山東照宮・宝台院の目論見見分が行なわれた(第一章第二節参照)。幕府勘定組頭倉橋与四郎・勘定方普請役・作事方役人が派遣された。それと同時期の三嶋大社文書「午三月」(安永三年)の覚書²²に、駿府の見分に名が認められる勘定組頭倉橋与四郎をはじめ勘定方普請役、作事方役人として作事下奉行小櫛七十郎、さらに大棟梁甲良筑前²³、江戸町棟梁浜松清七²⁴・小嶋長兵衛の名が記されている。これにより、三嶋大社も駿府と一連で見分が実施されたことが推測される。

これまで各寺社における修営の過程として見分を個別に扱ってきたが、『鈴木修理日記』等史料によって、幕府の遠国修営事業における一連の見分として実施された事例を確認することができた。

第二節 江戸幕府棟梁と地元棟梁

第一項 作事方大棟梁甲良豊前と駿府棟梁花村与七郎

元禄期から宝永期にかけての当地の公儀作事には、作事方大棟梁甲良豊前および駿府棟梁花村与七郎が参画している。

両者の名は、元禄十年(一六九七)の遠州一宮・駿州村山浅間神社の三社同時造営から認められる。大棟梁甲良豊前は甲良家三代目宗賀²⁵で、その下で三社の棟梁を勤めた甲良次郎左衛門は弟である。次郎左衛門は『鈴木修理日記』元禄十二年一月二十七日条で、「大棟梁甲良豊前弟次郎左衛門、只今迄扶持方不被下候得ども、大棟梁並二諸事相勤来申候、」と大棟梁並の働きが評されている。

花村与七郎は駿府棟梁花村家四代目で、三代目までは長左衛門を襲名し、文久元年(一八六一)には十代目与七郎を数えた。初代長左衛門は、中井正清と箱根

権現（現箱根神社）の造営に関わり、『鈴木修理日記』によれば、家康駿府入国時より駿府城他の御用を勤め、家康薨去後は、久能山東照宮建立以来修営に携わり宮大工同然とある（第一部第三章参照）。

【史料四・二・二】『鈴木修理日記三』元禄十二年七月六日条

覚

一 甲良豊前儀、当年七十二歳ニ罷成、老衰仕、耳遠、御用も難弁御座候付、実子惣領志摩二家督被仰付被下候様ニ奉願候由、拙者共方迄書付差出シ申候間、願之通隠居被仰付被下候様ニと奉存候、以上。

七月六日

鈴木与次郎

小幡備中守殿

片山三七郎

松平伝兵衛殿

鈴木 修理

【史料四・二・二】より甲良豊前宗賀は、遠州一宮・駿州村山浅間の三社同時造営を行なった元禄十年（一六九七）当時、七十歳ということになる。その二年後には、弟の甲良次郎左衛門が兄の片腕となり大棟梁並に働き、年老いた兄豊前宗賀は実子志摩に家督を譲った。

元禄十五年には、甲良宗賀の倅四代目甲良豊前宗員（甲良志摩）が、大棟梁として熱田・三嶋大社の見分に派遣されている。翌十六年の作事方による久能山修復見分は、被官と大棟梁甲良豊前宗員が行なうことになったが、その際江戸町棟梁ではなく、駿府の棟梁花村与七郎以下を召連れるよう指示されている。この久能山修復は小普請方によって行なわれたが、修復完了後の霧除設置は、小普請奉行の指示により、駿府棟梁花村与七郎が立ち会った。このような仮設的な作業については駿府棟梁がその役割を担ったことが窺える。その当時花村与七郎は、京都中井主水・大坂山村与助と共に駿河の作料等にも関与する棟梁であった²⁶。

宝永大地震後の宝永五年（一七〇八）一月から、駿府城と久能山の修復が直ち

に行なわれた。駿府城の修築には、大棟梁甲良豊前宗員と江戸町棟梁河合利兵衛・石丸仁右衛門・桑原伝八及び駿府町棟梁組頭花村与七郎・棟梁川本仁右衛門・石川安右衛門・細井伝次郎等が参画している。五月の普請完了後の見分で花村与七郎は、江戸町棟梁三名と行動を共にしており、普請の褒賞は江戸町棟梁筆頭の河合利兵衛と同等であった。

浅間大社も、宝永大地震と富士山の噴火によって大きな被害を受けた。駿府城修築完了後、大棟梁甲良豊前宗員は同じく地震被害に遭った富士山本宮浅間大社の見分に向かった（第一章第六節）。

第二項 江戸町棟梁

作事方配下の江戸町棟梁は、大工頭や大棟梁と共に派遣され、様々な作事や見分に携わっていた。江戸町棟梁の駿河・遠江・伊豆における動きは【表四・一・一】の幕府方他の項にまとめた。

江戸町棟梁と大棟梁に関しては、『鈴木修理日記』に次のように記録されている。

【史料四・二・三】『鈴木修理日記三』宝永元年六月十四日条

別紙

覚

一 町棟梁、御代々御作事方御用相達候者、前式百人計御座候而、作事方御普請之分、御細工仕来候故、遠国寺社・新田等見分積り、絵図等之御用も、右之訳故相勤来申候、然処二近来は小普請方御用多ク、御作事方御用少罷成候付、右町棟梁共、段々減申候而、只今は漸五十人計御座候、然所遠国見分・当所御用数多御座候付、右之者共、漸御絵図差図計相勤、一日之作料・飯米迄二而相続申候、此度御城内外御普請付、右町棟梁之内式拾人余、

御用差遣申候、其上、増御作事も御座候節ハ、外之町棟梁をも差加江申候、尤当御代様ニも二之丸・三之丸御普請之節、小普請方定棟梁ニ、此方町棟梁被指加、細工仕候事。

一拙者支配大棟梁四人之内、甲良豊前・鶴刑部左衛門儀は、此度御作事方御用被仰付、罷出、相勤申候、残而大棟梁平内大隅・辻内茂兵衛兩人、只今手明ニ而罷有候間、二之丸御普請ニ被指加被下候様ニ奉願候、(後略)

江戸町棟梁は、代々作事方御用を勤め、以前は二百人程あつたという。作事方の普請の際には細工を行ない、遠国寺社・新田等の見分見積・絵図等の作成も勤めた。しかし、小普請方御用が増え、作事方御用が減少したため、江戸町棟梁数も減り、宝永元年(一七〇四)当時、五十人程となつた。遠国見分・江戸御用の絵図等の作成を勤め、一日の作料・飯米で続いているという状況であつた。この度、江戸城内外の普請に江戸町棟梁の内二十余人が御用を勤めることになり、追加の作事の際は、他の江戸町棟梁も参画できることになった。二之丸・三之丸普請の際に、小普請方定棟梁に江戸町棟梁を加えて細工が行なわれたこともあつたという。作事方大工頭支配の大棟梁は、甲良豊前・鶴刑部左衛門・平内大隅・辻内茂兵衛の四人であつた。この度、甲良・鶴は作事方御用を命じられたが、平内・辻内は動員されなかつた。そこで、二之丸普請への兩人の参画を嘆願している。

江戸町棟梁の中でも浜松大工の系譜を引く者が、五社・諏訪神社に派遣されたことはすでに述べた(第一章第三節参照)。その他では、松井八郎左衛門は、元禄十年(一六九七)の遠州一宮・村山浅間神社の三社同時造営に関与し、同十三年には新居普請(湖西市)、元禄十六年の鈴木修理長頼の五畿内寺社等見分を、河合利兵衛・久村甚左衛門と共に勤めている。宝永元年には伊豆権現・鎌倉八幡宮修復見分に携わるなど、当地の修営に多数関わる江戸町棟梁の一人である。鈴木修理の見分に同行した河合利兵衛は宝永地震後の駿府城修築に、同じく久村甚左衛門は元禄十年の鎌倉八幡宮・伊豆箱根権現修復に参画している。市川治部左衛門

と桑原万五郎は、延宝三年(一六七五)の五社神社・諏訪神社修復に携わり、元禄十年に遠州一宮両社の造営に派遣されるなど、当地における江戸町棟梁の活動も明らかになってきた。

以上から、宝永大地震までの駿河・遠江・伊豆における主要な公儀作事について左記にまとめた。

慶長十二年(一六〇七)	駿府城造営	大工棟梁中井大和守正清
元和三年(一六一七)	久能山東照宮造営	
元和元年(一六一五)	五社・諏訪神社造営	御大工鈴木近江守長次
元和七年(一六二一)	府八幡宮造営	浜松棟梁
寛永九年(一六三二)	作事方設置	
寛永十六年(一六三九)	久能山五重塔造営	
寛永十八年(一六四二)	五社・諏訪神社造営	大工頭木原木工允義久
〃	静岡浅間神社造営	久能山内造営
正保三年(一六四六)	久能山内造営	大工頭木原木工允義久
承応三年(一六五四)	三嶋大社造営	大工頭鈴木修理長常
延宝三年(一六七五)	五社・諏訪神社造営	大工頭鈴木修理長常・木原内匠重弘
貞享二年(一六八五)	小普請方設置	江戸町棟梁
元禄十年(一六九七)	遠州一宮造営	大棟梁甲良豊前宗賀
	駿州村山造営	遠州一宮棟梁
	駿州村山造営	江戸町棟梁・駿府棟梁
宝永元年(一七〇四)	久能山東照宮修営	小普請奉行・定棟梁
宝永四年(一七〇七)	宝永大地震	

江戸初期は、家康の大工棟梁中井と鈴木の下造営が行なわれた。寛永の作事方設置後は、大工頭木原によって造営が行なわれ、五社・諏訪神社には浜松棟梁、

静岡浅間神社には駿府棟梁が関与している。江戸中期には大工頭木原²⁷・鈴木の両名と江戸町棟梁が関与している。小普請方設置後の遠州一宮・駿州村山の棟札には大工頭の名が見られず、作事方大棟梁甲良の下、江戸町棟梁・駿府棟梁によって造営が行なわれた。宝永元年の久能山東照宮修営は小普請方が担当した。宝永大地震後と宝暦期の修復にも小普請方の関与が認められ、江戸での作事方・小普請方の勢力関係が久能山修復にも反映されたものといえる。

一方、幕府の庇護を受けてきた徳川家ゆかりの寺社や一宮等の修営は、宝永大地震後、修復料や手当金の助成に切り替わり、勅化による資金調達が許され、以降幕末まで、最低限の修繕による維持管理を行なわざるを得ない状況となった。

久能山東照宮修営に関しては、明和以降作事方が担当し、天保久能山地震・安政東海地震で久能山も被害を受けるが、幕府作事方によって優先的に修復が行なわれた。

【表 4-1-1】駿河・遠江・伊豆における江戸幕府主要作事年表

西 暦	和 暦	月 日	事 項	幕 府 方 他	地 元 工 匠	史 料
1607	慶長12年	2月17日	駿府城修築	大工棟梁 中井正清		徳川実紀1
		12月22日	駿府城焼失			徳川実紀1
1608	慶長13年	8月20日	駿府城再建・七重天守上棟	大工 中井大和正次(ママ)		徳川実紀1
1612	慶長17年	9月	曾我社造営	大工 中井大和守正清	棟梁 華村長左衛門尉正重	駿河志料1
		11月3日	箱根権現社、宝蔵、拝殿造営	大工 中井大和守正清 棟梁 村源右衛門尉宗次 石川佐兵衛尉友重	大工 花村長左衛門尉正重	駿河志料1
1613	慶長18年		八幡神社	中井大和		県史料3
1615	元和元年	11月3日	五社神社造営(二代秀忠)	御奉行 安藤対馬守 御大工 鈴木近江守長次 小工 鈴木左衛門尉盛重 大鋸大工 松本清衛門尉廣綱 鍛冶大工 小田喜縫殿助是行	処之大工 佐藤左衛門尉吉直 小工 杉浦図書助吉次	県史料5 五社諏訪
			五社神社造営(小型棟札)		楼門 桑原佐左衛門吉性 桑原庄三郎吉直 桑原賀右衛門勝元 小山弥次右衛門宗次 富田伝左衛門家次 地藏堂 渡邊長左衛門吉勝 内山藤左衛門家次 拝殿 石原七衛門正次 浅原次左衛門家久 杉浦勘衛門家直 天神宮 清水忠衛門家長 御供所 渡邊市左衛門吉家 稲荷宮 一河惣十郎貞吉 内藤久右衛門忠次 鳥居 佐藤源兵衛吉久	県史料3 五社諏訪
			諏訪神社造営(二代秀忠)	御奉行 安藤対馬守 御大工 鈴木近江守長次 小工 鈴木三郎左衛門尉盛重 鍛冶大工 水野修理亮連政※ 大鋸大工 松本清右衛門※ 大鋸 才兵衛※	処之大工 都筑左衛門太輔家次 新村右近丞盛家 小工 杉浦左近尉吉久 杉浦木工寮正久	県史料5 五社諏訪
			諏訪神社造営(小型棟札)	楼門 小田原衆眞下宗右衛門連次 十王堂 半田半右衛門正次※ 眞下助三郎吉忠※ 清水弥七吉辰※	本宮 清水理兵衛家長 拝殿 杉浦喜兵衛綱家 森清兵衛貞久 杉浦伝吉直久 御供所 新村新六口次 都筑五兵衛久次	県史料5 五社諏訪
1616	元和2年	4月22日	久能山造営命(二代秀忠)	大工 中井大和守正次(ママ)		徳川実紀1
1617	元和3年	5月17日	久能山本社建立	大工 中井大和守正清 鋳物師 椎名伊予		久能山誌
		3月15日	府八幡宮本殿造営(二代秀忠娘)	神主 秋鹿和泉守朝正 御大工 鈴木近江守長次 大工 池田左衛門太夫清次	小工 桑原左近丞吉久 杉浦図書頭吉次 桑原左衛門尉吉正	県史料5 報告書A
1621	元和7年	11月15日	府八幡宮鳥居造営(二代秀忠)	神主秋鹿和泉守朝正 御大工 鈴木近江守長次 大工 池田左衛門太夫清次 大鋸大工 松本清右衛門正次※ 小工 杉浦七左衛門長次※	小工 杉浦図書頭吉次 宗七郎吉重 杉浦勘右衛門吉久 浅原次左衛門久家 川井六兵衛宗次 渡邊五右衛門正次 杉浦伝右衛門忠次	県史料5 報告書A
1639	寛永16年	8月20日	久能山五重塔建立供養	御大工 木原木工允義久		久能山誌
1641	寛永18年	11月26日	五社神社造営(三代家光)	御奉行 高力撰津守忠房 秋鹿長兵衛尉 御大工 木原木工允義久 塗師 長谷川甚兵衛吉次※ 大鋸大工 松本清左衛門※ 大鋸 今村才兵衛家次※ 鍛冶大工 水野次郎左衛門連政※ 瓦大工 中野五左衛門長俊※	大工 佐藤左衛門尉吉直 小工 佐藤拾左衛門	県史料5 五社諏訪
			五社神社造営(小型棟札)		拝殿 杉浦久兵衛 稲荷宮 内田長左衛門家次 天神宮・鼓楼 岩井九郎左衛門正次 鐘楼・鳥居 杉浦伝右衛門 地藏堂 杉浦惣七郎 御供所 浅原庄左衛門家成 唐門 小山弥次右衛門宗次	県史料5 五社諏訪
			諏訪神社造営(三代家光)	御奉行 高力撰津守忠房 秋鹿長兵衛尉 御大工 木原木工允義久 大鋸大工 松本清左衛門※ 大鋸 今村才兵衛家次※ 杉浦七左衛門※ 鍛冶大工 水野次郎左衛門連政※ 瓦大工 中野五左衛門長俊※	大工 都筑左衛門衛尉家次 新村右近丞成家 小工 都筑甚五兵衛 新村与十郎	県史料5 五社諏訪

西 曆	和 曆	月 日	事 項	幕 府 方 他	地 元 工 匠	史 料
1641	寛永18年	11月26日	諏訪神社造営(小型棟札)	鐘楼 江戸庄助※ 鼓楼 江戸甚五郎※ 塗師 長谷川甚兵衛吉次※	拝殿 桑原孫左衛門吉政 山王宮 浅原次右衛門家久 楼門 都筑仁左衛門・新村与十郎 十王堂 市川次郎左衛門貞吉 唐門 新村久左衛門 御供所 内山藤左衛門家次 鳥居 杉浦伝右衛門	県史料5 五社諏訪
		12月27日	静岡浅間神社上棟(三代家光)	御奉行 大久保玄蕃藤原忠成 土屋市丞源勝正 大工 木原木工允義久	大工棟梁 花村長左衛門 清右衛門 屋根葺 新五郎・清左衛門	報告書B 駿河志料2
1646	正保3年		久能山内造営	大奉行 久世大和守(老中) 普請奉行 牧野織部(作事奉行) 大工棟梁 木原木工允義久(大工頭)		久能山誌
1653	承応2年	5月18日	三嶋大社造営命			徳川実紀4
1654	承応3年	8月9日	三嶋大社上棟(四代家綱)	奉行 松平伊豆守信綱(老中) 大工 木原木工藤原義久 鈴木修理藤原長恒(ママ)(大工頭)		棟札写
1656	明暦2年		駿府大風雨 駿府城・久能山破損・修復			徳川実紀4
1659	万治2年	5月13日	宝台院荒廃・修復			徳川実紀4
1670	寛文10年	9月7日	宝台院・三嶋大社	被官 増田清右衛門		修理日記1
		11月12日	修復仕様目録・絵図作成			
		11月12日	静岡浅間神社堂減らし方検討	大工頭 木原内匠 被官 増田清右衛門		修理日記1
1671	寛文11年	5月20日	駿府棟梁共訴訟状并書付提出	大工頭 木原内匠 へ	駿府棟梁共	修理日記1
		5月30日	三嶋大社修復	下奉行 飯沼仁右衛門 青木友右衛門		修理日記1
		7月1日	数寄屋方棟梁・江戸棟梁・ 三島棟梁訴訟			修理日記1
1672	寛文12年	7月29日	宝台院修復			徳川実紀5
		12月26日	久能山修復	奉行 榊原越中守(久能山総門番) 被官大工 吉本加右衛門		久能山誌
			富士山本宮浅間大社修復(修復料金1000両)			浅間文書纂A
1673	延宝元年	3月5日	静岡浅間神社修復			徳川実紀5
		8月13日	駿府大風雨・駿府城内破損			徳川実紀5
1676	延宝2年	4月2日	五社・諏訪仕様帳完成 (五社・諏訪方惣入用高)	被官		修理日記1
		4月21日	大歳御祖神社寸法 (静岡浅間神社)		駿府棟梁共方より	修理日記1
1675	延宝3年	5月18日	五社神社修復(四代家綱)	御奉行 太田摂津守資次(浜松城主) 御大工 鈴木修理丞・木原内匠正 大工棟梁 清水兵左衛門家次 浅原庄右衛門吉重 市川治部左衛門良直 桑原万五郎政次 大鋸棟梁 松本次郎兵衛重之※ 今村七左衛門※		県史料5 五社諏訪
			諏訪神社修復(四代家綱)	御奉行 太田摂津守資次(浜松城主) 御大工 鈴木修理亮・木原内匠頭 大工棟梁 清水兵左衛門尉家次 浅原庄右衛門尉吉重 老川治部左衛門尉良直 桑原万五郎尉政次 大鋸棟梁 松平次郎兵衛政之※ 今村七左衛門定次※		県史料5 五社諏訪
1676	延宝4年	3月29日	五社・諏訪両社木棟より雨漏	両大工頭・棟梁 兵左衛門・庄右衛門		修理日記1
1681	延宝9年	2月24日 ～3月9日	久能山破損所見分	鈴木長兵衛(大工頭鈴木修理長常伴) 被官大工 河辺六左衛門	駿府棟梁 花村長左衛門(出迎)	修理日記1
		3月15日	宝台院・静岡浅間神社見分			修理日記1
		6月2日	駿府役屋敷絵図完成			修理日記1
1686	貞享3年	3月1日	熱田作事		浜松棟梁4人	修理日記2
		8月26日	浜松木引棟梁近日帰る		浜松木引棟梁 次郎兵衛・清左衛門	修理日記2
1687	貞享4年		宝台院修復	勘定頭 彦坂伯耆守重治 作事奉行 戸田又兵衛直治		徳川実紀5
1689	元禄2年	4月21日 ～5月10日	久能山破損所見分	奉行 安藤九郎左衛門・西尾藤兵衛 被官大工 河辺六左衛門 江戸町棟梁 平内長右衛門 大谷善次郎		久能山誌
		8月	久能山修復	奉行 安藤九郎左衛門・西尾藤兵衛 被官大工 河辺六左衛門		久能山誌
1690	元禄3年	10月	静岡浅間神社破損所見分	被官 杉本五左衛門 大工棟梁 2人		修理日記2
1691	元禄4年	5月26日～ 12月25日	静岡浅間神社修復	修復奉行 松平新五左衛門 山口孫次郎 被官 杉本五左衛門 大工棟梁 2人		修理日記2
1694	元禄7年	8月27日	伊豆・箱根権現・鎌倉八幡社 破損所見分	被官 坂本三郎兵衛 棟梁 2人		修理日記2
1695	元禄8年	2月27日	伊豆・箱根・鎌倉修復一両年延期			修理日記2

西 曆	和 曆	月 日	事 項	幕 府 方 他	地 元 工 匠	史 料
1696	元禄9年	8月22日	遠州一宮・駿州富士浅間見分	被官 内山清左衛門		修理日記2
		12月2日	遠州一宮・駿州村山浅間 材木等見積	被官 内山清左衛門		修理日記2
		12月18日	遠州一宮 宮大工・木挽訴詔持参		宮大工・木挽3人	修理日記2
1697	元禄10年	1月18日	遠国所々見分大積(元禄7～9年見分)			修理日記3
			鎌倉八幡宮・伊豆権現・箱根権現 駿府御城代・町奉行役屋舗 遠州一宮・村山浅間神社	被官 坂本三郎兵衛 被官 前沢藤兵衛 被官 内山清左衛門		
		1月28日	鎌倉八幡宮・ 伊豆・箱根両権現修復	大棟梁 鶴飛驒・平内大隅 町棟梁 脇場九左衛門 久村甚左衛門・西井儀兵衛		修理日記3
		2月4日	鎌倉・伊豆・箱根工割	鶴飛驒 25,000人 平内大隅 12,000人 久村甚左衛門 5,000人 甲良平九郎 5000人 脇場久左衛門 5,000人 西井儀兵衛 5,000人 箱根与三兵衛 2,000人 松井茂左衛門 2,000人	鎌倉宮大工 宇兵衛 1,000人 鎌倉宮大工 木工之丞 1,000人	修理日記3
		2月9日	鎌倉八幡・伊豆・箱根方御用 遠州一宮・村山浅間御用	被官組頭 片山三七郎 被官組頭 鈴木与次郎		修理日記3
		4月19日	遠州一宮・村山浅間修復	大棟梁 甲良豊前 町棟梁 甲良次郎左衛門		修理日記3
		8月13日	遠州御用(出発)	棟梁 桑原清兵衛・清水喜兵衛		修理日記3
		8月24日 ～28日	駿府城番大岡忠右衛門役屋舗 見分・仕様書・絵図作成 (三州伊賀八幡見分帰)	棟梁 久村甚左衛門 中野太郎右衛門		修理日記3
		9月29日	村山浅間本地堂大棟梁 諸末社造営(五代綱吉)	御奉行 太田摂津守資直(田中城主) 佐々木長右衛門 甲賀十太夫秀成 被官 内山清左衛門 大棟梁 甲良豊前 棟梁 甲良次郎左衛門 松井八郎左衛門		報告書C
1697	元禄10年	12月4日	小国神社造営(五代綱吉)	御奉行 西尾隠岐守忠成(横須賀城主) 河原清兵衛正真 豊原佐助勝喜 内山七兵衛永貞(中泉代官) 被官 内山清左衛門由茂 大棟梁 甲良豊前宗賀 棟梁 甲良次郎左衛門宗俊 市川治部左衛門良直 清水喜兵衛・桑原万五郎 松井八郎左衛門・久村甚三郎・ 大木太郎左衛門・柴川藤左衛門 木挽棟梁 今村七左衛門※ 川口清右衛門※	棟梁 花村与七郎元貞 御修理大工 高木助右衛門 御修理木挽 宮谷小右衛門 御修理鍛冶 山崎吉右衛門 御修理葺師 鈴鹿勘十郎	
		12月9日	天宮神社造営(五代綱吉)	御奉行 西尾隠岐守忠成(横須賀城主) 河原清兵衛正真 豊原佐助勝喜 内山七兵衛永貞(中泉代官) 被官 内山清左右衛門由茂 大棟梁 甲良豊前宗賀 棟梁 甲良次郎左右衛門 市川治部左右門 清水喜兵衛・桑原万五郎 松井八郎左右門・久村甚三郎・ 大木太郎左右門・柴川藤左衛門 木挽棟梁 今村七左右門※ 川口清右衛門※	花村与七郎 高木助右衛門 木挽 宮谷小右衛門・村松五郎助	報告書C
		11月28日	駿府華陽院修復			修理日記3
		12月28日	遠州一宮・村山浅間造営見廻褒美	内山七兵衛(中泉代官)・甲良清兵衛		修理日記3
1700	元禄13年	10月4日・ 15日	荒井(新居)普請	被官組頭 片山三七郎 被官 河辺六左衛門・内山惣右衛門 棟梁 根本七左衛門・甲良作左衛門 松井八郎左衛門		修理日記3
1702	元禄15年	9月21日	熱田並三嶋大社見分	被官組頭 片山三七郎 被官 内藤兵右衛門 大棟梁 甲良豊前 棟梁 甚兵衛・次郎右衛門		修理日記3
1703	元禄16年	1月29日	久能山破損所見分	被官 増田清右衛門 大棟梁 甲良豊前	駿府棟梁 花村与七郎以下	修理日記3
		3月	久能山破損所見分	小普請奉行 曲淵伊左衛門 鈴木伊兵衛		修理日記3

西 暦	和 暦	月 日	事 項	幕 府 方 他	地 元 工 匠	史 料
1703	元禄16年		五畿内寺社等見分	大工頭 鈴木修理 被官 大石貞右衛門 被官見習 鈴木源五郎 町棟梁 河合理兵衛 久村甚左衛門 松井八郎左衛門		修理日記3
		8月7日日	三嶋大社見分(炎上以後社跡計)		宮大工 惣兵衛(三島)	
		8月8日	駿府着		花村与七郎・花村長左衛門 棟梁5人・木挽3人	
		8月9日	駿府見分 駿府城廻り(伊豆あわ島石性悪)・水野小左衛門役屋敷(修復済)			
		～10日	八幡村八幡宮(破損)・貞松山蓮永寺(破損)・静岡浅間神社境内薬師堂・大竜山臨濟寺(破損)・静岡浅間神社(破損)・宝台院(修復済)			
		8月11日	金谷着		諏訪宮大工 都築五郎太郎 五社宮大工 佐藤伊右衛門 木引 治右衛門	
		8月13日	五社修復見分(間数等改)			
		8月14日	諏訪修復見分(天井・床下他見分、間数等改)			
		11月23日	元禄大地震			
1704	宝永元年	2月11日	三嶋大社入用大積目録			修理日記3
		9月4日・6日	伊豆権現・鎌倉八幡破損所見分	被官 内藤兵右衛門 大棟梁 辻内茂兵衛 町棟梁 西井儀兵衛 松井八郎左衛門		修理日記3
		9月6日	伊豆権現別当般若院修復	作事被官棟梁		徳川実紀6
		10月15日	久能山修復	作事奉行 松平伝兵衛兼邦 小普請奉行 曲淵伊左衛門重羽		徳川実紀6
		12月15日・17日	久能山上棟・供養	総奉行 稲垣対馬守重富(若年寄) 助役 太田摂津守資直 小普請奉行 曲淵伊左衛門 鈴木伊兵衛 大工 大谷甲斐正矩・大谷出雲基矩		久能山誌
1705	宝永2年	4月7日			遠州棟梁 庄右衛門跡世倅庄右衛門	修理日記4
		4～5月	久能山霧除	小普請奉行 曲淵伊左衛門	駿府棟梁 花村与七郎	久能山誌
1707	宝永4年	10月4日	宝永大地震			
		10月6日	駿府城内外地震被害			徳川実紀6
			久能山巡察			徳川実紀6
		10月27日	久能山・宝台院・駿府城石塁修復命	普請奉行 水野権十郎 小普請奉行 間宮播磨守信明 駿府城修理助役 榊原式部大輔政邦 松平越前守定重 松平伊豆守信輝		徳川実紀6
1708	宝永5年	1月26日	久能山修復	普請奉行 間宮播磨守(小普請奉行)		久能山誌
		1～5月	駿府城修築	普請奉行 横山藤兵衛 被官 坂本七左衛門・内山惣右衛門 大棟梁 甲良豊前 棟梁 川合利兵衛・石丸仁右衛門 桑原伝八 石方 亀岡石見	駿府町棟梁組頭 花村与七郎 棟梁 川本仁右衛門・石川安右衛門 細井伝次郎 小屋棟梁 細井五兵衛・花村清兵衛 望月長右衛門・池田長十郎 壁方棟梁 七右衛門・甚左衛門 屋根方棟梁 与右衛門・清左衛門 木挽方棟梁 牧田太左衛門・西嶋十左衛門 塩津五右衛門 石方 四郎左衛門・次郎左衛門 三郎兵衛・甚右衛門	市史近世
		6月9日	富士山本宮浅間大社見分	甲良豊前		浅間文書集B
1709	宝永6年	5月28日	新居修復	普請奉行 伊勢平八郎貞教(目付)		徳川実紀7
1710	宝永7年	3月15日	三嶋大社修復命			徳川実紀7
			富士山本宮浅間大社修復(修復料金2000両)			浅間文書集B
1711	宝永8年	4月23日	三嶋大社上棟(六代家宣)	奉行 但馬守藤原喬知(老中) 片山三七郎(大工頭)		棟札写
1711	正徳元年	7月19日	駿府華陽院(修復料金銀300枚)			徳川実紀7
		11月15日	駿府城石垣修復	助役 松平甲斐守吉里		徳川実紀7
1712	正徳2年	5月30日	富士郡大石寺山門再興(富士山の樺・縦以下の雑木伐採許可)			徳川実紀7
1733	享保18年	2月12日	久能山石垣崩壊見分	小普請方勘定		徳川実紀8
		7月	三嶋大社 小修理は拝借金300両＋金140両の貸付利銀にて毎年実施			実紀8・触寛保
1738	元文3年	6月18日	駿府城石垣修造			徳川実紀8
		8月23日	諏訪神社修復(八代吉宗、修復料金500両)			五社諏訪
1743	寛保2年	5月	三嶋大社大破(七ヶ国勸化)			触寛保
			遠州一宮(四ヶ国勸化)・遠州天宮(三ヶ国勸化)			触寛保
			二俣清瀧院信康廟并位牌所大破(修復料金100両)			触寛保
		8月22日	久能山修復	奉行 松平左近衛将監乗邑(老中) 作事奉行 井戸伊勢守 大工頭 鈴木源次郎 作事下奉行 石渡善次郎 大柳八左衛門 大棟梁 平内大隅政長 助役 小笠原山城守		久能山誌

西 曆	和 曆	月 日	事 項	幕 府 方 他	地 元 工 匠	史 料
1745	延享2年	7月	三嶋大社造営(造営費616両、不足は勅化)			徳川実紀9
		9月27日	五社神社修復(修復料金500両)			五社諏訪
1747	延享4年	9月	三嶋大社造営(富興行10年許可、材木100本)			徳川実紀9
1748	延享5年		三嶋大社	大工頭大柳八左衛門・福田久左衛門支配 普請方棟梁 清水藤蔵 三嶋普請棟梁 親(清水) 喜兵衛		文書A
1749	寛延2年	5月	富士浅間社(駿東郡岡宮)大破(一ヶ国勅化)			触宝曆
1751	宝暦元年		駿府城修復			徳川実紀9
1752	宝暦2年		久能山破損所見分	小普請方 杉浦吉左衛門		久能山誌
1756	宝暦6年		久能山修復	奉行 堀田相模守正亮(老中) 助役 松平伊豆守 作事奉行 鶴殿十郎左衛門(小普請奉行代) 小普請方 窪田十郎左衛門 小普請方大工 村松飛驒棟貫		久能山誌 徳川実紀9
1757	宝暦7年	5月	静岡浅間神社破損(修復料金1544両、檜6万挺)			徳川実紀9
1758	宝暦8年	4月4日	駿府城石畳修復・久能山神井	小普請方		徳川実紀9
1764	明和元年	4月29日	駿府城・宝台院修復	小普請方・勘定		徳川実紀10
1765	明和2年		久能山修復	作事奉行 正木志摩守 大工頭 千種庄兵衛 作事下奉行 小櫛七十郎 大棟梁 辻内遠江(ママ) 棟梁 平内八右衛門・浜松清七	駿府棟梁 花村清右衛門 海野佐右衛門・牧田定次郎	久能山誌 徳川実紀10
1766	明和3年	12月	富士山本宮浅間大社大破(一ヶ国勅化)			触天明
1766	明和4年	5月	富士浅間社(駿東郡岡宮)大破(二ヶ国再勅化)			触天明
		6月	二俣清瀧寺廟所大破(修復料金100両)			触天明
		10月	村山浅間社頭并諸末社大破(一ヶ国勅化)			触天明
		11月	富士山本宮浅間大社修復(修復料銀30枚)			触天明
1773	安永2年	1月12日	静岡浅間神社其外末社共41ヶ所類焼			触天明
		12月	静岡浅間神社別当惣持院(修復料金100両) 社僧玄陽院(修復料金50両) 浅間御修復料溜金より拝借(10ヶ年賦返済)			触天明
1774	安永3年	3月	静岡浅間神社再建目論見見分 久能山目論見再見分 宝台院神殿霊屋諸堂目論見見分 三嶋大社見分	勘定組頭 倉橋与四郎 勘定方普請役 作事方役人 勘定組頭 倉橋与四郎 作事下奉行 小櫛七十郎 被官 江原源五郎 大棟梁 甲良豊前 町棟梁 浜松清七・小嶋長兵衛		触天明 文書B
		12月	二俣清瀧寺廟所位牌殿大破(修復料金100両)			触天明
1775	安永4年	7月	三嶋大社社頭末社修復(代官 江川太郎左衛門へ完了時届出、見分)			触天明
		8月～	久能山・宝台院修復	作事奉行 新見加賀守正栄 助役 松平千太郎直恒・松平出雲守		徳川実紀10
		閏12月26日	久能山修復完了	奉行 松平右近衛将監武元(老中) 助役 松平千太郎 作事奉行 山川下総守 大工頭 鈴木市十郎 作事下奉行 長沼千右衛門 矢島源四郎 大棟梁 甲良筑前棟村	久能山誌	
1776	安永5年	11月30日	駿府城内外修復	駿府町奉行 土屋長三郎正 小普請方		徳川実紀10
1777	安永6年	5月22日	久能山御宮修復(内陣鼠入り)	寺社奉行 牧野越中守貞長 作事奉行 河野信濃守安嗣 目付 田沼市左衛門意致		久能山誌 徳川実紀10
1787	天明7年	7月9日	久能山・宝台院修復	作事奉行 松平織部正 目付 井上助之進利恭		続徳川実紀1 触天明
1788	天明8年	5月22日	久能山修復完了	奉行 牧野備後守貞長(老中)・作事奉行 松平織部正 大工頭 河田安右衛門・作事下奉行 竹内半十郎 大棟梁 石丸隠岐充倚		久能山誌
		11月	駿府市井焼失・静岡浅間神社火災			続徳川実紀1
1790	寛政2年	11月	静岡浅間神社他仮殿25ヶ所造作			触天保下
1794	寛政6年	8月	二俣清瀧寺廟并本堂修復願(手当銀50枚)			触天保上
1797	寛政9年	4月	駿府華陽院位牌殿并御供所修復願(手当銀70枚、古木使用)			触天保上
1798	寛政10年		久能山修復	作事方		久能山誌
1802	享和2年	9月13日	久能山・宝台院修復			続徳川実紀1
1803	享和3年		久能山・五重塔修復完了	奉行 松平伊豆守信明(老中) 作事奉行 三上因幡守 大工頭 竹村七左衛門 作事下奉行 竹永市左衛門 橋本忠左衛門 大棟梁 甲良筑前棟村 金納助役 仙石越前守・亀井隠岐守		久能山誌 手伝記
1804	文化元年		静岡浅間神社再建	駿府城代 松平信濃守忠明 駿府町奉行 牧野鞠貞	棟梁 花村与七郎・花村清右衛門 三寺与右衛門・花村富左衛門	報告書B
1865	～慶応元年			破損奉行 榊原平兵衛長貞	以降、駿府棟梁・彫刻立川一門	

西 暦	和 暦	月 日	事 項	幕 府 方 他	地 元 工 匠	史 料
1807	文化4年	11月	宝台院神殿霊屋他破損場所取繕			触天保上
1808	文化5年	11月	三嶋大社大破見分		代官 江川太郎左衛門	触天保下
1809	文化6年	11月	富士山本宮浅間大社大破(手当金100両、三ヶ国勅化)			触天保下
		12月	三嶋大社修復棧門屋根銅瓦に葺替(修復料金2000両、神主引請)			触天保下
1810	文化7年	4月	富士山本宮浅間大社大破(三ヶ国勅化)			触天保下
1811	文化8年	3月	五社神社棧門再建社頭修復(手当銀30枚、一ヶ国勅化)			触天保下
		7月	静岡浅間神社別当惣持院修復(浅間修復料溜金より手当金150両)			触天保上
1814	文化11年	9月	久能山御宮別当德音院(手当銀500枚)			触天保上
			宝台院(手当銀50枚)			触天保上
			静岡浅間神社別当惣持院修復(浅間修復料溜金より手当金50両)			触天保上
1817	文化14年	7月	静岡浅間神社別当惣持院屋根銅瓦葺に葺替 (浅間修復料溜金より金161両1分、銀7匁9分3厘4毛)			触天保上
		8月	駿府華陽院廟所他破損(手当銀50枚)			触天保上
1818	文化15年	1月	宝台院神殿霊屋他破損(手当銀200枚)			触天保上
1821	文政4年	3月	静岡浅間神社別当惣持院(浅間修復料溜金より金26両)			触天保上
1826	文政9年	8月	二俣清瀧寺廟所位牌殿他修復願(手当銀50枚)			触天保上
1827	文政10年	12月	宝台院修復3ヶ年の割合			触天保上
1828	文政11年	5月	宝台院修復(手当銀100枚)			触天保上
1829	文政12年	2月	二俣清瀧寺廟所位牌殿他大破(三ヶ国勅化)			触天保下
1831	天保2年	4月	三嶋大社修復(修復料金2000両)			触天保下
1833	天保4年	7月2日	久能山修復完了	奉行 水野出羽守忠成(老中格) 作事奉行 川井長門守 大工頭 大越孫兵衛 作事下奉行 生田丈助・岡本良右衛門 岡本良右衛門 大棟梁 石丸伊勢 大工棟梁 児玉児左衛門・高木吉次郎 服部八十郎・上田儀兵衛 金納助役 佐竹右京大夫→松平越前守 →松平老岐守・細川中務少輔 金納助役 真田伊豆守・久世隴岐守		久能山誌
1837	天保8年	12月27日	駿府城内塩埦屋他修復	前駿府町奉行 本多淡路守		続徳川実紀2
1840	天保11年	12月29日	駿府城内櫓多門他修復	駿府町奉行 牧野靱負		続徳川実紀2
1841	天保12年	3月2日	天保久能山地震			
		3月28日	久能山地震被害檢視	使番 松平小豊次		続徳川実紀2
		7月20日 ～8月4日	久能山地震破損所見分	大工頭 金田藤七郎(蔵奉行格) 作事下奉行 今井右左衛門 大棟梁 辻内近江 大工棟梁 沢村儀三郎・服部八十郎	駿府棟梁 石方善左衛門・左官方宗蔵	久能山誌
		11月12日	二俣清瀧寺信康君牌殿他破損(三ヶ国勅化)			続徳川実紀2
1842	天保13年	6月29日	久能山修復	奉行 水野越前守忠邦(老中) 作事奉行代 岩瀬内記→中川勘三郎 大工頭 村上与五郎 作事下奉行 今井右左衛門・安西久次郎 大棟梁 辻内近江景頭 大工棟梁 林善太郎・服部八十郎 浜松彦八郎	駿府棟梁 花村源左衛門 花村清右衛門 池田栄次郎 絵図師 五郎兵衛	久能山誌
1854	安政元年	11月4日	安政東海地震			
		11月10日	駿府城内外・久能山地震被害見分	目付 大久保右近将監		続徳川実紀3
1855	安政2年	4月16日	久能山地震破損所見分	大工頭 松田弥太郎 作事下奉行 生田丈助 被官 大戸金右衛門 大棟梁 甲良若狭 大工棟梁 岡徳三郎		久能山誌
		10月2日	安政江戸地震			
1856	安政3年	9月26日	久能山修復	奉行 阿部伊勢守正弘(老中) 作事奉行代 松本十郎兵衛 大工頭 松田弥太郎 作事下奉行 生田丈助・那須喜兵衛 被官 大戸金右衛門 大棟梁 石丸祐次充久 大工棟梁 八木沢市右衛門・岡徳三郎 重田万次郎・今西清蔵	駿府棟梁 花村与七郎 花村清右衛門 池田栄次郎 絵図師 常吉	久能山誌
1857	安政4年	3月29日	三嶋大社諸堂社大破(十五ヶ国勅化)			続徳川実紀3
1860	万延元年	12月26日	建徳寺客殿諸堂社大破(五ヶ国勅化)			続徳川実紀3
1862	文久2年	6月29日	臨濟寺諸堂大破(七ヶ国勅化)			続徳川実紀3
1863	文久3年	2月晦日	草薙大明神本社末社大破(五ヶ国勅化)			続徳川実紀3
1866	慶応3年	9月	三嶋大社本殿・幣殿・拝殿上棟祭		御宮大工棟梁 井口宗左衛門範靖 木匠頭領 平田伝之輔波江 彫工頭領 後藤芳治良重利 小沢半兵衛	報告書D

年表中の事項・氏名は史料による。(一部参考文献による) ※は所屬不確定の者

史料 徳川実紀…黒板勝美・國史大系編集会『新訂増補國史大系 徳川実紀』吉川弘文館、1981。 続徳川実紀…黒板勝美・國史大系編集会『新訂増補國史大系 続徳川実紀』吉川弘文館、1982。 駿河志料…中村高平『駿河志料』歴史図書社、1969。 県史料…静岡県編『静岡県史料』復刻版、臨川書店、1994。 五社諏訪…『調査研究報告書五社神社・諏訪神社社殿等修理関係資料本文編』東京国立博物館、1996。 久能山誌…『久能山誌』静岡市、2016。(拙稿「久能山東照宮の修営と工匠」 報告書A…文化財建造物保存技術協会編『府八幡宮社殿修理工事報告書』府八幡宮、1994。 報告書B…文化財建造物保存技術協会編『神部神社浅間神社大歳御祖神社第三期修理工事報告書』静岡浅間神社修理委員会、1988。 棟札写…「棟札写」(近世267)矢田部家文書(矢田部家所蔵三嶋大社(宝物館)寄託管理)。 修理日記…鈴木棠三・保田晴男『近世庶民生活史料未刊日記集成鈴木修理日記』三一書房、1997～8。 浅間文書纂A…「大宮司別当公文案主連署造宮見分願写」(浅間神社社務所編『浅間文書纂』名著刊行会、1973。) 浅間文書纂B…「当山本宮記」(『浅間文書纂』) 報告書C…静岡県伝統建築技術協会編『天宮神社本殿及び拝殿修理工事報告書』天宮神社、2013。 市史近世…『静岡市史』近世、静岡市役所、1979年。 文書A…「覚」(大工頭大柳八左衛門他)(近世175)矢田部家文書。 文書A…「覚」(作事役人・大工等の覚)(近世178)矢田部家文書。 触寛保…高柳眞三・石井良助『御触書寛保集成』岩波書店、1958。 触宝暦…高柳眞三・石井良助『御触書宝暦集成』岩波書店、1958。 触天明…高柳眞三・石井良助『御触書天明集成』岩波書店、1958。 触天保上…高柳眞三・石井良助『御触書天保集成上』岩波書店、1958。 触天保下…高柳眞三・石井良助『御触書天保集成下』岩波書店、1958。 報告書D…『三嶋大社の御社殿 三嶋大社本殿・幣殿・拝殿調査報告書』三嶋大社、2000。

- 1 川村由紀子「宝暦・明和期の日光東照宮の修理と日光棟梁」『関東近世史研究第七十九号、二〇一六』
- 2 「雑簿」『久能山叢書』第三編、久能山東照宮社務所、一九七三、所収。
- 3 川村由紀子「宝暦・明和期の日光東照宮の修理と日光棟梁」
- 4 「天保壬寅御修復公私日録」「安政丙辰地震損御修復公私日録」は、久能山総門番柳原照成が編纂した『久能経営記』『久能山叢書』第一編、久能山東照宮社務所、一九七〇、所収）の中に納められた久能山内修復をめぐる記録である。
- 5 「室伏家文書」沼津市歴史民俗資料館所蔵。
- 6 「駿河国有渡郡駒越村 斎藤家文書」静岡市所蔵。以下「斎藤家文書」。
- 7 「駿州久能山御宮其外御修復」一「斎藤家文書（提供：静岡市）」。
- 8 「浅間金」は、駿府在番・加番の奉納金・追放神主の配当高・残木材払下金等を修復料として蓄積し、利殖を図った資金。『静岡市史』近世、静岡市役所、一九七九
- 9 家康が遠州中泉（磐田市）で旅宿としたのが秋鹿邸であり、その秋鹿氏が神職を務めていたのが府八幡宮である。『徳川実紀』第一篇、慶長十四（一六〇九）一月十一條
- 10 戦前国宝に指定されていた五社神社・諏訪神社の社殿は、寛永造営のものとみられるが異論がある。（湯浅隆「五社神社、諏訪神社の成立過程」『調査研究報告書五社神社・諏訪神社社殿等修理関係資料本文編』東京国立博物館、一九九六）
- 11 秋鹿長兵衛は中泉代官で、天竜川上流の榑木を集積する船明山（浜松市天竜区）で榑木の管理を行なう榑木奉行でもあった。（第三部第一章第一節天竜川筋の木材と榑木、参照。）
- 12 湯浅隆「五社神社、諏訪神社の社殿維持について」『調査研究報告書五社神社・諏訪神社社殿等修理関係資料本文編』
- 13 浅原庄右衛門は、作事方配下の大工棟梁浅原（浜松）家四代目で、二代目から出身地の「浜松」姓を名乗る。初代浅原次左衛門家久は、元和元年の五社神社造営において拝殿を、寛永十八年の諏訪神社造営で山王宮を担当している。二代浅原（浜松）庄右衛門家成は、寛永十八年の五社神社造営で御供所を担当した。（表四・一一一参照）（西和夫「浜松棟梁と徳川幕府作事方大工棟梁」『日本建築学会論文報告集』二六〇、一九七七）
- 14 原秀三郎「総説 三嶋大社の沿革と社家組織」『三嶋大社関係文書目録—三嶋大社関係古文書調査報告書—』静岡県文化財調査報告書第四十六集、静岡県教育委員会、一九九三。
- 15 慶安元年（一六四八）の火災により三嶋大社は延焼し『徳川実紀』第三篇、

- 慶安元年十一月八日条）、承応二年（一六五三）造営が命じられて、翌三年完成した。
- 16 片山三七郎は、宝永五年（一七〇八）、被官組頭から大工頭に任じられ、享保八年（一七二三）まで大工頭を務めた。被官組頭であった元禄十年（一六九七）、鎌倉八幡宮・伊豆・箱根方御用を担当し、元禄十五年の熱田並びに三嶋大社の見分では大棟梁甲良豊前と共に訪れている。
- 17 『三嶋大社関係文書目録—三嶋大社関係古文書調査報告書—』解題 6 井口家文書。
- 18 同右。
- 19 井口家は三嶋大社の宮大工を務めた社人である。（原秀三郎「総説 三嶋大社の沿革と社家組織」『三嶋大社関係文書目録—三嶋大社関係古文書調査報告書—』）
- 20 江奈村（賀茂郡松崎町江奈）の彫師で、伊豆半島を中心に多くの作品を残し、石田姓も名乗る。石田半兵衛と記すことがほとんどである。『三嶋大社の御社殿 三嶋大社本殿・幣殿・拝殿調査報告書』三嶋大社、二〇〇〇。
- 21 「当山本宮記」（浅間神社社務所編『浅間文書纂』名著刊行会、一九七三、所収）。
- 22 「覚」（作事役人・大工等の覚）（近世一七八）矢田部家文書（矢田部家所蔵三嶋大社（宝物館）寄託管理）。
- 23 御勘定組頭 倉橋与四郎、御作事下奉行 小櫛七十郎、支配勘定 三嶋所左衛門、御被官 江原源五郎、御普請役 橋爪領助、勘定役 飯田茂八郎、小役 青木団七、手代 平嶋源次郎、定普請同心 赤城十四郎・大竹金平、大棟梁 甲良筑前、町棟梁 浜松清七・小嶋長兵衛
- 24 以上
- 25 午三月
- 26 大棟梁甲良筑前は、八代目甲良棟村で、享和三年（一八〇三）に久能山東照宮並びに五重塔修復（第二章第二節参照）に関与している。（田邊泰「江戸幕府大棟梁甲良氏に就て」『建築雑誌』六〇九、一九三六）
- 27 作事方配下の江戸町棟梁浜松清七は、明和二年（一七六五）の久能山修復に参画している。
- 28 三代目甲良豊前宗賀は、元禄十二年（一六九九）隠居し、倅志摩が家督を継いで四代目甲良豊前（宗員）と改めた。（田邊泰「江戸幕府大棟梁甲良氏に就て」）
- 29 『鈴木修理日記三』宝永三年（一七〇六）六月三日条（大工・木挽作料、飯米調査）

大工頭木原氏の代替わりの時期に相当している。六代木原木工允義久（明暦二年（一六五六）没）、七代木原内匠義永、八代木原内匠重弘（明暦三年大工頭、享保九年（一七二四）没）
田邊泰「江戸幕府大工頭木原氏に就いて」『建築雑誌』五九六、一九三五。
『新訂 寛政重修諸家譜』第二十二、続群書類従完成会、一九八五。

結

近世の駿河国とその周辺地域では、種々の建築普請活動が行なわれていた。駿府には、駿府城、久能山東照宮、静岡浅間神社、宝台院等、徳川家ゆかりの寺社等が造営され、その周辺地域においても江戸幕府による建築普請が実施されていた。本研究は、個々の建築普請そのものを当地からの目線で調査し、建築普請活動の実態を包括的に解明することを試みたものである。久能山東照宮等数々の事例に基づき、修営における過程や建築普請方式から修復関係者の旅宿にいたるまでを記録から明らかにした。それらを担った江戸幕府の建築普請組織と地元工匠の関わりに着目し、駿河国とその周辺地域の公儀作事を横断的に総括したところ、個別の事象として扱われていた建築普請が、一連の幕府見分や修営であったことが判明した。さらに、作事方大工頭・大棟梁、その配下の江戸町棟梁の当地における複数の建築普請への関与と駿府棟梁等地元工匠との関わりを整理し、駿府棟梁の広域的な活動を明らかにした。

第一部は、駿府における工匠の組織および主要な公儀作事について取り上げた。天保期と明治期の駿府町絵図から大工町・材木町・大鋸町・鋳物師町等職人町の存在が確認できる。多数あった職人町の中で、天保期に工匠の集住が認められるのは「上大工町」と「新通大工町」であり、両大工町の大工は、駿府城内外の破損所定式御用を勤め、久能山近辺の火災の際には火消人足として急行すること等が定められていた。駿府でも太子講が結ばれ、大工は十組、左官は五組で構成されている。左官は二番組が定式御用を勤め、車町・馬場町の者から成った。太子講では組合の規定と作料の決定が行なわれている。安政五年（一八五八）「十組仲間大工規定書」によると、両大工町の大工の定式御用勤めは天明年中（一七八一〜九）からで、それ以前は棟梁方から町方大工への指示により交代で勤めた。天保年中の凶作の際、両大工町は定式御用の資格を失い、仲間規定を破ったため、

安政五年以降、定式御用や駿府城・静岡浅間神社等御用は、棟梁方の指図により町方大工が勤めることになったという重大な変化が判明した。両大工町は規定仲間でないことが規定書に記され、十組仲間と両大工町の間で、互いの持ち場への立入が禁止された。駿府城下町の寺社普請については、過半が入札で行なわれ、町内の者も入札が必要な場合があったことも記されている。

駿府における主要な公儀作事として、駿府城、久能山東照宮、静岡浅間神社が挙げられる。駿府城は、大工棟梁中井大和守正清の造営によって完成したが、寛永十二年（一六三五）の火災で焼失した。その後再建されるが、宝永大地震、安政東海地震等、幾多の災害に遭いながら幕末まで公儀の修営が行なわれ、駿府の棟梁と工匠たちもその役割を担っていたことが分かった。

久能山東照宮は、家康の遺言通り、大工棟梁中井大和守正清によって元和三年（一六一七）に建立された。寛永期に家光によって五重塔が造立され、宝塔は石造に、社殿・諸堂社の屋根は銅瓦で葺き替えられた。久能山内の諸施設が整えられたのは正保三年（一六四六）であった。その後の主要な修営は、幕府作事方または小普請方によって行なわれた。宝永期・宝暦期の修復は小普請方が担当しているが、これは小普請方成立後の勢力拡大時期と合致している。明和期以降幕末までは再び作事方が担当した。明和二年（一七六五）の修復には駿府棟梁花村清右衛門・海野佐右衛門・牧田定次郎が参画していたことが判明した。さらに、天保四年（一八三三）の修復見分帳は、駿府町奉行・代官によって作成され、それには駿府の棟梁宗蔵・権十郎が関与している。天保十二年（一八四一）の地震後、駿府町奉行と使番によって直ちに見分が行なわれ、町奉行与力・駿府石方棟梁善左衛門と共に同行したのは、天保四年の修復見分帳作成に携わった左官方棟梁宗蔵である。翌年の修復は、大工工事の過半が終了すると江戸大工は引き払い、大棟梁辻内近江と駿府棟梁花村源左衛門・花村清右衛門・池田栄次郎の下、駿府大工によって完成された。その後の安政東海地震（一八五四）によって、五重塔の

柱が一尺五寸開き、御供所・春屋の二棟が焼失する等の被害を受けた。翌年、安政江戸地震が発生したことにより、久能山東照宮の修復は延引され、翌々年の安政三年ようやく修復が開始されたのであった。この修復にも、駿府棟梁花村与七郎・花村清右衛門・池田栄次郎が参画している。駿府棟梁及び工匠の名は棟札に記されず、彼らの参画は知られていなかったが、久能山同心近藤家文書や久能山総門番の公私日録等の史料によって明らかになった。

安政の地震被害による修復では、費用の節減と耐用年数の長期化が最大の課題となった。材木は当初江戸から輸送の予定だったが、安政江戸地震のため材木は江戸で差し止められ、全てを地元で調達せざるを得ない状況となっていた。江戸から久能山への材木運送は、小普請方が担当した宝永期の修復と御宮霧除設置の際の史料に見られ、江戸で材木加工が完了すると、廻船で清水湊へ搬送された。日光東照宮も元禄期造替から資材調達及び加工は江戸で行なわれている。安政東海地震後、地元調達して久能山へ搬入された材木は生木で、下番所の材木は鑿穴から水が出るかと思うほどと記録にある。材料の樹種・寸法も制限され、檜は杉に、五寸角は四寸三分角に、三寸垂木は二寸に、瓦屋根の下地の土居葺板は杉皮へと変更になった。根太・梁には松が用いられたが、当時の江戸城御殿においても、これまで櫓であった梁は残らず松に変更される事態であった。金物は江戸の御霊屋の事例から、金鍍金から真鍮に、漆塗りは日光東照宮と同様の仕様となった。また、安政期の久能山は国防の要所として一之門に大砲の設置が予定され、安政の修復と併せて床の補強も検討された。江戸前期に建立された久能山東照宮の諸堂社修復の仕様は、江戸や日光の事例を参照し、適宜決定されてきたことが確認できた。現在の文化財保存修理においては、史料から得られる修復仕様履歴を十分把握し、維持管理されてきた事実も踏まえる必要がある。また、地震で全壊した山上の坊舎再建については、京間を田舎間とすることで規模を縮小し、檜の柱は全て杉の赤身とされた。材種や規模を落としても建築として質を極力落とさぬ配慮と言えよう。

江戸時代の修営において古木は積極的に利用された。久能山東照宮の天保十三年の修復では古木が払い下げられ、安政の修復においては古木の積極的な活用が見られる。古木は別当德音院が拝領し、その後、知行所まで払い下げられた。地震に大風雨が重なった安政期の古木払い下げについては、希望者が殺到し、通常の五倍の額で落札したと記録に残る。

久能山修復の際には、修復役人や工匠が多数久能山に入ることになる。山上への出入りは一之門にて取り締まられ、幕府作事方等によって発給される鑑札との引き合わせが行なわれた。久能山下の寺院と民家は修復関係者の旅宿として割り当てられ、寛保二年（一七四二）の修復以来、作事奉行の旅宿は照久寺、目付は石蔵院と定められた。久能山下の村々には、修復に乗じた商売や金銭トラブルが起きないよう御触れが出されていたことも判明した。

静岡浅間神社は、徳川家の祈願所として家康が造営し、家光によって寛永の再造営が行なわれた。作事方大工頭木原木工允義久の下、駿府の大工棟梁花村長左衛門・清右衛門、屋根葺新五郎・清左衛門が参画した。安永・天明二度の大火によつて、社殿は全焼し、文化元年（一八〇四）から六十余年をかけた再建が行なわれた。駿府城代・町奉行を奉行に、寛永期の姿を再現するため、棟梁には寛永造営の駿府棟梁の後継者である大工棟梁花村与七郎・花村清右衛門、屋根方棟梁三寺与右衛門・花村富左衛門が登用され、駿府の工匠たちと彫物大工の諏訪立川一門によつて全社殿を完成させた。

江戸時代を通じて駿府で活躍した棟梁の代表として、家康在城時から幕府の造営に携わり、駿府城・久能山東照宮・静岡浅間神社の修営を担当した駿府棟梁花村与七郎家がある。初代長左衛門は、中井大和守正清と共に箱根権現社の建立に携わったとされる。三代目長左衛門は、大工頭鈴木近江守長次から駿府城内の修復を命じられ、静岡浅間神社の造営にも参画している。四代目からは与七郎を襲名し、元禄十年（一六九七）遠州一宮・駿州村山浅間の三社同時造営に関与した。小普請方による久能山東照宮修復の際に与七郎の修復参入嘆願の記録がある。京

都中井主水・大坂山村与助・駿河花村与七郎の職務状況と三ヶ所の飯米・作料の調査が行なわれたことは、与七郎が、京都中井・大坂山村と並び、駿河の作料・飯米に關与する棟梁であつたことを示している。宝永大地震後の駿府城修復は駿府町棟梁組頭として参画した。静岡浅間神社の文化度造営には八く十代目の与七郎が關わり、安政の久能山東照宮修復にも携わっている。また、大工棟梁花村清右衛門は、久能山東照宮の三度（明和・天保・安政）の修復、静岡浅間神社の寛永・文化兩度の造営に關与した。左官棟梁宮嶋宗蔵は、文政十三年（一八三〇）から静岡浅間神社の再建掛りとなり、天保期の久能山東照宮修復では、駿府町奉行・代官の下で修復見分帳の作成に携わる等、積算に長けた棟梁であつたことが判明した。

以上から、駿府における公儀作事に、地元駿府の工匠がいかに関わつてきたのかを明らかにすることができた。

第二部は、駿河国とその周辺地域に範圍を広げて、建築普請活動の事例を検証した。元禄十年（一六九七）、遠州一宮（小國神社・天宮神社）・駿州村山浅間の三社同時造営が行なわれた。三社の造営は、幕府作事方大棟梁甲良豊前宗賀の下、大棟梁弟の甲良次郎左衛門・駿府棟梁花村与七郎・江戸町棟梁松井八郎左衛門が關与した。小國神社と天宮神社は、遠州一宮として両社一体で扱われ、前記棟梁の他に江戸町棟梁六名と遠州一宮の大工棟梁高木助右衛門等が両社の棟札から確認できた。

また、富士山西麓の富士宮市の棟札等史料から工匠の建築普請活動を抽出した。これら棟札には幕府による公儀作事の事例は見られなかったが、隣接する山梨県河内地域の工匠の進出がさらに明らかになった。大石寺には下山大工石川氏、北山本門寺には下山大工石川氏と波木井大工佐野氏が關与している。日蓮宗寺院と甲州工匠の關係が当地の寺社修営に表われている。旧白糸村の内野氏神社の拝殿造営は、甲州河内領大工と下内野村大工の協同行なわれ、白山神社は身延大工

池上氏が關与している。鎌倉時代富士の巻狩りの本陣となつた井出家の高麗門及び長屋と上井出稻荷神社本殿は、薬袋村（早川町）大工喜三郎が、旧上井出村の神社には、古閑村（旧下部町）大工伊藤氏の進出が見られる。旧上井出村・旧白糸村は、富士宮市の北部に位置し、西側に連なる天子山地を越えて甲州との行き来が頻繁に行なわれていたことから、甲州の工匠との交流も多数認められた。富士川左岸の沼久保八幡宮は塩沢大工の造営で、富士川が建築文化の交流にも大きな役割を果たしてきたことが実証された。

第三部では、建築普請に用いられた木材・石材の調達と流通について、地元産出材の地元使用を中心に扱った。駿河・遠江・伊豆には、豊かな山林が広がり、天竜川・大井川・安倍川・富士川の四大河川が流れる。河川を利用した木材流通と地元使用について各地に残る史料に基づき明らかにした。

天竜川上流域からは、木材・樺木が河口の掛塚湊まで川下げされて東西各地へ送られ、樺木については「掛塚樺木」と称された。久能山や駿府城・宝台院・静岡浅間神社等駿府の町へは、清水湊経由で輸送された。天竜川西岸の五社神社・諏訪神社、新居關所、気賀番所、東岸の遠州一宮へは、天竜川の河岸で筏が引き上げられ陸路で各所へと運ばれた。このように掛塚湊に至らず陸揚げする場合の筏賃金は十分なものではなく、増額の嘆願書が提出された。そこには陸揚げの際の筏賃金の先例を挙げ、筏の道程のみでは計れぬほど樺木の集積所である船明山からの樺木選出と筏組みに膨大な手間が掛かると訴えている。樺木は、長短、品質によつて数種類に分類されて船明山に積まれている。集積の間に品質を損なうものもあり、それらの仕分けに時間を要したことは想像できる。

大井川筋では、井川山と千頭山から駿府城・静岡浅間神社・江戸城の御用木が伐出されたと記録されている。元禄年間に紀伊國屋文左衛門によつて寛永寺根本中堂の御用材が伐出される際、運送ルートが検討された。大井川河口の住吉湊での船積みは容易でないため、大井川下流の道悦島に木屋水門を開き、運河を焼津

の和田湊まで通して、そこから江戸へ向けて出港するというルートである。その後の川触に大井川上流から和田湊までのルートの確立が認められる。

安倍川上・中流域から切り出された建築用材も駿府・久能山の修営をはじめ、清水湊から各地へ回漕された。久能山修復御用材は、安倍川を筏下げされ、駿府の十分一材木蔵にて改められ、無税で再び河口まで送られて、沿岸を通って久能山下に着岸している。享保元年の久能山修復では、普請奉行を務めた駿府町奉行・代官より、川触・浦触が発令された。安永年間には、幕府直轄の「御林山」には御用木となるような木材が充足していなかった。また、静岡浅間神社の文化度造営用の寄附木材見分が、駿府大工棟梁花村清右衛門によって行なわれている。その後も静岡浅間神社の社殿造営は継続され、天保期には梅ヶ島村が管理する「百姓山」から梅三百五十本が伐出された。

富士川上流の甲州からは、久能山修復御用木及び奉納木が伐出され、富士川河口の岩淵村まで川下げされ、そこから沿岸を通り清水湊に送られた。甲州村々からの奉納は、徳川家康が甲州入国の際に、人馬御用を勤めた村々へ朱印が与えられ、その冥加として願い出たものであった。

石材は「伊豆石」が広く重用され、久能山東照宮及び駿府城へは、西伊豆の重寺村（沼津市内浦）の石材が搬入されている。重寺村は、駿河湾を挟んで清水湊の東に位置し、切り出された石材は清水湊を経由して江戸へも回漕されていた。久能山東照宮の天和度修復御用石材は、内浦湾に浮かぶ淡島から切り出された「あわ島石」で、用途別に加工されると、船で清水湊まで運送された。主要な石材は大谷村田中治左衛門が請負い、約三ヶ月で八回に分けて船積・搬送している。「あわ島石」の品質に関して大工頭鈴木修理長頼が駿府城見分の際に指摘している。駿府城の石垣は蘆科川流域の砂岩「わらしな石」が用いられていたが石垣には向かず、「伊豆堅石」で築き直すよう指図された。ところが当時駿府で使用されていた「伊豆石」は、「あわ島石」で、石質は「わらしな石」と同然で「伊豆堅石」で

はないと述べられている。伊豆産出の石材は「伊豆石」と総称されるが、安山岩と凝灰岩の二系統に大別され、安山岩系が「伊豆堅石」、「あわ島石」は凝灰岩系であろう。

第四部は、駿河国とその周辺地域の神社造営における公儀作事について概観し、幕府作事方・小普請方の下、どのような組織で建築普請活動が行なわれたのかを総括した。

徳川家康の遺言により大工棟梁中井大和守正清によって久能山東照宮が造営され、秀忠代には五社神社・諏訪神社、府八幡宮の造営（御大工鈴木近江守長次、浜松棟梁）が行なわれた。家光代には久能山東照宮、静岡浅間神社、五社神社・諏訪神社の大造営（大工頭木原木工允義久、駿府棟梁または浜松棟梁）、家綱代は三嶋大社の造営（大工頭木原木工允義久・鈴木修理長常）、五社神社・諏訪神社修復（大工頭鈴木修理長常・木原内匠重弘、江戸町棟梁）が行なわれている。綱吉代には遠国神社の見分および修営が実施され、元禄十年（一六九七）、遠州一宮・村山浅間並びに伊豆箱根権現・鎌倉八幡宮の三社同時修営の運びとなった。

久能山東照宮修営における、作事方・小普請方の関わりに着目すると、宝永・宝暦期の修復は小普請方が担っており、小普請方定棟梁が久能山にも優先的に関わっている。明暦大火から享保の場所分けまで優位に公儀作事を担当した小普請方の勢力が久能山修復にも反映され、『徳川実紀』に小普請方の駿府城内外・宝台院修復が記録されている。日光東照宮には日光棟梁があり、修営は幕府方と日光方の分担によって幕末まで行なわれた。久能山には日光棟梁に相当する常用の職人集団はなく、修営には作事方の下、駿府棟梁の参画が認められる。天保十三年（一八四二）修復の際、大工工事の過半が終了して江戸大工が引き払った後は、大棟梁辻内近江の下、駿府大工が修復を完成させている。当時の建築普請方式は、御宮（本殿・石の間・拝殿）以外の諸堂社・別当・坊舎に関しては、木材共一式渡切で行なわれた。安政の修復は作事方の下、大工棟梁と木挽方はそれぞれ請負

で行なわれたことがわかった。石工事に關しては、伊豆石の切り出しから清水湊までの運送が一式で請負われ、工事請負人は久能山下に位置する駒越からの石材運送も含む一式請負であった。

五社神社・諏訪神社の延宝度修復には、作事方配下の棟梁の中でも浜松大工の系譜を引く江戸町棟梁が派遣された。

これまで各寺社における見分は、修營の過程として個別に扱ってきたが、『鈴木修理日記』等史料によって、江戸中・後期の寺社等見分が幕府の遠国修營事業における一連の見分として実施されたことが明らかになった。元禄七年（一六九四）から九年にかけて、被官と江戸町棟梁による遠国十六ヶ所の寺社等見分が行なわれた。その中に遠州一宮・村山浅間が含まれ、その結果、元禄十年に三社同時造營が行なわれた。元禄十六年には、江戸から五畿内の寺社等見分として大工頭鈴木修理長頼による三島・駿府・浜松の見分が実施された。五社神社・諏訪神社の見分後、元禄と宝永の大地震が発生し、修復は享保期まで延引された。さらに、安永三年（一七七四）の駿府における目論見見分と共に、三嶋大社の見分も実施されたと考えられる。このように、作事方による遠国の見分事業が一連で行なわれていたことが判明した。

駿河国とその周辺地域の公儀作事は、作事方大工頭・被官・大棟梁および江戸町棟梁によって見分・見積・修營が行なわれ、そこには駿府・遠江等の棟梁が協同していた。駿府棟梁花村与七郎は、元禄・宝永期の駿河・遠江において、作事方大棟梁甲良豊前宗賀・宗員と共に修營に参画し、宝永の駿府城修復は、「駿府町棟梁組頭」として務め、江戸町棟梁筆頭の河合利兵衛と同等であったと考えられる。江戸町棟梁は、浜松棟梁の系譜を引く者や、当地の見分および修營に複数携わった者が多く含まれることを明らかにできた。

以上のように、駿府を中心に駿河国とその周辺地域における各々の建築普請活動の実態を調査・分析した。「駿府在住の工匠」及び「公儀作事に関わった駿府棟

梁」について、各々の事象に關して明らかにできた。江戸時代を通じて駿府の棟梁および工匠が、町方と公儀においてどのような組織の下で建築普請活動を行っていたのか、久能山東照宮の修營と静岡浅間神社の文化度造營から検証した。静岡浅間神社の文化度造營は、駿府城代・町奉行を奉行に、駿府棟梁および工匠によって行なわれた建築普請であった。六十余年におよぶ造營の間、作事方による久能山東照宮の修復が三度実施されており、そこには駿府棟梁も参画していた。それと同時に、駿府町奉行・代官の下で久能山東照宮の修復見分に携わった駿府棟梁の存在も明らかになった。静岡浅間神社の造營関係史料の中に駿府破損方によって記録された現場日記「御再建場所日記」が存在し、この日記によって駿府の建築普請組織の実態のさらなる解明が期待できる。

主要参考文献

- 若尾俊平「駿府の都市構造と社会」『静岡市史』近世通史篇、静岡市役所。
若尾俊平「駿府の町割り」『静岡中心街誌』同編集委員会。
若尾俊平「家康の町づくり」『駿府の城下町』静岡新聞社、一九八三。
織田元泰「駿府町絵図の一考察」『葵』一六号。
織田元泰「駿府九六カ町を歩く」『駿府の城下町』静岡新聞社、一九八三。
横田冬彦「職人と職人集団」『講座日本歴史』五 近世一、東京大学出版会、一九八九。
田邊 泰「江戸幕府作事方職制に就て」『建築学会大会論文集』一九三五。
田邊 泰「江戸幕府大工頭木原氏に就て」『建築雑誌』五九六、一九三五。
田邊 泰「江戸幕府大棟梁甲良氏に就て」『建築雑誌』六〇九、一九三六。
鈴木解雄「江戸幕府小普請方について」『日本建築学会論文報告集』六〇、一九五八。
内藤 昌・中村利則「江戸幕府小普請方の成立過程について」『日本建築学会大会学術講演梗概集』一九六九。
谷 直樹「中井家大工支配の研究」思文閣出版、一九九二。
谷 直樹「大工頭中井大和守正清と久能山東照宮」『久能山誌』静岡市、二〇一六。
西 和夫「江戸建築と本途帳」SD選書八九、鹿島出版会、一九七四。
西 和夫「浜松棟梁桑原家について」『日本建築学会論文報告集』二五九、一九七七。
西 和夫「浜松棟梁と徳川幕府作事方大工棟梁」『日本建築学会論文報告集』二六〇、一九七七。
湯浅 隆「五社神社、諏訪神社の成立過程」『五社神社、諏訪神社の社殿維持について』『調査研究報告書 五社神社・諏訪神社社殿等修理関係資料』本文編、東京国立博物館、一九九六。
川村由紀子「元禄期寛永寺門前町における諸職人の存在形態」『國史学』二〇二、二〇一〇。
川村由紀子「近世中期における江戸の「町棟梁」」『日本歴史』七八六、二〇一三。
川村由紀子「享保期における江戸幕府作事方と大工職人」『風俗史学』五六、二〇一四。
川村由紀子「宝暦・明和期の日光東照宮の修理と日光棟梁」『関東近世史研究』七九、二〇一六。
山澤 学「日光東照宮の成立 近世日光山の「莊厳」と祭祀・組織」思文閣出版、二〇〇九。
金行信輔「幕府寺社奉行所における建築認可システムの史料学的検討」『日本近世史料学研究 史料空間論への旅立ち』北海道大学図書刊行会、二〇〇〇。
作事記録研究会編『大名江戸屋敷の建設と近世社会』中央公論美術出版、二〇一三。
所 三男「江戸幕府初期の営林事業」『徳川林政史研究所研究紀要』一九七七。
所 三男「近世林業史の研究」吉川弘文館、一九八〇。
村瀬典章「天竜川水運と樽木」建設省中部地方建設局天竜川上流工事事務所、一九九三。
浅井治平『大井川とその周辺』いずみ出版、一九六七。
高木浅雄「重寺村の石切文書」『沼津市歴史民俗資料館紀要』五、沼津市歴史民俗資料館、一九八一。
榊原幸次郎『番匠秘事録』建築業助成会、一九三一。
白鳥金次郎「聖徳太子伝遺跡巡り」聖徳太子伝刊行会、一九五九。
『明治前期静岡町割図集成』静岡郷土出版社、一九八八。
『久能山叢書』久能山東照宮社務所、一九七〇〜八一。
鈴木棠三・保田晴男『近世庶民生活史料未刊日記集成 鈴木修理日記』三一書房、一九七七〜八。
中村高平『駿河志料』歴史図書社、一九六九。
桑原藤泰『駿河記』臨川書店、一九七四。
阿部正信『駿國雜誌』吉見書店、一九七六。
新庄道雄『修訂駿河国新風土記』図書刊行会、一九七五。
『静岡県史』通史編3・4 近世一・二、静岡県、一九九六・七。
『静岡県史』通史編資料 静岡市役所教育社会課、一九二九。
『静岡県史』静岡市役所、一九三一。
『静岡県史』近世史料、静岡市役所、一九七六。
『静岡県史』近世、静岡市役所、一九七九。
『静岡県史』中世近世史料、静岡市役所、一九八一。
『磐田市誌シリーズ 第六冊 中泉代官』磐田市誌編纂委員会、一九八一。
『森町史資料編別冊 森町の棟札・金石文』森町、一九九八。
『天竜市史』上巻、天竜市役所、一九八一。
竜洋町史編さん委員会『竜洋町史』通史編、磐田市、二〇〇九。
本川根町史編さん委員会『本川根町史』通史編2 近世、本川根町、二〇〇五。
中川根町史編纂委員会『中川根町史』静岡県榛原郡中川根町、一九七五。

新井正『梅ヶ島郷土誌』硯水泉、一九九〇。

『山梨県史資料叢書 山梨県棟札調査報告書』山梨県、一九九六～二〇〇五。

『重要文化財久能山東照宮修理工事報告書』第一・二集、重要文化財久能山東照宮修理委員会、一九六八。

文化財建造物保存技術協会『重要文化財久能山東照宮保存修理工事報告書』

久能山東照宮、二〇〇九。

『神部神社・浅間神社・大歳御祖神社造営史料並同解説』神部神社・浅間神社・大歳御祖神社社務所編、一九六六。

文化財建造物保存技術協会編『重要文化財神部神社・浅間神社・大歳御祖神社 第一～三期修理工事報告書』重要文化財静岡浅間神社修理委員会、一九七七～七八。

宝鑑出版委員会『宝鑑 静岡浅間神社の文化財・社宝目録』静岡浅間神社御鎮座千百年奉祝会、二〇〇一。

特定非営利活動法人静岡県伝統建築技術協会『静岡県指定有形文化財 天宮神社本殿及び拝殿修理工事報告書』天宮神社、二〇一三。

波多野純建築設計失『甦れる往代の威容 総本山大石寺御影堂大改修工事全記録』大日蓮出版、二〇一六。

奈良文化財研究所『北口本宮富士浅間神社建造物総合調査報告書』北口本宮浅間神社、二〇一六。

資料編

資料目録（資料は本文使用順で配列した）

資料一	駿府の大工町	資料二十五	久能山御宮向其外御破損所御修復願箇所書
資料二	新通大工町 天保十三年（一八四二）町絵図	資料二十六	安政三年修復工程
資料三	新通大工町 明和二年（一七六五）書上	資料二十七	墓石刻銘（作事方大棟梁石丸祐次立之）
資料四	延享四年（一七四二）太子講仲間帳	資料二十八	安政三年修復方針
資料五	宝暦三年（一七五三）太子講仲間帳	資料二十九	安政三年普請所儉約
資料六	安政五年（一八五八）十組仲間大工職規定書	資料三十	安政三年修復入用高
資料七	安政三年（一八五六）仲間規定連印書	資料三十一	安政三年勘定組頭鈴木大之進談話
資料八	久能山五重塔建立書付	資料三十二	久能山御宮向其外地震ニ付御普請御修復坪数減其外取調候趣相伺候書付
資料九	久能山御造営年譜（寛永十二年（一六三五）	資料三十三	天保十三寅年、岩瀬内記、山口勘兵衛より旅宿願立の例を以、安政三辰年松本十郎兵衛、松平弾正より同様の願立書付写
資料十	駿州久能山之事	資料三十四	天保十三年久能山修復申渡条々
資料十一	五重塔棟札写 寛永十六年（一六九三）	資料三十五	天保十三年修復における髪結和平
資料十二	延宝九年（一六八一）久能山修復見分	資料三十六	天保十三年諸向売物値下
資料十三	久能山御普請覚（元禄二年（一六八九）	資料三十七	静岡浅間神社再建棟梁由緒書付
資料十四	久能山御宮堂舎造営覚（元禄二年）	資料三十八	静岡浅間神社造営における工匠一覧表
資料十五	宝永元年（一七〇四）久能山修復	資料三十九	大工木挽作料・飯米調査（宝永三年（一七〇六）
資料十六	久能山東照宮御本社並五重塔修営御棟札明細書	資料四十	馬場町旧家 大工棟梁花村与七郎
資料十七	宝永元年久能山修復大工増手間	資料四十一	上魚町 北側中井屋敷
資料十八	久能山御普請覚（宝永六年（一七〇九）	資料四十二	天ノ宮・小國大明神由緒書（明和四年（一七六七）
資料十九	天保四年（一八三三）出来栄見分役々名前	資料四十三	小國神社棟札写（天正十一年（一五八三）
資料二十	天保四年出来栄見分	資料四十四	天宮神社棟札写（天正十七年（一五八九）
資料二十一	天保十二年（一八四一）久能山地震被害報告	資料四十五	小國神社棟札写（元禄十年（一六九七）
資料二十二	天保十三年修復工程	資料四十六	天宮神社棟札（元禄十年）
資料二十三	久能山総門番櫓原越中守石灯籠修復	資料四十七	一ノ宮造営奉行之覚（元禄九〜十年）
資料二十四	安政元年（一八五四）久能山地震被害報告	資料四十八	天宮神社棟札（元禄十年）

資料四十九 天宮神社修繕願（明治二十四年（一八九二））
 資料五十 天宮神社屋根棟札（元禄十年（一六九七））
 資料五十一 村山浅間神社棟札写
 資料五十二 一宮記録写
 資料五十三 横須賀藩御用留
 資料五十四 天宮神社木札
 資料五十五 小國神社棟札写（元禄十年）
 資料五十六 請負手形之事（元禄十年）
 資料五十七 遷宮祝詞（元禄十年）
 資料五十八 請取申御道具之事（元禄十年）
 資料五十九 覚（装束）（元禄十年）
 資料六十 覚（装束）（元禄十年）
 資料六十一 一宮小國神社記（文化十四年（一八一七））
 資料六十二 大工職相論に関する返答書（慶安五年（一六五二））
 資料六十三 元和五年（一六一九）駿府城御用木諸払勘定帳写
 資料六十四 元禄十年九月、甲州富士川筏乗り稼につき甚平外四人の請状
 資料六十五 覚（元禄五年（一六九二））
 資料六十六 御川触（寛政十二年（一八〇〇））
 資料六十七 回状（安政七年（一八六〇））
 資料六十八 久能山御修復
 資料六十九 御吟味ニ付差上申書付（梅ヶ島村）
 資料七十 御吟味ニ付差上申書付（入島村）
 資料七十一 御吟味ニ付差出書状（入島村・梅ヶ島村）
 資料七十二 御尋ニ付奉申上候
 資料七十三 明細帳（冊子文書）
 資料七十四 御用留史料（2）静岡浅間神社（文化元年（一八〇四））

資料七十五 御用留史料（2）覚 静岡浅間神社（天保三年（一八三二））
 資料七十六 御用留史料（2）覚 久能山東照宮（天保四年（一八三三））
 資料七十七 西丸御普請御用ニ付、木挽杣職人為雇出（文久四年（一八六四））

地誌	『駿府廣益』	『駿國雜誌』	『駿河記』
上大工町	(四十二 府中町□名并町頭之數) 上大工町 (五十 諸役相除候町々之事) 上下大鋸町 是ハ大工町並ニ公役相勤候故右同断ニ役儀相勤 不申候但伝馬町人足ハ出シ申候	上大工町 安倍郡に隸り、一町あり。御在城の時、工匠を置く、故に町名とす。	上大工町 昔より大工の住せしによりて名づく。 昔は今の丁より上の方にづきて町屋ありしが、慶長年町割ありし時に、其所に住る者に今の新通二丁目に替地を賜ふ。是を新大工町と云、今に新通は二丁目の名なくして新通大工町と云。此丁も御城の修營の役を勤むるをもて、諸役を免さる。町内素人屋敷と称るものは、大工ならぬ人の住し所なれば、其屋敷のみ町方の役を勤む。
新通大工町	(四十二 府中町□名并町頭之數) 新通町七丁 内式丁目ヲ新通大工町ト言	新通り 有度郡に隸り、七町あり。二丁目を大工町と云。後年命有て開く所の街道なり、故に新通の名あり。一丁目、三丁目各石橋一あり。或云新通りは旧河原町と云り。	新通町 七丁 此筋の町は慶長十四年に町割ありて初て建し処なり。東海道の往来と定められしは其頃の事なるか不詳。寛永年間に記せし寺町の寺々の過去帳に、新通町の名なくして異名にしてしるす。今も一丁目二丁目の次第のみありて何れも異名あり。 新通一丁目は旅籠町と云。昔旅籠屋此辺にありしと云。二丁目は新大工町と云。是慶長十四年町制ありし時、上大工町をさきて此所に移せし処なり。三丁目四丁目は馬喰町。五丁目六丁目を笠屋町。七丁目は大鋸町と云。此大鋸町も、昔西の大鋸町をさきて此処に移せし処なりと云。古へはすべて名を異にせしを、後に新通の一名とはなれるなり。
備考	『駿府廣益』 宝暦十三年（一七六三）～五年間 『静岡市史中世近世史料二』静岡市役所、 一九八一	阿部正信（駿府二加番阿部大学）文化年間 『駿國雜誌一』 吉見書店、一九七六	桑原藤泰 文化年間 『駿河記上巻』 臨川書店、 一九七四

『駿河志料』	『修訂駿河国新風土記』	地誌
<p>上大工町 此町も西は元武家屋敷地 北裏も武家屋敷地なり</p> <p>此町は、往古より大工居住の地にて、此町より西へ一町ありしを、慶長年中町割のとき、新通へ移され、今に新通大工町と云、古くは此町を中河大工云へり 永禄余年氏眞袖判の文書</p> <p>近世御器屋町に所属す 御城修営の役をつとむるに依て、諸役免許の地なり</p>	<p>上大工町</p> <p>此町昔より大工の住みしによりて名づく、昔は今の町より上の方に續きて町屋ありしが、慶長年中町割ありし時に其所に住める者遷されて今の新通二丁目に替地を賜ふ、是を新大工町といふ、今に新通は二丁目の名無くして新通大工町といふ、此町も御城の修営の役を勤むるを以て諸役を免さる、町の内素人屋舗と称ふるは大工ならぬ人の住みし所なれば其屋舗のみ町方の役を勤む。</p>	上大工町
<p>新通八町 寺町より 西に連る</p> <p>古老云、此町は慶長十四年町割のとき、建てられ所にて、東街道の道次と定められしに依て新通と称す、新通五丁目西側町裏に、一里塚榎ありしが、今は枯朽たり、本通裏修福寺前一里塚の一对なりと云、一町目を元旅籠町と云、二町目を大工町と云、上大工町を割て移せりとぞ、三丁目、四町目を馬喰町とも、五丁目、六町目を笠屋町とも、七町目を大鋸町と云へり、此町は武家屋敷地割のとき、所々より移されし地にて、近世は押並て新通と称す</p>	<p>新通大工町</p> <p>新通町七町</p> <p>此の筋の町は慶長十四年に町割ありて初めて建てし所なり、東海道の往来と定められしは其頃のことによ詳かならず、寛永年間に記し、寺の過去帳には新通の町名なくして異名にて記す、今も一町目二丁目の次第にあらずして何れも異名あり、新通一町目は旅籠町といふ、昔旅籠屋が此辺にありきといふ、二町目を新大工町といふ、是れ慶長十四年町割ありし時上大工町を割きて移し、なり、三丁目四丁目は馬喰町といひ五丁目六丁目を笠屋町と呼ぶ、七丁目を大鋸町といふは昔西寺町の大鋸町を割きて此所に移し、を以てなり、かく古はすべて名を異にせしを後に新通の一名となれるなり、</p>	新通大工町
<p>中村高平（駿府浅間 新宮前神主） 文久元年（一八六一） 『駿河志料一』 歴史図書社、 一九六九</p>	<p>新庄道雄 天保年間 『修訂駿河国 新風土記上巻』 図書刊行会、 一九七五</p>	備考

『静岡市史』	地誌
<p>上下大工町（○上大工町、新通大工町） 是は御高札攤御仕置者の節、制札板拵申候故、年行持役相勤め申さず候。但大工の外は伝馬町人足計相勤め候。 上下大鋸町（○下大鋸町は新通七丁目） これは大工町なみに御公用相勤め申候故、年行持役・町役相勤め申さず候。木挽の外は伝馬町人足計り相勤め申候。</p>	上大工町
	新通大工町
<p>『静岡市史第二卷』 静岡市役所、 一九三一</p>	備考

資料二 新通大工町 天保十三年（一八四二）町絵図

「駿河国駿府町方文書」（S〇九二・二／三）町絵図

静岡県立中央図書館所蔵

右人足被 仰付次第差出申候勤方之儀は平均拾軒役二付壹ヶ年人足老人之割合を以差出申候

（表書）

天保十三年寅十一月改

新通大工町

明治三庚午閏十月裏打致ス

□十月引合判

（町絵図）

東側小間七拾壹間五尺 此坪数 千七拾七坪半

西側小間六拾八間 此坪数 千拾三坪七分五厘

家数合二拾七軒

内 貳軒 町頭家無役

此内 拾七軒半大工家伝馬町人足御除御座候

貳拾五軒諸役相勤候家

拾三軒半素人家伝馬町人足相勤申候

一札之辻町川越町両

新通大工町

御高札御修復御用被 仰付候節は

上大工町 往古より大工手間御役二而御用相勤申候且

御高札近辺出火御座候節は早速駆付外江取退ケ御焼失無御座候様仕候事

一御仕置者御座候節捨札仕立御用被 仰付候節は前同様大工手間御役二而御用相

勤申候

一年行事并 御城内御鋸人足 牢屋敷御修復之節手伝人足 同所掃除人足

両 御高札場御修復之節手伝人足等往古より御除御座候

一両見附并愛染川横内川縁通掃除人足

一四足町江川町両橋下浚人足并安倍川満水之節防人足

一伝馬町人足 壹ヶ年二三拾四人五歩
一火消人足 拾三人

右人足 久能

御山近辺出火之節は被 仰付次第差出申候

一御城内外御破損所御定式御用大工相勤候節作料飯米等月々被下置頂戴仕来候

一例年十一月五ヶ所 御高札取組建前取入二付大工并人足差出申候其外臨時御高札相建候節共大工作料人足賃等被下置候二付頂戴仕来候

一牢屋敷御修復并囚人籠台拵御用之節大工差出申候尤作料被下置候二付頂戴仕来候

右之通相改相違無御座候以上

天保十三寅年十一月

新通大工町

町頭 久七郎（印）

年行事御衆中

<p>東側小間七拾七間 西側小間六拾八間 小間合百拾九間</p>	<p>東側小間七拾七間 西側小間六拾八間 小間合百拾九間</p>
<p>東側小間七拾七間 西側小間六拾八間 小間合百拾九間</p>	<p>東側小間七拾七間 西側小間六拾八間 小間合百拾九間</p>
<p>東側小間七拾七間 西側小間六拾八間 小間合百拾九間</p>	<p>東側小間七拾七間 西側小間六拾八間 小間合百拾九間</p>
<p>東側小間七拾七間 西側小間六拾八間 小間合百拾九間</p>	<p>東側小間七拾七間 西側小間六拾八間 小間合百拾九間</p>
<p>東側小間七拾七間 西側小間六拾八間 小間合百拾九間</p>	<p>東側小間七拾七間 西側小間六拾八間 小間合百拾九間</p>
<p>東側小間七拾七間 西側小間六拾八間 小間合百拾九間</p>	<p>東側小間七拾七間 西側小間六拾八間 小間合百拾九間</p>

資料三 新通大工町 明和二年（一七六五）書上

『静岡市史』近世史料三、静岡市役所、一九七六、所収

（端裏貼紙）

天保十三年寅十二月改

新通大工町

町頭久七郎（印）

（坪付絵図 略）

一新通大工町 間口百貳拾九間五尺

奥行町並拾五間之多御年貢地

長短図面之通御座候

一伝馬町人足壹ヶ年中三拾四人五歩

一火消人足拾三人

右出人足其外町諸役相勤候家数貳拾五軒

内 拾軒 大工家伝馬町人足御除御座候

拾五軒 素人家伝馬町人足相勤申候

右之外御 城御門御鋸人足両 御高札御

普請之節人足牢屋人足町内御除御座候

一丁頭持家 表拾壹間 無役

三拾壹間五尺

奥行

拾八間五尺

但町並拾五間之外御年貢地御座候

一世里会所丁内ニ無御座候

一町内地尻年貢

金壹両三分卜錢百貳拾文

川辺村組頭八兵衛方江上納

一地子屋敷丁内ニ無御座候

右之通相違無御座候以上

明和二年酉七月

新通大工町

丁頭忠左衛門（印）

同 清右衛門（印）

年行持御衆中

資料四 延享四年（一七四二） 太子講仲間帳

榊原幸次郎『番匠秘事録』建築業助成会、一九三二、所収

丁卯延享四年

太子講仲間帳

九月吉日 両大工町

聖徳皇太子尊前に於て奉祈誓趣意は、今度上下両大工町發起人と成り、当府の大工方銘々其組下を相催ふし、講を結ぶ所則ち名前左の通りなり、然るに職分みだりがましく、或ひは他の細工場へせり込み、或は悪所非人等の在所へ細工にあるき、不埒千万の仕かた以ての外のみが事なり、此の上見聞に及び候はゞ吃度可除之、左様の儀無之為自今以後太子講いたし、何れも毎月二十二日もより々々へ寄合ひ通錢三文宛持ちより溜め置き正月十六日七月十六日此両度一人前十八文宛の積りに持参可仕候右正七両月十六日には、昼四つ時極楽寺へ惣仲ヶ間不参なく寄合可申候、斯様に相極め候儀は

太子尊前修理等相続の為別して各職冥加のために候間怠りなく寄合可申合候事

延享四年卯九月

上大工町丁頭			
海野佐兵衛	平左衛門	忠右衛門	利兵衛
石川安右衛門	平七	五郎兵衛	市右衛門
仁左衛門	清七	善三郎	喜右衛門
仁兵衛	次郎左衛門	八右衛門	喜兵衛
吉兵衛	弥助	八兵衛	半右衛門
平兵衛	金左衛門	八郎左衛門	伊兵衛
久右衛門	平助	庄三郎	七郎兵衛
善四郎	権八郎	市兵衛	七郎右衛門
善右衛門	長兵衛	才兵衛	政右衛門
文右衛門	忠八	庄太郎	利左衛門
文七	市左衛門	太郎兵衛	吉左衛門
下大工町丁頭			
花村清右衛門	半左衛門	惣左衛門	次郎
同 忠左衛門	喜兵衛	金助	平七
仁右衛門	助右衛門	金三郎	甚四郎
藤兵衛	次右衛門	惣五郎	長八
伊兵衛	源太郎	銀右衛門	清右衛門
六兵衛	惣兵衛	甚四郎	
伊右衛門	金兵衛	庄五郎	
治郎右衛門	治兵衛	半兵衛	
惣四郎	七郎右衛門	與太郎	
治郎兵衛	半七	平吉	
平次郎	市右衛門	辰之助	

資料五 宝暦三年（一七五三）太子講仲間帳

榊原幸次郎『番匠秘事録』建築業助成会、一九三二、所収

右太子講延享四年卯年相始り候処

宝暦二申年七月從

御公儀当府大工方人数名前書付差出候義被為仰付則大工方名前所付いたし差上申候に付き帳面仕直申候 以上

宝暦三年酉正月五日改之

花村長左衛門組

馬場町	十左衛門	横内町	源右衛門	馬場町	源七	宮中	新七
同町	八右衛門	同町	惣右衛門	車町	次助	細井長兵衛組	
同町	李兵衛	横田町	八郎右衛門	横内町	庄五郎	御器屋町	甚兵衛
同町	佐七	同町	庄右衛門	同町	勘右衛門	同町	才兵衛
同町	庄左衛門	同町	庄八	同町	利八	同町	権左衛門
同町	権右衛門	紺屋町	太右衛門	同町	弥七	草深町	清兵衛
同町	長七	同町	平四郎	同町	半左衛門	同町	伊右衛門
車町	惣右衛門	鋳物師町	七左衛門	同町	吉左衛門	安倍町	吉右衛門
同町	伊右衛門	八幡町	忠右衛門	同町	金右衛門	同町	勘兵衛
同町	治右衛門	馬場町	善吉	同町	乙吉	同町	吉左衛門
同町	伊左衛門	曲金村	弥七	同町	吉兵衛	同町	平次郎
番町長八分	久治郎	紺屋町	幸右衛門	御器屋町	伝次	同町	御器屋町
安倍町	九右衛門	宮内	市郎左衛門	同町	十右衛門	同町	市左衛門
茶町一丁目	源八	鋳物師町	善六郎	同町	吉蔵	同町	海野佐兵衛組
本通五丁目	吉左衛門	花村與七郎組		同町	喜惣次	同町	本通四丁目
横内町	久三郎	馬場町	十兵衛	同町	惣右衛門	同町	本通五丁目
同町	平右衛門	同町	安八	同町	十五郎	同町	寺町
				同町	甚太郎	同町	新通四丁目
				同町	平七	同町	伊八
				同町	忠蔵	同町	半兵衛
				同町	金五郎	同町	友八
				同町	平蔵	同町	喜兵衛
				同町	西七月入	同町	清十郎
				同町	池田村	同町	源右衛門
				同町	源八郎	同町	

本通五丁目	吉右衛門	黒又村	浅右衛門	午正月新入	小坂村	善藏	寺町三丁目	平助
同 六丁目	市兵衛	材木町	伊兵衛	午七月新入	本通七丁目	鉄藏	人宿町三丁目	太七
本通五丁目	定八郎	花村清左衛門組		午七月新入	同 四丁目	万藏	研屋町	佐兵衛
同町	次兵衛	本通七丁目	八郎右衛門	午七月新入	新通大工町	甚四郎	上石町	文右衛門
安西一丁目	半七	同町	金左衛門	花村忠左衛門組			馬場町	新八郎
池田十右衛門組		同 六丁目	金三郎	本通十丁目	平左衛門			
上寺町	五郎兵衛	同町	伊左衛門	新通四丁目	九左衛門			
治右衛門改メ		同町	市左衛門	同町	吉兵衛			
下魚町	八郎右衛門	本通七丁目	金兵衛	吉田村	孫八郎			
江尻町	六郎兵衛	同町	半左衛門	中田村	權右衛門			
人宿町二丁目	甚兵衛	同町	喜兵衛	下大工町	惣左衛門			
両替町二丁目	伊兵衛	同町	伊右衛門	同町	清吉			
同 一丁目	喜八	車町	八郎左衛門	新通三丁目	甚八			
呉服町二丁目	與八	新通三丁目	清八郎	石川安右衛門組				
改メ車町		同町	清三郎	安西一丁目	半兵衛			
呉服町二丁目	吉左衛門	同町	清吉	研屋町	善兵衛			
小鹿村	清右衛門	本通九丁目	文次郎	両替町四丁目	太右衛門			
同	小兵衛	下魚町	忠右衛門	梅屋町	平右衛門			
呉服町二丁目	治兵衛	建穂村	角左衛門	安西一丁目	新八			
川本仁左衛門組		本通七丁目	八左衛門	本通五丁目	磯右衛門			
茶町二丁目	金兵衛	與八		梅屋町	源右衛門			
上桶屋町	市郎右衛門	卯正月十六		本通五丁目	正四郎			
上石町	伊右衛門	日ヨリ入		片羽	源右衛門			
梅屋町	源左衛門	巳七月十六		安西四丁目	又右衛門			
草深町	久太郎	日入ル		本通四丁目	庄右衛門			
黒又村	新八郎	伝馬町		安西一丁目	十右衛門			
		新通一丁目	平吉					

資料六 安政五年（一八五八）十組仲間大工職規定書

『静岡市史』近世史料一、静岡市役所、一九七四、所収

（表紙）

十組

大工職規定書

仲間

（本文）

規定書之事

當所大工職業之儀往古より職親弟子之間柄を以銘々ニ出入先相持居り自儘入職不致様仲間一同相定有之然所地震洪水出火杯ニ而所々家損焼失等致節ハ平日より違職業繁多ニ相成仲間規矩相乱候ニ付右様之儀無之様天明年中之頃及評議ニ旧来御公儀様より被仰付候御修復御用大工御定式と唱棟梁方より御沙汰有之節町方職業之もの隔ニ出勤致候處右規矩為取定御定式之儀は上下両大工町江相頼御用之節出勤仕尤御定式よりは相唱候得共年分ニ寄御入用人工多少御定無之儀ニ付右為冥加大工職一同より老人ニ付錢三拾六文宛年々正月七月太子講之節両度ニ差出其廉を以右両町之儀は仲間中職親より立万端世話向等頼置候處天保年中凶作ニ而職業取統兼難渋御赦願候節右両町は致格失猶又此度仲間規矩相破り職業差縫出来銘々及難渋ニ畢竟右様之儀無之様職親ニ相立来候處不実之儀度々有之然上は仲間規矩相糺銘々職業ニ差障り及迷惑候間以来御定式御入用大工之儀は往古之通り町方年番之ものニ而御差支無之様致手處両大工町江は都而つき合不致様今般十組申合自今以来世話方相断十組年番中ニ而話致候處相定向後心得違無之様左之通り旧来之規矩ニ相立置申候

一 御公儀様御法度之儀は不及申ニ都而是迄被仰渡之御趣意急度相守御定賃銀之外聊多里共増賃銀請取申間敷事

附り賃銀高下被仰渡候節は仲間中評議之上賃銀取定相對を以勝手次第請取

間敷令何様之非常ニ候共右同断之事

一 御定式御入用大工其時之年番ニ而御差支無之様出勤致し万事棟梁方御差図請心得違致間敷制限等無違滞誠勤可致事

一 御城御普請淺間惣社御普請都而御公用之御普請向棟梁方思召ニ随ひ致職業候は勿論之處若時々寄町方何職之ものニ不限勝手次第御請負可致旨御座候節は銘々心得次第之事

一 銘名入職先出入之者は別而実意ニ職業致し候は勿論之處出入ニ茂無之もの乱ニ逼込致職業候ハ見当り次第道具品数相改封印附置其所之丁役人又は村役人方江預け置其組江申出差図可請入用之儀は規矩相破り候ものより差出可申品ニ寄其組ニ而事片付兼十組年番江指出又は棟梁方其上御訴訟ニ相成候連入用之儀は右同断之事

附り在町共寺社堂宮之儀は過半入札ニ相成時々寄在家ニ而茂入札ニ相成候節も有之

其節右入札之場所ニ出入之もの有之候ハ其者江熟体鉢之上入札可致且又銘々寔ニ相為合建具類都而小拵工向注文請候ハ勝手次第第二可請負候猶又規定仲間ニ無之両大工町之者十組仲間之持合先江立入乳ニ職業致候節は評議之上取押及掛合其節は入用は仲間一同より差出可申且仲間之者大工町之職先江立入候儀茂乱ニ不相成是又心得違之者有之候而其儀差縫ニ相成候節は入用之儀は其者より可差出事一銘々差置候弟子年季之儀は拾ヶ年定礼奉公壹ヶ年都合拾ヶ年無怠懈相勤可申右年季明之節は組入為披露酒代五百文其組合江差出可申猶又十組江披露之者ハ酒代七百文差出可申両様共其者職親より届無之候ハ取上申間敷事

他国より同職之もの罷越當所江落着職業致候節ハ其者仲間内江親取致職業可為致其節心得違無之様職親ニ相立候ものより當所江振合能々申間可差置然共渡り職ニ而不埒之儀有之何様致来候共右差置候者ニ而万端入用向可取斗事

附り當所江住居定仲間入致し候者有之候ハ組入為酒代金式朱可受取又々

十組江披露之節は金壹両貳分可為差出様取極有之是以其職親ニ相立候者より沙汰無之ものは取上申間敷事

一 毎年正月十五日七月十五日太子講之節積錢前々之通り老人ニ付拾八文宛可差出右之酒代又ハ御定式御入用備□致置候成丈無遲滯出滯不可致事

右規定之廉ニ急度相守可申万一心得違もの有之規矩相破り候ハ、其者職先ニ而道具取上当町在共渡世為致申間敷候聊も申分無之旨逐決心を一同申合為後日規定書連印依而如件

大工職

安政五年午十月

一統 十組

資料七 安政三年（一八五六）仲間規定連印書（より抜粋）静岡市左官組合史料

（表紙）

安政三丙辰歳七月

仲間規定連印書

馬場町

車町

（本文）

仲間規定之事

一 御當地左官瓦職連、猥ニ相成候付此度一同相談之上取極メ規定左之通

一 御公儀様御用之儀往古より馬場町車町江被仰付右両町ニ而相勤来り候尤大切之御用候得は自身罷出相勤可申候勿論病氣之節は申送り次之当番ニ而可相勤事

一 弟子取之儀は若年之物拾ヶ年季ニ相定中年之者は六ヶ年季ニ相召抱可申約定尤弟子相抱の節其組年番月番江其本人差出シ相届可申候且又弟子式人迄相抱候義と取極メ候得共其餘者召抱申間敷事

（中略）

一 弟子共年季明ヶ仲間入之節は為祝儀金百疋月番江差出シ可申事
（後略）

資料八 久能山五重塔建立書付

久能山東照宮文書三六六一〇

資料九 久能山御造營年譜（寛永十二年（一六三五）を抜粋）

『久能山叢書』第一編、久能山東照宮社務所、一九七〇、所収

元和二丙辰年より

宝永三丙戌迄九十二年二成

権現様御他界より十九年目

家光公御上洛寛永

十一甲戌年七月十一日

宝永三丙戌迄七十三年二成

御塔供養ハ寛永十

六己卯八月卜棟札ニ有り

御上洛より七年後歟

一又寛永十一年

八月十七日鉦初

明ル十二年正月十八日

銑針打卜

中央ノ札ニ有之也

〔寛永十二乙亥年〕

一、五重塔御建立 同年八月御鉦初、翌子年正月十八匏之釘打納

普請奉行 山岡伝右衛門

若林与左衛門

播州式東郡府寺村飛驒内匠十五代孫

大工棟梁 甲良出雲

資料十 駿州久能山之事（抜粋）

「秘録覚」『久能山叢書』第三編、久能山東照宮社務所、一九七三、所収

（前略）

五重之御塔御建立 寛永十二亥年八月十七日鉦初

翌年子ノ正月十八日銑之釘打納

普請奉行 山岡伝右衛門 若林与左衛門

棟梁大工は播州式東郡府寺村飛驒工より十五代之

末孫甲良出雲守宗次

資料十一 五重塔棟札写 寛永十六年（一六九三）

久能山東照宮文書三「六七」二二

大檀主征夷大將軍從一位左大臣氏長者源家光公

（梵字）奉造立駿州久能山東照宮大権現五重宝塔所

重方
呪願師寒山院忠舜法印

三門三院執行探題大僧正天海法務名代僧導師宗光寺玄海法印誌之

御奉行

寛永十六曆龍集己卯 松平豊前守源朝臣勝政

（梵字）聖主天中天迦陵伽声哀愍衆生者我等今敬礼矣

御大工

八月吉祥如意珠日 木原木工允藤原朝臣義久

資料十二 延宝九年（一六八一）久能山修復見分（『鈴木修理日記』より抜粋）

鈴木棠三・保田晴男『近世庶民生活史料 未刊日記集成 第三卷

鈴木修理日記一』三一書房、一九九七

（二月）廿四日 戊申 霽、陰、雨降

辰刻登城、御老中御退出之砌、備中守殿御祐筆部屋江御出、新右衛門殿同道罷出、備中守殿被仰渡候は、今度久能江罷越候二付、御朱印被下候、并彼地之役人衆江御奉書、御代官江御添状被遣、又為御暇、黄金壹枚・時服式被下之旨御申渡、松平山城守殿列座二而拝領、罷出、備中守殿、焼火之間江御出、川辺六左衛門御呼、為御暇白銀拾枚被下、御伝馬は自分一所二有之。

御朱印之覚

馬五疋 從江戸駿府迄上下可出之。

此内三疋は鈴木長兵衛、式疋は御被官大工河辺六左衛門被下候、是は久能御官御用付而罷越者也。

延宝九年二月廿三日

右宿中

御奉書

御証文

駿州久能御宮破損付而、為見分

覚

鈴木長兵衛并御被官河辺六左衛

一拾人扶持

鈴木長兵衛

門遣候間、万事可有差図候、恐

一五人扶持

御被官大工

、謹言。

河辺六左衛門

二月廿四日

板内膳正

右は駿州久能御宮破損故、為

重通判

見分遣候付而被下候之間、道

堀備中守

中上下并彼地逗留中、書面壹

正俊判

倍之積手形取之相渡、重而可

大加賀守

有勘定候、以上。

忠朝判

延宝九酉

二月廿四日 内膳印

三枝摂津守殿

備中印

本多備前守殿

加賀印

本多忠左衛門殿

諸星庄兵衛殿

大久保甚兵衛殿

右之御書物共頂戴、御老中・御作事奉行衆江御礼ニ参、暮合帰、何も被参。

廿五日 己酉 雨降

(前略)

巳后刻、江戸発足、雨降、未后刻、金川江着、天属霽。

廿六日 庚戌 霽

卯刻、金川出、午之内(イイ)藤沢ニ而少、内休、未刻、大磯江着、市右衛門所江泊、

坪井牛之スより使被越、山本伝右衛門参、手作之酢肴等給。

廿七日 辛亥 霽

卯刻、大磯出、申后刻、沼津江参着、三島之明神江参詣、山桜太開。

廿八日 壬子 陰

卯刻、沼津を出、蒲原昼休、未后刻、駿府江着、則甚兵衛殿江使遣候処ニ、御城江御出之由、以花村長左衛門、着之段御城中江申入レ、暮時分、甚兵衛殿江六左同道見廻、面談、御奉書相渡、被致拝見、此方江請取、帰宿、伝馬町清兵衛と申者之所ニ宿。

廿九日 癸丑 曇

卯刻、六左同道、甚兵衛殿へ振廻ニ参、料理過、甚兵衛殿同道、本多忠左衛門

殿へ参、御奉書拝見ニ入、夫より本備前守殿江参、是又御奉書相渡、久能御

奉行土岐左(衛)右殿・山口孫次郎殿被参、面談、帰、直孫次殿・左(衛)右どの小屋

江見廻、各面談、左衛之於小屋、久能見分之帳一冊・坊中願書之帳い冊被見、

則請取、帰、松前八兵・西郷八郎左へ見廻、八郎左ニ而料理給、今晚榊原采女

殿へ何も加番衆杯寄合ニ付、参、近付罷成可然之旨、大甚兵衛殿相談ニ付、八

郎左ニ而、甚兵衛殿左右相待、采女殿へ参、備前殿・忠左殿・甚兵衛殿・太田

原備前殿・太田式部殿・横田甚右衛門殿寄合、面談、帰、三摂津守殿・長田六左殿留守へ見廻、宿江帰、本通町出雲や清兵衛と申者之所へ宿替致、江戸江之状、松八兵へ頼越。

晦日 甲寅 雨降

備前守殿より手紙給、四ツ時分、大甚兵衛殿江参、夫より登城、備前殿江参、面

談、孫次・八兵・左衛見廻、何も面談、左衛・孫次御申候は、明後二日ニ久能可参候間、其心得致候様ニと被申、今日は奉行衆より請取候帳ども為写、江戸

江定飛脚之便在之ニ付、書状共認、西八郎左迄頼遣。

三月

朔日 乙卯 雨降

本多忠左殿より使、音信等給、昼時分、大甚兵衛殿江参、夫より本多備前守殿江参、明日、弥久能江罷可越旨申談候処、尤之由御申、左候ハゞ明朝、六左同

道、料理給候様可参之旨御申、夫より孫次・左衛江見廻、帰、暮方ニ横田甚右衛門殿江見廻、面談、帰。

二日 丙辰 終日雨降

卯刻、御加番太田式部殿江見廻、申置、帰、夫より本備前守殿江六左同道参、西郷八郎左も被参、此間、左衛・孫次より借り候久能見分帳写返ス、備前殿ニ而料理給、帰、本多忠左衛門殿江、今日、弥久能江罷立候由申入、面談。

一自分又は六左、追手四足御門出入之儀、張紙被成被置候間、断次第通り可申候、家来之札之義は、備前殿・忠左衛門殿両判ニ而、追手通可通之旨、備前殿御申、札は久能より帰次第可請取之旨申談。

一忠左衛門殿より帰ニ、甚兵衛殿江寄、面談、今日、弥久能江罷越之旨申談、夫より太田原備前殿江見廻、直ニ久能江参、午後刻参着、星与左衛門参、坊中大寿院・法性院被参、御山下名主彦右衛門と申者之所ニ居。

三日 丁巳 陰

卯后刻、御宮江参詣、六左同道、自分内江入、六左は御縁ニ被居、御酒頂戴、拝終退出、大寿院案内、午刻より雨降。

四日 戊午 雨降

無別条、巳后刻より天晴、星野与左衛門参、暮前、山口孫次・土岐左衛より唯

(判)

今当着之由申来、本多備前殿より書状、孫次より御届、追付六左同道、左衛見廻、面談、駿府御城中家来出入之判鏡、本多備前殿・同忠左衛門殿焼印在之。

(札図二枚)

但札式枚、一枚ハ壱人札

右は御城中江家来使ニ越候ため、四足之儀は札数多候も如何之間、延引之由御申、尤六左儀は張紙ニ致、追手四つ足出置候間、断次第可通之由。

一久能御山度、御修復之時分、奉行之書付、定知院より参、左衛仕廻、孫次江も見廻、帰。

五日 己未 霽

卯后刻、左衛・孫次、自分宿所へ被見廻、六左同道、見分ニ登山、御廟所初、御本社・御拝殿・御玉垣・御唐門・御本地堂・鐘楼・塔・御蔵・愛宕堂・稲荷之宮・御法所・其外所、小宮、透と見分、於神楽所、孫次弁当給、尤両人衆最前見分被致候帳面を以引合、此度之修復之仕様、奉行衆遂相談、直ニ其所ニ而書付致、暮合見分仕廻、帰ル、明日江戸江之使在之付、書状認。

六日 庚申 霽

卯后刻、左衛・孫次御出、同道登山、林光院より見初、松岩院・装束所・玉泉院・放生院・大寿院・長円院見分、法生院ニ而左衛之弁当給、申后刻、見分仕廻、帰、明日は残候分、見分之筈ニ申合。

七日 辛酉 霽

辰之刻登山、一之御門より見分初、定智院・三明院見分、三明院ニ而自分より弁当持参、披之、昼過、見分仕廻、帰、太田図書被参、盆山参。

八日 壬戌 霽

見分、昨日切ニ仕廻候ニ付、今日、仕様帳調之、夕飯後、孫次・左衛江見廻、同道、又御山江登、方、見廻、帰、亀岡久三郎方より飛脚差越。

九日 癸亥 霽

辰之刻、久能罷立、駿府江着、則大甚兵衛殿江六左同道参、面談、帰、於途中ニ江戸より之状、備前殿より御届、見分帳清書調之、夕飯後、備前殿へ六左同道参、面談、帰ル、山口孫次江寄、帳出来申候間、何時分備前守殿へ可被懸御目、左右次第出合可申之由申候、帰。

一備前守殿より、明日、帳持参致候様ニ、出来相料理御申付可有之旨、手紙給。
一江戸より飛脚参、六左家来、明日江戸へ返ニ付、書状認之。

十日 甲子 雨降

巳后刻、清帳、先甚兵衛殿へ持参、懸御目候処、尤之由、則左衛・孫次へ持参、為見、昼過ニ備前守殿江帳持参、忠左衛門殿・甚兵衛殿 例座、帳読之候処、一段能由被申、料理給、帰ル、尤孫次・左衛被参、七ツ過帰ル、暮合、横甚右衛門殿へ咄ニ参、四過帰、江戸江之飛脚返ス。

十一日 乙丑 霽

卯后刻、六左同道、本忠左衛門殿江参、朝料理被下、大甚兵衛殿・本備前守殿御出ヲ相待、同道、御本城江参、從西之丸見分始、御殿中見分、追手へ出、山岡三郎兵衛・斎藤左源太同道、御番衆居小屋江廻り見分、本備前守殿江寄、帰。
一馬場三郎左より飛脚被差越。

一三撰津守殿与力磯部次左衛門・忠左衛門殿与力高野清右衛門見廻、面談、追付帰。

十二日 丙寅 霽 四時降

卯后刻、松八兵小屋江見廻、料理給、辰后刻より三枝撰津守殿役屋舗見分、鹿島忠兵衛・佐藤勘太夫案内、六左同道、見廻、昼前仕廻、本多忠左殿役屋敷見

分、帰、宿ニ而料理給、松八兵被参、七ツ時分ニ本多備前守殿へ風呂入参、暮前、横甚右殿同道帰、鶴飛驒方より飛脚越。

十三日 丁卯 霽

辰后刻より長田六左殿見分初、太田式部殿・横田甚右衛門殿小屋共、六左同道見分、巳后刻帰、西八郎左被見廻、面談、昼過、横田甚右衛門殿迄参、同道、太田原備前殿江参、本多備前守殿・忠左衛門殿・甚兵衛殿・藤三御出、六左も参、見分過、料理給、帰。

十四日 戊辰 霽

久能宿彦右衛門見廻参、日比宗程も参、太田図書・佐藤勘太夫参、面談、昼時分より大甚兵衛殿へ見分参、本多備前殿・同忠左衛門殿御出、城清参、平家紅葉・鶴語之、暮前帰。

十五日 己巳 霽

巳刻、六左同道、宝台院見分ニ参、甚兵衛殿与力「伊左衛門出合、方々見分、方丈江面談、夫より浅間江見分罷越、宮内将監出合、昼過仕廻、帰、本備前殿江暇乞、振廻参、甚兵衛殿・横甚右衛門殿御出、六左同道申、風呂御申付、飯後、忠左衛門殿・采女殿御出、御奉書御請、御調請取、暮合帰、備前殿

へ参懸ニ、八郎左・八兵・伊右・佐右・孫次江暇乞参。
(左衛力)

十六日 庚午 雨降

寅后刻、駿府発足、巳刻雨止、申后刻、沼津江着、一宿。

十七日 辛未 霽

寅后刻、沼津発足、申后刻、大磯市右衛門所へ着、風呂申付。

十八日 壬申 霽

子后刻、大磯発足、神奈川昼休、江戸飛脚参、八ツ時分、江戸着、直ニ新右衛門殿・若狭守殿・本美作守殿江見廻、宿江着、食給、青遠江殿見廻、帰。

(中略)

廿三日 丁丑 陰り、未之刻雨降

卯ノ刻、筑前守殿へ参、駿府御用之書物出来仕候間、明日、御城江持参可仕哉と、幸若狭殿・新右衛門殿御出ニ付、申上候へバ、明日、持参可仕之由被仰、罷出、夫より三枝撰津守殿江見廻、面談、帳面・目録之様子申談、帰、高木忠右御出、面談。

(中略)

廿五日 己卯 陰

巳刻登城、御黒書院御老中列座へ、内匠同道罷出、駿府御用申上候处、見分之通一段尤之由、其内瓦・築地之積、又は、御役屋敷、風已後増積り致、重而可懸御目由被仰渡、八ツ時分退出。

(中略)

四月 小

(中略)

二日 乙酉 陰、時々雨降

卯刻、筑前守殿江参、久能其外積書付出来仕候間、可懸御目之由申上候处、今日、御城江持参可仕之旨被仰、罷帰、巳刻登城申候处、今日は御用多ニ付、明日、罷出候様被仰、退出、暮前、松因幡守殿より御切紙被下、則参候处、御座間前、御劔術場之所御好、明日、御城江持参仕候様ニと被仰、罷帰。

三日 丙戌 雨降

辰刻登城、昨晚御好之絵図、因幡守殿江差上ル、久能・御役屋舖積書付、筑前殿・豊後殿江、於溜之間、掛御目、余ノ御老中、今日は(立花)橘・飛驒殿へ振廻御越故、明日罷出、懸御目候様と被仰、退出、因幡殿又絵図御好、是又明日持参候様と被仰、退出。

四日 丁亥 霽

辰刻登城、因幡守殿江絵図差上候处、御好替り、明日持参候様被仰、久能御用之儀も、明日罷出候様ニと、八ツ時分退出、宿へ帰、上野へ罷越、今日御宝塔御胴筒石建、加賀守殿も御出、暮前御帰。

五日 戊子 霽、陰

辰刻登城、駿府御用申上候处、帳面、久能江近日以継飛脚可被遣候間、認候様ニと被仰、御役之儀は三枝撰津守殿御出合之上、可被仰談候間、其節罷出候様ニと被仰、定棟梁弥(次)ニ右衛門御証文、石美作殿より遠江守殿ヲ以被仰渡。

覚

定棟梁四人之内、左助儀、延宝六年十二月迄、三人扶持雖請取之候、病氣引ニ而、從翌未年正月、御扶持方差上候、為代弥次右衛門、從去申年十月相勤候付而、三人扶持被下候間、注引付、從去申十一月朔日、当四月迄之御扶持方、自分手形ニ鈴木修理・木原内匠以裏判、手形相渡、從当五月は、如前之、毎月定棟梁共同一紙手形ニ而、修理・内匠以裏判、可被相渡候、以上。

延宝九酉

内膳印判

四月四日

筑前印判

加賀印判

太田六左衛門殿

由比長兵衛殿

(中略)

八日 辛卯 霽

辰刻登城、今日、久能帳面・目録、御老中江懸御目候処、筑前殿・内膳正殿・豊後守殿、一段能候由被仰、左候ハゞ帳面上ニ付札被成被遣、別紙目録も一所被遣候間、右付札目録之通入札致、修復仕候様被仰遣可然奉存候、付札ニハ押切之御印判も可被遊哉と申上候得ば、尤思召候間、自分之判形押遣候様ニと被仰、御役屋舗之儀は、幸撰津守殿御出候間、差図致相談候様ニ被仰、退出、上野へ参詣、今日、御笠石足代半バ引上ル、加賀守殿御出、御霊前江も参詣。

資料十三 久能山御普請覚(元禄二年(一六八九)を抜粋)

久能山東照宮文書三三九

『久能山叢書』第三編、久能山東照宮社務所、一九七三、所収

一、元禄貳己巳年御修覆始り奉行佐野又兵衛殿、長嶋半左衛門殿、三月三日御飯殿鉦立、十二日柱立、十八日ニ出来。同廿七日外遷宮有、先ツ房中御供所学頭御修復有。四月始より九月十七日に御仕舞、府中へ御帰り。

一、御宮修復奉行安藤九郎左衛門殿、西尾藤兵衛殿、江戸より御上り見分修復奉行共に被成候。

四月廿一日より御宮見分両奉行御被官河部六左衛門、町棟梁式人江戸より来ル。五月十日見分相済、江戸へ御下り。

一、八月四日、九郎左衛門殿、藤兵衛殿江戸より御上り、直ニ小屋へ御入。同十一日御宮鉦始有。

十一月十六日、上遷宮、同廿一日迄ニ御普請相済、廿三日両奉行河部六左衛門等江戸へ下ル。此時、御宝塔ノ上方、石ノ高欄出来。御宮ハ長押下塗彩色出来。諸堂同断

資料十四 久能山御宮堂舎造営覚（元禄二年（一六八九）を抜粋）

「御城内外臨時御普請覚」『静岡市史』近世史料三、静岡市役所、一九七六、所収

一、元禄二巳年

御供所坊中学頭寺御修復同寺居間台所萱葺柿屋根被 仰付其外大寿院脇道
通石垣被 仰付三月三日新初九月上旬出来

稲葉出羽守組

佐野又兵衛

奉行

長崎半左衛門

同年

御宮廻御修復塗彩色等御繕被 仰付御内陣向江鼠不入様ニ御天井上鼠通
道塞候故正外遷

宮有之八月十三日新初十月廿四日出来

一惣御翠簾替

一神正体再興

一樓門隨身御修復

一御内陣御鉾并御場之御鉾出来也

安藤九郎左衛門

西尾藤兵衛

附り御被官大工河辺六左衛門相勤之

資料十五 宝永元年（一七〇四）久能山修復（『鈴木修理日記』より抜粋）

鈴木棠三・保田晴男『近世庶民生活史料 未刊日記集成 第五卷

鈴木修理日記三』三一書房、一九九八、所収

正月 小

廿九日 乙亥 霽

一辰刻、三七被参、面談、左之書付相渡ス、伝兵衛殿江進候様ニと申談。

覚

御被官

増田清右衛門

同

坂本七左衛門

右之内耆人ニ、大棟梁甲良豊前被差添、久能江可被差遣候哉、何も服穢無御
座候、町棟梁義は此度被遣候ニ及中間敷候哉、駿府ニ罷有候棟梁花村与七已
下之者共召遣申候様ニ可仕候、毎々其通ニ御座候。

正月廿九日

鈴木修理

二月 大

朔日 丙子 霽

一松平伝兵衛殿より御手紙、則報并左之書付相添遣ス。

増田清右衛門・甲良豊前、明二日、御城ニ罷出候様ニ可被申渡候、駿州久能

江被遣義申渡候御暇之節拝領物書付可被差越候、御暇之節ハ若年寄衆被仰渡

候様ニ覚候、弥其通ニ候哉、是又可被申聞候、以上。

二月朔日

松平伝兵衛

鈴木修理様

尚々、明日申渡候義ハ、我等共申渡、御暇之節、若年寄衆被仰渡候様ニ覚
申候、以上。

久能江被遣覺

御朱印、馬式疋

高百俵

一御暇銀 拾枚

御被官

七人扶持

増田清右衛門

但、道中上下・彼地逗留中、書面老倍直手形

御朱印、人足老倍

一馬 老疋

大棟梁

御暇銀 五枚

甲良 豊前

七人扶持

但、道中上下・彼地逗留中、書面老倍

清右衛門裏判手形

先例書

元禄二巳年

御被官

一銀拾枚

河辺六左衛門

右は久能御宮御修復見分為御暇被下、於焼火之間、土屋相模守殿被仰渡、

御奏者朽木伊予守殿・稻生五郎左衛門殿御出座。

一大棟梁、久能江参候例無御座候得共、遠国近国江被遣候節、御暇之例ニ御

座候、以上。

三日 戊寅 曇

一大棟梁、遠国近国江見分、御普請御用ニ罷越候節、御暇、罷帰候而御褒美被下

候先例書出、伝兵衛殿江進ル。

覺

元禄十五年二月十日

一銀五枚ツゝ

鶴 飛驒

平内 大隅

是ハ伊豆箱根権現・鎌倉八幡御修復付、被遣候時

元禄十丑四月廿二日

一銀五枚

甲良 豊前

是ハ遠州一ノ宮・村山浅間御修復付、罷越候時

四日 己卯 霽

(マ)

一今朝、於評定、増田清右衛門、久能江罷越候誓詞致ス、与次同道、甲良豊前

義ハ私宅ニ而、今朝致ス。

一今朝、伝兵衛殿江以手紙、先例、久能江御被官参候時、御奉書持参致候留并窺

書、左之通遣、御奉書留ハ例帳ニ有リ。

覺

一御被官・大棟梁駿府迄罷越、町奉行衆江申入、久能江可参義ニ御座候哉事。

一久能学頭徳恩院江、上野迄御案内可被仰入哉事。

一清右衛門・豊前計久能江見分ニ罷越候義ニ御座候哉、御番衆之御破損奉行

衆も御立会御座候哉之事。

二月四日

鈴木 修理

十六日 辛卯 霽

一松平伝兵衛より御手紙、久能絵図書付老通来ル。

以手紙申達候、然ば久能絵図差越候。此絵図は対馬守殿此度御持参可被成由、

被仰付候間、写留、本紙可有御返候、写は清右衛門方江可被差越候、已上。

二月十六日

松平伝兵衛

鈴木修理様

御手紙拝見仕候、然ば久能絵図并御書付一通被遣、奉請取候、御本紙は対馬

守殿、此度御持参可被成由被仰候間、早速為写候而返上可仕旨、奉畏候、尤

写は清右衛門方江相渡可申旨、奉得其意候、以上。

二月十六日

鈴木 修理

松伝兵衛様

十七日 壬辰 曇、昼時より小雨降

一松平伝兵衛殿江、昨日之絵図遣ス。

昨日被遣候久能絵図并書付共ニ写取候間、御本紙返進仕候、以上。

二月十七日

鈴木 修理

松伝兵衛様

三月 大

十日 乙卯 霽

一曲淵伊左衛門殿、駿州久能御宮見分御用被仰付之。

十四日 己未 朝曇、昼時より雨

一今日、伝兵衛殿・伊左衛門殿御暇、但シ伊左衛門殿は久能見分御用ニ付、

一金五枚

松平伝兵衛

一金五枚

曲淵伊左衛門

時服三・羽織

時服式・羽織

一鈴木伊兵衛、伊左衛門殿ニ差添、駿府江可被遣由、被仰渡。

十六日 辛酉 霽

一鈴木伊兵衛、今日、久能江之御暇被下之。

一黄金三枚

時服三・羽織

九月 小

廿七日 庚午 朝より曇、時々小雨降

一久能御宮御修復御手鉦始、柳原小屋ニ而有之。

十一月 小

廿二 甲子 晴天

一丑后刻大地震、則刻登城、御城内外御石垣等破損、其外方々検ル、夜中、翌廿三日昼夜勤。

廿三日 乙丑 霽、終日地震

廿四日 丙寅 曇、終日打続地震、今日ハ少々輕シ、凡今日迄ニ式百度程、暮

合より明ケ七ツ過迄雨降

廿五日 丁卯 霽、終日地震

廿六日 戊辰 霽、終日折々地震、夜中共ニ

宝永元年 日記

九月 大

十一日 戊申 霽

一松平伝兵衛殿・大島肥前守殿より御連紙。

大谷甲斐、久能江御用付被遣候、依之甲斐歸府仕迄ハ、其内護持院御普請

場、甲良豊前度々見廻候様ニ可申付之旨、今日、本伯耆守殿小総州江被仰

渡候、右之段御自分へも申達、小屋ニ而可申渡之旨、総州・肥前守江被申

聞候、御自分御出無之故、豊前へ右之段申渡候間、左様ニ御心得可有之候。

九月十一日

松平伝兵衛

鈴木修理様

大島肥前守

十月 小

十一日 戊寅 霽

一松平伝兵衛殿、久能御宮御修復御用被仰付之。

①

征夷大將軍正二位内大臣源吉綱修宮

駿州久能山
上棟 東照宮大権現

奉行 鳥山城主從五位下対馬守源姓 稻垣 重富
副司 田中城主從五位下撰津守源姓 太田 資直

監事 從五位下安房守源姓 松平 乗宗
從五位下越前守源姓 曲淵 重羽

伊兵衛穂積姓 鈴木 重武

大工 大谷甲斐 藤原 正矩
大谷出雲 藤原 基矩

宝永元甲申年十二月十五日

②

御願主征夷大將軍正二位内大臣源綱吉公

奉行 鳥山城主從五位下対馬守源姓 稻垣 重富
副司 田中城主從五位下撰津守源姓 太田 資直

聖主天中天 迦陵頻伽声
奉修宮 久能山東照宮 宝永元甲申年十二月十七日
從五位下安房守源姓 松平 乗宗

哀愍衆生者 我等今敬礼

從五位下越前守源姓 曲淵 重羽

伊兵衛穂積姓 鈴木 重武

大工 大谷甲斐 藤原 正矩
大谷出雲 藤原 基矩

遷宮供養導師為一品公辨親王代 凌雲院大僧正義天勤之

③

御願主征夷大將軍右大臣正二位源朝臣吉宗公

奉行 從四位下行侍從左近衛將監源朝臣乘邑
副司 從五位下守伊勢守 藤原朝臣弘隆
聖主天中天 迦陵頻伽声
祀奉修宮 久能山東照宮 寛保二壬戌年八月廿二日
哀愍衆生者 我等今敬礼
暈奉行 稻生七郎右衛門 藤原 正延
大工頭 広戸勘九郎 藤原 昌房
下奉行 鈴木源次郎 源 高估
大工 石渡善次郎 藤原 高置
大工 大柳八左衛門 藤原 昌紹
平内 大隅 齋部 改長

遷宮供養導師一品公遵親王代大円覺院權僧正澄然行之
監宮 大工 山城守從五位下 源朝臣長庸

④

御願主征夷大將軍正二位内大臣源家重公

奉行 從四位下行侍從兼相模守紀朝臣正亮
副司 鵜殿十郎左衛門 藤原 長達
聖主天中天 迦陵頻伽声
祀奉修宮 久能山東照宮 宝曆六丙子年十月廿二日
哀愍衆生者 我等今敬礼
小普請方 小菅猪右衛門 源 武第
小普請方改役 窪田十左衛門 源 繁清
大工 名倉藤五郎 源 勝意
大工 村松 飛驒 源 棟貫

遷宮供養導師一品公啓親王代静慮院權僧正義順行之
監宮 伊豆守從五位下 源朝臣信復

⑤

御願主征夷大將軍正二位内大臣源家治公

聖主天中天 迦陵頻伽声
卅 奉修宮 久能山東照宮 安永四乙未閏十二月廿六日
哀愍衆生者 我等今敬礼

奉行 從四位下行侍從兼右近衛將監源姓松平武元

副司 從五位下守下總守 藤原朝臣貞幹

御勘定組頭 小長谷喜太郎 藤原 政房

勘定吟味方改役 中野 藤十郎 源 定候

御勘定 田村金左衛門 藤原 恒常

御大工頭 今村五右衛門 藤原 長央

御作事下奉行 鈴木市十郎 穗積 正助

大工 長沼千右衛門 藤原 貞英

遷宮供養 導師一品准三后公遵親王代凌雲院僧正順行行之
矢島源四郎 藤原 高陳

⑥

御願主征夷大將軍正二位内大臣源家齊公

聖主天中天 迦陵頻伽声
卅 奉修宮 久能山東照宮 天明戊申年五月廿二日
哀愍衆生者 我等今敬礼

奉行 從四位下行侍從備前守源朝臣牧野貞長

副司 從五位下行織部正 源朝臣 松平乘尹

御勘定組頭 井上助之進 藤原 利恭

勘定吟味方改役 永田与左衛門 藤原 政道

御勘定 大貫興太郎 藤原 勝孚

御大工頭 谷田久太郎 藤原 則成

御作事奉 河田安右衛門 藤原 秉彝

大工 行竹内半十郎 源 善寿

遷宮供養 導師凌雲院僧正知願行之
石丸 讚岐 源 充倚

⑦

聖主天中天 迦陵頻伽声
卍 奉修宮 久能山東照 宮享和三年癸亥四月二日
哀愍衆生者 我等今敬礼

御願主征夷大將軍正二位内大臣源家齊公

奉行 從四位下行侍從伊豆守 源朝臣 松平信明

副司 因幡守從五位下 源朝臣 三上 季寬

御勘定組頭 從五位下行若狹守 紀朝臣 山木 正富

御勘定 水野藤九郎 源 忠得

御大工頭 名倉數五郎 源 意規

御作事奉行 竹村七左衛門 源 久茂

竹永市郎左衛門 源 忠雄

橋本忠左衛門 藤原 安実

大 工 甲良 筑前 源 棟村

遷宮供養 導師一品公澄親王代凌雲院前大僧德孝行之

□宮建事 從五位下越前守 源朝臣 仙石久道

從五位下隱岐守 源朝臣 龜井矩賢

⑧

御願主征夷大將軍從一位太政大臣源家齊公

奉行 從四位下行侍兼出羽守 源朝臣 水野忠茂

副司 從五位下行長門守 藤原朝臣 川井 久徳

讚岐守從五位下 藤原朝臣 大久保忠実

御勘定組頭 村井榮之進 源 政朝

勘定吟味方改役 笹木茂三郎 源 忠久

御勘定 長尾 一郎 橘 資利

御大工頭 根岸三十郎 源 忠休

大越孫兵衛 平 喬久

御作事奉行 生田 丈助 越智 政辰

岡本良右衛門 源 綱文

大 工 石丸 伊勢 源 充政

遷宮供養 導師准三宮一品舜仁親王代莊嚴院僧正慈顯行之

聖主天中天 迦陵頻伽声
卍 奉修宮 久能山東照 宮天保癸巳七月二日酉刻
哀愍衆生者 我等今敬礼

⑨

御願主征夷大將軍從一位左大臣源家慶公

聖主天中天 迦陵頻伽声
卅 奉修宮 久能山東照宮 天保十三年壬寅六月廿九日酉刻
哀愍衆生者 我等今敬礼

奉行	從四位下行侍從兼越前守	源朝臣	水野忠邦
副司	中川勘三郎	藤原忠潔	
御勘定組頭	山口勘兵衛	源直養	
勘定吟味方改役	都筑金三郎	藤原峯重	
御勘定	吉田条太郎	源直周	
御大工頭	渡辺左大夫	源庸	
御作事奉行	村上与五郎	源三生	
	今井右左衛門	中原温知	
	安西久次郎	藤原由哲	
大工	辻内近江	源景頭	

遷宮供養 導師准三宮一品舜仁親王代觀理院權僧正字門行之

⑩

御願主征夷大將軍從二位内大臣源家定公

聖主天中天 迦陵頻伽声
卅 奉修宮 久能山東照宮 安政三年丙辰九月廿六日
哀愍衆生者 我等今敬礼

奉行	從四位下行侍從兼伊勢守阿部朝臣	阿部正弘
副司	松本十郎兵衛	源穀実
御勘定組頭	松平彈正	源正之
勘定吟味方改役	鈴木大之進	穗積重領
御勘定	渡辺三十郎	源穆
御大工頭	根立助五郎	源亮延
御作事奉行	猪俣英次郎	源則榮
	松田弥太郎	藤原静修
	生田丈助	越知政朝
	那須喜兵衛	源俊保
大工	石丸祐次	源充久

遷宮供養 導師一品慈性親王代真覺院權僧正志常行之

(表)

享和三癸亥歲

(梵字)

聖主天中天迦陵頻伽声哀愍衆生者我等今敬礼矣

四月吉祥日

御作事奉行
三上因幡守季寛

御目付
山本若狭守正富

御勘定組頭
水野藤九郎忠得

御勘定
名倉数五郎意規

御大工頭
竹村七左衛門久茂

御作事奉行
橋本忠左衛門安実

御大工
甲良筑前棟村

(裏)

御願主征夷大將軍正二位内大臣源家齊公

(梵字)

駿州久能山五重宝塔御修宮正遷座供養之所

導師 当山第拾七世学頭德音院大僧都觀光行之

資料十七 宝永元年（一七〇四）久能山修復大工増手間

〔鈴木修理日記〕より抜粋）

鈴木棠三・保田晴男『近世庶民生活史料 未刊日記集成 第六卷

鈴木修理日記四』三一書房、一九九八、所収

【宝永二年十月十二日】

久能御普請御勘定清帳急セ申候間、大工手間付等書出有之候ば、随分急改致、棟梁江申渡候様ニ改之、御被官江御申渡可有之候、以上。

十月十二日

曲淵越前守

鈴木修理殿

【宝永三年五月八日】

駿州久能

御宮御修復工手間増之覚

吟味工高三万貳百九拾八人半ニ、此度式割増之積り

一工数六千五拾九人半

此作料金百五拾壹兩貳分余

飯米九拾石八斗九升余

右増之儀は、元禄十三辰年、於日光大猷院様御法事方并三仏堂御修復方共ニ、御急之分壹割半増、同十五年日光御本坊御修復吟味工高二、御急之分壹割増ニ御座候得共、申年久能作事之節ハ、地震已後故、作料高直ニ御座候故、式割増被仰付候而も苦ケ間敷奉存候事。

但、前より増手間之義は、其時之御奉行衆御断之書付、此方江被遣、其上ニ而右之工割帳奥書ニ、御奉行衆御断ニ付、増手間如此御座候段、書付指出シ候事ニ御座候、以上。

戊五月

鈴木新五兵衛

片山三七郎

鈴木貞右衛門

【宝永三年五月十日】

一久能増之書付、今日稲垣对馬守殿衛江、曲淵越前守殿御書付ニ而被仰上、式割増之願相叶候由、对馬守殿、越前守殿江被仰渡候由。

資料十八 久能山御普請覚（宝永六年（一七〇九）を抜粋）

久能山東照宮文書三二三九

『久能山叢書』第三編、久能山東照宮社務所、一九七三、所収

一 宝永己丑六月廿日、御塔漏候ニ付寺社奉行衆江注進有之。八月六日、青山信濃守殿江御奉書ニ而見分之儀申来。同月六日府中破損奉行勝金左衛門殿、庄田主税殿為見分ニ御越。御本地堂・神樂所・御宝蔵・御膳所・鐘楼・楼門皆銅瓦下地朽り候由。御塔は足代出来次第見分可有由。御塔普請為奉行在番衆兩人被仰付。宝永七庚寅七月廿三日兩人參詣、同月廿八日御塔足代請負之者共足代ニ取付、九月十日、普請相済。漏盤下九輪之根之金物之上葺有之也

杉浦出雲守殿組

御塔奉行 山岡孫七郎

下奉行 安西半右衛門

石井治郎右衛門

同 奉行 井戸三五郎

山本喜助

川崎武兵衛

大工棟梁 孫右衛門

同 伝四郎

同 肝煎 源三郎

屋根や 与右衛門

閏八月廿七日より普請ニ取付。

資料十九 天保四年（一八三三）出来栄見分役々名前（久能山御宮諸堂社一之御

門并御別当所八ヶ院其外御修復一件より抜粋）

『久能山叢書』第三篇、久能山東照宮社務所、一九七三、所収

見分罷出候役々名前

御山上突合名前

御被官 黒子宗三郎

仮役 松嶋弥十郎

吟味方下役出役 大竹伊兵衛

御普請役代理 川名円蔵

勘定役出役 井上末五郎

小役助 小谷源兵衛

御小人目付 田中円平

青木勝作

定普請同心 菊地弁次郎

同出役 桐山新四郎

大棟梁 石丸伊勢

大工棟梁 児玉児左衛門

以上

御瑞籬廻り諸堂社向下突合

御疊大工見習 中村弥惣兵衛

御疊方肝煎 土屋正作

御別当所より八ヶ院向下突合

村田熊太郎

御疊方肝煎 関鉄五郎

御山下名前

御被官 菅谷源次郎

仮役 栗原六之助

御普請役代理 坂登八郎

同代理 石川太助

勘定役助 飛田甚之助

小役助 村田龍太郎

御小人目付 雨笠重平

磯山作之助

定普請同心組頭 森丈右衛門

同同心 島田彦三郎

木村清

高貫鉄四郎

同出役 小田仁三郎

大工棟梁 高木吉次郎

服部八十郎

上田儀兵衛

資料二十 天保四年（一八三三）出来栄見分（久能山御宮諸堂社一之御門并御別

当所八ヶ院其外御修復一件より抜粋）

『久能山叢書』第三篇、久能山東照宮社務所、一九七三、所収

【天保四年六月二十三日】

御宝塔并御供廊下御瑞籬飯御廊下御正面御唐門・御本地堂御門・御本地堂・
神庫・荒神社・御神樂所・御膳所・五重塔・鐘楼・護摩堂・山王社・庚申弁
天社・御鳥居・神廐・御楼門・禰宜番所迄見分

愛宕江上り口鳥居角柵共御見分、愛宕社・稻荷社鳥居銅燈籠見分、夫より御
下り

夫より御供米蔵・禰宜食所・御供所・春屋・薪小屋・御供所御門・御供水御
見分済（御奉行方御刀御差被成）坊中林光院・松岩院・玉泉院・同所脇井戸・
宝性院・大寿院・長円院・同所井戸・定智院共坊中は御見渡、三明院江御立寄
（此所二而町奉行・御代官・御作事奉行・御目付・御作事方役々共暫休足有之）
夫より一之御門渡り御櫓御見分

夫より御坂通石垣同所角柵石柵共下馬札并角柵、夫より御別当所江御越、玄
関向御導場・御神殿・書院向・御茶屋御見渡長屋向御見渡之積之所無之相済、
書院迄見分相済

資料二十一 天保十二年（一八四一）久能山地震被害報告（天保壬寅御修復

公私日録より抜粋）

『久能山叢書』第一編、久能山東照宮社務所、一九七〇、所収

当二日未刻、駿州久能甚舖地震にて御座候処、御山内所々御損御座候付、其節
従在所家来駿府町奉行加藤軀負へ相達申候段申越候。尤御宮御別条無御座候。
委細の儀は追て可申上候え共、先此段御届申上候、以上

三月六日

榊原越中守

当二日駿州表地震にて久能御山御損所荒増左の通。

一、御宮向少々宛塗禿御損

一、御楼門所々御損

一、銅御鳥居折損

一、御供所向所々御大破

一、御石灯籠不残倒損

一、御土蔵御大破

一、護摩堂御大破

一、御愛宕御大破

一、坊中各院所々大

一、禰宜番所倒損

一、一の御門御櫓台石少々御損

一、御番所、下御番所共壁所々御損其外所々少々宛御損、右の通御座候、以上。

三月七日

榊原越中守家来

津村直八

御山中所々御破損左の通。

一、御神庫並御神樂所内外長押等惣体響入損

一、御樓門左右羽目響入其外惣体破損、同所左右二重猿頭塀南の方へ倒、東の方石柵破損、前通石柵惣体ゆるみ出来

一、御正面銅御鳥居礎際より震倒悉打碎。

一、御膳所外通り羽目損、五重塔響入漆禿損

一、護摩堂正面柱長押後ろの方羽目共大破、内廻り建具等破損。

一、御唐門下石手水鉢屋根破損

一、諸家より献備の石灯籠惣体震倒

一、御膳所脇並御鳥居脇用水瓶破損、同所脇石柵式間余崩落

一、御塔下石階段其他鐘楼下四半石所々損

一、御鳥居脇各柵式間余破損、同所石階段凡拾段程欠損、神廐惣体響入損

一、禰宜番所惣体南の方へ倒懸り相見、窓羽目等破損

一、愛宕社後ろの方へ倒懸り甚危、並同所石鳥居笠石震落、棹石共惣体破損、

同所銅灯籠式台倒損

一、御供米蔵内廻り羽目等損、外廻り壁落又は響入、屋根向瓦落懸り大破

一、禰宜会所所々壁落建具共惣体損

一、御供所上下台所並御宮役人勤番部屋共所々壁落、羽目長押等崩落、柱折、舖居、鴨居、建具等大破、屋根向棟下より瓦落下り、外壁土台露出し所々大

破

一、一の御門御櫓台石垣所々損危相成、並腰羽目東西共割損、同壁少々損、同続南の方角柵扣貫拔損

一、上御番所面番休息所台所共壁不殘大損、同面番先東の方庇扣柱羽目共損並路次損

一、同所東の方裏通り軒羽目板尅間屋根摺下り、同続羽目板三尺程放危相成

一、下御番所面番休息所共壁不殘損、面番格子先南の方羽目板損

一、同所廊下通、壁不殘損、同南の方出口敷居放れ腰羽目損

一、御門外木高欄張出下土少々崩落、並地山少々崩落

一、坊中八院何れも大破

右の通。尤

御宮向御別条無御座候趣、在所表家来より申越候、委細の儀は駿府町奉行加藤鞆負より可申上候、此段申上候、以上。

三月十五日 榊原越中守

右に付大目付へ案内切紙別紙御損所書付も差出。

去月二日駿州久能表地震に付、御宮向並御宝塔其外御場所、猶又去る二日為見廻、駿府町奉行加藤鞆負儀罷越御損所相伺候処、御本殿向御羽目其外響入少々

宛御損、御石の間内外御羽目響入、隅縁通漆

禿、御長押所々響入、御彩色御損、御拝殿内外御羽目、御長押惣体弛出来、御唐門御柱其外御損。御宮廻御玉垣響入、惣体少々宛御損、御廊下同断、御宝塔

御正面左右石御灯籠式台並銅御灯籠震倒、御同所御正面石階段下石垣惣体弛、

御鳥居前後両側石柵惣体弛出来。御本地堂内外御羽目並長押惣体響入御損相見

申候由、在所家来より申越候。委細の儀は加藤鞆負より可申上候、此段申上候、以上。

四月十一日 榊原越中守

右差出候処御落手、使番野々村直右衛門相勤居候付大目付へ案内切紙差出す。

資料二十二 天保十三年（一八四二）修復工程

〔天保壬寅御修復公私日録〕より抜粋・作成〕

『久能山叢書』第一編、久能山東照宮社務所、一九七〇、所収

天保十二年

十二月二十日

此度御修復御材木江戸廻の分近々着岸に付、駒越物揚場へ地所借用の懸合有之。

天保十三年

二月二十六日

此度御修復御急に付、小屋組大工式人、四五日前、当所へ罷越、小屋下組に取懸近々出来に付、小屋地内々引渡に相成候様致度旨、領分根古屋百姓を以内々申聞候由。

三月朔日

諸職人十八人到着の由。

三月二日

去月廿六日初立の御役人昨日到着可有之处、川支に付今日延着、何れも着届として屋敷玄関へ直勤

御作事下奉行 今井右左衛門

御被官助 鶴見淳助

飯役

中川要右衛門

御普請役 新井茂作

勘定役

小林三十郎

勘定役 脇田久蔵

小役

石場藤左衛門

手代 岡本新之丞

定普請同心

須藤一郎

同 森 丈左衛門

同

高部清五郎

同 木村金三郎

同出役

永田仁三郎

大工棟梁 林 善十郎

大工棟梁

服部八十郎

三月四日

〆十五人

御作事方一の御門通行鑑札二枚、一の御門通行名前書一通、鶴見淳助（作事下奉行）持参差出、林濤守（榊原越中守家来）受

三月十二日

取、月番支配呼出、高津市之進、新井重八郎へ右の趣相達鑑札書付相渡。

御小屋地例は双方立合引渡の処、今度は最早内懸合に付地所へ御用木等積入、小屋組等取懸居候に付、別段不及立合、直地所受取可申旨

但右の通談済の処、絵図面と小屋地形数相違に付淳助より懸合有之、濤守出役の処絵図面引替相渡、小屋場引渡相済。もはや今日三方矢来出来

去月廿八日跡立の内、今日到着に付、何れも着届として屋敷玄関へ相越。

御勘定吟味方改役出役

吉田条太郎

御大工頭

村上与五郎

只今到着仕候間為御届参上仕候旨申置。

御被官

赤城新右衛門

御作事方飯役

斎藤善左衛門

御普請役

上川惣蔵

御作事方勘定役出役石川半之助

小役出役

坂川寛之丞

定普請同心組頭太田三郎右衛門

御作事方手代見習柴山雄之助

定普請同心 平野安太郎

定普請同心 細谷忠次郎

同 原 源七郎

同 市川力太郎

同 小野市右衛門

大棟梁 辻内近江

（大工棟梁）

浜松彦八郎

〆拾六人

下御作事小屋の内、会所並大工小屋木挽小屋何れも出来、コケラは未皆出来不相成候由、諸職人此節凡二百人程も着の由。今日下会所呼出、木道具並諸式御山上より差下に付、一の御門へ右に付印鑑相渡す。

三月十三日	諸堂社御仮殿向は今日出来、明日遷座の由、御宮御仮殿は未取懸由、諸堂社も遷座済一統引渡、坊中六箇院は此間引渡相済候由。尤手廻しに懸合済、諸堂社共足代は懸り居、万事手廻し宜由。	四月二十日	大寿院出来、引渡仮受取相成
三月十六日	下会所呼出。木道具並諸色共、御山上より下小屋へ相下げ候節端印鑑引合御通過有之候、伊是印鑑一枚相達申候、以上。安西・今井・村上三明印鑑相渡る。	四月二十二日	跡四箇院仮受取
三月二十日	唐銅御鳥居鑄立場所東矢場立会の上引渡す。	四月二十五〓六日	御宮外 遷宮に付御修復御場所、両日共諸職人休日
三月二十四日	駒越村御用御材木揚場立会引渡す。	四月二十六日	御宮外 遷宮
三月二十六日	作事奉行代岩瀬内記病氣に付、代り中川勘三郎	五月一日	上番所御修復取懸候に付為引渡立合、林濤守出役。
三月二十八日	御量大工到着	五月二日	一の御門御番所持場内外角柵修補今日取懸候旨、三明院より御番所へ懸合有之、承置候旨月番与力届出る。
四月一日	於下小屋御新初の式有之、右に付御普請休日由。	五月八日	御鳥居御用、新銅七十駄程昨日到着に付、今日試鑄有之好、御作事より達は無之候え共、火業相始候に付、兼て申付置候同心
四月九日	漆奉行組手代本多奎之助、寺島清七郎、神宝方棟梁堀井秀作、今日着届玄関へ出。	五月十五〓六日	見廻今夕より申付候事、尤今日は昼計の趣故夜中見廻りは不申付、明日より本鑄立に取懸候旨承。
四月十一日	御鳥居鑄立場出来取懸可申处、今度右鑄立銅古御鑄直は難相成旨德音院より申立、御門主よりも被仰立候处矢張古御鑄直の風聞にて早々取懸も可致様子由、又々鑄立見合に相成、唐銅新規にも可相成風聞にて未鑄立不取懸由。	五月十六日	量大工見習中村弥惣兵衛外肝煎兩人御用済、出立。
四月十四日	四時頃御作事奉行代中川勘三郎、御目付代山口勘兵衛、同時に着に付為吹聴玄関へ差越。	五月十八日	江戸大工この頃まで引弘
四月十五日	同時刻、御徒目付鈴木萊助、御小人目付萩原又作、同遠藤定八郎着届玄関へ出。	五月十六日	上番所・下番所引渡
四月十六〓七日	御作事奉行代中川勘三郎、御目付代山口勘兵衛、御宮為拝礼登山有之。御徒目付御小人目付も同断	六月五日	一之門櫓引渡
四月十八日	御宮御祭礼に付、御修復御場所両日共諸人休日	六月六日	漆工日々八十人程では不足、江戸へ申遣候由
	深秘職法眼菊地少進、神宝方棟梁野村助次郎到着	六月十四日	櫓台御門外左右石垣繕に付足代懸り候間
		六月十五日頃	一の御門左右御石垣繕出来足代取候間
		六月十六日	鳥居ミガキ済御山へ差登せ候由
		六月二十日迄	皆完成予定
		六月二十一日	駒越村御用材揚場御用済に付、引渡
		六月二十二日	鳥居完成
			塗師方完成
			飾方は今日半日にて皆完成
			神宝方は未残有之候由
			出来栄見分

六月二十三日 下拵小屋場会所取払に付、今日より御作事方役人泊相止申候
六月二十四日 下拵小屋場地所引渡

唐銅御鳥居鑄立小屋地所引渡

六月二十九日

御宮正 遷宮

七月一日

諸役人出立

一、寺社奉行阿部伊勢守殿旅宿清水町十一屋太郎右衛門方へ暇
乞使者差出。朝倉新左衛門甚暑の節弥御安全被成御勤珍重御
儀奉存候。就御出立御暇乞以使者申述候。

一、鶴見淳助（被官助）、木村金四郎、石川半之助、細谷忠次
郎、斎藤善右衛門、上川惣藏、坂川寛之丞、新井茂作、高部
清五郎、石腸藤右衛門、鈴木萊助、中川要右衛門（仮役）、原
源七郎、山本八郎左衛門、小野市右衛門、市川刀太郎、赤城
新左衛門、小林三十郎、勝田久藏、太田三郎左衛門、寺島清
七郎、本多松之助、川口五作、小野伝之助、山崎市十郎、萩
原久作、近藤定八郎、須藤一郎、森丈左衛門、岡本新之丞、
体阿弥易、辻内近江（大棟梁）、右何れも御用済出立為届玄関
へ出る。

一、中川勘三郎殿（作事奉行代）、山口勘兵衛殿（目付代）被
参、御修復御出来御用済に付今日致出立候、滞留中は彼是御
世話相成候、為御暇乞参上仕候段被申置。

一、根古屋村旅宿、御目見以上の分へ為暇乞使者差出

都築金三郎（勘定組頭）、渡辺左太夫、村上与五郎（大工頭）、
吉田条太郎、今井右左橘（作事下奉行）、安西久次郎（作
事下奉行）

甚暑の節弥御安全珍重存候、近々御出立に付御暇乞以使者
申述候。

近藤金弥

七月二日

御小人目付杉野甚平出立

七月三日

村上与五郎（大工頭）、安西久次郎（作事下奉行）、吉田条太郎、
今井右左橘（作事下奉行）、渡辺左太夫出立

資料二十三 久能山総門番榊原越中守石灯笼修復

〔天保壬寅御修復公私日録〕より抜粋〕

『久能山叢書』第一編、久能山東照宮社務所、一九七〇、所収

【天保十三年五月二十七日】

一 德音院々代本明房より文通にて、先頃修復頼置候此方献備御灯笼一本、清水石工松蔵と申者より積出差出候に付差越、尤未出来上りには不相成候由、積り書左の通。

榊原越中守様御献備石御灯笼一本御修復仕用並御入用積り

一、宝珠 一、笠石

一、棹石 一、上台

一、芝台

右者惣体押直し小疵取締、笠石御文字御銘文等泊差直し、銅火蓋式枚減金仕直し、新規御銘文彫付、

右御入用 金一両貳分と銀二匁

一、火袋 一、請石

右は新規仕直し、惣て御有形の通仕立、石代並持運、御本形御立方等迄一式受負

右御入用 金三両二分と二朱と銀六匁

惣へ金五両一步と銀五分

右の通に御座候、以上

清水二丁目

天保十三年

石工

松蔵 印

寅五月

同所請人

水口屋

栄助 印

德音院様

御役人中様

資料二十四 安政元年（一八五四）久能山地震被害報告

〔安政丙辰地震損御修復公私日録〕より抜粋〕

『久能山叢書』第一編、久能山東照宮社務所、一九七〇、所収

【安政元年甲寅年十一月四日】

一 自分四つ時登山、夕八つ半頃迄消防指揮いたし、追々下火相成相応間、愛宕山其外共定智院同道見廻候处、愛宕社は潰、稻荷は別条無之、御宮は聊も御別条無之、御宝塔同断、御本地堂、御宝蔵、御塔は御大破に候え共御別条無之、御棲門其外小社御膳所、神樂所も御損のみ御別条無之、御供所食所、御春屋、禰宜番（所）、護摩堂皆潰、御土蔵は御大破のみ、坊中八院は不残潰候殊。

御櫓御損のみ、上番所大破、下番所潰れ、御石欄所々崩、地山所所欠落、愛宕後の地山は余程欠候様子成。

【安政元年甲寅年十一月七日】

一 德音院々代より此度地震に付、御山上御損所御焼失の場所御届下案差越。去四日巳の上刻、駿州久能稀成大地震御座候处、御山中所々御損所并御焼失御場所左の通。

奥院

一、惣御石柵の内崩候分

御上段御石柵向て左の方

同御後通

同右の方

一、同御後外隅左の方

一、同外左の方

一、同向て左の方御階段石柵

三間 老箇所

六間 老箇所

三間半 老箇所

二間 老箇所

三間半 老箇所

二間半 老箇所

一、御同所御鳥居外 式間 壱箇所 壱間 壱箇所
 一、御同所御道筋右の方 四間 壱箇所
 一、同左の方 五間半 壱箇所
 一、御同所左の方 式間 壱箇所
 一、十ヶ箇所、其外所々御損
 一、御石灯籠不残折損
 但 献備分共
 一、御宮向所々御弛
 一、御本地堂 同断
 一、御宝蔵 同断
 一、御神楽所 同断
 一、御膳所 同断
 一、五重塔 左の方御柱壹尺五寸開
 御同所 上段石雁木御損
 一、愛宕山御堂 潰
 右の方山崩、同御灯籠 二基
 但 御堂潰下に相成駈と相分不申候。
 一、御鐘楼台 所々御弛
 一、御楼門前御石灯籠不残折損
 但 献備共
 一、御神楽所脇御石柵御損分
 左二間 一箇所、右一間 一箇所
 一、御華表礎 御弛
 一、御護摩堂 潰
 一、御厩 同断
 一、禰宜番所 同断

一、御楼門
 御扉二枚逃れ、右の方狛狗の柵御損
 一、同右の方柵 大損
 一、御同所御石柵 御損
 左折廻し凡五六間 壱箇所、右式間 壱箇所
 一、御土蔵 大損
 一、御供所 潰御焼失
 但御台所炉より出火の由
 一、御春屋 同断
 禰宜食所
 一、同所部屋 潰
 御花所
 一、御薪部屋 同断
 一、坊中八箇所院不残、潰
 一、一の御門櫓 所々弛
 但左右石垣共御弛
 与力番所 大傾大損、同心番所 潰
 一、御坂通り石垣所々倒御損
 御別当所
 一、御神殿向其所々大損
 一、長屋 不残 潰
 一、練堀 所々 崩損
 一、土蔵 大破
 右の通に御座候、尤御宮、御宝塔、益御安全に御座候、此段御届申上候、
 以上。
 十一月 德音院

右御損所届德音院より十一月八日駿府町奉行へ差出候由。

【安政元甲寅年十一月十日】

一 去四日地震為注進差立候手飛脚根古屋村義藏今朝帰着、去六日夜九つ時過御用番松平伊賀守殿御表へ差出候処被成御落手候、御届書案。

今四日已刻頃駿州久能稀成大地震御座候て、其後数度大地震御座候内、御山上御供所其外坊中八箇院共不残相潰申候。偕又右御供所潰候場所より出火仕候に付、私儀早速登 山仕、種々消場手当申付候え共、折節西風に御座候間、御宮の方へ風並不宜、何分御場所近にて早々鎮火の程難計、其上地震も未相止不申、御坂通追々地山欠落候場所も有之、此上御坂通欠落候ては御遷座申上候御道筋も無御座、誠以心配仕候に付、德音院出府中の儀御座候間、御宮附の者へも申談、御坂通 通御御出来の内、乍恐 御遷座申上候方安全の御儀と奉存、御別当所内山手の方へ暫時 御遷座申上候処、夕八つ半時頃漸下火相成候間、私共御宮附の者守護仕、無御滞御宮へ御遷座相済申候。何分火急の儀不通非常の儀にも御座候間、右の通取計申候。且又御宮 御宝塔並私御預一の御門御別条無御座候。尤未地震も相止不申候間、此後の処猶又無油断手当等申付置候、且 御山中破損所の儀は追々取調の上可申上候え共、先不取敢此段御届申上候、

以上。

十一月四日

榊原越中守

資料二十五 久能山御宮向其外御破損所御修復願箇所書

〔久能山修覆記録〕より抜粋〕

狩野文庫第二門一一〇六、東北大学附属図書館所蔵

久能山

御別當

御宮向其外御破損所御修復願箇所書 德音院

安藤長門守

覚

一 奥院御上段御不陸ニ相成向而右方

御石垣少々損

一 御同所惣御石柵之内御損分

御上段向而左之方

三間 壺箇所

同御後通

六間 壺ヶ所

同右之方

三間半 壺箇所

御後外隅

式間 壺ヶ所

外左之方

三間半 壺箇所

外向而左之方御階段石柵

式間半 壺箇所

- 右御鳥居外
- 一 式間 老箇所
- 一 老間 老箇所
- 御道筋右之方
- 一 四間 老箇所
- 同左之方
- 一 五間半 老箇所
- 同右之方
- 一 式間 老箇所
- ノ拾老箇所其外所ノ御損
- 一 御寶塔前銅御燈籠老基倒損
- 但仮御殿繕之上御建方ニ相成申候
- 一 御同所左右石御燈籠式基倒損
- 但御損之儘御建方いたし置候
- 一 御同所御正面石階相弛
- 一 諸家献備石御燈籠不殘倒損
- 一 御宮向
- 一 御内陳^マ深秘之御場所ニ至迄
- 内外御羽目御長押通惣躰
- 響入御弛離損并御石之間
- 御拝殿共同断
- 一 御本殿御屋根勝男木御銅物
- 相離
- 一 御宮向御莊嚴并御膳所
- 御道具共震落し少ノ宛
- 御損之御所も有之候
- 一 御同所御廊下向御膳所共
- 所ノ御弛損
- 一 御本地堂御門取付左右共離損
- 一 御同所内外御羽目共惣躰
- 響入離損
- 并同所山之手より御神庫脇迄
- 一 角柵破損
- 一 御神庫所ノ御弛裏之方
- 腰通破損
- 并御同所上り段石岩岐弛
- 一 荒神社御弛屋根向破損
- 一 御神木囲角柵御鳥居左右
- 一 続角柵御接穂蜜柑囲角
- 柵神厩廻り角柵御楼門上下
- 続キ角柵愛宕山上リ口角柵
- 其外所ノ角柵破損
- 一 御水屋式箇所所ノ天水桶并
- 覆とも朽損
- 一 銅御燈籠老基倒損
- 但仮御殿繕之上御建方ニ相成申候
- 一 御唐門下上り段石岩岐弛御同所
- 下四半石少ノ損
- 一 御神楽所所ノ御弛損
- 并向而右之方袖塀破損
- 一 御同所脇御石柵御損

但	左式間	老箇所		右桁廻	凡式間
	右老間	老箇所		祢宜番所潰	
一	五重御塔向而左之方柱老尺五寸程開御同所内天井西之方より東之方江老尺五寸程片寄其外所、御弛損		一	愛宕山御堂潰	
	并御同所上り段石岩岐損			但本尊無御別条	
一	鐘樓堂所、御弛腰羽目破損		一	御同所石御藏表折損	
	并御同所山之手角柵破損		一	御同所銅御燈籠式基倒損	
一	銅御藏表礎御弛		一	御同所稻荷社屋根破損其外	
一	護摩堂潰			御弛	
	并本尊画像護摩檀其外共御損		一	御土藏破損	
一	山王社御弛屋根向破損		一	御供所潰焼失	
一	庚申辨天相社御弛屋根向破損		但	御供所付御道具類焼失燈明僧預御品少、焼失	
一	神廐潰		一	御春屋潰焼失	
	并木彫神馬破損		一	御薪小屋潰	
御唐門下より御樓門内迄			一	祢宜食所潰	
一	諸家献備銅石御燈籠不殘倒損		一	井戸屋形式箇所潰老ケ所少、震込坊中八箇院惣損	
一	御樓門			并惣囲板塀破損	
	但東之方江倒其外御弛		一	大壽院脇石柵三間餘破損	
一	御同所左之方猿頭塀破損		一	大壽院脇石柵凡七間程崩損	
一	同所御石柵破損		一	一之御門并左右石垣弛	
但	左桁廻	凡五六間	一	御同所與力番所破損	
			一	御同所同心番所潰	
			一	御同所内外御坂通角矢来板塀朽損	
			一	御同所外御坂通石柵所、破損	
			一	御坂上り口右之方石垣弛	

一 下馬札囲柵破損

御別当所之分

一 御神殿所、御損其外玄關座敷

勝手向御茶屋表門裏門共破

損屋根向極、大破并柱根床下

羽目共惣軀朽損建具所、破

損

一 長屋惣潰

一 土蔵破損

一 練堀所、崩損

一 板堀所、破損

一 供待所潰其外所、破損

右は先般御届申上候去ル寅十一月

四日地震之節御破損所其外

御修復後餘程之年数相立

候間自然朽腐破損仕候分共

何卒御見分之上御修復被

仰付被下置候様仕度奉願上候

以上

久能山

卯 御宮御別當

二月 德音院

寺社

御奉行所

資料二十六 安政三年（一八五六）修復工程

〔安政丙辰地震損御修復公私日録〕より抜粋・作成〕

『久能山叢書』第一編、久能山東照宮社務所、一九七〇、所収

十二月五日

申談候処、昨日も四十人程入、玉泉院取片付候処、中々大梁等容易に片付兼急促の事には参間敷

安政元年（一八五四）

十一月四日 安政東海地震

十一月八日 一の御門下番所仮屋場所為取建人足並手大工竹村与平召連、山

本卯左衛門相登、組立て出来に付、尚又為見分山本卯左衛門相

登、当番与力近藤栄治へ引渡上番所同様二間に九尺也。

十二月六日

既に坊中仮住居も銘々古木を以、手普請致し、禰宜番所等も古木にて小屋相立候含の由候、

風に、此節人足被下は大久保の差図に候哉、老人に付一日の賃米三升五合づつ、七ツ過より暮過迄働候者へは四升五合の賃

十一月十一日

今日 御宮其外見廻登 山の節、仮御供所と申所見分致候処、

十二月八日

潤い、既に乞食迄も足を洗い人足に出、当時駿府い乞食一人も無之由、是は風聞にて承候事。

古戸にて三方囲ひ其中にて御供を焚、御膳棚も有合のものにて御屋根等にて出来居、御供の御品如何にも恐多き事故、介添を以右御供仕立の場所御籠末に相見候間、有合候新敷板可相廻候間、定智院、杉江左近差図致、大工与平へ可申付様相咄候処、

十二月九日

御目付大久保右近将監殿今朝五時頃当所へ着、今日は拝礼に登

両人も夫にては大に宜旨申間候間、兼て仮御番所に可相用駿府へ詔置候杉板十坪分柱・貫等相添今日為登候様申付。尤与平を先為差登、定智院、左近へ模様を承り合、其つもりにて木品為差登候様申付、夫より下山。

山の由、外に御勘定老人御小人目付一人相登。 拝礼済 御山中所々見廻も有之候由、

十一月十二日

当分の仮御供所の場所建建方、今日大工与平為差登、御宮附の者任差図、取立候様申付。

三月

夕方、右場所御出来に付、与平相戻、御出来の趣届有之、且又兼て絵図面の外、御膳棚、御流し竈前風除等可成は出来相成候様致度申間候に付、其通出来候由、尤定智院、左近も始終附添居、差図致候由。

久能山 御宮向其外地震に付、御破損所等御普請御修復為目論見、御勘定方、御作事方被差遣候間、御別当所其余坊中等差支不相成箇所は可成丈建坪減少いたし、無余儀箇所のみ御普請御修復の積相心得、可成丈仕様省略いたし御入用少なに可被取計候。

四月二十四日

見分御役人今日着揃候

十一月二十一日

目付大久保右近将監、町奉行貴志孫太夫、勘定組頭他見分

御勘定 猪俣英次郎、

十一月二十三日

昨日 御山坊中其外潰家取片付、御神領人足を以為取片付候積

御作事奉行 生田丈助、御大工頭 松田弥太郎、

大戸金右衛門（被官）、田辺新右衛門、会田常次郎
市村篤之助、木村金三郎、石川新之助

平尾小平次、鈴木市五郎、甲良若狭（大棟梁）

岡 徳三郎（大工棟梁）、中村善五郎

大工肝煎 要左衛門、岩五郎、政吉、孫次郎

四月二十六日 御勘定方、御作事方登 山、御宮向其外共御修復見分相始候

安政三年（一八五六）

一月二十四 当時奉行慮人とも江戸表地震損御用附切相勤居候間、久能の方

へは多分被仰付間敷と被存候。

二月二日 久能山御修復 作事奉行代松本十郎兵衛、目付代松平弾正

三月十六日 御用材木石等駒越村芝地例の通引渡の儀も被申達、

三月二十日 御普請御修復御山上御山下小屋場取建、前々の通御山下小

屋場、御作事方御役人泊番有之、御山上小屋場先格の通、御社人並其御組与力同心へ日々御役人引払の節、被引渡、夜中火の元心附候可申談旨、

三月二十一日 御修復御役人追々参着

三月二十七日 御作事下奉行那須善兵衛、御被官大戸金右衛門其外成沢良作、

井上三之助、坂川寛次郎、小森竜助、高見倉次郎、村田寿之助、

大沢貞次郎、野口源内、原田当之助、岩田藤藏、今西清藏、石

丸祐次（大棟梁）、石山出雲、肝煎二人、右参着届出る。

上下御番所の場所、御作事方にて受取置、御都合次第御普請取

懸り候様致度、

四月二日 小屋場会所出来に付、今二日より御作事方役人致泊候段達。

四月四日 御山上小屋出来、明五日より御役人相詰、日々引払の節御社人

并組与力同心へ引渡、夜中火の元心附候様致度達。御山上より下小屋へ木道具諸武相下候印鑑相渡。

五月十五日
六月十日

この頃迄仮物不残出来
神楽所御修復中

御宝塔前へ御仮殿出来、御本地堂は御彩色皆御出来、御宝蔵も下地大体御出来、其後五重御塔も見廻候処四方足代にて御塔見え不申位、漸五分程上り候由、四月より足代かかり、此節五分程上候由。

玉泉院、法性院、大寿院、三明院は御修復大体出来の様子、定智院、林光院は未不取懸、元来八院の所、此度は六箇院出来に相成、松岩院、長円院は追て出来の積の由。

御供所は未建、礎計有之、但地震にてがけの方ひび入候間、是迄よりは余程引下り相立由、禰宜食所、御春屋は出来。

水溜の堀、此度二箇所共御修復相成候由。

六月十六日 御勘定組頭 鈴木大之進、御勘定吟味方改役 渡辺三十郎

御勘定 根立三十郎、御勘定 猪俣英次郎

御大工頭 松田弥太郎、御作事下奉行 生田丈助

御作事下奉行 那須喜兵衛、支配勘定格御被官 大戸金右衛門

大棟梁 石丸祐次、畳大工 伊阿弥筑後、塗師棟梁 鈴木美作

大工棟梁 八木沢市右衛門、大工棟梁 岡 徳三郎

大工棟梁 重田万治郎、大工棟梁 今西清藏

駿府棟梁 花村与七郎、駿府棟梁 花村清右衛門

駿府棟梁 池田栄次郎、絵図師 常吉（一部略）

右者御用中一の御門致往来候、尤家来職人人足等は鑑札致持参

候間印鑑引合無滞可被相達候、以上。

辰六月 松平弾正 印（目付代）

松本十郎兵衛 印（作事奉行代）

一の御門 御番中

六月十七日	御唐門外御仮橋懸る、神楽所も皆出来、御楼門も塗下地出来、上番所皆出来、		
六月十八日より二十日迄	諸職人休日		
六月十九日	外遷宮		
六月二十日	外遷座		
七月四日	御山中為見廻登山、	九月二十四日	安藤益次郎、石川新之助、駿府へ早立
	御本社御蔀下り居、外向は足代かかり御修復最中故御内陣は不伺候え共、足代歩行の邪魔に不相成候間御拝殿前通り所々拝見、御本社御脇御柱大体御根継有之、	九月二十五日	正遷座
	仮御供所は礎土台有之計、	九月二十六日	正遷宮
	御修復中 御宮其外御山中御別条無之旨、江戸表へ可申上候付、德音院へ相達、	九月二十七日	御供養
八月十三日	一の御門御櫓足場かかり居候のみ未取懸無之、	九月二十八日	天笠鉢太郎出、御修復中御役人其外腰札供札鑑札共返却の儀、両奉行口上にて返却可申来、即返却候由
	月次見廻り七月に同、今日は御本社御石の間迄拝見、五重御塔外通り足代は未かかり居候え共、内通りは皆取払、御柱皆出来、御彩色も大体出来、御供所は此度三間程跡へ引下る。	九月二十九日	松本十郎兵衛(作事奉行代)、松平弾正(目付代)、木村金三郎、羽田六蔵、江戸帰府
八月二十六日	昨夜大風雨に付、		渡辺三十郎(勘定吟味方改役)、猪俣英次郎(勘定)、那須喜兵衛(作事下奉行)、木村奎之助、河野忠蔵、三井隆助、成瀬良作、柳川勇右衛門、井上三之助、小森竜助、高見忠次郎、天笠鉢太郎、伴内権三郎、吉井正右衛門、鈴木市五郎、大沢貞二郎、五味地宗之助、原柳蔵、野口源内、原田当之助、岩田益蔵、石丸袴(祐力)次(大棟梁力)、伴内好四郎、岡徳三郎(大工棟梁)、今西清蔵(大工棟梁)、三州へ出立
	御坂大杉倒、往来六つかしく可有之由聞候付、右見分差出候处、倒木をくぐり候えば通行出来候趣に付、		鈴木木大之進(勘定組頭)、根立助七郎(勘定)、松田弥太郎(大工頭)、生田丈助(作事下奉行)、大戸金十郎、朝倉清左衛門、小林鑑之丞、平尾小平次、宝田彦三郎、八木沢市右衛門(大工棟梁)、駿府へ出立
	昨夜大雨高波にて浜手百姓家へも水押廻候由に付、		
	右大風雨にて御山上大木は余程吹折、吹倒柵塀等御損も有之候え共、諸堂社御損無之。	九月三十日	
	江戸表大雨出水		
九月八日	諸御修復は最早御出来、神宝のみ残居来十五日迄皆御出来の由。		
九月十三日	御用材木揚場、駒越村場所引渡		
九月十八日	御宮向其外共地震損御普請御修復出来榮為見分貴志孫太夫殿		

資料二十七 墓石刻銘（作事方大棟梁石丸祐次立之）

（右側面）

作事方

大棟梁

□□寄附 石丸祐次立之

（正面）

安政三辰年

源隰院本与泉流召伯居□

九月九日

（左側面）

武州川越領

俗名 田嶋藤吉墓

行年廿三才

資料二十八 安政三年（一八五六）修復方針

（「安政丙辰地震損御修復公私日録」より抜粋）

『久能山叢書』第一編、久能山東照宮社務所、一九七〇、所収

【安政二年五月五日】

一 此程御別当と坊中と論判御座候由、右は此度の御普請建坪減し被仰出候付、坊中是迄の寺坪六七十坪の処、此度三十六坪づつに減し相成候由。右を御別当坊中へ相談もなく御役人の意に任せ及挨拶候を呼出し、平常御別当と坊中不和故、坊中より殊の外六ヶ敷申懸り論議最中と申事に御座候。此度有形の御修復は御宮向と御番所にて其外は皆御減し相成候由。

【安政三年正月十五日】

十二月廿九日安藤対馬守殿御達写。

久能山 御宮向其外御普請御修復被仰出候に付ては御場所取懸りの上御保方第一に相心得、可成丈け御入用相減候様厚く心懸け、且 御宮御内廻り、奥院並御別当所内、御神殿等の儀も御尊敬に不拘御場所は可成丈省略致し、御入用取調可相伺旨御作事奉行へ相達候間、其段厚く相心得申談候様伊賀守殿被仰聞候に付、得其意德音院へ可申達候。

卯十二月

【安政三年六月十日】

此度の御修復は都て最初の見込より余程念入、地震損御修復のみに無之、此後本御修復迄御手の入らぬ様御修復の由。

資料二十九 安政三年（一八五六）普請所倭約

〔安政丙辰地震損御修復公私日録〕より抜粋〕

『久能山叢書』第一編、久能山東照宮社務所、一九七〇、所収

【安政三年五月十五】

一、御普請所の儀も厳敷御倭約にて檜は杉に相成、五寸角は四寸三分に相成、三寸垂木は式寸に相成、土居葺板は杉皮に相成、江戸御渡ししの御材木は御差止にて、不残当所にて御買上の処、諸木生木にて御座候。乍恐御保ち如何と奉存候。下番所杯鑿穴より水出候と申位に御座候、杉檜は格別、当時の松木にて根太梁は年数無覺束奉存候。

資料三十 安政三年（一八五六）修復入用高

〔安政丙辰地震損御修復公私日録〕より抜粋〕

『久能山叢書』第一編、久能山東照宮社務所、一九〇七、所収

【安政三年九月晦日】

一、此度御山上御修復御入用高、並風聞の条

一、玄譲、伝聞

御修復御入用。御作事方一万五千両、神宝方三千両、惣御扶持五千石余、其外諸御役人御金拝領、此御入用は別段、但金一枚は廿両余、此御金数十枚。

一、此度御塔の先五輪の根御かな物腐、雨洩致、御勝手方にては頂上にて鑄懸と申、御作事方も同意の処、御目付方承知無之、頂上にてフイゴ等相用候儀不宣、右に付、御目付方の申立通りの御修復相成候由。尤両奉行着前取極候由。

一、神宝方御入用の内、上方へ申遣為織候御品有之、是は御帳其外御神秘の御品、右の織立中々九月中不聞合、十月は御遷宮不相成候えば十一月御遷

宮と相成、就ては御役人も一旦帰府、又十一月参候趣、先日栄次申聞候処、其後玄譲神宝方へ承候処、上方の岩城升屋へ申遣、昼夜かかり織立致し、仕立にかかり候えば九月廿日頃迄には相廻り可申旨申聞候由。

一、御別当所是迄は三方皆板塀練塀の処、此度石橋の方此度竹垣に相成候由。其上以来自分繕と相成候由。

一、近藤栄次、伝聞、

御塔五輪金物御入用十二両にて御出来、足代の御入用は三百両懸候由、是は最初御塔起立御修復見積の外の御入用の由。

一、御宮の御修繕入用は上の御手許より御入用金相下り、道中も杖払にて参候由、是迄江戸より御金三千両づつ三度来、一度千両箱三つ宛参候由。

一、職方へ承候に江戸御城御殿御建坪八町四方、中々つもり候ても絵図にても六ヶ敷、雛形入御覧相済候由、御城御殿御梁は是迄けやきの処、近年御炎上後、御修復は不残松に相成候由。①

一、当御山天保十三寅年御修復老万両欠け候由。

一、杉江左近、伝聞

御塔五重を釣候足代御入用計三千五百両の由五輪御繕此外の由。

一、坊中は迄京間、此度不残田舎間に成、建坪も余程つまり、平瓦の処此度さん瓦に成、是迄八院の処此度松岩院、長円院二箇院は追てと申事にて六箇院のみ新規御出来相成。②

一、八月十三日、左近再話、御塔諸入用追々御減にて二千三百九十七両、此外御扶持は出候由。

一、山本卯左衛門、伝聞

一、大工棟梁此度大損致候由、右は此度惣受負八千人に御扶持六百石のつもりにて受候処、老万人かかり五百両程の損毛の由。③

一、木挽方四百両、三十石の受負の処、是も余程損失の由。④

一、德音院へ被下と相成候足代丸太、是は御本社の足代也。一本三匁の御買

上の処、御山上げ下げ二本一人持にて一本一匁にも払に無之ては引合不申故買人無之由。

一、御本社ひづみ御社人申立の節七月廿三日の条に委し。

一、鈴木大之進、咄

御拝殿、御内陣の画、先年御修復の節其拙画故、此度不殘御彩色はがし、新規画を狩野玉円へ被申付候由、玉円は当時表にては一二の画家の由。⑤
一、諸堂社御かなもの類、是迄不殘金めつきに候処、めつきにては一年余も立候えば赤銅出候て見苦敷、且御入用は格別相懸候間此度は上真鍮にて相直候由。御供所御道具一昨年不殘御焼失、皆新規相成候処、前々の通にては御重など御紋數十つき、余程の御入用にて御神前へ出候品に無之、是等は御品相減、御宮向へ夫丈の御入用相懸候由、真鍮御かな物の儀も江戸御靈屋、台徳院様御靈屋真鍮故、近來文系院、慎徳院様靈屋も皆真鍮に相成、右御例にて此度被致候。⑥

一、日光御宮は都て御塗物の御場所、中塗二度上ぬり、是は無益の御入用にて、夫丈御儀に相成総候事に無之、当所も御神前向は中塗二度上塗一度の由。⑦

一、御修復御入用高減じの儀は九月廿九日大之進被参直話有之、廿九日の条に委敷記有之。

一、御勘定根立助七郎咄

神宝方御入用計三千両の由。

駿府御城御外通計にて凡四十万両程の御入用の由。

一、野々村直右衛門、伝聞

上下普請小屋前々五両位にて落札の処、当八月の大荒にて望人多く、買人よりせり上廿五両の御払相成候由、且又本多豊前殿仮番所受負方へ払にて三分の払に候由、是は定直段受負引取候由。

資料三十一 安政三年（一八五六）勘定組頭鈴木大之進談話

（「安政丙辰地震損御修復公私日録」より抜粋）

『久能山叢書』第一編、久能山東照宮社務所、一九七〇、所収

【安政三年九月二十九日】

此度御修復別段御立派に御出来の旨申述候処、何れにても評判宜難有、最初の御積の内にて差引致、木品御省略の廉にて貳百五十金相減、其外御入用減じ、背板を貫に用い、坊中の古木品用立候を買取、夫を又土台其外へ相用、是等の省略にて六百五十両程の御減、両口にて千両程御入用御減相成候え共、右背板其外用い方にて其筋懸りのもの余程骨折候に付、其段申立貳百五十両程惣体の被下に取計、左候えば向後も矢張右に準じ背板古木を用候ても一同小言も不申、左も無之と此度は箇様の主法に致候ても向後差支候事故、其等の儀奉行へも申立其通取計に相成、右被下有之候ても最初の御積より六百五十両残りに相成、一体此以前天保十三寅年御修復の節より御入用相減、御修復所は一倍念入出来方も宜、此儀大に骨折候由。此度の出来方若伊勢殿様御咄序も有之候はば申上呉候様被申聞、且又如何様結構に出来候ても夫丈御入用増にては却て不出精に相成候え共、御入用相減前より御立派に御出来の事故、何れへ申立候ても差支無之旨被申聞。

資料三十二 久能山御宮向其外共地震ニ付御普請御修復坪数減其外取調候趣相同

候書付（久能山修覆記録より抜粋）

狩野文庫第二門一一〇六、東北大学附属図書館所蔵

九月十二日彦左衛門を以上

伊勢守殿 十月十四日同人ヲ以御下承付

同十五日友之助ヲ以返上

久能山

御宮向其外共地震ニ付御普請御修復

坪減其外取調候趣相同候書付

水野筑後守

遠山隼人正

書面久能山諸堂社其外地震損ニ付

御普請御修復所之内坪減并模様替

空院ニケ院御差延等之儀都而伺之通

相心得可成丈御入用不相□□様取調程

可相伺右之趣德音院江可申渡旨

寺社奉行江被仰渡候段奉承知候

卯

十月十四日 水野筑後守

遠山隼人正

久能山

御宮向其外共地震ニ付御普請御修復目論見

見分支配向被差遣候間御別当所其余坊中等

差支不相成ケ所は可成丈建坪減少致し
無余儀ケ所而已御普請御修復之積相心得
可成丈仕様省略御入用少ナニ可取斗旨
被仰渡候後

御宮向諸堂社御彩色等凡積最前

願書ニ相洩候ケ所共惣躰御修復被

仰付候様再応相願候ニ付地震損之場所は

格別惣躰御修復之儀は難被及御沙汰旨

德音院江可申渡旨寺社奉行江被仰渡

候趣被仰渡候間兼而支配向江申渡

置候ニ付可成丈箇所少ナニ取調尤御損

柄一ト通り之儀は先達而彼地より申越

申上置候得共猶省略方建坪減并諸堂

社は木品位下ケ等之儀厚評儀之上

精々御別当江掛合取調候処別帳之通

御座候且諸堂社向高欄廻り御銅物

去ル巳年御修復之砌漆減金相止メ三篇

本減金ニ模様替相成候処其後寅年

御修復之節御損之様子見分仕候処汐風

当強御場所故箔気保兼候間漆箔之方

御保宜御入用も相減候ニ付伺済之上

御本地堂神庫楼門等漆箔ニ相成候間

此度鐘楼五重塔共同様高欄廻り

御銅物漆箔ニ模様替可仕哉且又御屋

根向土瓦下は杉皮切葺ニ仕候方御蓋

筋ニ付去ル弘化四未年篠山撰津守

田村伊豫守御作事奉行勤役中伺済
之趣ヲ以都而瓦下杉皮葺ニ取調
御別当所裏門屋根化粧二歩櫓之處
海辺風烈敷御保方不宜候間是又
杉皮切葺棧瓦之積同統束之方
板塀倒損此度建直ニ相成候ニ付而は
竹垣ニ模様替之儀御別当より申立候ニ付
相糺候処風当り施場所ニ而板塀ニ而は
節ノ破損致し其度ノ手入御入用も多く
相掛竹垣ニ相成候後は山内竹を以手輕ニ取
繕も出来此度も山内竹差出候間模様替
相願候旨申聞御入用之儀も竹垣之方御修
復之度ノ相減候ニ付是又模様替之
積其餘種ノ談判減方仕御山中所ノ
角柵之儀は金御見付而已ニ而御締ニ相締候
儀ニも無御座御締ケ所は裏板打子御座候間
此度建直之分は柵子数相減別而八ヶ院之儀
是迄六尺五寸間ニ御座候処此度六尺まニ掛合仕
惣躰省略木品位下ケ小屋床力廻り等
共は古木割返し遣之積り尤古木畳等
取片付有之候分夫ニ取調候処数少ニ付
再応掛合候得共木品存外□□其上四ヶ月
程も潰候俣ニ相成居畳等蒸腐候間大
破之分は相除見斗取片付置候趣ニ付
右有高を以取調仕巨細之儀は追而仕様
御入用吟味出来次第相伺可申候得共坪減

其外模様替取調候趣別帳相添相伺
申候且又前書八ヶ院之内二ヶ院は去ル卯年
以後空坊ニ相成六ヶ院ニ而済来尤正外
遷宮之節は夫ノ宿坊ニも相成候得共必用
御名代并日光御門主御名代寺社奉行宿坊
三ヶ院当置其外は残三ヶ院ニ而差□仕候得は
御差支之義も有之間敷近ノ住職出来之
趣も不相聞候間此度御普請被
仰付候而も空坊ニ而年ケ□候得は住職有之
候と違ひ自然朽腐早く往ノ御不益ニ茂
相成候儀ニ付二ヶ院御普請之儀は当時御差
延追而住職相備候節ニ至り相願候ハノ
其節御普請可被 仰付哉此段も相伺申候
此節御入用専ら取調罷在候間早ノ御下知
御座候様仕度奉存候依之申上候以上

卯

九月

資料三十三 天保十三寅年、岩瀬内記、山口勘兵衛より旅宿願立の例を以、安政

三辰年松本十郎兵衛、松平弾正より同様の願立書付写（附録四抜粋）

『久能山叢書』第一編、久能山東照宮社務所、一九七〇、所収

越前守殿 三月廿日田中休蔵を以上る

四月七日立田録助を以御下承付

同九日同人を以返上

書面願の趣御別紙御書取

の通被仰渡奉承知候 岩瀬内記

四月八日 山口勘兵衛 山口勘兵衛

久能山 御宮其外地震に付損箇所々々御修復、在山中、榊原越中守知行所照久寺へ内記儀致旅宿、勘兵衛儀は同所石蔵院旅宿の積、尤右式箇寺前々旅宿に相成居候由、然処何れも大破相成、照久寺は別て及大破、其上石蔵院より建坪減居、戸締り等は此度可成越中守方にて取繕相渡候趣には候え共其外は是迄の仕来の由申立、御用相勤候ば自力にて取建物其外取繕等致候由、然処此度目論見罷越候者へ得と相尋候処、門は直し候え共困無之、供廻り下々の者並馬等差置候所建物無之。尤住居向間敷を仕切家来差置、又は湯殿其外は自力にて取繕可仕候え供、困並下々差置候場所無之候ては甚差支候間、越中守開基にも候に付、下々の者並馬差置候場所位は出来相渡候ても可然奉存候、御用相勤候ば自力にて取繕候由、尤日光表在勤の者多く候間宿坊に有之、右旅宿取繕仮物取建等、日光奉行支配向にて取繕御入用に相立候旨に御座候、左候えば久能の儀も同様に相立候様奉願候。尤可成御取繕仮物御取建雨露を凌候儀に候えば、丸柱羽目杉板にて削立不申其儘相用為取繕困等は葺簀にて宜事に御座候、尤御時節柄の儀に付、強て御入用の儀難申上、左候連、越中守開基と申迄の儀に付仮物取建致困等相渡候様示談仕候も相当不致哉と奉存候に付、可相成儀に候えば御入用にて以来御用罷越候方は開基にも無之、建坪等も余分に有之、別紙絵図面の内、

両寺供懸紙の場所御入用に相立申度奉存候。尤前文の通、精々御入用相嵩不申候様可仕候、右の外旅宿相糺候処一厘余も欠隔り可也の場所可有之候え共御作事下奉行始右旅宿近辺の儀私共欠隔候えは御用弁も不宜、取締にも拘り候間、可相成は前々の通矢帳御山下寺院旅宿に仕候方安心可仕候、此段奉願候、以上。

三月

岩瀬内記

山口勘兵衛

御書取

覚

書面中川勘三郎、山口勘兵衛申聞候旅宿の趣建坪並御入用等減方致し、

此度御修復御入用仕様書内訳帳へ別廉に取調追て可被申聞候事

伊勢守殿 四月十四日彦左衛門を以上げる

五月廿八日同人を以御下承付

同日同人を以返上

久能山 御宮向其外共、地震損御普請御修復御用旅宿の儀に付奉願候書付

書面願の通仮物取建等可被仰付候間、仕様精々省略仕極々御手輕に出来仕候

様取計、追て内訳帳を以可相伺旨被仰渡奉承知候

辰五月廿六日

松本十郎兵衛

松平弾正

久能山 御宮向其外共地震損御普請御修復に付き、私共在勤中先に榊原越中守知行所照久寺石蔵院へ旅宿仕候処、右式箇寺共大破殊に困無之、供廻り下々の者並馬等差置候所建物無之、家来差置候住居向、間仕切差置候え共、困並湯殿、雪隠、下々差置時所無之、甚差支、尤日光表在勤の者は坊中旅宿仕候処日光奉行支配向にて取繕御入用に相立、旁、久能の儀も以来同様に被成下候様、天保十三寅年御

同所御修復御用罷越候御作事奉行代り中川勘三郎、御目付代山口勘兵衛奉願、其節御入用に被成下置仕払にて申上候え共、当節彼地の模様今般目論見罷越候者へ得と相尋候処、一昨年地震後は別て両寺共大破罷成、勿論少々つ手入の箇所も御座候え共、年来の建物殊に照久寺の方へ石蔵院よりも建坪も相減、何も困等不取締の趣に御座候間、此度の儀も仮物取建取繕等被仰付被下置候様仕度、仕様の儀は精々省略、可成雨露を凌候にて丸柱羽目杉板にて削り立不申其儘相用、困等は葺簀にて出来の積りに御座候。尤此節柄候出方筋の儀奉願候は恐入、左候連、越中守へ申談候も相当不仕、無余儀寅年の振合を以、御入用にて出来候様仕度、此段奉願候、以上。

辰四月

資料三十四 天保十三年（一八四二）久能山修復申渡条々

（「天保壬寅御修復公私日録」より抜粋）

『久能山叢書』第一編、久能山東照宮社務所、一九七〇、所収

【天保十三年二月晦日】

一 此度御修復の儀に付、別段於江戸表懸御役人より越前殿被仰渡の書付被相渡候に付、前々御修復の節は一通の達に候え共、此度は別段左の通、浜六ヶ村並東十ヶ村は於役所相渡、尤浜方東方へ書付一通づつ相下げ候由。

申渡条々

一、御修復中は入込候事故、喧嘩口論博奕は不及申、諸勝負一切致間敷候、万事がさつ成儀無之様相慎、御用弁候様可致事。

一、御修復を見懸け新規に湯屋・髪結床・其外諸商売相始候儀不相成事。

一、御用宿仕候者は勿論、其外迄も火の元大切に致し、昼夜村役人平百姓迄も繁々相廻り入念可申事。

一、日雇賃並諸負物商物等不相応に高直致間敷候。

尤其節々代料受取可申事、後日不勘定の段申出候共取上無之事。

一、御修復を見掛一時の事と心得、万一心得違のもの有之、竹木其外都て諸品直段引上げ候もの有之候はば、不移時刻御召捕急度御吟味有之趣、此度日光御修復に付、右の通御触も有之候間、一同心得違無之様可仕事。

一、是迄有り来りの商い屋共諸色成丈下直に仕売渡し可申候、若仕入方高直に相当り候品は売り申間敷候。

一、諸棟梁並職人は不及申、御作事方御支配向被召連候御家来に至迄、金銀其外何品によらず用立申間敷、勿論諸色掛売の儀一切致間敷、万事現金に取引可申、若相対にかり貸し致、返済滞候由を以申立候とも取上無之事。

一、請売の酒屋は是迄有来の外一切不相成候、勿論煮売り居酒の儀はかたく仕間敷事。

一、是迄売り来候品の外、御修復に付、別段諸色仕入商い仕候儀不相成候事。
一、銭相場の儀は時の相場有之事に付、駿府・江尻・清水へ承合候上売買可致候事。

一、質物の儀、たとえ何様差支いの訳を以頼候とも一切取り申間敷候。

右の条々前々御修復の度々申達候えども、今般公儀にても御改正の御時節柄、此度久能御宮其外御修復に付ても厳敷被仰出候に付、右御達の御書付為説聞、尚又個条差加村中小百姓に至迄申渡条々堅く可相守、若し相背候もの於有之ば吟味の上急度可申付もの也。

寅二月

久能御役所

一 右の外別段根古屋村・安居村・蛇塚村役人呼出左の書付相渡受書執之。

覚

一、此度御修復を見懸け新規に湯屋・髪結床・其外諸商売相始候儀不相成事。

一、諸棟梁並職人は不及申、御作事方御支配向被召連候御家来に至迄、金銀其外何品によらず用立申間敷、勿論諸色掛売りの儀一切致間敷事、現金に取引可申、若相對にかり貸し致返済滞由を以、申立候共取上無之事。

一、御用宿致候者は不及申、其外村内若き者共に至迄、役人へ対無礼仕間敷候、並諸職人と心安たて致し酒宴は勿論都て入込申間敷候。

一、日雇賃並請負物等不相応高値に致し申間敷事。

一、是迄有来りの商い屋も諸色成丈下直に仕売渡し可申候。若仕入方高直に相当り候品は売申間敷候。

一、請売の酒屋も是迄有来の外、一切不相成候、勿論煮売居酒の儀は堅く仕間敷候。

一、是迄売り来候品の外、御修復に付別段諸色仕入商い仕候儀不相成候事。

一、銭相場の儀は時々の相場有之事に付、駿府・江尻・清水へ承り合の上売買可致候事。

一、質物の儀、たとえ何様差支いの訳を以、頼候とも一切取り申間敷候。

一、御修復を見掛一時の事と心得、万一心得違のもの有之、竹木其外都て諸品直段引上げ候者有之候はば不移時刻召捕急度御吟味有之趣、此度日光御修復に付右の通御触も有之候間、一同心得違無之様可仕事、

今度御修復に付、従公儀も厳敷被仰出有之候に付、右の条々別段相達候間堅く相守可申候、若等閑に相心得者於有之ば吟味の上急度可申付候。

寅二月

資料三十五 天保十三年（一八四二）修復における髪結和平

〔天保壬寅御修復公私日録〕より抜粋）

『久能山叢書』第一編、久能山東照宮社務所、一九七〇、所収

【天保十三年三月十四日】

一 昨年来根古屋村へ差置候髪結、此度厳敷被仰出有之候に付、差留置候処御役人始諸職人甚差支候由、院代を以内談も有之候え共、何分御時節柄の儀容易に難差免候処、有来の髪結迄差留置候は余り堅過候旨御役人噂も有之候由、有来有来と申間候趣に候えは差免候ても差支有之間敷哉に付、今日左の通御被官迄在役より文通為致、尤文通は院代を以内々御被官へ打合候事。当所の文字加筆差越

以手紙啓上仕候、緩和の節御座候え共、各様弥御安泰被成御在勤珍重御儀奉存候、然ば当所には迄髪結仕来候者御座候処、此度修復に付厳重被仰出も有之候間為念差留置候、然る処○（朱印当所）諸向差支の趣も相聞候に付、右

有来の髪結老人は差免候ても不苦儀御座候哉、右御問合申上候間宜御差図可被下、此段可得貴意如此御座候、以上。

山本卯左衛門

三月十四日

林 濤守

山本郡司

赤城新右衛門様

鶴見淳助様

右及文通候处、同十五日、左の通返書差越。

御手紙拝見仕候、如仰緩和の砌各様御安全被成御勤仕珍重御儀奉存候。然ば当所には迄髪結仕来候者御座候处、此度御修復に付嚴敷被仰出も有之候間為念差留置候由、然る処諸向差支の趣も相聞候に付、有来の髪結老人は差免候ても不苦間敷哉の段御問合の趣承知致し候、右髪結の儀は被仰出の御趣意も有之候儀に付、髪結床と唱え人集候ては御趣意にもふれ可申候へ共、有来に候分は村々相廻候儀は可然哉と被存候、此段無急度及御挨拶候以上。

三月十五日

尚々赤城新左衛門儀不快頼合中故拙者一名にて及御挨拶候、且先日は各様旅宿へ御入来被下忝奉存候、拙者よりは旅中とは乍申御無沙汰に打過候段御用捨可被下候、以上。

山本卯左衛門様

林 濤守様

山本郡司様

鶴見淳助

【天保十三年三月十六日の項】

一 当所髪結和平次儀、昨日御被官懸合済に付、其旨申渡、左の箇条書相渡。

申渡

一、此度御宮御修復に付ては当所に有来の外、湯屋・髪結床・新規に取建は不相成趣、従公儀被仰出も有之候に付是迄差留置候处、諸向差支の趣も相聞候に付、其方老人有来に付、被成御免候間、相慎渡世可仕。尤床を張候儀は不相成、道具風呂敷包にいたし不目立様頼来候向へ相廻可申候。

一、弟子手間取等差置候儀不相成候事。

一、依怙量眞なく頼の不順無之様可致事。

一、御役人旅宿へ参候節失礼無之様可致勿論、御家来に至迄龜略不仕、且又御当地の雑説猥に不可致、言葉少に可致候事。

一、直下げの儀は追て可申付間、夫迄も成丈下直に可致事。

右の趣相背者急度可申付候

三月

但右髪結の者(和平儀)駿府弥勒町破風屋六兵衛二男にて村方より願に付、根古屋村に差置、去

年御修復目論見の節より当所に居付候事。○髪結料直下げ十八文と申達候由。

資料三十六 天保十三年（一八四二）諸向売物値下

〔天保壬寅御修復公私日録〕より抜粋〕

『久能山叢書』第一編、久能山東照宮社務所、一九七〇、所収

【天保十三年四月晦日】

一 此度諸向売物直段下ヶの儀従公儀、被仰出有之に付、先頃、領分、根古屋村、安古村にて商い致し候者へ直下げ申達置候処、此節駿府辺も一同直下げ相成候間、猶又売物直下げ書上差出。

差上申売揚の事

一、並酒 売升到付、百四十文の処百三十文

一、上酒 同断に付、貳百八十文の処貳百六十四文

一、中酒 同断、貳百文の処百八十文

一、豆腐 売丁に付、廿四文の処貳拾貳文

一、揚豆腐 売枚に付、六文の処五文

一、中炭 売俵に付、貳百七十二文の処貳百六十文

一、山十醤油 売合に付、廿六文の処廿四文

右の通に御座候、以上。

寅五月

根古屋村

李兵衛 印

右同断の書付、根古屋村傘右衛門、同村長五郎、同村利吉、同村彦次郎より

も差出。

乍恐以書付申上候

一、玄米 売升到付、百四文の処百文売

一、白米 一升到付、百八文の処百八文売

一、大豆 百文に付、一升五勺の処一升一合五勺売

一、小豆 百文に付、一升一合の処一升二合売

一、桐油 一升到付、六百四十文の処六百文売

一、上酒 一升到付、二百八十文の処二百六十四文売

一、山十醤油 一合廿六文の処廿四文売

一、上炭 三百八十文の処三百七十二文売

一、中炭 二百七十二文の処二百六十四文売

一、左束（紙）一帖に付、百文の処八十文売

右の通に御座候

寅五月

根古屋村

万屋

権右衛門 印

右の通直下げ書付差出す。

【天保十三年六月十九日】

一 当時の御趣意に付、駿府辺商ひ物尚又直下げ正札附に相成候由に付、領分とも尚又値下げ申達候処、昨日左の通書付差出す。

乍恐奉差上候売上げの事

一、並酒 売升到付 代百廿四文

一、上酒 売升到付 代二百四十八文

一、中炭 売俵に付 代貳百四十八文

一、大半紙 売帖に付 代二十文

一、小半紙 売帖に付 代十四文

一、山十醤油売升到付 代貳百貳拾四文

右の通に御座候、以上。

根古屋村

天保十三寅年六月

李兵衛 印

久能御役所

差上申諸色直下の事

- 一、玄 米 百文に付 壺升
- 一、白 米 壺升到付 百四文
- 一、小 豆 百文に付 壺升貳合五勺
- 一、大 豆 百文に付 壺升貳合
- 一、上 酒 壺升到付 貳百四十八文
- 一、大半紙 壺帖に付 二十文
- 一、小半紙 壺帖に付 十四文
- 一、山十醬油 二十二文
- 一、油 壺升到付 五百八十文

右の通追々下直に売買可仕候、以上。

六月十六日 万屋権右衛門 印

乍恐奉差上売上の事

- 一、並 酒 壺升到付 代百廿四文
- 一、酢 壺升到付 代七拾文

右の通に御座候、以上。

六月

右の外根古屋村利吉、同村条右衛門、同長五郎、同彦次郎、安居村栄蔵、同甚兵衛右同様に付略之。

資料三十七 静岡浅間神社再建棟梁由緒書付

財団法人文化財建造物保存技術協会編『重要文化財神部神社・

浅間神社・大歳御祖神社第三期修理工事報告書』

重要文化財静岡浅間神社修理委員会、一九八八、所収

享和三亥年十二月

御城内外御破損所御修復並浅間御再建之儀伺此度

御下知被仰下候御奉書到来一件

破損方

役所扣

棟梁共由緒之議申上候書付

松平信濃守

牧野鞆負

寛永年中浅間御再建之節御用相勤候棟梁共

由緒之趣相認候書付

大工棟梁 花村与七郎

右者花村長左衛門往古より

御城内外御破損方大工本斗御用相勤罷在寛永年中浅間社御造営之節大工御用相勤右長左衛門より當時与七郎迄六代相統致元文二巳年

御城内御修復掛り御勘定組頭宮間平四郎支配勘定矢葺五郎左衛門相越候節御入用諸色吟味之上本斗名目相止ミ定式諸方棟梁共相改御破損方御用相勤相統罷在候

屋根方棟梁 与右衛門

右當時与右衛門より四代以前之屋根葺新五郎と申物御破損方本斗御用相勤罷

在寛永年中浅間社御造営之節屋根方御用相勤元文二巳年より右同断棟梁職相統罷在候

屋根方棟梁 富左衛門

右富左衛門六代以前之屋根葺清左衛門と申者御城内外御破損方本斗御用相統仕罷在元文二年より右同断棟梁職相統罷在候

大工棟梁 清右衛門

右清右衛門元祖大工棟梁清右衛門儀

御城内外本斗御用相勤五代以前之清右衛門儀寛永年中浅間御造営之節大工方御用相勤相統仕居候処元文二巳年より右同断棟梁職相統罷在候

右棟梁共之儀御再建□□伝出候て御用申付候様罷其□諸職人之儀茂成丈ヶ當地之者並當地近在之者共江御用申付候様罷候越奉伺候

亥十月

松平信濃守
牧野鞆負

西暦	和暦	月日	社 殿	職 名	氏 名	居住地	資 料
1641	寛永18	12月27日	浅間之霊宮上棟（浅間神社）	大工	木原李允藤原義久		棟札（駿河志料2）
1641	寛永18	12月27日	惣社大神上棟（神部神社）	大工	木原李允藤原義久		棟札（駿河志料2）
1641	寛永18	12月27日	奈吾屋大明神上棟（大歳御祖神社）	大工	木原本工允義久		棟札（報告書1）
1641	寛永18	12月27日	山宮神社上棟（麓山神社）	大工	木原本工允藤原義久		棟札（報告書1）
1641	寛永18	12月27日	摩利支尊天上棟（八千戈神社）	大工	木原本李允藤原義久		棟札（報告書2）
1804	文化1	12月14日	浅間惣社本社上棟（神部浅間両社）	棟梁	花村与七郎		棟束刻銘（報告書3）
1804	文化1	12月14日	浅間惣社本社上棟（神部浅間両社）	棟梁	花村清右衛門		棟束刻銘（報告書3）
1804	文化1	12月14日	浅間惣社本社上棟（神部浅間両社）	棟梁	三寺与右衛門		棟束刻銘（報告書3）
1804	文化1	12月14日	浅間惣社本社上棟（神部浅間両社）	棟梁	花村富左衛門		棟束刻銘（報告書3）
1805	文化2	10月21日	（神部浅間両社本殿）		浅井甚七	上大工町	妻板墨書（報告書3）
			（神部浅間両社本殿）	大工方肝煎	平十郎	上大工町	小屋貫墨書（報告書3）
			（神部浅間両社本殿）	大工方肝煎	平三郎	上大工町	小屋貫墨書（報告書3）
			（神部浅間両社本殿）	大工方肝煎	清三郎	上大工町	小屋貫墨書（報告書3）
			（神部浅間両社本殿）	大工棟梁	太郎次	上大工町	小屋貫墨書（報告書3）
			（神部浅間両社本殿）	木挽方棟梁	左右衛門		棟札（造営史料解説）
			（神部浅間両社本殿）	木挽方棟梁	次郎右衛門		棟札（造営史料解説）
			（神部浅間両社本殿）	鍛冶方棟梁	久左衛門		棟札（造営史料解説）
			（神部浅間両社本殿）	左官方棟梁	甚左衛門		棟札（造営史料解説）
			（神部浅間両社本殿）	桶方棟梁	惣右衛門		棟札（造営史料解説）
			（神部浅間両社本殿）	石方棟梁	宗七		棟札（造営史料解説）
			（神部浅間両社本殿）	畳方棟梁	権右衛門		棟札（造営史料解説）
			（神部浅間両社本殿）	小買物方	周藏		棟札（造営史料解説）
			（神部浅間両社本殿）	日用立棟梁	与五兵衛		棟札（造営史料解説）
			（神部浅間両社本殿）	日用立棟梁	太助		棟札（造営史料解説）
			（神部浅間両社本殿）	日用力棟梁	惣正衛門		棟札（造営史料解説）
			（神部浅間両社本殿）	日用力棟梁	甚右衛門		棟札（造営史料解説）
			（神部浅間両社本殿）	大工方棟梁見習	太郎次		棟札（造営史料解説）
			（神部浅間両社本殿）	大工方棟梁見習	清吉		棟札（造営史料解説）
			（神部浅間両社本殿）	大工方肝煎	与左衛門	新通大工町	棟札（造営史料解説）
			（神部浅間両社本殿）	大工方肝煎	栄次郎	新通五丁目	棟札（造営史料解説）
			（神部浅間両社本殿）	大工方肝煎	平十郎	上大工町	棟札（造営史料解説）
			（神部浅間両社本殿）	大工方肝煎	清三郎	上大工町	棟札（造営史料解説）
			（神部浅間両社本殿）	大工方肝煎	平三郎	上大工町	棟札（造営史料解説）
			（神部浅間両社本殿）	大工方肝煎	大吉	新通五丁目	棟札（造営史料解説）
			（神部浅間両社本殿）	大工方肝煎	新助	草深町	棟札（造営史料解説）
			（神部浅間両社本殿）	彫物大工	立川内匠	信州	棟札（造営史料解説）
			（神部浅間両社本殿）	木挽方	権左衛門	材木町	棟札（造営史料解説）
			（神部浅間両社本殿）	木挽方	半助	材木町	棟札（造営史料解説）
			（神部浅間両社本殿）	木挽方	仁右衛門	片羽町	棟札（造営史料解説）
			（神部浅間両社本殿）	木挽方	長藏	片羽町	棟札（造営史料解説）
			（神部浅間両社本殿）	木挽方	市左衛門	安西一丁目	棟札（造営史料解説）
			（神部浅間両社本殿）	木挽方	甚兵衛	安西一丁目	棟札（造営史料解説）
			（神部浅間両社本殿）	木挽方	忠兵衛	安西一丁目	棟札（造営史料解説）
			（神部浅間両社本殿）	木挽方	佐七	瑞龍寺門前	棟札（造営史料解説）
			（神部浅間両社本殿）	屋根方	権次郎	人宿町二丁目	棟札（造営史料解説）
			（神部浅間両社本殿）	屋根方	次郎兵衛	馬場町	棟札（造営史料解説）
			（神部浅間両社本殿）	塗装方頭取給方兼	大石周我		棟札（造営史料解説）
			（神部浅間両社本殿）	絵方	秋元梅曉		棟札（造営史料解説）
			（神部浅間両社本殿）	塗師方肝煎	小兵衛	馬場町	棟札（造営史料解説）
			（神部浅間両社本殿）	塗師方肝煎	儀兵衛	七間町二丁目	棟札（造営史料解説）
			（神部浅間両社本殿）	塗師方肝煎	政右衛門	両替町二丁目	棟札（造営史料解説）
			（神部浅間両社本殿）	塗師方肝煎	半右衛門	両替町三丁目	棟札（造営史料解説）
			（神部浅間両社本殿）	塗師方肝煎	庄右衛門	両替町三丁目	棟札（造営史料解説）
			（神部浅間両社本殿）	塗師方肝煎	惣兵衛	両替町三丁目	棟札（造営史料解説）
			（神部浅間両社本殿）	塗師方肝煎	十兵衛	両替町四丁目	棟札（造営史料解説）
			（神部浅間両社本殿）	石方	彦三郎	安西一丁目	棟札（造営史料解説）
			（神部浅間両社本殿）	日用力肝煎	嘉兵衛	車町	棟札（造営史料解説）
			（神部浅間両社本殿）	日用力肝煎	小平次	車町	棟札（造営史料解説）
			（神部浅間両社本殿）	日用力肝煎	喜平次	車町	棟札（造営史料解説）
			（神部浅間両社本殿）	日用力肝煎	権右衛門	馬場町	棟札（造営史料解説）
			（神部浅間両社本殿）	木挽方棟梁	左右衛門		棟札（造営史料解説）
			（神部浅間両社本殿）	大工棟梁花村与七郎弟子	安八	馬場町	小屋貫墨書（報告書3）
			（神部浅間両社本殿）	大工棟梁伊藤太郎次伴	太郎助		小屋貫墨書（報告書3）
			（神部浅間両社本殿）	大工棟梁	太郎次		小屋束墨書（報告書3）
			（神部浅間両社本殿）	大工棟梁	伊藤太良次	上大工町	野地板墨書（報告書3）
1810	文化7	4月11日	二階拝殿上棟（神部浅間両社拝殿）	棟梁	花村与七郎恭晤		棟札（造営史料解説）
1810	文化7	4月11日	二階拝殿上棟（神部浅間両社拝殿）	棟梁	花村清右衛門孝曉		棟札（造営史料解説）
1810	文化7	4月11日	二階拝殿上棟（神部浅間両社拝殿）	棟梁	三寺与右衛門親合		棟札（造営史料解説）
1810	文化7	4月11日	二階拝殿上棟（神部浅間両社拝殿）	棟梁	花村富左衛門泰故		棟札（造営史料解説）
1810	文化7	4月11日	二階拝殿上棟（神部浅間両社拝殿）	助	太郎次利道		棟札（造営史料解説）
1812	文化9	8月	（神部浅間両社拝殿）	鋳物師	村上又左衛門藤原久親		風鐸舌刻銘（報告書3）
1812	文化9	8月	（神部浅間両社拝殿）	鋳物師	宮崎孫左衛門藤原利保		風鐸舌刻銘（報告書3）
1812	文化9	8月	（神部浅間両社拝殿）	鋳物師	村上又左衛門藤原久親		風鐸舌刻銘（報告書3）
1812	文化9	8月	（神部浅間両社拝殿）	鋳物師	宮崎孫左衛門藤原利保		風鐸舌刻銘（報告書3）
1813	文化10	3月26日	両廂廊新立	掛棟梁	花村与七郎		棟札（報告書2）
1813	文化10	3月26日	両廂廊新立	掛棟梁	三寺与右衛門		棟札（報告書2）
1813	文化10	3月26日	両廂廊新立	掛棟梁	花村富左衛門		棟札（報告書2）
1813	文化10	3月26日	両廂廊新立	掛棟梁	伊藤太郎次		棟札（報告書2）
1813	文化10	4月	（神部浅間両社本殿）	鋳物師	村上又左衛門藤原久親		擬宝珠刻銘（報告書3）
1813	文化10	4月	（神部浅間両社本殿）	鋳物師	宮崎孫左衛門藤原利保		擬宝珠刻銘（報告書3）
1814	文化11	4月	（神部浅間両社拝殿）		善左衛門	人宿町	下貼墨書（報告書3）
1814	文化11	4月	（神部浅間両社拝殿）		長兵衛	新通	下貼墨書（報告書3）
1814	文化11	4月	（神部浅間両社拝殿）		伝吉	下桶屋町	下貼墨書（報告書3）
1814	文化11	4月	（神部浅間両社拝殿）		九郎兵衛	研屋町	下貼墨書（報告書3）
1816	文化13	4月13日	楼門上棟	大工棟梁	花村与七郎		棟札（報告書2）
1816	文化13	4月13日	楼門上棟	屋根方棟梁	三寺与右衛門		棟札（報告書2）
1816	文化13	4月13日	楼門上棟	屋根方棟梁	花村富左衛門		棟札（報告書2）
1816	文化13	4月13日	楼門上棟	大工棟梁	伊藤太郎次		棟札（報告書2）
1816	文化13	4月13日	楼門上棟	大工棟梁	花村清右衛門		棟札（報告書2）
1816	文化13	4月13日	楼門上棟	塗師頭取并給方	大石周我		棟札（報告書2）
1816	文化13	9月	神部浅間両社楼門	鋳物師	村上又左衛門		擬宝珠刻銘

西暦	和暦	月日	社 殿	職 名	氏 名	居住地	資 料
1816	文化13	9月	神部浅間両社様門	鋳物師	宮崎孫左工門		擬宝珠刻銘
1817	文化14	1月	仁王門新立（総門）	大工棟梁	花村与七郎		棟札（報告書2）
1817	文化14	1月	仁王門新立（総門）	屋根方棟梁	三寺与右衛門		棟札（報告書2）
1817	文化14	1月	仁王門新立（総門）	屋根方棟梁	花村富左衛門		棟札（報告書2）
1817	文化14	1月	仁王門新立（総門）	大工棟梁	伊藤太郎次		棟札（報告書2）
1817	文化14	1月	仁王門新立（総門）	大工棟梁	花村清右衛門		棟札（報告書2）
1817	文化14	1月	仁王門新立（総門）	塗師方頭取并絵方	大石周我		棟札（報告書2）
1819	文政2	7月25日	舞台柱建（舞殿）	大工棟梁	花村与七郎		棟札（報告書2）
1819	文政2	7月25日	舞台柱建（舞殿）	屋根方棟梁	三寺与右衛門		棟札（報告書2）
1819	文政2	7月25日	舞台柱建（舞殿）	大工棟梁	伊藤太郎次		棟札（報告書2）
1819	文政2	7月25日	舞台柱建（舞殿）	大工棟梁	花村清右衛門		棟札（報告書2）
1820	文政3	4月	舞台喜納（舞殿）	屋根方肝煎	権次郎	人宿町二丁目	棟札（報告書2）
1820	文政3	4月	舞台喜納（舞殿）	屋根方肝煎	治郎兵衛	馬場町	棟札（報告書2）
1820	文政3	4月	舞台喜納（舞殿）	権次郎伴	要蔵	人宿町二丁目	棟札（報告書2）
1820	文政3	4月	舞台喜納（舞殿）	次郎兵衛伴	忠次郎	馬場町	棟札（報告書2）
1822	文政5	5月11日	山宮本社柱建	大工棟梁	花村与七郎		札（報告書1）
1822	文政5	5月11日	山宮本社柱建	大工棟梁	花村清右衛門		札（報告書1）
1822	文政5	5月11日	山宮本社柱建	屋根方棟梁	花村富八		札（報告書1）
1824	文政7	9月14日	山宮拝殿上棟	大工棟梁	花村与七郎		棟札（報告書1）
1824	文政7	9月14日	山宮拝殿上棟	大工棟梁	花村清右衛門		棟札（報告書1）
1824	文政7	9月14日	山宮拝殿上棟	大工棟梁	花村富左衛門		棟札（報告書1）
1824	文政7	9月14日	山宮拝殿上棟	大工棟梁	池田栄次郎		棟札（報告書1）
1824	文政7	9月14日	山宮拝殿上棟	日用方棟梁	葉山伊左衛門		棟札（報告書1）
1826	文政9	5月27日	奈吾屋本社柱建（大歳御祖神社）	大工棟梁	花村与七郎		棟札（報告書3）
1826	文政9	5月27日	奈吾屋本社柱建（大歳御祖神社）	大工棟梁	花村清右衛門		棟札（報告書3）
1826	文政9	5月27日	奈吾屋本社柱建（大歳御祖神社）	屋根方棟梁	花村富左衛門		棟札（報告書3）
1826	文政9	5月27日	奈吾屋本社柱建（大歳御祖神社）	大工棟梁	池田栄次郎		棟札（報告書3）
1826	文政9	5月27日	奈吾屋本社柱建（大歳御祖神社）	日用方棟梁	葉山伊左衛門		棟札（報告書3）
1826	文政9	7月	（麓山神社拝殿）	大工方	平十郎		棟札（報告書3）
1826	文政9	7月	（麓山神社拝殿）	大工方	清三郎		棟札（報告書3）
1826	文政9	7月	（麓山神社拝殿）	大工方	庄五郎		棟札（報告書3）
1826	文政9	7月	（麓山神社拝殿）	大工方	市蔵		棟札（報告書3）
1826	文政9	7月	（麓山神社拝殿）	大工方	平左衛門		棟札（報告書3）
1826	文政9	7月	（麓山神社拝殿）	大工方	甚右衛門		棟札（報告書3）
1826	文政9	7月	（麓山神社拝殿）	大工	熊次郎		棟札（報告書3）
1826	文政9	7月	（麓山神社拝殿）	大工方	仙次郎		棟札（報告書3）
1826	文政9	7月	（麓山神社拝殿）	大工方	巳之助		棟札（報告書3）
1826	文政9	7月	（麓山神社拝殿）	大工方	八十八		棟札（報告書3）
1826	文政9	7月	（麓山神社拝殿）	日用方	嘉兵衛		棟札（報告書3）
1826	文政9	7月	（麓山神社拝殿）	日用方	平蔵		棟札（報告書3）
1831	天保2	3月19日	奈吾屋本社・拝殿上棟	大工棟梁	花村清右衛門		棟札（報告書1）
1831	天保2	3月19日	奈吾屋本社・拝殿上棟	屋根方棟梁	花村富左衛門		棟札（報告書1）
1831	天保2	3月19日	奈吾屋本社・拝殿上棟	大工棟梁	池田権十郎		棟札（報告書1）
1831	天保2	3月19日	奈吾屋本社・拝殿上棟	日用方棟梁	葉山久左衛門		棟札（報告書1）
1831	天保2	3月19日	奈吾屋本社・拝殿上棟	左官方棟梁	宮嶋宗蔵		棟札（報告書1）
1831	天保2	3月19日	奈吾屋本社・拝殿上棟	石方棟梁	完戸善左衛門		棟札（報告書1）
1833	天保4	6月11日	麓山神社中門	鋳方	石川茂平	車町	墨書
1835	天保6	10月	（大歳御祖神社本殿）	彫工	立川門儀兵衛	信州	墨書
1835	天保6	10月	（大歳御祖神社本殿）	彩色	五郎右工門		墨書（造営史料解説）
1835	天保6	10月	（大歳御祖神社本殿）	門人	宮嶋勝太郎		墨書（造営史料解説）
1835	天保6	10月	（大歳御祖神社本殿）	弟	千蔵		墨書（造営史料解説）
1835	天保6	10月	（大歳御祖神社本殿）	倅	万蔵		墨書（造営史料解説）
1835	天保6	10月	（大歳御祖神社本殿）	倅	文次郎		墨書（造営史料解説）
1835	天保6	11月	（大歳御祖神社本殿）	鋳物師	宮崎孫左工門藤原貞口		擬宝珠刻銘（造営史料解説）
1835	天保6	11月	（大歳御祖神社本殿）	彫工	立川内匠	信州	墨書（造営史料解説）
1835	天保6	11月	（大歳御祖神社本殿）	彩色	梅門芳房		墨書（造営史料解説）
1835	天保6	11月	（大歳御祖神社本殿）	門人	宮嶋正敬		墨書（造営史料解説）
1835	天保6	11月	（大歳御祖神社本殿）	弟子	龍山		墨書（造営史料解説）
1835	天保6	11月	（大歳御祖神社本殿）	弟子	口二		墨書（造営史料解説）
1835	天保6	11月	（大歳御祖神社本殿）	弟子	周朝		墨書（造営史料解説）
1838	天保9	12月5日	摩利支天社上棟	大工棟梁	花村源左衛門		棟札（報告書2）
1838	天保9	12月5日	摩利支天社上棟	屋根方棟梁	花村富左衛門		棟札（報告書2）
1838	天保9	12月5日	摩利支天社上棟	大工棟梁	池田権十郎		棟札（報告書2）
1838	天保9	12月5日	摩利支天社上棟	左官方棟梁	宮嶋宗蔵		棟札（報告書2）
1838	天保9	12月5日	摩利支天社上棟	石方棟梁	完戸善左衛門		棟札（報告書2）
1838	天保9	12月5日	摩利支天社上棟	大工肝煎	市蔵		棟札裏面（報告書2）
1850	嘉永3	9月19日	神宮司社拝殿共上棟（少彦名神社）	大工棟梁	花村源左衛門		棟札（報告書2）
1850	嘉永3	9月19日	神宮司社拝殿共上棟（少彦名神社）	大工棟梁	栄次郎		棟札（報告書2）
1850	嘉永3	9月19日	神宮司社拝殿共上棟（少彦名神社）	木挽方棟梁	正次郎		棟札（報告書2）
1850	嘉永3	9月19日	神宮司社拝殿共上棟（少彦名神社）	屋根方棟梁	長次郎		棟札（報告書2）
1850	嘉永3	9月19日	神宮司社拝殿共上棟（少彦名神社）	鍛冶師方棟梁	友右衛門		棟札（報告書2）
1850	嘉永3	9月19日	神宮司社拝殿共上棟（少彦名神社）	日用方棟梁	五郎兵衛		棟札（報告書2）
1854	嘉永7	9月13日	宝蔵柱建	棟梁	花村清右工門		棟札（報告書3）
1854	嘉永7	9月13日	宝蔵柱建	棟梁	長次郎		棟札（報告書3）
1854	嘉永7	9月13日	宝蔵柱建	棟梁	富左工門		棟札（報告書3）
1854	嘉永7	9月13日	宝蔵柱建	棟梁	宮嶋宗蔵		棟札（報告書3）
1854	嘉永7	9月13日	宝蔵柱建	棟梁	友右工門		棟札（報告書3）
1854	嘉永7	9月13日	宝蔵柱建	棟梁	秋蔵		棟札（報告書3）
1861	万延2	2月1日	神廐柱建	棟梁	花村清右衛門		棟札（報告書3）
1861	万延2	2月1日	神廐柱建	棟梁	正平		棟札（報告書3）
1861	万延2	2月1日	神廐柱建	棟梁	勝太郎		棟札（報告書3）
1861	万延2	2月1日	神廐柱建	棟梁	新八郎		棟札（報告書3）
1861	万延2	2月1日	神廐柱建	棟梁	宗七郎		棟札（報告書3）
1861	万延2	2月1日	神廐柱建	棟梁	下山菱右衛門		棟札（報告書3）
1861	万延2	2月1日	神廐柱建	棟梁	惣左衛門		棟札（報告書3）
1861	万延2	2月1日	神廐柱建	棟梁	寛平		棟札（報告書3）
1861	万延2	2月1日	神廐柱建	大工方肝煎	半助		棟札（報告書3）
1861	万延2	2月1日	神廐柱建	大工方肝煎	多七		棟札（報告書3）
1861	万延2	2月1日	神廐柱建	大工方肝煎	半兵衛		棟札（報告書3）
1861	万延2	2月1日	神廐柱建	大工方肝煎	甚兵衛		棟札（報告書3）
1861	万延2	2月1日	神廐柱建	大工方肝煎	要蔵		棟札（報告書3）
1861	万延2	2月1日	神廐柱建	大工方肝煎	金次郎		棟札（報告書3）

資料三十九 大工木挽作料・飯米調査（宝永三年（一七〇六）六月三日条）

〔鈴木修理日記四〕より抜粋）

鈴木棠三・保田晴男『近世庶民生活史料 未刊日記集成 第六卷

鈴木修理日記四』三一書房、一九九八、所収

一越前守殿被仰候は、京都中井主水・大坂山村与助・駿河花村与七郎、三ヶ所大工木挽作料・飯米、江戸並二候哉、口米など如何程有之候哉、御聞被成度候間、我等方より承合候様ニと御申二付、退出已後、主水・与助・与七郎方へ町飛脚を以、左之通書状認、状箱二入、今日指遣。

一筆致啓上、弥々御無為御座候哉、承度奉存候、拙者義無事致勤役候。

一御作事奉行衆被仰候は、京都大工木挽作料・飯米、江戸並老五五分・老升五合二而候哉、口米ハ何程宛貴様御取候哉、訳委細御聞被成度之由、拙者方より承合候様ニと被仰候間、委細御書付可被遣候、恐惶謹言。

六月三日

鈴木新五兵衛

中井主水様

尚々、大工木引作料・飯米請取手形、表判・裏判認様、是又書付可被遣候、以上。

一筆申入候、弥御無事候哉、我等義、無為ニ令勤仕候。

一御作事奉行衆被仰候は、其御地大工木挽作料・飯米、江戸並老五五分二老升五合二而候哉、請取手形名判、御自分名判ニ而被請取候哉、たき出しも御自分ニ而被致候哉、委細之訳御聞被成度之由、我等方より申越候様ニと被仰候間、具訳書付御越可有之候、恐惶謹言。

六月三日

鈴木新五兵衛

山村与助殿

尚々、大工木引作料・飯米請取手形、表判・裏判認様、是又御書付可被指越候、以上

一筆申入候、然ば御作事奉行衆被仰候は、其御地大工木引作料・飯米、江戸並二老五五分・老升五合二而候哉、請取手形、其方名判ニ而被請取候哉、焼出しも其方被致候哉、委細之訳御聞被成度由、我等方より申越候様ニと被仰候間、具二訳書付可被指越候、恐惶謹言。

六月三日

鈴木新五兵衛

花村与七郎殿

尚々、大工木引作料・飯米請取手形、表判・裏判認様、是又書付可被指越候、以上。

資料四十 馬場町旧家 大工棟梁花村与七郎（『駿河志料一』より抜粋）

中村高平『駿河志料一』歴史図書社、一九六九、所収

馬場町（ばんば、近世ば、町と云、宮ヶ崎南につづく、社前元馬場の地なるべし）

【旧家】大工棟梁、花村与七郎（同町にあり、町役免許なり）相伝へ云、今川家武田家の頃より大工職にて両家の朱印判物を持てりと云、大神君御在城となり、先祖花村長左衛門、御修理の事勤仕し、慶長の度相模国箱根権現社、宝殿、拝殿、御建立ありしに、中井大和守両人事を承り、造立せし棟札の識に（姓名のみ略記す）

慶長十七歳次壬子十一月三日

大工中井大和守正清 華村長左衛門尉正重

棟梁村源右衛門尉宗次 石川佐兵衛尉友重

かくあり曾我社棟札に

慶長十七年壬子九月吉辰 大工 中井大和守正清

棟梁 華村長左衛門尉正重

大坂御陣の折供奉し、近江国矢走の渡にて破船し、長左衛門没し、二代目長左衛門江戸へ召されしに、重病に因て弟子杉本七郎左衛門出せしに、御被官大工に命ぜられ、俸米百二十俵賜はり、長左衛門は無程果けるに、寛永九年御大工頭鈴木近江吹挙にて、三代目長左衛門前々の如く、御城内外御修理の事命ぜられ、四代目与七郎まで帯刀御免なりしに、帯刀は止み、当代まで十代、大工棟梁職相継し、町頭上席なりと云々、此町の北裏なる稲荷社は、此町の産土神なり、地は武家明屋敷方なれば、其村の條に出す

資料四十一 上魚町 北側中井屋敷（『駿河志料一』より抜粋）

中村高平『駿河志料一』歴史図書社、一九六九、所収

上魚町（茶町南なり）

北側中井屋敷と云（京住居大工棟梁）中井大和正次拝領地なり、今按に、中井氏初治郎左衛門、姓は巨勢、其祖は聖德太子の時、大工之法伝受以来、世々大和國中井郷に在しと云、慶長中に本惣大工棟梁に補したり、武徳編年集成に、慶長十二年八月廿日、駿府城造り畢たる功を以て、大和守に叙し、薄錢千貫、白銀百十六枚、太刀一腰賜はりしと見ゆ、此地もその時に賜はりしにか、今に彼家に伝領し、支配人ありて北側と称し、青物問屋あり、御在城の頃よりの例なりとて、毎年初筈を公納す、御代官所へ出し、江戸御本丸御台所へ廻る事なりと云（青物問屋の役なり）

資料四十二 天ノ宮・小國大明神由緒書（明和四年（一七六七））（天宮神社蔵）

特定非営利活動法人静岡県伝統建築技術協会『静岡県指定有形文化財

天宮神社本殿及び拝殿修理工事報告書』天宮神社、二〇一三、所収

今度御由緒御尋御座候仁付

乍恐御答奉申上候御事

一遠江國周智郡 天ノ宮大明神之儀者

人王三十代欽明天王⁽⁴⁴⁾勅願所

天下太平國土安全御武運御長久御祈禱之

御社仁而御座候 御代々御朱印五拾石頂戴仕候

権現様御建立被為遊候寛永四丁卯歲御造営

被為 遊候從夫七拾壹年目元禄十丁丑年御造営被

為 遊從夫四拾年目寛保三癸亥歲御繕被為

遊候永代御修覆所仁而御座候

同國同郡一ノ宮小國大明神天ノ宮大明神右両社者異に⁽⁴⁴⁾他候

宮卜御由緒一同之儀御座候旧記仁相見江候通

奉言上候

天下太平 御武運御長久之御祭拾式段之

御舞樂御座候 一ノ宮御舞樂二月十七日十八日

天ノ宮御舞樂二月廿四日廿五日從先規

右両者共仁相勤来候

以上

明和四乙亥年

九月 遠州周智郡

天宮大明神

神主

中村左京（印）

御奉行所

資料四十三 小國神社棟札写（天正十一年（一五八三））（高木保氏蔵）

『静岡県指定有形文化財 天宮神社本殿及び拝殿修理工事報告書』所収

大工福島新左衛門

大守徳川家康 奉行本多作左衛門 当社大工高木五郎左衛門

助右衛門

（梵字）奉造立小國一宮鹿齒大菩薩諸願成就所

勾当觀智北島孫左衛門秀吉

于時天正十一癸未十二月七日 神主豊前守重勝

資料四十四 天宮神社棟札写（天正十七年（一五八九））（高木保氏蔵）

『静岡県指定有形文化財 天宮神社本殿及び拝殿修理工事報告書』所収

大工福島新左衛門

大守徳川大納言殿 奉行寺田右京亮 当社大工高木五郎左衛門

助右衛門

（梵字）奉改造天宮菩薩社頭一字所

于時天正十七己丑年十二月十八日 神主中村助太郎

社人五郎左衛門

資料四十五 小國神社棟札写（元禄十年（一六九七））（小國神社蔵）

『静岡県指定有形文化財

天宮神社本殿及び拝殿修理工事報告書』所収

御奉行

遠江國一宮小國事任神社一字

從五位下行隱岐守源姓西尾忠成

横須賀

富永十郎右衛門兼龍

市川治郎左衛門良直

征夷大將軍正二位内大臣源綱吉公御修宮

河原清兵衛藤原正真

下奉行

加藤新五右衛門宗意

清水喜兵衛

元禄十丁丑歲十二月四日遷宮

豐原佐助藤原勝喜

江戸残役

中尾政右衛門兼慶

桑原万五郎

内山七兵衛源永貞

社僧

蓮増院榮順法印

密嚴院廣栄法印

御被官

内山清左衛門藤原由茂

神主父子

鈴木豊前守藤原重玄

真心寺良栄

小國彈正藤原重正

瀧唱院玄順

行事坊憲良

松井八郎左衛門

御修理大工

高木助右衛門

久村甚三郎

潮田武兵衛政固

同木挽

大木太郎左衛門

木村万平重好

宮谷小右衛門

柴川藤左衛門

井出殊左右衛門喜治

同鍛冶

木挽棟梁

松山庄兵衛安意

山崎吉右衛門

今村七左衛門

下役人

同葺師

川口清右衛門

堀口伴右衛門宗方

鈴鹿勘十郎

土屋内匠長則

土屋文左右衛門久清

（次頁へ）

伊藤丹波貫道

堀口伴右衛門宗方

（右下より）

森田主水盛永

平岡長左右門徳着

（次頁へ）

鈴木民部重房

同鍛冶

（次頁へ）

建部主税勝時

同葺師

（次頁へ）

毛利隼人安富

同葺師

（次頁へ）

神麻外記直則

同葺師

（次頁へ）

鈴木左近重定

同葺師

（次頁へ）

清木治郎正守

同葺師

（次頁へ）

宮野谷伊賀貫久

同葺師

（次頁へ）

栗倉比嶋八左衛門重常

同葺師

（次頁へ）

（次頁へ）

（次頁へ）

（次頁へ）

（次頁へ）

（次頁へ）

（次頁へ）

（次頁へ）

（次頁へ）

（次頁へ）

（次頁へ）

（次頁へ）

（次頁へ）

（次頁へ）

（次頁へ）

（次頁へ）

（次頁へ）

（次頁へ）

（次頁へ）

（次頁へ）

（次頁へ）

（次頁へ）

（次頁へ）

（次頁へ）

（次頁へ）

維遠江國一宮事任神社大己貴尊者 欽明天皇十六年乙亥二月十八日出現此所
則勅願所也爾來世奉國連无不欽敬奉仕矣元龜年中 德川家康公為參遠兩州

之守比与武田信玄御關戰之時于茲當國目代武藤刑部亟氏定衣企逆心令一味信玄家

□招甲府之士卒搆一宮乎城郭也于時神主鈴木豐前守藤原重勝依有神慮寄瑞奉訴件之事

家康公太有御感迺被召出御前神慮寄瑞尚有遭思食合事急奉遷御神体於別所社

頭不殘可燒拂合戰於得勝利者宮社樓閣復旧永有可被為成大檀那嚴命為御願之

御印三条小鍛治宗近所依之靈劔一振御奉納今尚有之迺任嚴命旨元龜三年九月廿二日

(前頁より) 本社樓門廻廊一字不殘令放火即時追拂敵軍厥后如御願駿甲兩州奉属幕下然后

未幾八州又奉属下因茲命安部善九郎正勝本多依左右門重次同平八郎康俊三人社頭不

殘御建立天正十一年癸未十二月七日奉遷宮其後經年月社頭漸及大破歸自寛永十二年

元禄年中奉訴御再興之願年已久矣抑今度

征夷大將軍正二位内大臣源綱吉公忝有貴命本社末社本宮拙者悉御再建并至御神宝祭祀之神器

被為成御再興為莊嚴為莊嚴御舍神具可仰可丹(力)誠是時哉社人調樂器含歛惊之咲神官捧幣

帛發喜悅之員嚴重奉遷宮訖歷代如左之祭祀无令陵夷恒例礼尊不致怠慢可奉抽天下太平御當家御繁栄御武運長久

御祈祷丹誠者也謹誌

（表）

棟梁

大棟梁

甲良次良左右衛門

御奉行

甲良豊前源宗賀

花村与七郎

木挽棟梁

遠江國周智郡天宮大明神社頭一字

從五以下行隠岐守源姓西尾忠成

横須賀

市川治郎左右衛門

今村七左右門

河原清兵衛藤原正真

下奉行

清水喜兵衛

川口清右衛門

征夷大將軍正二位内大臣源綱吉公御修宮

豊原佐助藤原勝喜

富永十郎右衛門兼龍 桑原万五郎

内山七兵衛源永貞

加藤新五右衛門宗意 松井八郎左右衛門

元禄十丁丑稔十二月九日遷宮

江戸残役

久村甚三郎

御被官

中尾政右衛門兼慶

大木太郎左衛門

社僧

内山清左右衛門藤原由茂

神主中村左京源重次

柴川藤左右門

神宮寺良圓

高木助右衛門

社家

久保伊織

（裏）

夫遠江國周智郡天宮大明神御神体者田心姫尊湍津姫尊市杵嶋姫尊則一宮

大巳貴尊之姉尊也往昔依一宮神託而齊祭于此地奉轉佐大巳貴尊神德也云云

此尊神者於于天上為出生故奉崇敬天宮大明神也矣天正年中 徳川家康公一宮御

願成就之此先一宮御造榮被為成之次而天正十七年癸丑歲當社御建立嚴然也厥后經年月

社頭漸及大破故寛永年中奉訴御再興之願同一宮而為中絶幾何年然如先規今般以一

宮御再建之御序

征夷大將軍正二位内大臣源綱吉公忝有貴命本社末社不殘再建并至神宝祭祀之神器被為

成御再興為莊嚴御舍清淨神具可仰可信今日嚴重奉遷宮歷代如在之祭祀无令陵夷恒例

禮莫不致怠慢可奉抽天下泰平

御當家繁栄御武運長久御祈祷丹誠者也鈴木豊

前守藤原重玄謹而奉遷宮訖矣

濱野想太夫時隣

渡部市左右衛門氏庸

石原平四郎正治

宮谷小右衛門

龜山与五兵衛満胤

村松五郎助

横須賀 富永新右衛門兼豊

下役人 江崎半内政員

木挽

資料四十七 一ノ宮造営奉行之覚（元禄九ノ十年（一六九六ノ七））

（旧鈴木太郎左衛門家文書）

『静岡県指定有形文化財 天宮神社本殿及び拝殿修理工事報告書』所収

（上段）

元禄九年子九月廿一日江戸御見分衆

御越

御家名 御頭

川原清兵衛様

内山清左衛門殿

（マ）
当領衆

甲良次郎左衛門

（マ）
太 木太郎左衛門殿

松井八郎左衛門殿

元禄十年丑ノ三月廿四日

御神宝御奉行御越

同日より御改

清野半右衛門様

御手代 持田惣兵衛殿

同 清水権太夫殿

諸方町式拾六人余

かさり屋備前

糸方坂本や

武兵衛

同折戸小左衛門

亀屋 市兵衛

同松屋三右衛門

はりまや茲兵衛

ぬり方

い物師 蓮

佛師 孝蓮

同宮内

同中川左近

同香長

御宮御普請方御奉行衆

大奉行川原清兵衛様

同 豊原左助様

（下段）

一ノ宮御奉行之覚

元禄十丑九月

御内□長十郎左衛門殿

定礎奉行

同笠松権七殿

同月六日御家老松山勘兵衛殿御越

同七日 殿様御出

甲良次郎左衛門殿

御当領衆

同倉見豊前殿

(マ)

太 木太郎左衛門殿

天宮御奉行衆右同断

御神宝御見分衆七月十四日二

御越

御奉行堀得佐兵衛様

御手代式人

町人ハ一ノ宮同前

資料四十八 天宮神社棟札(元禄十年(一六九七))(天宮神社蔵)

『静岡県指定有形文化財 天宮神社本殿及び拝殿修理工事報告書』所収

(表)

御願主

征夷大將軍正二位内大臣源綱吉公 奉行従五位下行隠岐守源姓西尾忠成

奉修宮遠江國周智郡天宮大明神社頭一字

元禄十丁丑年十二月九日遷 神主中村左京源重次 大工甲良豊前源宗賀

(裏)

なし

資料四十九 天宮神社修繕願(明治二十四年(一八九一))(天宮神社蔵)

『静岡県指定有形文化財 天宮神社本殿及び拝殿修理工事報告書』所収

明治二十四年十月

遠江国周智郡郷社天宮神社修繕願

周智郡森町天宮

氏子惣代

抑天宮神社ハ昔時人王三十代欽明天皇勅

願所ニテ其后世々ノ領主造営修繕アリシモ 然シテ

勅使ノ間等旧形今尚存ス

天文ノ頃今川氏ノ領地トナリ社領五百石被□□□□

其後徳川氏御入國ノ際伊奈備前守殿より社領

百五十石ト被成附置シモ京都ニ於テ朱印ニ書換ノ際

五十石ト被減明治初年ニ至リ悉皆上地ト相成申候御

造営之儀ハ天正十七年徳川氏ノご造営有

其后寛永四年御造営有其後元禄十年

御造営有此后度々御造営ヲ仰グモ国事

御多端之趣ニテ寛保三年ニ至リ漸ク御修繕

有之シ而已故其後□□御造営ノ事ヲ神主

中村氏より度々

(以降欠落)

資料五十 天宮神社屋根棟札（元禄十年（一六九七））（天宮神社蔵）

『静岡県指定有形文化財 天宮神社本殿及び拝殿修理工事報告書』所収

（表）

元禄十丁丑年

江戸鞘町

摂州四天王寺檜皮御大工

屋根 肝入金右衛門

武州江戸霊岸嶋銀町檜皮屋

奉喜納當社天宮大明神

棟梁 忠松与兵衛

江戸桶町

藤原朝臣家次氏

板粉 肝入弥次兵衛

十一月吉祥日

（裏）

井河平左衛門 小林勘兵衛 鈴木所左衛門 伊藤三重郎 平右衛門 太兵衛

屋根方 吉田甚四郎 吉田長次郎 高橋庄兵衛 田中又左衛門 山四郎 長八

川口勘右衛門 中谷清兵衛 新村佐兵衛 谷川権兵衛 長三郎

板粉方 加藤三太郎 森仁兵衛 権七 甚四郎 子共七郎兵衛 大伐五郎兵衛

鈴木兵四郎 松本権重郎 久四郎 六兵衛 同 金三郎 同 次郎兵衛

裏書

別当

池西坊
辻之坊
大鏡坊

資料五十一 村山浅間神社棟札写『富士山興法寺大鏡坊記録』

（村山浅間神社蔵（富士宮市教育委員会寄託））

『静岡県指定有形文化財 天宮神社本殿及び拝殿修理工事報告書』所収

浅間七社大棟梁諸末社 御造営有之

御棟札写左之通

征夷大將軍正二位内大臣源綱吉公御造営

駿州富士山村山浅間本地堂大棟梁諸末社

元禄十丁丑九月二十九日

奉司從五位撰津守太田氏源朝臣資直

奉行 家從佐々木長右衛門安次

甲賀十太夫秀成

大工 甲良次郎左衛門

花村与七郎

松井八郎左衛門

資料五十二 一宮記録写（伊藤輝男氏蔵）

『静岡県指定有形文化財 天宮神社本殿及び拝殿修理工事報告書』所収

（表紙）

一宮記録 全

寛政元年酉十一月写之有分

今時明治二年己六月写取直

（前略）

右書付絵図

一只今之御宮御神宝其外一色元禄十丑年

御手傳西尾隠岐守殿御奉行河原清兵衛殿

豊原左介殿御代官内山七兵衛御道具方清野

半右衛門殿御金奉行鈴木三郎兵衛殿御被官片

山三七郎殿内 田 清左衛門殿棟梁甲良豊前殿

被 仰付御入用金七千両余二而御造 栄被 仰付候

（中略）

寺社御奉行井上河内守様 松平紀伊守様

大岡越前守様之時 其後御覆修之儀願出候処

元文六年酉五月六日 駿遠参信州

一宮御修覆金四百両被下并四ヶ国御免勸

化相叶申候事

戊亥子迄三ヶ年二勸化順行御仕廻

（中略）

紙有数三拾三枚 表紙込二

大久保邑

松井郷右衛門

持所

資料五十三 横須賀藩御用留

『静岡県指定有形文化財 天宮神社本殿及び拝殿修理工事報告書』所収

（前略）

一今度一之宮御普請奉行被仰付候

御用付長中江買米被仰付候段

之吟味致町中より金子差上申候

金十両付式表安之積金子差上くれ二

米御請取申心得

金高百両三分 惣町中

石津迄

御帳面町々庄や衆二有

（中略）

一元禄十年丑九月より一之宮御普請取付申事

奉行西尾隠岐守様被仰付候

（中略）

元禄十年丑十月六日より人足出ス

一市之宮御普請二而御やとい人足町中石津

迄三拾人出申候御みち方ハ御上様より出申候

町中家数二而割過ましを錢二而持外 □□□

壺人百文つゝ二而やといを □□□二御用書帳

書付置申候

一之宮人足終

元禄十丑年十一月十二日働仕廻申候

（中略）

惣人足合千八拾人出申候 □□事

御扶持方老人ニ付米七合五勺宛申候て

右之人足老人付百廿六文つゝにて雇遣申候

但宿はらひ^(マ)足シ扶持味噌塩代迄

町中之惣錢高百三拾七貫貳百五十文

外老貫三百五十文 御用頭三人三日勤申候

式口金百三十八貫六百元 遣申候

ありがたく

ありがたく

右之町人足随分出精働申候而

ありがたく

朝未明よりくれ迄相働御奉行様迄悉御ほめ有候

資料五十四 天宮神社木札（元禄十年（一六九七）（天宮神社蔵）

『静岡県指定有形文化財 天宮神社本殿及び拝殿修理工事報告書』所収

（表）

遠州豊田郡

河匂之庄

掛塚村

とびのもの

太郎兵衛

多十郎

与八郎

藤兵衛

藤三郎

藤松

直右衛門

傳吉

善喜

清右衛門

丁

元禄拾歳

丑十一月吉日

（裏）なし

資料五十五 小國神社棟札写（元禄十年（一六九七）（小國神社蔵）

『静岡県指定有形文化財 天宮神社本殿及び拝殿修理工事報告書』所収

征夷大將軍正二位内大臣源朝臣綱吉公御修造

遠州一宮小國大明神社頭一字 從五位下隱岐守源姓西尾氏忠成奉之

元禄十年丁丑十二月四日

資料五十六 請負手形之事（元禄十年（一六九七）

（小國神社蔵（山本忠夫氏旧蔵）

『静岡県指定有形文化財 天宮神社本殿及び拝殿修理工事報告書』所収

差上ケ申御請負手形之事

一今度遠州一宮御普請御入用釘鉄物塗

師方同国一宮山本忠太夫松嶋武助御請負

仕ニ付拙者請人ニ罷立御注文入札之通無

相違御普請中御用為相調可申候依之為田地

質岡津村三右衛門田地高五拾石目 佐 券金貳

百両ニ田地差上ケ置申候若御請負申上候釘鉄

物塗師方相障儀御座候者余人江可被仰付候

□貴者之代銀何程高直ニ御座候共其分私共

弁 湘 濟シ其上差上ケ置候田地被召上札主請人

共ニ何様之曲事ニ茂可被仰付候其時一言御訴

訟申上間敷候為後日仍而如件

岡津村

請人 三右衛門

元禄十年丑六月

一ノ宮

札主 忠太夫

同所

同断 武助

井伊兵部少輔様御内

江原仁右衛門殿

西堀夫左衛門殿

資料五十七 遷宮祝詞（元祿十年（一六九七）（天宮神社蔵）

『静岡県指定有形文化財 天宮神社本殿及び拝殿修理工事報告書』所収

遷宮祝詞

掛毛畏□天宮大明神田心姫尊湍津
姫尊市杵嶋姫尊乃廣前仁恐美恐
美毛申佐久夫尊神者素盞烏尊天
照太神乃御前仁於天御心赤□事乎
明之賜牟加為仁誓約志賜中仁生麻須
御神仁天天照太神止同德多留尊神奈利
此神天上仁天生麻須御神多留故仁天宮
止号之奉利一宮大己貴尊乃姉尊奈利
往昔一宮乃託宣於以天此所仁齋祭天
大己貴神乎奉輔佐之神威利生於千里
万家仁施之賜中比
德河家康公御願成就乃砌先一宮乎
御造宮御次而當社御建立嚴然他利
厥后漸久年乎涯天社領大破仁及乃所仁
今度
征夷大將軍正二位内大臣源綱吉公忝毛貴命在天
本社末社及至神宝祭祀神器悉仁御再興
神慮何歛喜無良民于時元祿十歲次
丁丑冬十二月九日乎吉日良辰止擇定天
御神躰乎新殿仁遷奉天諱辞竟奉利
一天泰平四海安全別之天波
御當家万歳御武運長久御子孫繁榮乃

御祈祷精誠乎疑之丹心乎抽奉留此状乎

平介久安介久聞食天心中乃祈願一一成就

常磐堅磐仁夜乃守日乃護仁守護幸

賜止恐美恐美毛申壽

辞別仁申佐久今日吉時仁參集留輩乃

中仁不慮乃穢氣不淨乃事在止毛太神

達乃御心廣□御助厚□御恵乎施

之賜天咎毛无久崇毛无久護幸賜止

恐美恐美毛申壽

再

元祿十丁丑歲十二月九日鈴木豊前守藤原重玄

拝

資料五十八 請取申御道具之事（元禄十年（一六九七））

（旧鈴木太郎左衛門家文書）

『静岡県指定有形文化財 天宮神社本殿及び拝殿修理工事報告書』所収

請取申御道具之事

一本尊不動并	脇立式童子共二	三体
一菩薩面并	冠日月之輪共二	式面
一二ノ舞面		式面
一陵王面并	頭巾共二	壺面
一納蘇利面并	頭巾共二	壺面
一獅子頭		壺ツ
一獅子舞ノ面并	冠共二	壺ツ
以上御修復也		
右之本尊御道具慥ニ請取申所実正也為後日之如件		
元禄十年	大佛師 宮内（花押）	
丑七月十	同中川 左近	
様		
様		

資料五十九 覚（装束）（元禄十年（一六九七））（旧鈴木太郎左衛門家文書）

『静岡県指定有形文化財 天宮神社本殿及び拝殿修理工事報告書』所収

覚

一花籠緒	壺筋
一造花	壺本
一拔頭長絹	壺人前
一同袴	壺人前
一石帶	壺筋
納蘇利	
一熨斗目小袍	壺ツ
同 一装束	壺ツ
同 一同括袴	壺ツ
一花籠緒	壺筋
一鉢緒	壺筋
右之通慥ニ預リ置申候	以上
丑七月廿六日萬屋太郎兵衛（印）	

資料六十 覺（装束）（元禄十年（一六九七）（旧鈴木太郎左衛門家文書）

『静岡県指定有形文化財 天宮神社本殿及び拝殿修理工事報告書』所収

覺

○一延鉾長絹 耆人前

○一同天冠 耆頭

○一太平樂半臂 耆人前

下襲衣共二

○一同指貫 耆人前

△○一按摩直垂 耆人前

一同大口 耆人前

一新摩訶長絹 耆人前

○一二ノ舞装束 式人前

○一同綿ほうし 式ツ

○一陵王之袴 耆ツ

右之分御本ニ入申候間御揃

置可被下候 当月廿二三日頃ニハ

爰元へ伺ひ可致候間其節

御渡し被下候様頼上候 以上

右五口槌ニ預リ置申候 以上

丑 折戸小左衛門

七月十六日 坂本や武兵衛（印）

小國彈正様

御役人衆中様

資料六十一 一宮小國神社記（文化十四年（一八一七）（小國神社蔵）

『静岡県指定有形文化財 天宮神社本殿及び拝殿修理工事報告書』所収

（表紙）

一宮小國神社記

（前略）

正親町天皇御宇天正三乙亥年二月廿七日

國主徳河三河守源朝臣家康公御造立奉行

阿部善九郎正勝本多作左衛門重次神主

鈴木豊前重勝大工福島新左衛門同年同

月廿八日遷宮畢

同十一年癸未曆十二月七日 國主從三位參議

源朝臣家康公御再建奉行本多作左衛門重

次神主鈴木豊前重勝大工福島新左衛門當社

大工高木助右衛門勾當觀智北嶋孫左衛門秀吉

御志意於被遂者社頭悉御再建可有之御願也

如御願依奉属諸國本多作左衛門尉重次同平

八郎康俊阿部善九郎正勝三人被 仰付悉

御造宮有之天正十一年十二月遷宮畢

（中略）

御陽成天皇御宇慶長十一丙午年十二月十三日

一宮末社外宮殿一字造立

（中略）

同十四己酉年小國一宮樓門一字

征夷大將軍從一位宇大臣源家康公御建立神主

鈴木豊前守重長大工高木助右衛門

(中略)

後水尾天皇御宇元和六庚申年九月九日一宮末
社飯王子一字造立神主鈴木豊前守重長

同七辛酉越し六月十五日 征夷大將軍從一位

右大臣源秀忠公御再建神主鈴木豊前守重長

勾當宝善大庭五郎左衛門勝重鈴木太郎左衛門勝守

鈴木源内重高鈴木源右衛門林与兵衛田目八右

衛門大工高木助右衛門

(中略)

其後経星霜社頭漸及大破故自寛永十二年

至寛文年中奉訴御再建之願年月已久焉

(中略)

靈元天皇御宇寛文庚戌年征夷大將軍正二位

右大臣源家綱公依嚴命宮殿再復旧貫

(中略)

東山天皇御宇元禄十丁丑年依征夷大將軍正二位内

大臣源綱吉公嚴命奉行西尾隱岐守源朝臣忠成

河原清兵衛藤原正真豊原佐助藤原勝喜内山

七兵衛源永貞御大工棟梁甲良豊前源宗賀御被官内山清

左衛門藤原由茂等被 仰付本社末社本宮撰社悉御

再建并至御神宝祭祀之神器被為成御再興同

年 十月四日奉遷宮畢神主鈴木豊前守重玄謹

誌焉

(中略)

其後経年月至自享保年中元文之比及零落因

茲奉訴御再建之願

(中略)

桜町天皇御宇寛保元辛酉年五月六日 征夷大將

軍正二位右大臣吉宗公有 貴命同年五月六日

為御修覆金四百兩并駿河遠江三河信濃四ヶ

国可致勸化旨寺社奉行牧野越中守殿松平紀伊守殿

大岡越前守殿於御列席御月番松平紀伊守殿

被 仰渡也神主鈴木弾正重正

(中略)

桃園天皇御宇延享四丁卯年 征夷大將軍

正二位内大臣源家重公依貴命御修理同

年十二月 遷宮畢神主鈴木弾正貞俱

謹誌焉

(中略)

一宮小國神社記者慶長八年神主

鈴木豊前守重勝欲傳於子孫以令書

記之處也元禄十年鈴木豊前守重玄

延享四年鈴木弾正貞俱等次於其意

而書記之因茲今隨於先祖之意集以校

合而為解

文化十四丁丑年五月六日

小國神社神主行宮司鈴木越前清原重年

資料六十二 大工職相論に関する返答書（慶安五年（一六五二）（高木保氏蔵））

『静岡県指定有形文化財 天宮神社本殿及び拝殿修理工事報告書』所収

乍恐返答書を以申上候御事

一 権現様浜松御入国之砌一ノ宮御造立

被為成候御時御大工福嶋新左衛門殿如前、大工

我等先祖ニ被仰付只今ニ迄大工仕候儀

其かくれ無御座候其上 権現様御大工

福嶋新左衛門殿鈴木近江守殿片山三七郎殿

御証文御座候御事

一米倉村清十郎木原殿之御証文抔申由

申上候其御証文之儀ハ清十郎偽申上候彼ノ

三郎兵衛と申者ハ六拾年以前一ノ宮を罷出

横須賀有馬玄番様へ御奉公仕其後

駿府へ罷下り一ノ宮大工之由偽申上御

証文申請一ノ宮へ罷越候へ共一ノ宮大工之儀

前より有之處ニ無筋事を申候とて神

主殿へ一円御取上無御座候故御代官岡田

郷右衛門殿森右馬介殿申上候へ共神主殿へ御

尋之故前より通リ被仰付候御事

御代官高室金兵衛殿御仕置被成候時

彼ノ三郎兵衛又候哉右之御証文を以申上候時我々

共罷出一ノ宮天宮両社之棟札并村々

氏神之棟札共指上申候へハ則御覽被成、

前より通リ被仰付候處只今彼ノ清十郎

何方ニ而哉 覽 御証文もとめ三郎兵衛と名ヲ

替江戸へ罷下り、右之三郎兵衛せかれニ而御座候と

偽申上御証文頂戴仕候儀大偽ものにて

御座候清十郎親市左衛門と申者ハ前より一ノ宮

神領之内ニ罷有候せかれ清十郎六七ヶ年

以前ニ米倉村罷越三郎兵衛と名

替只今大工之由申上候ハ皆偽ニ而御座候

其偽之証拠ニハ三通之御証文抔申す

只今迄大工不仕候其上彼清十郎御 公儀

御鷹之御ほこ并日光御宮様御返り之

御用其外御 公儀之御用ニ不罷出候て

我等大工場大久保村ニ而無断ニ細工ヲ

仕候ニ付、則大工道具取申候御事

右之條より奉仰御念仍如件

慶安五年

辰ノ三月

木原木工允様

一ノ宮大工

助右衛門
五郎左衛門

資料六十三 元和五年（一六一九）駿府城御用木諸勘定帳写（田代家文書）

『天竜市史 続資料編1 田代家文書一』天竜市教育委員会、一九九九、所収

駿府御城御用木鹿嶋より懸塚迄諸拂二付、元和五末年小浦治左衛門様より被下候御勘定帳写

一 六拾六本式間半	六寸角	一 式本 同	此米九升合	四寸七分角
此米七石九斗式升	壹斗式升ツヽ	此米九升合	此米九斗壹升八合	四寸五分角
一 拾貳本 同	五寸角	一 式本 同	此米九斗壹升八合	五升壹合ツヽ
此米壹石八合	八升四合ツヽ	一 四本 同	此米九斗壹升八合	四寸四分角
一 拾本 同	五寸七分角	一 式本 同	此米九斗壹升八合	四寸八分角
此米壹石八升	壹斗八合ツヽ	一 式本 同	此米九斗壹升八合	五升六合ツヽ
一 七本 同	五寸五分角	此米壹斗六合	此米九斗壹升八合	四寸六分角
此米七斗壹升四合	壹斗式合ツヽ	米合拾七石六斗五升四合	此米九斗壹升八合	五升三合ツヽ
一 四本 長式間木	六寸角	右御材木		
此米三斗五升式合	八升四合ツヽ	木数貳百拾八本		
一 拾貳本 同	四寸角	長式間壹尺角二廻し		
此米五斗四合	四升式合ツヽ	六拾八本五分余		
一 貳本 同	三寸七分角	尺廻壹本二付		
此米七升四合	三升七合ツヽ	米貳斗五升七合七勺貳戈余		
一 七拾貳本同	五寸角			
此米四石三斗式升	六升ツヽ	河内小谷下藪目山より出候御用木		
一 壹本 同	四寸角	式間壹尺角二廻シ		
此米四升式合	四升式合ツヽ	七千四拾八本五分四厘		
一 壹本 同	四寸式分角	此米千八百拾六石五斗四升九合七勺余		
此米四升五合	四升五合ツヽ			
一 三本 同	四寸三分角			

資料六十四 元禄十年（一六九七）九月、甲州富士川筏乗り稼につき

甚平外四人の請状（田代家文書）

『天竜市史 続資料編1 田代家文書1』天竜市教育委員会、一九九九、所収

手形之事

一 拙者共儀、甲州佐野山より出候材木塙屋加兵衛殿取遣被申候ニ付、藤川長筏乗申筈ニ被相抱、當九月より極月廿日迄之抱ニ罷成、為前金三両三分之手形を入、金子請取極月迄之抱ニ罷成候、奥判形被成被下候故、首尾能相調忝奉存候、此上随分かせき前金預り候分、九・十月中ニ勘定相濟、極月罷帰候刻ハ、金子持参懸御目ニ可申候、勿論組之内何ニても諸勝負ケ間敷儀一圓仕間敷候、為其判形仕如此ニ御座候、以上

元禄十年丑ノ九月

甚平	印
権八	印
次郎助	印
伝吉	印
作兵衛	印
七郎左衛門殿	

資料六十五 寛（元禄五年（一六九二）

中川根町史編集委員会『中川根町史』静岡県榛原郡中川根町、一九七五、所収

寛

一 元禄五年申より七十九年前（慶長十九年）

初めて寸又川に於て駿府城御本丸御用木を所の百姓に被仰付槻柏檜二万五千本を出し御奉行海野弥兵衛、朝倉六兵衛、御手代西村源兵衛、御木印⊕とあり

一 七十五年前（元和四年）

檜・槻を寸又川板沢川（現今の逆川出合点）で杣取。

一 七十年前（元和九年）

檜・槻御用木大内手廻り（現在の大間部落民有林）にて木数六千本を所の百姓杣取、出し方仕り、御奉行中泉朝倉喜藏御手代牧田勘七。

一 六十年前（寛永十年）

伊勢屋作兵衛御用木出し右伐木は黒帽子、日向沢、上西川、西河内、樋造河内（現在閑蔵沢入）右五ヶ所にて杣取、川流し木数五万本。

一 五十七年前（寛永十三年）

浅間神社御材木出し請負人駿河孫右衛門外三人大手代松本理左衛門外一人手代大阪屋町右衛門外十二人。上下人数千百余山槻柏檜木数六万本余、木印「浅間御用木」、三ヶ年出す。

一 五十四年前（寛永十六年）

江戸御本丸御用木、檜母木数一万二千余。二ヶ年に出し、御奉行長谷川三右衛門、寛三郎右衛門。木印「御本丸御用木」、右、広川原、下西河内、日向沢山にて檜矢割御伐木出し、御伐木は大間手廻り（現在の民有林）にて杣取、出方は地役にて出す。

一 四十九年前（正保元年）

六江橋（東海道六郷橋の如し）御伐木出し、長さ七間より下の末口物、松本理右衛門本締、所の百姓切込、木数五千余本。

一 四十七年前（正保三年）

江戸深川御用木請負人安藤喜右衛門、石垣屋次右衛門、松本理右衛門、倉橋新右衛門本締にて、手代木村太郎兵衛、佐々木九郎兵衛等、人夫九百人、木数三万余本、又釜口迄切込、小川は草槓、諸之沢、黒帽子、黒松沢、日向沢山にて杣取料三ヶ年に出し、御木印「御用木」とあり。

一 三十五年前（万治元年）

江戸本丸御用材木数一万二千余二ヶ年に出し、請負人鎌倉屋吉兵衛外三人、右伐木は本寸又樽沢、釜之口、樋造河内、板沢河内、上西河内、下西河内、大間川の内広川原、青なぎ、黒松沢、栗代山、木羽沢、泉山の内熊手山にて杣取御奉行森惣右衛門、山本三右衛門、木印「御本丸御用木」。

（大井川安倍川流域の林業「より」）

註 この文書は、もと林野局千頭出張所が、旧家に残る古文書によって調査したものである。

資料六十六 御川触（寛政十二年（一八〇〇））

中川根町史編集委員会『中川根町史』静岡県榛原郡中川根町、一九七五、所収

駿州安倍郡井川山百姓林水戸殿為用木伐出右材木同所より大井川通此筋より来ル十一月迄之内川下ヶ有之和田湊より海上江戸迄運送有之筈ニ候間若出水ニ而散乱有之敷海上ニヲ難破船等之節者右川附村々早速罷出紛失無之様其所江集置駿府安西町水戸殿材木用場有之候間右之所江早速注進可致者也

申（寛政十二年）

十月

治郎右

八右

間三

藤右

三九

下野

左近

飛弾

主膳

駿州井川小河内村前ニ而大井川落合右川通往還渡瀬
飯淵湊迄村々併道悦嶋村ニ而木屋水門江入堀腰和田
湊迄川附両側村々夫 船積ニ致し江戸深川木場迄
右川附海辺附

御料

私領

寺社領

村々

③ 山元極印

三 切判

① 船積極印

追而此触書披見之上村役人共請書相添留リ村より御代官野田松三郎役所江可相返候

(後略)

資料六十七 回状(安政七年(一八六〇)申三月)

中川根町史編集委員会『中川根町史』静岡県榛原郡中川根町、一九七五、所収

尾張殿用材駿州安倍郡小河内村百姓持林 檜赤松栗梅尺締三万本程伐出大井川筋向谷枋山川木屋川通同州田尻北村ニ而組立焼津湊迄川下同所ニ而船積夫より江戸深川木場迄廻木有之筈ニ付出水等ニ而散乱木有之か又は海上難破船等之節は川付海付村々早速罷出紛失無之様其所集置引請人江戸神田九軒町庄三郎方江可合通達もの也

大蔵

平作 豊前

八郎右 出雲

八三 式部

次郎 丹波

三月九日夜寅ノ上刻田野口村江繼立申候

資料六十八 久能山御修復

新井正『梅ヶ島郷土誌』硯水泉、一九九〇、所収

御用材木 印 極印

印

梅ヶ嶋 藤兵衛

覚

久能山御修復御用の材木、梅ヶ嶋藤兵衛請負、梅ヶ嶋より久能山御普請所迄川下シの積リニ候、自然満水高浪の節、右極印の材木筏流散リ候ハ、御領私領川筋の村々にて取揚置、御普請場等へ早速注進可有之候、若シ隱置候歟又は盜取者在之は、僉儀の上急度越度可申付候、此廻状村下へ致印形、早々相廻留リ村より、久能山御普請役所へ可相返候、以上

申ノ十一月(享保元年)

伊左衛門(村瀬) 平松村 大谷村

又左衛門(小林) 高松三ヶ村 下嶋村

西嶋村 中嶋村

中野新田 下川原新田

東新田 中原町

安倍川町 弥勒町

手越村 向敷地村

山崎新田 仙代村マヤより

梅ヶ嶋迄

享保元年申ノ 右村々名主

十一月廿二日 百姓

資料六十九 御吟味二付差上申書付（梅ヶ島村）

新井正『梅ヶ島郷土誌』硯水泉、一九九〇、所収

一駿州安倍郡梅ヶ嶋村御林三ヶ所の内、桧・榎・榎の類、木品有之候ハヽ、根伐川下ヶ并

久能山迄運送仕入金積立、尤木数寸間方附所も可申上旨、此度為御見分御越被成、御吟味御座候

此段拙者共村方御林、天神森いもし山佛山三ヶ所ニ御座候、右の内天神森山御林の義は、五年以前寅年京都御用ニ付、桧四拾三本榎壹本御用木ニ相成、相残りの分、桧・榎・榎共不残、節木曲木枝木ニて、御用立候木品無御座候、外式ヶ所いもし山御林之儀も節曲木ニて、目通細ク御材木ニ相成不申候、佛山御林ニハ榎木数五拾五本、長老間半より四間半迄、目通八寸廻りより式尺八寸廻り迄の木数の内、十六七本程も御用可立木品、相見へ申候得共、右御林の儀は、至て嶮岨ニて何らし方無之、直チニ落候得は池へ退レ埋木ニ相成、出シ方手都合一向無之場所ニて御座候、右場所ハ夫故五年以前、御用木出シ候節も御伐出し無御座候、右の通御座候ニ付、当村御林、榎・桧・榎・榎御材木ニ相成候木品無御座候、榎御材木ニ相成候木品御座候ても、根伐川下ヶ運送等、直段付の儀ハ致不馴儀、殊ニ小高村々ニて人少ニ御座候ニ付、伐出し村請ニ被 仰付候ても、杣日雇其外働の人足迄も、他所より雇入不申候てハ相成不申候ニ付、旁直段付差上候儀、難仕御座候、既ニ五年以前寅年京都御用木御伐出しの節も、村請の儀御吟味御座候得とも、其節も達て右の通御願申上、御免奉願上候、此度迎も御同様の義ニ御座候間、何分直段付差上候儀致不馴儀ニ付、御免奉願上候、右相違不申上候、以上

午四月二日（安永三年）

駿州安倍郡梅ヶ嶋村

名主 儀兵衛

岩松直右衛門様御手代

中村佐市郎殿

組頭 藤兵衛
同断 藤蔵
百姓代 勝右衛門

資料七十 御吟味二付差上申書付（入島村）

新井正『梅ヶ島郷土誌』硯水泉、一九九〇、所収

駿州安倍郡入嶋村字八重垣山御林の内、檜・榎・榎・榎の類、御材木相成候木品有之候ハヽ、根伐川下ヶ并久能山迄運送御仕入金積立可申旨、右ニ付此度為御見分御越被成御吟味御座候

此段入嶋村御林の儀、惣木数拾萬式千四百四拾壹本の内、檜式本・榎三本、榎九本、榎百五十合百十九本御座候、右の内御用立候木品榎榎の内、字八幡をねはやあらしと申所ニハ、木数大積五拾本程御座候、乍然一體嶮岨の御林ニて御座候ニ付、山出被仰付候節、のらし伐ニ仕候ハヽ、拾本伐候ハヽ四

（栈手）

五本も御用立過半朽木ニ相成可申と奉存候、佐手等ニて山出仕候ハヽ、失却手間ハ相懸可申候得共、多分山出可相成奉存候、残の分ハ曲木節木枝木勝ニて、榎御用立候木品御座候ても、嶮岨と申内別て難所の場所ニて、山出容易ニ相成中間敷奉存候、相伐川下并久能迄運送直段、御吟味御座候得共、右申上候通御林の儀、格別居村より道法遠ク、其上難所出場悪敷、佐手等の場所御座候ニ付、直段積仕馴不申儀、殊小高人少の村方ニて難儀仕候間、何分村請の儀は幾重ニも御免被成下候様奉願上候、御用立候木品伐出被仰付候ハヽ、員数増減可有御座奉存候、難所の御林殊ニ道等も無之、青草生茂り暁と御見分御見定相成不申、大積を以申上候、右御林御用立候分、御伐出外請負御座候て被仰付候ても、後日御願ヶ間敷儀申上間敷候

右御吟味二候、相違不申上候、以上

午四月八日（安永三年）

駿州安倍郡入嶋村

名主 孫左衛門

與頭 徳右衛門

〃 源四郎

岩松直右衛門様御手代

百姓代 兵右衛門

中村左市郎殿

資料七十一 御吟味二付差出書状（入島村・梅ヶ島村）

新井正『梅ヶ島郷土誌』硯水泉、一九九〇、所収

駿州安倍郡梅ヶ島村入嶋村御林の内、桧・槻・榎の類、御材木相成候木数有之哉、為御見分御越御吟味被成候処、両林御林共右の木品有之分節曲木枝木にて、御用可立文少々御座候分ハ、根伐出方嶮岨にて、不相成候段申上并根伐川下ヶ久能山迄運送直段の儀も致馴レ不申儀ニ付、御免被下候様申上候處、被仰聞候ハ、平日杉松雑木丸太小角物等木取、川下ヶ等仕候ニ付てハ、運送直段書上候儀、不相知と申も難申上筈ニ被思召候旨、御吟味御座候

此段被仰聞候通、平日杉松雑木丸太小角物等、少々宛仕出川下ヶ仕候ニ付、直段付不相知と申上候儀、御不審被思召候趣御察當御尤ニ奉存候、右の儀拙者共村々にて、仕出候杉松雑木丸太小角類の品、何れも安倍川より格別入方ニ有之候は、失却相懸候ニ付仕出不申、安部川端并ニ入方と申候ても、四五町を峠の入方にて、出し方等の手間取不申、直ニ川入仕候、此度被仰聞候御林の儀は、居村より何れも道法壺里より壺里半迄有之、殊ニ根伐山出仕候ても嶮岨にて、さて落しゆ羅井あらし下ヶも、川しゆ羅等にて仕出、川下ヶ仕候ニ付、右體の

仕形見積一向不〆低にて御座候ニ付、直段積差上候儀難仕御座候

右吟味ニ付、相違の儀不申上候、以上

安永三年午四月二日 駿州安倍郡入嶋村

名主 孫左衛門

組頭 徳右衛門

同断 源四郎

百姓代 兵右衛門

同國同郡梅ヶ島村

名主 儀兵衛

岩松直右衛門様御手代

與頭 藤兵衛

中村佐市郎殿

同断 藤蔵

百姓代 勝右衛門

資料七十二 御尋ニ付奉申上候

新井正『梅ヶ島郷土誌』硯水泉、一九九〇、所収

當村字八重垣山御林の儀、安永三年岩松直右衛門様御代官所の節、久能山并駿府寶台院御修復、御普請木ニ御伐出申候、且根返風折立枯ニ相成候節ハ、其時々御拂被 仰付、右代永御上納仕候、右の外御用木御伐出の儀無御座候、右御尋ニ付奉申上候、以上

卯九月（文政二年）

山田茂左衛門御代官所

駿州安倍郡入嶋村

名主 孫左衛門

御林御見分

組頭 仁兵衛

御役人中様

百姓代 次郎右衛門

資料七十三 明細帳（冊子文書）

新井正『梅ヶ島郷土誌』硯水泉、一九九〇、所収

（表題）

文政五年午八月駿州安倍郡入嶋村差出シ明細帳

入嶋村差出シ明細帳

（前略）

八重垣山

一御林

壺ヶ所

是ハ先年御巢鷹掛ケ申候ニ付、所之者立山ニ致シ置候所、貞享元年子年、近山六左衛門様御支配之節、御改メ御林ニ被遊候所、其後江戸町人和泉屋源七・本牧屋半右衛門と申者、御用炭薪木御請負、右御林伐出シ申候、其後明和九年辰年、大風ニ而根かへり風折仕候所、其後安永三年午、材木町佐右衛門と申者御請負、久能山御用之御材木取出シ申候

（中略）

右之通り相違御座候、以上

文政五年午八月

駿州安倍郡入嶋村

名主

孫左衛門

組頭

八郎兵衛

伊奈友之助様

百姓代

兵右衛門

御役所

資料七十四 御用留史料（2）静岡浅間神社（文化元年（一八〇四））

新井正『梅ヶ島郷土誌』硯水泉、一九九〇、所収

其村々御材木見分の上、浅間御普請御入用木ニ伐出被仰付、右見分の儀ニ付尋儀有之間、心得候もの此廻状披見次第、村役人印形不殘持参、早速可罷出、差急候儀ニ付延引致間敷候、此廻状不限昼夜順達、留り村より可相返候、以上

覚

大工棟梁 清右衛門

大工 清吉

木挽 半七

人足 一人

右は駿府浅間惣社御再建ニ付、御寄附の御林木為下見分、来ル十六日駿府出立、入嶋村梅ヶ嶋村御林へ相越候條、止宿并川越等の儀申談候ハ、無差支用取斗、且御林地元村々ニては、役人共場所へ立会并其節人足入用の趣、申談候ハ、是又不差支様取斗可申候、此廻状早々順達梅ヶ嶋村より可相返刺る王、以上

（文化元年）

子五月九日

駿府紺屋町

御役所

井宮村始メ

資料七十五 御用留史料(2) 覚 静岡浅間神社(天保三年(一八三二))

新井正『梅ヶ島郷土誌』硯水泉、一九九〇、所収

覚

一 梅木数三百五十本

外浮木三百本余

印 極印

印 同

印 同

印 切判

右は駿府浅間惣社、其外諸社御再建御入用、書面の木品、安倍郡梅ヶ嶋村百姓山より伐出、山許より横山村迄持下ケ、安倍川通筏下ケ、同郡安西方上下拾分一御蔵前へ着木の積候條、右木品其村々地内筏下ケの節、差支無之様取斗可申候、此廻状村下令請印、早々順達留村より可相返者也

辰(天保三年)

閏十一月廿一日

駿府紺屋町

御役所

右村々

名主

組頭

百姓代

右御廻状の儀ハ、已正月十一日昼九ツ半時、梅ヶ嶋村名主處へ相届キ申候、廻状継人横山村の人也

資料七十六 御用留史料(2) 覚 久能山東照宮(天保四年(一八三三))

新井正『梅ヶ島郷土誌』硯水泉、一九九〇、所収

覚

一 梅木 凡百八十本

一 栗木 凡三百本

右は久能山

御宮、其外共修復御用御材木、書面の通り、安倍郡梅ヶ嶋村・中平村・俵澤村百姓山より伐出、山許より安倍川通り筏下ケ、同郡安西方上下十分一御蔵前へ着木の上、改請猶又安倍川通り海口迄筏下ケの積り、右木品村々地内筏下ケの節、差支無之様取斗可申候、此廻状村下令請印、早々順達留村より可相返者成
已(天保四年)

二月九日

駿府紺屋町

梅ヶ嶋村始

御役所

中嶋村迄

右村々

名主

組頭

資料七十七 西丸御普請御用ニ付、木挽杣職人為雇出（文久四年（一八六四））

新井正『梅ヶ島郷土誌』硯水泉、一九九〇、所収

文久四子年二月 御作事

御役所

右宿村

役人

御作事奉行支配

御作事方大鋸棟梁

石山佐渡

手附のもの

松兵衛

作兵衛

御作事奉行支配

御普請方大鋸棟梁

南川伊豫

手附のもの

栄吉

八五郎

寅吉

米吉

遠江・駿河・伊豆・相模・上総・下総・下野・武蔵右八ヶ国へ、木挽杣職人為雇出差遣候ニ付、右道中筋幾度も往返、無差支相通可申事

一右国々木挽杣職人のもの、雇方申談候迄、御料私領寺社領とも、其筋より可申談候間、何人ニても道筋等無差支、江戸表へ急速出府為致候様、其向き向々ニおゐて取斗可申事

一右為雇出差遣候もの共、道中筋人馬并旅籠錢とも、相對を以相當の代錢可請取事

右の通り持触相渡候間、可得其意もの也

一 元治

右の通り、当月朔日改元被 仰出候事

西丸御普請御用ニ付、遠江・駿河・伊豆・相模・上総・下総・下野・武蔵・右八ヶ国へ木挽杣職人為雇出、御作事方大鋸棟梁石山佐渡、御普請方大鋸棟梁南川伊豫手附のもの、別紙通書付所持為至差遣候ニ付、右国々木挽杣職のものへ、雇方申談候上、其所の年寄名主等へ可申談候間、在候ハ、急速無差支、江戸表へ出府為致候様取斗方の儀、其筋達有之候條、可得其意候、此廻状村下令請印、刻付ヲ以早々順達、留村より可相返もの也
子（文久四年）

三月六日 紺屋町

御役所

右村々

役人